

松山市道「小野158号線」関連遺跡

上 苧 屋 遺 跡

— 第3次・4次調査 —

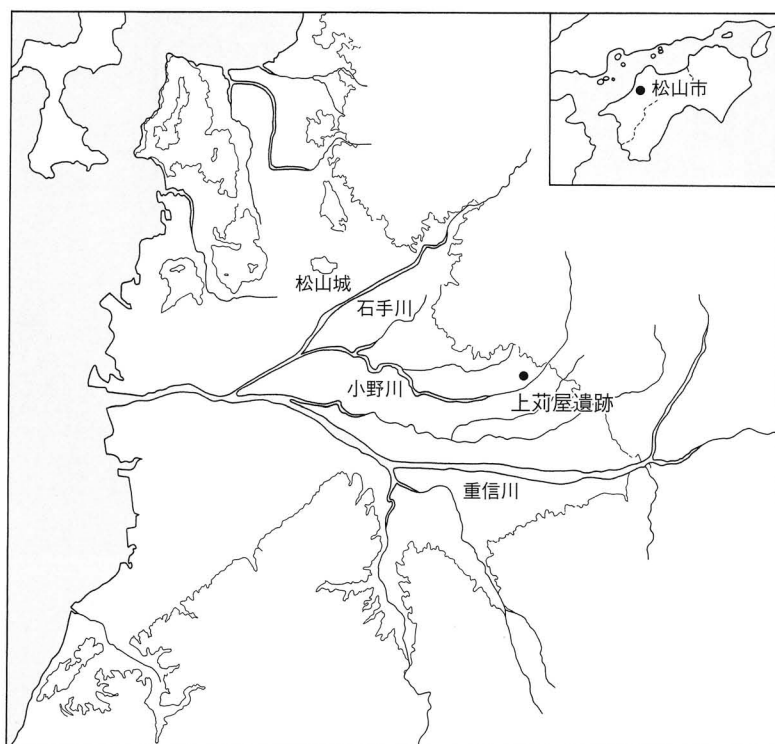
2005

松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市道「小野158号線」関連遺跡

上 苧 屋 遺 跡

— 第 3 次 ・ 4 次 調 査 —



2005

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版 上空より望む調査地

序

温暖な気候・風土に恵まれた瀬戸内沿岸にあって、最大規模の平野を持つ松山市には、その恵まれた環境のもと、古くからのひとびとの生活の証として、数多くの遺跡が存在しています。

今回の調査地は、松山市東南部、平井・小野地区の小野川右岸の微高地上です。調査地周辺の丘陵上には、葉佐池古墳・播磨塚天神山古墳などの首長墳をはじめとする多くの古墳群が存在し、また駄場姥ヶ懐窯址などの須恵器窯址群が分布するなど、この地域は埋蔵文化財の多く分布するエリアとして知られています。

今回の調査では、古くは縄文・弥生時代、新しくは中・近世にいたるまで、各時代の遺構や遺物が出土し、ここもまた古くから先人たちの暮らしの場であったことを明らかにすることができました。

このような成果をあげることができたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力のたまものと感謝申し上げます。

本書が、今後各方面でご活用いただければ幸いに思います。

平成17年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 中村時広

例 言

1. 本報告書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、平成14年から15年の間、松山市平井町において、松山市道小野158号線道路改良工事に伴い実施した上
菟屋遺跡第3次調査および第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 第3次調査では松山市平井町865番地外の5,015.11m²を、第4次調査では松山市平井町甲176番
地外において936.2m²の調査を実施した。
3. 本書に使用した方位は座標北である。
4. 遺物の実測・製図、遺構の製図は、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子が行った。
5. 遺構の撮影は、各調査担当者および大西朋子が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行
った。
6. 遺物の縮尺は、土器を1/3にすることを原則としたが、大型品については1/6で掲載している。
石器・石製品・土製品は1/2とした。
7. 調査に伴う基準点測量は（株）イーエムに、また航空写真撮影は（株）パスコ、国際航業株式会
社にそれぞれ委託した。
8. 自然科学分析は、（株）古環境研究所に依頼し、第4章として掲載した。
9. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本報告書の執筆は、第1・3・5章を栗田茂敏が、第2章を吉岡和哉が担当し、編集は栗田が行
った。

本文目次

第1章 はじめに	栗田茂敏	1
1. 調査に至る経緯		1
2. 調査・刊行組織		1
3. 立地・環境		2
第2章 上苜屋遺跡第3次調査	吉岡和哉	7
1. 調査の経過		7
2. 層位		8
3. 1区の調査		11
4. 2区の調査		14
5. 3区の調査		20
6. 4区の調査		25
7. 5区の調査		30
8. 6区の調査		39
9. 7区の調査		67
10. 8区の調査		73
11. 9区の調査		77
12. 10区の調査		86
13. 11区の調査		88
14. 小結		92
第3章 上苜屋遺跡第4次調査	栗田	94
1. 試掘調査		94
2. 遺構と遺物		94
3. 小結		145
第4章 自然科学分析	株式会社 古環境研究所	147
1. 上苜屋遺跡3次調査における樹種同定		147
2. 上苜屋遺跡4次調査における種実同定		152
第5章 まとめ	栗田	157

挿図目次

図1 調査地と周辺の主要遺跡	4
第3次調査	
図2 上苜屋遺跡3次調査地 柱状土層図	9
図3 1区遺構配置図	11
図4 1区壁面土層測量図	12

図5	1区出土遺物実測図	13
図6	1区倒木1測量図	14
図7	2区遺構配置図	15
図8	2区壁面土層測量図	16
図9	2区積石1測量図	16
図10	2区倒木1測量図	17
図11	2区掘立1測量図	17
図12	2区SA1測量図	18
図13	2区SA2測量図	18
図14	2区出土遺物実測図	19
図15	3区遺構配置図	20
図16	3区壁面土層測量図	21
図17	3区掘立1測量図	22
図18	3区掘立2測量図	23
図19	3区掘立3測量図	24
図20	3区出土遺物実測図	25
図21	4区遺構配置図	26
図22	4区壁面土層測量図	27
図23	4区SB1・SA1測量図	28
図24	4区SK1測量図	29
図25	4区出土遺物実測図	29
図26	5区遺構配置図	30
図27	5区壁面土層測量図	31
図28	5区掘立1〔6区掘立3〕測量図	33
図29	5区掘立2測量図	34
図30	5区SK1測量図	35
図31	5区SK2測量図	36
図32	5区出土遺物実測図(1)	37
図33	5区出土遺物実測図(2)	38
図34	5区出土遺物実測図(3)	39
図35	6区遺構配置図	40
図36	6区壁面土層測量図	41
図37	6区SD4・SX2・SX3測量図	42
図38	6区SK1測量図	44
図39	6区SK3測量図	45
図40	6区SE1測量図	46
図41	6区掘立1測量図	49
図42	6区掘立2測量図	50

図43	6区掘立4測量図	51
図44	6区掘立5測量図	52
図45	6区掘立6測量図	53
図46	6区掘立7測量図	54
図47	6区出土遺物実測図(1)	56
図48	6区出土遺物実測図(2)	57
図49	6区出土遺物実測図(3)	58
図50	6区出土遺物実測図(4)	59
図51	6区出土遺物実測図(5)	60
図52	6区出土遺物実測図(6)	61
図53	6区出土遺物実測図(7)	62
図54	6区出土遺物実測図(8)	63
図55	6区出土遺物実測図(9)	64
図56	6区出土遺物実測図(10)	65
図57	6区出土遺物実測図(11)	66
図58	7区遺構配置図	67
図59	7区壁面土層測量図	68
図60	7区SD1測量図	69
図61	7区SD2測量図	70
図62	7区掘立1測量図	71
図63	7区出土遺物実測図	72
図64	8区遺構配置図	73
図65	8区壁面土層測量図	74
図66	8区掘立1測量図	75
図67	8区掘立2測量図	76
図68	8区出土遺物実測図	77
図69	9区遺構配置図	78
図70	9区壁面土層測量図	79
図71	9区SR1測量図	80
図72	9区掘立1測量図	82
図73	9区出土遺物実測図(1)	83
図74	9区出土遺物実測図(2)	84
図75	9区出土遺物実測図(3)	85
図76	10区遺構配置図	86
図77	10区壁面土層測量図	87
図78	10区出土遺物実測図	87
図79	11区遺構配置図	88
図80	11区壁面土層測量図	89

図81	11区出土遺物実測図（1）	90
図82	11区出土遺物実測図（2）	91

第4次調査

図83	試掘調査出土遺物実測図	94
図84	試掘調査トレンチ配置図	95
図85	調査区南壁土層断面	97
図86	調査区東壁土層断面	99
図87	調査地の区割り	100
図88	遺構全測図	101
図89	S K 3 遺物出土状況図	103
図90	S K 3 出土遺物実測図	103
図91	S K 4 遺物出土状況図	104
図92	S K 4 出土遺物実測図（1）	105
図93	S K 4 出土遺物実測図（2）	106
図94	S K 4 出土遺物実測図（3）	107
図95	S K 4 出土遺物実測図（4）	108
図96	S K 4 出土遺物実測図（5）	109
図97	S K 4 出土遺物実測図（6）	110
図98	S K 5 遺物出土状況図	111
図99	S K 5 出土遺物実測図	112
図100	S K 6 遺物出土状況図	113
図101	S K 6 出土遺物実測図	114
図102	S K 7 出土遺物実測図	114
図103	S K 7 遺物出土状況図	115
図104	S K 8 遺物出土状況図	116
図105	S K 8 出土遺物実測図（1）	117
図106	S K 8 出土遺物実測図（2）	118
図107	S K 8 出土遺物実測図（3）	120
図108	S K 8 出土遺物実測図（4）	121
図109	S K 8 出土遺物実測図（5）	122
図110	S K 8 出土遺物実測図（6）	123
図111	S K 8 出土遺物実測図（7）	124
図112	S K 8 出土遺物実測図（8）	125
図113	S K 8 出土遺物実測図（9）	126
図114	S D 1 出土遺物実測図	127
図115	S X 1 遺物出土状況図	128
図116	S X 1 出土遺物実測図（1）	129

図117	S X 1 出土遺物実測図 (2)	130
図118	S X 1 出土遺物実測図 (3)	131
図119	S X 1 出土遺物実測図 (4)	132
図120	S X 2 遺物出土状況図	133
図121	S X 2 出土遺物実測図	134
図122	柱穴出土遺物実測図	135
図123	S K 1 測量図	136
図124	S K 1 出土遺物実測図	136
図125	S K 2 測量図	137
図126	包含層出土遺物実測図 (1)	138
図127	包含層出土遺物実測図 (2)	139
図128	包含層出土遺物実測図 (3)	140
図129	包含層出土遺物実測図 (4)	141
図130	包含層出土遺物実測図 (5)	142
図131	包含層出土遺物実測図 (6)	143
図132	包含層出土遺物実測図 (7)	144
図133	包含層出土遺物実測図 (8)	145

表 目 次

表 1	上苅屋遺跡 3 次調査における樹種同定結果	149
表 2	上苅屋遺跡 4 次調査における種実同定結果	155

図 版 目 次

巻頭図版 上空より望む調査地

第 3 次調査

図版 1	1 ~ 4 区遺構検出状況 (西より)	1 区遺構検出状況 (西より)
	2 区遺構検出状況 (西より)	
図版 2	3 区遺構検出状況 (東より)	4 区遺構検出状況 (南東より)
図版 3	1 ~ 4 区遺構完掘状況 (西より)	1 区遺構完掘状況 (南西より)
図版 4	1 区倒木 1 土層断面 (南東より)	2 区積石 1 検出状況 (北より)
	2 区積石 1 土層断面 (南東より)	
図版 5	2 区遺構完掘状況 (北西より)	3 区遺構完掘状況 (東より)
図版 6	4 区遺構完掘状況 (東より)	4 区 S B 1 完掘状況 (東より)
図版 7	5 区遺構検出状況 (西より)	5 区遺構完掘状況 (西より)
図版 8	5 区西部遺構完掘状況 (西より)	5 区 S K 2 遺物出土状況 (北より)

図版9	6区遺構検出状況（西より）	6区遺構完掘状況（西より）
図版10	6区SE1完掘状況（西より）	6区SK3完掘状況（北より）
図版11	6区SE1検出状況（北西より）	6区SE1遺物出土状況（北より）
	6区SD4遺物出土状況（西より）	
図版12	6区SP39遺物出土状況（北より）	6区SP137土層断面（東より）
	6区SK1遺物出土状況（北より）	
図版13	6区IV層除去後全景（西より）	6区SP41遺物出土状況（1）（北西より）
	6区SP41遺物出土状況（2）（北西より）	
図版14	7区遺構検出状況（東より）	7区SD2遺物出土状況（西より）
図版15	7区遺構完掘状況（東より）	7区SD1完掘状況（北東より）
図版16	8区遺構検出状況（西より）	8区掘立1検出状況（西より）
図版17	8区遺構検出状況（東より）	
図版18	9区遺構検出状況（東より）	9区SR1完掘状況（東より）
図版19	9区遺構完掘状況（北西より）	9区掘立1完掘状況（北西より）
図版20	10区遺構検出状況（西より）	10区遺構完掘状況（西より）
図版21	11区遺構検出状況（北西より）	11区遺構完掘状況（南西より）
図版22	2区出土遺物	3区出土遺物
	5区出土遺物（1）	
図版23	5区出土遺物（2）	6区出土遺物（1）
図版24	6区出土遺物（2）	
図版25	6区出土遺物（3）	
図版26	6区出土遺物（4）	
図版27	6区出土遺物（5）	
図版28	6区出土遺物（6）	
図版29	7区・9区出土遺物	
図版30	10区・11区出土遺物	

第4次調査

図版31	調査前全景（1）（西より）	調査前全景（2）（北東より）
図版32	遺構検出状況（西より）	
図版33	SK4とSX1（西より）	SK4遺物出土状況（1）（西より）
図版34	SK4遺物出土状況（2）（西より）	SK4遺物出土状況（3）（北東より）
図版35	SK4遺物出土状況（4）（東より）	SK4遺物出土状況（5）（北西より）
図版36	SK4遺物出土状況（6）（西より）	SK4遺物出土状況（7）
図版37	2区遺構検出状況（北東より）	SK3、SX2検出状況（北東より）
図版38	SK3遺物出土状況（1）	SK3遺物出土状況（2）
図版39	SK5遺物出土状況（1）	SK5遺物出土状況（2）
図版40	SK6検出状況（北より）	SK6完掘状況（北より）
図版41	SK7検出状況（南より）	SK7完掘状況（北より）

図版42	S K 8 遺物出土状況 (1) (北より)	S K 8 遺物出土状況 (2)
図版43	S K 8 遺物出土状況 (3)	S K 8 完掘状況 (北より)
図版44	1 区 S D 1 完掘状況 (西より)	S X 1 検出状況 (南東より)
図版45	S X 2 遺物出土状況 (1) (南西より)	S X 2 遺物出土状況 (2)
図版46	S K 1 検出状況 (北より)	S K 1 調査状況 (東より)
図版47	S K 1 完掘状況 (南より)	S P 55 遺物出土状況
図版48	完掘状況全景 (1) (西より)	完掘状況全景 (2) (北東より)
図版49	S K 4 出土遺物 (1)	
図版50	S K 4 出土遺物 (2)	
図版51	S K 4 出土遺物 (3)	
図版52	S K 4 出土遺物 (4)	
図版53	S K 3、S K 5～7 出土遺物	
図版54	S K 8 出土遺物 (1)	
図版55	S K 8 出土遺物 (2)	
図版56	S K 8 出土遺物 (3)	
図版57	S K 8 出土遺物 (4)	
図版58	S K 8 出土遺物 (5)	
図版59	S X 1 出土遺物 (1)	
図版60	S X 1 出土遺物 (2)	
図版61	S X 2 出土遺物	柱穴出土遺物
図版62	包含層出土遺物 (1)	
図版63	包含層出土遺物 (2)	
図版64	包含層出土遺物 (3)	

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

調査は松山市東南部の平井町、水泥町において松山市が実施している、松山市道小野158号線道路改良工事に伴うものである。この改良区間は、松山市の指定する周知の包蔵地「No90 権現山古墳群・No152 平井遺物包含地」に含まれる地点にあたり、平成8年以来、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、松山市埋文センター)により、断続的に発掘調査が行われている。今ここで、東西に長いこの路線で実施された既往の調査を西から挙げていくと、「下苅屋遺跡2次調査地」、「下苅屋遺跡3次調査地」、「古市遺跡2区」、「古市遺跡1区」となり、この既往の調査区間約1kmの間については、調査後、改良工事も完了して既に供用が開始されている。

平成14年4月、この区間に続く東方向への延伸部分にあたる区間、長さ550m部分についての埋蔵文化財確認調査願いが松山市都市整備部道路建設課から、松山市教育委員会(以下、市教委)に提出された。これにもとづき、同年4月下旬、市教委によって実施された試掘調査の結果、柱穴、溝、流路などの遺構や、弥生時代から古代・中世・近世にわたる遺物を包含する土層が申請地の各所において検出され、これらの地点については本格調査が必要と判断された。このため、道路建設課と市教委、ならびに松山市埋文センターの三者は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、遺跡と判断された部分についての本格調査を、松山市埋文センターが主体となって実施することとなり、「上苅屋遺跡3次調査」として同年5月1日より調査を開始した。また、さらに続いてこの区間に続く東延伸部分についても、同年8月1日、確認願いの提出があり、この区間に関する試掘調査を10月に行ったところ、部分的ではあるが、主に弥生時代の遺物を包含する層や、各期の柱穴等の遺構が検出された。そこで、この部分についても「上苅屋遺跡4次調査」として、翌平成15年2月1日より本格調査を実施した。以下に調査区、調査期間、担当者についてまとめておく。

「上苅屋遺跡3次調査」……………平成14年5月1日～平成15年1月31日

担当：吉岡和哉

「上苅屋遺跡4次調査」……………平成15年2月1日～7月31日

担当：栗田茂敏

2. 調査・刊行組織 (平成17年3月31日現在)

松山市教育委員会 教 育 長 土居 貴美
事 務 局 局 長 久保 浩三
企 画 官 石丸 修
〃 丹生谷博一
〃 仙波 和典

文化財課課長 篠原 忠人

(財)松山市生涯学習振興財団

理事長 中村 時広

事務局長 三宅 泰生

次長 石丸 允良

次長 池田 政勝

埋蔵文化財センター

所長 杉田 久憲

専門監兼学芸係長 早瀬 忠幸

次長兼調査係長 西尾 幸則

管理係長 岸本 照修

調査員 栗田 茂敏

調査員 吉岡 和哉

3. 立地・環境

(1) 地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約4 kmの通称出合で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみると、北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原、これに加えることに、両河川の間を流れる石手川の支流、小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。調査地はこの小野川の現流路の右岸約1 kmから直近の小野川扇状地上にある。北方直近には高縄山系の南東麓斜面が迫り、調査地の特に北方周辺には沖積作用によって形成された段丘状の高まりが残っている。

(2) 歴史的環境

ここでは、調査地周辺の道後平野南東部の平井・小野地区から若干西方の来住・久米地区の遺跡分布を中心に述べることにする。

旧石器時代の遺物は、この地区に限らず道後平野では該期の遺構とともに出土した例は知られておらず、数例ある資料も採集遺物であったり、単独出土であったりする例がすべてである。この地区では、鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査に伴い出土した角錐状形石器、久米窪田V遺跡出土の角錐状石器、あるいは平井町山田池で採集されたナイフ形石器などの数例が知られているのみで、いずれも後期旧石器時代のものと考えられている〔重松 1992〕。

この地区で、確実な遺構とともに遺物が出土するのは、縄文時代後期中頃以降である。この時期の良好な一括遺物としては、久米窪田町森元遺跡の土坑出土の土器群がある〔栗田 1989〕。この森元遺跡の近隣の久米窪田Ⅰ遺跡でも同様の時期の遺物を出土しており、これらの遺物は小型方形住居址にともなうものとされている〔吉本 他 1981〕。晩期では、近年になって来住台地上での遺構・遺物の検出が目立ってきている。特に久米高畑遺跡36次調査では、晩期前葉の土器群をともなう円形住居址1棟が検出されているほか、同エリア内の26次調査・35次調査でも同様の時期の土坑の検出をみており、該期の資料の希薄な当平野にあっては、貴重な例といえる〔小玉 1997／河野 1998／小笠原 1998〕。晩期末の比較的良好な例としては、南久米片廻り遺跡2次調査の土器群がある。斜面堆積で明確な遺構に伴うものではないが、層位・平面ともにまとまりがみられ、一括性の高い遺物群である〔松村 他 1996〕。また本調査に先立つこの路線関連の調査、古市遺跡1区の自然流路内から晩期前葉、あるいは後葉の土器片が若干出土していたり〔栗田 他 2000〕、同遺跡2次調査地では晩期後葉の土坑1基が調査されている〔山之内 1997〕。

縄文時代には点的であった遺跡分布も弥生時代になると、面的なひろがりを持ち、その数も大幅に増大する。その中でも最も注目されるのが、やはり来住台地上に展開する前期末から中期初頭の集落である。このエリアの弥生遺跡は、前期末から後期まで継続してはいるが、その盛期は上述の前末～中初の段階にある。集落は、少数の円形竪穴住居と数多くの無柱長方形竪穴と土坑などによって構成されているが、近年の調査（久米高畑23・25・28・29次）や過去の来住Ⅴ遺跡などの調査成果をあわせると、同時期併存の環濠を複数ともなう可能性が高くなってきている〔橋本 1995／高尾 1996／小笠原 1997〕。そのほか、この時期の遺物を出土する遺跡には、この小野158号線関連で調査された古市遺跡1区の調査がある。この調査では、検出された自然流路の10層と呼ばれる包含層からまとまった遺物の出土をみている〔河野 他 2000〕。中期の良好な資料は現在のところ少ないが、中期も後半あるいは後期初頭、凹線文の段階の遺物を出土する遺跡はいくつかある。来住廃寺15次調査では、台地の縁辺の落ち際に投棄された状況で多数の凹線文段階の遺物が出土し〔西尾 他 1993〕、また、久米窪田町古屋敷Ⅲ遺跡では比較規模の大きい溝からやはり該期の遺物が出土している〔梅木 他 1992〕。この両遺跡ともに、台地の縁辺部に位置することで共通しているが、台地上には現在のところこの時期に該当する遺構が希薄であり、この時期のこのエリアの集落展開についてはまだ不明な部分が多い。なお、この段階の住居址は鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査中に、低丘陵緩斜面で1棟検出されているが〔森 1978〕、平地部との比高差20m程度の緩傾斜面であり、高地性集落と言えるような立地ではない。後期の集落は、面としてのひろがり把握されていないのが現状であるが、単発的に遺構が検出される例はいくつかある。南久米片廻り遺跡では円形住居址1棟から、終末期の土器とともに鉄鏃を1点出土していることで注目できる〔栗田 1987〕。その他、後期の遺構・遺物は主に久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡や、平井遺跡〔豊田 他 1982〕など国道11号松山東道路関係の調査での出土が報告されている。

このエリアにおける古墳時代の集落は、6世紀代以降のものが主に確認されている。南土居町開遺跡では、比較的小規模な調査面積であったにもかかわらず、方形竪穴住居址5棟、掘立柱建物3棟などが検出され、出土遺物ならびに切り合いから、6世紀初頭から後半までの住居形態の変遷や竪穴から掘立への移行が検討されている〔宮内 1996〕。本改良路線の南西端に位置する下苅屋遺跡や下苅屋遺跡3次調査地で調査された集落も6世紀後半を主体とするもので、検出された方形竪穴住居址の一部から生焼け・焼け歪みの顕著な須恵器が出土してみたり、須恵器の集積土坑が検出されていたりす

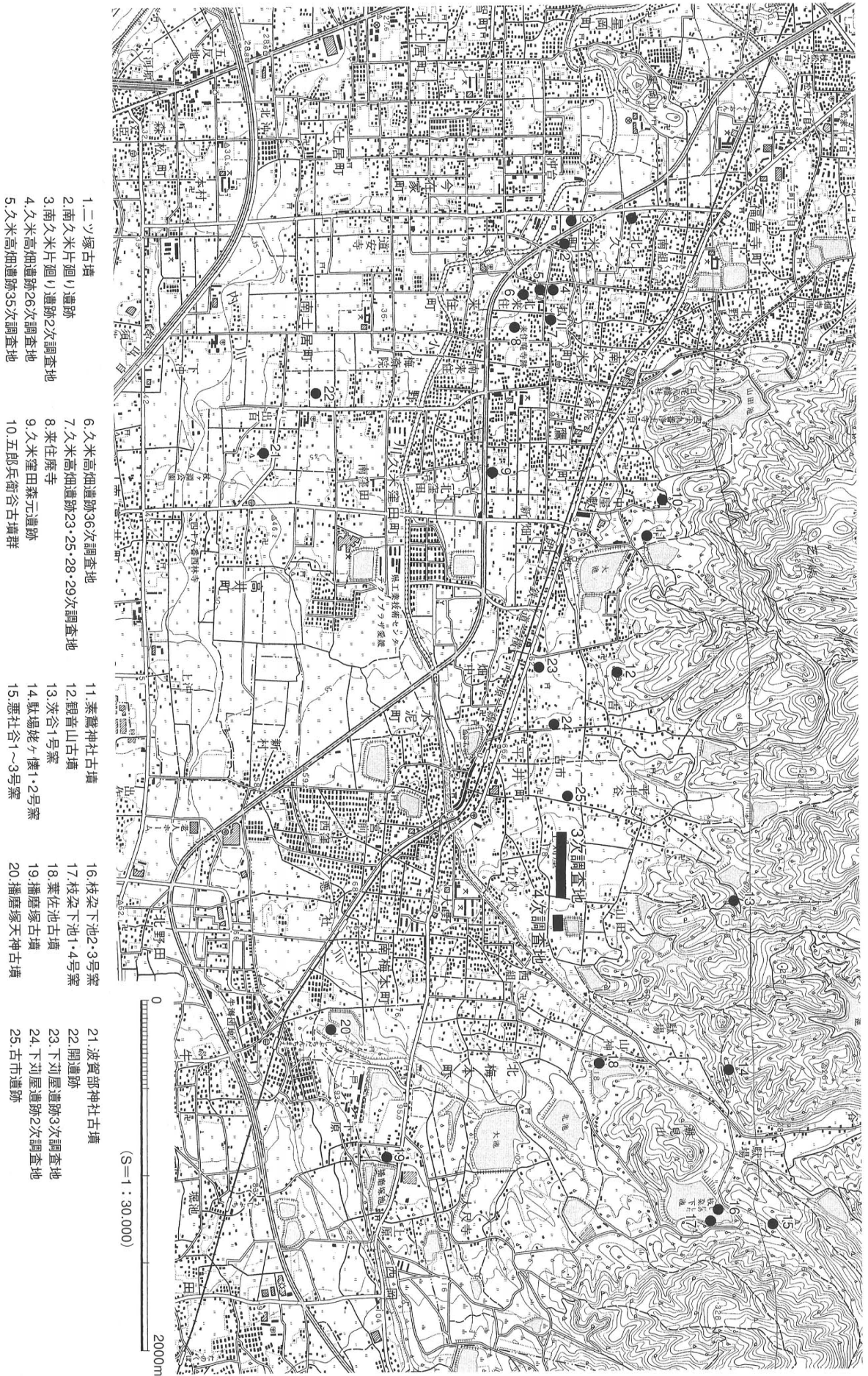


図1 調査地と周辺の主要遺跡

るところから、遺跡北東の小野谷に分布する窯址群からの中継点あるいは集積地のような性格を推定されている集落である〔重松 1996／河野 2000〕。

調査地北方の丘陵上には松山峠古墳群、芝ヶ峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群、東方の低丘陵上には播磨塚古墳群など小規模な円墳あるいは方墳を主体とする古墳群が密集しており、そのほとんどが後期古墳と考えられているが、これらの古墳群の中には平井町の観音山古墳のように5世紀代の大規模な帆立貝形古墳と推定されているようなもの〔相田 1980〕、あるいは鷹子町素鷲神社古墳のような、当地では最大規模の円墳〔愛媛県教委 1991〕とされている古墳がある。また、平地部に眼を転ずると高井町波賀部神社古墳、北久米町二ツ塚古墳、北梅本町葉佐池古墳〔栗田 1994〕や、現在では消滅してしまっただが鷹子町タンチ山古墳など当平野では数少ない後期の前方後円墳が多く分布する地域である。近年、播磨塚古墳群中の1基、播磨塚天神山古墳の調査が行われ、この古墳は全長32.5mの前方後円形の墳丘に主体部として横穴式石室を持つ、6世紀前半代の古墳であることが明らかになり、あらたにこのエリアに前方後円墳の例をひとつ加えることとなった〔吉岡 2001〕。このような、後期の突出した首長墳がこのエリアに集中する背景のひとつには、後述するように、7世紀代になって来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となった地方豪族の存在が挙げられよう。

さて、その来住台地上での久米官衙遺跡群の調査は近年着実な成果を挙げながら、新たな争点、課題も生み出しつつある。白鳳寺院址来住廃寺の調査が契機となり、その後、調査の進展とともに明らかとなった、寺院隣接部分の方一町規模の「回廊状遺構」をはじめとする、台地上の方一町規模の区画割りの存在は、久米高畑遺跡・来住廃寺あわせて100次近くに及ぶ調査によって、既に既成の事実となっていると言ってもよからう。台地北部の半町規模の方形区画域内部における近年の調査では、政庁としての姿を整えた建物配置が確認され、以前より、至近距離での「久米評」線刻須恵器の出土から推定されていた、この区画域が評衙政庁であることをより確定的なものとした。そればかりではなく、さらにその成立が評制以前の7世紀前半の段階である可能性が高くなったことで論議を呼んでいる。またその西部では、8世紀以降の段階で成立した、区画割りを越えたかたちでの、濠で囲われた正倉域の発見等、この台地上の官衙遺跡群はきわめて重要な遺跡群である〔橋本 1997・1998・2003〕。先にも述べたように、区画割りを含めたこれらの施設の初現は現在のところ7世紀前葉の年代が推定されているが、この遺跡群に須恵器を供給した可能性の高い窯址群が先にもふれた小野谷に分布する松山平野東部古窯址群である。発掘調査が行われたものは7世紀前半の駄場姥ヶ懐1号窯1基のみであるが、この地区では現在のところ駄場姥ヶ懐、悪社谷、枝朶下池、茨谷など10数基の須恵器窯の存在が確認されている。最も古いもので6世紀後半、新しいものには8世紀後半のものがあり、操業の盛期を概ね7世紀代に持つ窯址群である〔栗田・岡根 1996〕。

【文献】

- 重松佳久「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター 1992
 「下莉屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
 栗田茂敏「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会 1987
 「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989
 『葉佐池古墳―木棺がのこされた横穴式石室の調査―』松山市教育委員会 1994

はじめに

- 栗田茂敏ほか『古市遺跡・下苅屋遺跡-2・3次調査-』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
- 栗田茂敏・岡根なおみ「駄場姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
- 山之内志郎「古市遺跡2次調査地(1区)」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
- 吉本 拡・阪本安光「来住V遺跡、久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981
- 小玉亜紀子「久米高畑遺跡26次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
- 河野史知「久米高畑遺跡35次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
- 小笠原善治「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
- 「久米高畑遺跡28次・29次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
- 橋本雄一「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1995
- 「久米官衙遺跡群～総括と今後の展望～」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
- 「久米官衙遺跡群～今後の展望～」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
- 「久米官衙遺跡群～13年度調査の成果と今後の課題～」『松山市埋蔵文化財調査年報14』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2003
- 高尾和長「久米高畑遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
- 西尾幸則ほか『来住廃寺遺跡-第15次調査報告書-』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
- 梅木謙一・宮内慎一「久米窪田古屋敷C遺跡」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1992
- 宮内慎一「開遺跡-1次調査地-」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
- 森 光晴『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会 1978
- 豊田達雄ほか「平井遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1982
- 相田則美「4・5世紀伊予の首長墓」『社会科学研究第1号』1980
- 『愛媛県内古墳-分布調査報告-』愛媛県教育委員会 1991
- 吉岡和哉『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2001

第2章 上苧屋遺跡第3次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成14(2002)年4月11日、松山市都市整備部道路建設課(以下、道路建設課と記す)より、市道小野158号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の試掘・確認調査の申請が、松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課と記す)に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No90 権現山古墳群」内に所在する。また申請地の西側には、「古市遺跡」、「下苧屋遺跡2次調査地」や「古市遺跡2次調査地」、「五楽遺跡1区」など多くの遺跡が存在し、発掘調査によって古墳時代後期～古代の掘立柱建物跡、古墳時代後期の竪穴式住居址、弥生時代の土坑、自然流路、縄文時代の土坑などがみつまっている。さらに、申請地周辺は古墳が分布する地域としても知られ、「上苧屋遺跡1次調査地」や「五楽遺跡3次調査地」では6世紀から7世紀頃に造られた古墳の存在が明らかになっている。

周辺における過去の調査成果から、当初より申請地に埋蔵文化財が存在する可能性が高いことが予想された。上記の事実をふまえ、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋蔵文化財センターと記す)は、埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認する為に平成14(2002)年4月18日より同年4月30日にかけて試掘調査を実施した。

試掘調査では合計33本のトレンチを設定し、内部の精査を実施した。その結果、14本のトレンチにおいて柱穴、溝、自然流路などの遺構を検出し、遺構の内部あるいは包含層中より、弥生土器、須恵器、土師器、土師皿、陶磁器などの出土がみられた。申請地内に弥生時代から中・近世の集落遺跡が存在する可能性が極めて高いことが判明し、事前の発掘調査が必要であると判断された。

この結果を受け、道路建設課、文化財課、埋蔵文化財センターが協議を重ね、平成14年5月1日～平成15年1月31日の予定で発掘調査(屋外調査)を実施する運びとなる。

(2) 調査の経過

調査対象地が水田地帯の中央部を東西に貫くことから、調査は先ず、買収地と民有地との境界に畦畔を設置し、分断した水田の為に新しい水口と水戸を設ける作業から開始した。また当初、道路工事が調査地の西側から進行することが想定された為、基本的に西側から調査区を設定し、順次発掘調査を実施した。その結果、合計11の調査区を設置し、一部並行しながら1～4区、6区、7・8区、5区、9区、10・11区の順に調査を実施した。

調査の開始が5月上旬であった為、その後まもなく周囲の水田が一斉に導水を開始した。その為、調査は予想以上に困難な状況下に置かれたが、道路建設という大規模工事の性格上、比較的広範囲にわたる遺跡調査が実施できた。

(3) 調査組織

調査地	松山市平井町865番地1外
遺跡名	上苧屋遺跡3次調査地
調査期間	平成14年5月1日～平成15年1月31日
調査面積	7,689.39 m ² のうち5,015.11 m ²
調査担当	吉岡和哉、栗田茂敏

2. 層 位

本調査で確認した土層は大きく5つに分けることが可能で、今回検出した遺構には第Ⅱ層上面から掘り込まれたものと第Ⅲ層上面から掘り込まれたもの、第Ⅲ層堆積以前に存在したものがある。

第Ⅰ層；灰色～褐色系微粒土および灰色細砂、暗緑褐色粘質土

…近現代の水田耕作に伴って形成された土層（耕作土及び水路の基礎など）で、調査地の全面に広がる。場所により枚数に違いがある。

第Ⅱ層；黒～暗褐灰色粘質土

…2区～8区にかけて堆積する土層で、同一調査区内では西側に厚く堆積する傾向がみられる。また9区よりも西側の調査区に関しては、9区に近づくほど堆積が厚い。9区を含め9区よりも東側の調査区に堆積していないことから、9区の東側で検出した自然流路（SR1）の氾濫によって形成された土壌である可能性が考えられる。遺物はほとんど含まないが、6区では本土層中に縄文時代から中世にかけての遺物が含まれる。また、上面より16世紀～17世紀代の遺構が切り込むことが判明している。

第Ⅲ層；暗灰褐色～黒（灰）褐色粘質土、暗灰色砂礫層、乳橙色微砂

…第Ⅱ層と同様に9区のSR1の氾濫によって形成されたと考えられる堆積土壌で、6区、8区、9区（SR1よりも西側）に堆積する。特に9区では弥生時代中期の土器を疎らに含む遺物包含層であるが、他の調査区では遺物の出土はみられない。上面において古代～中世期の遺構を検出した。

第Ⅳ層；黒（褐）色粘質土～暗褐色粘質土、橙灰色～暗灰色粘質土

…締まりのないパサパサした土質の無遺物層で、地山直上に堆積した腐植土である可能性が高い。上位に第Ⅲ層の堆積が見られるにも関わらず本層上面より掘り込まれる遺構は、弥生時代中期以前に属する可能性が高い。5区から9区にかけて見られ、第Ⅱ層および第Ⅲ層が削平により存在しない地点では本層が遺構検出面となる。

第Ⅴ層；赤橙色～黄橙色粘土、乳白色粘土、拳大～人頭大の円礫層

…調査地全域に堆積した基盤層（地山）で、特に5区では一部に黄色の火山灰性堆積物の混入がみられた。弥生時代以前の遺構が直接掘り込む可能性があり、特に6区の調査では黄橙色粘土中より石器が1点出土している。上層が削平などにより消滅している場合は、本層が全時代を通じての遺構検出面となる。

※〈土層図の表記〉

①、②、…、⑪ …… 調査区を表す

I、II、…、V …… 基本土層の第何層に相当するのかを表す。（全ての調査区で共通）

a、b、c、…、f …… 同一調査区内で、基本土層が細分される場合に表現

3. 1 区 の 調 査

当調査区においては、中世以前の倒木痕を2基、古代～近現代のピットを11基、現代の暗渠を1条検出した。

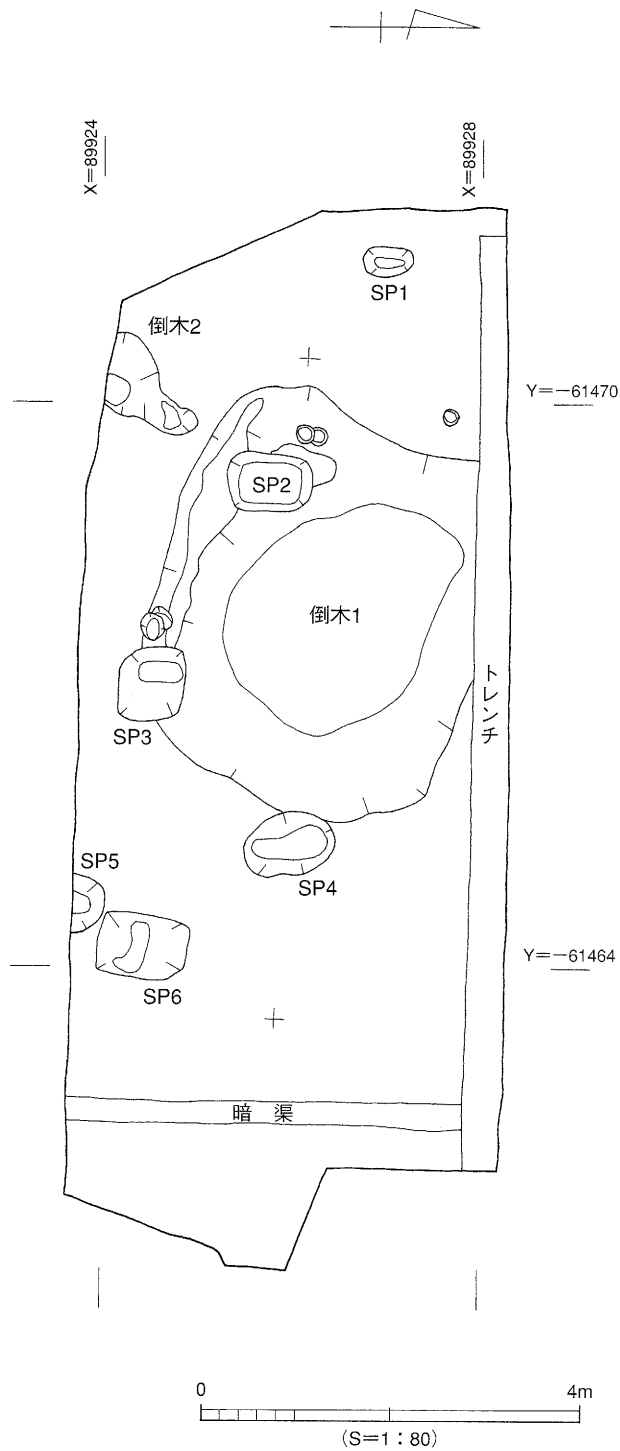


図3 1区遺構配置図

(1) 土層

1区の土層は、調査地全体の基本土層でいえば、第I層及び第V層の計2層に分けることが可能である。

また、それぞれを4つ (Ia~Id) あるいは3つ (Va~Vc) に細分することができる。

近現代のものと考えられる暗渠を除き、全ての遺構は第I層を取り除いた第V層上面にて検出した。

(2) 遺構と遺物

倒木痕1 (図6)

調査区の中央に、3.5~4.6mを測る巨大な倒木痕(倒木1)を1基検出した。

平面形態は不整形で、深さ約70cm、断面形態が皿状を呈する。埋土は断面で見ると、赤色系の粘質土を黄橙色~黄白色系の粘質土が「コ」の字状に包み込む状態であり、そのことより倒木痕と判断した。また、それとは別に調査区の南西部において、小規模な倒木痕を1基検出している(倒木2)。

時期：出土遺物がなく時期は不明であるが、古代～中世のピットに切られることから中世以前に属すると考えられる。

ピット

長径が1m弱、短径が70cm前後を測るもの(SP1~6)と、直径約20cmのもの(SP7~11)を検出

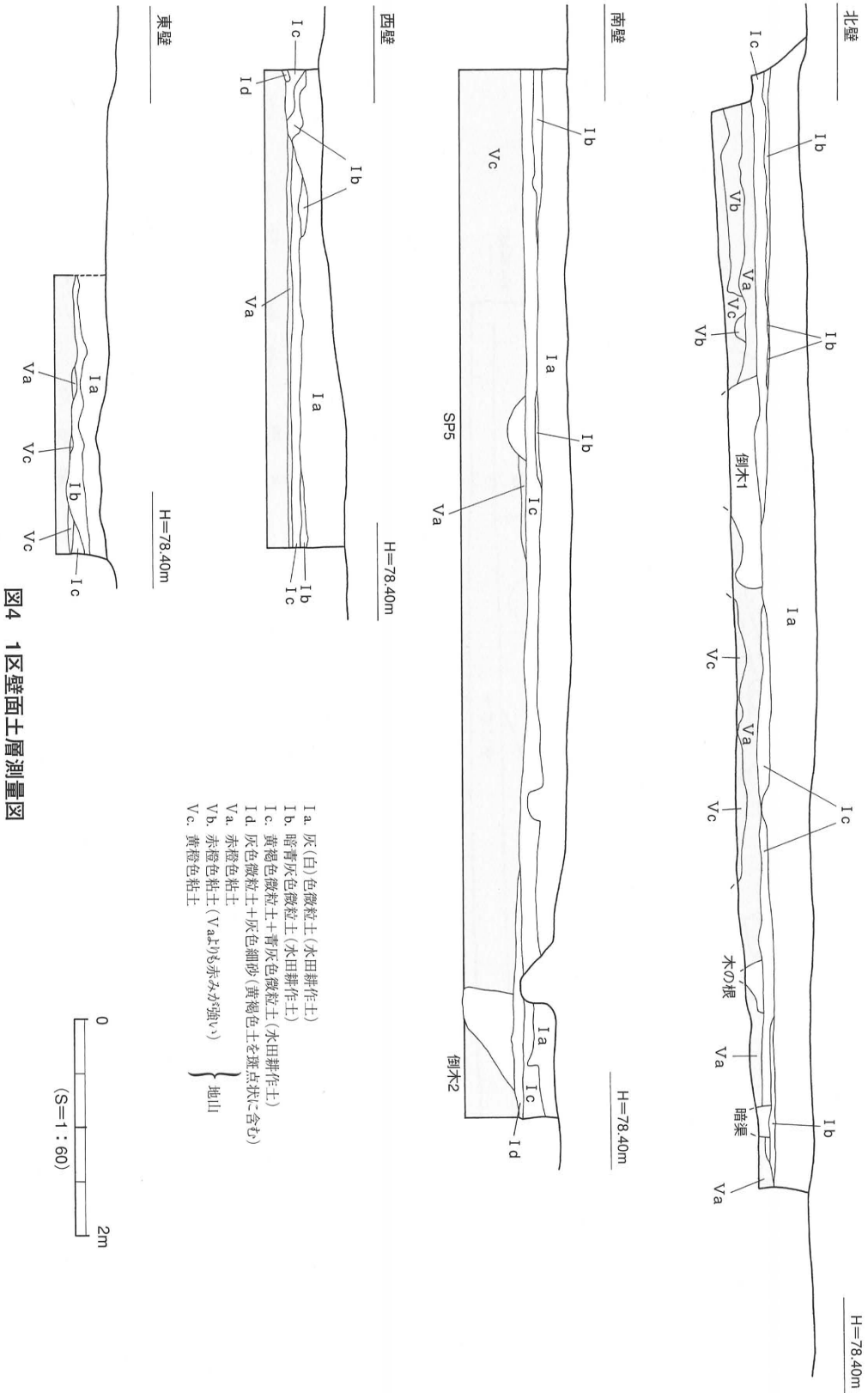


図4 1区壁面土層測量図

1 区 の 調 査

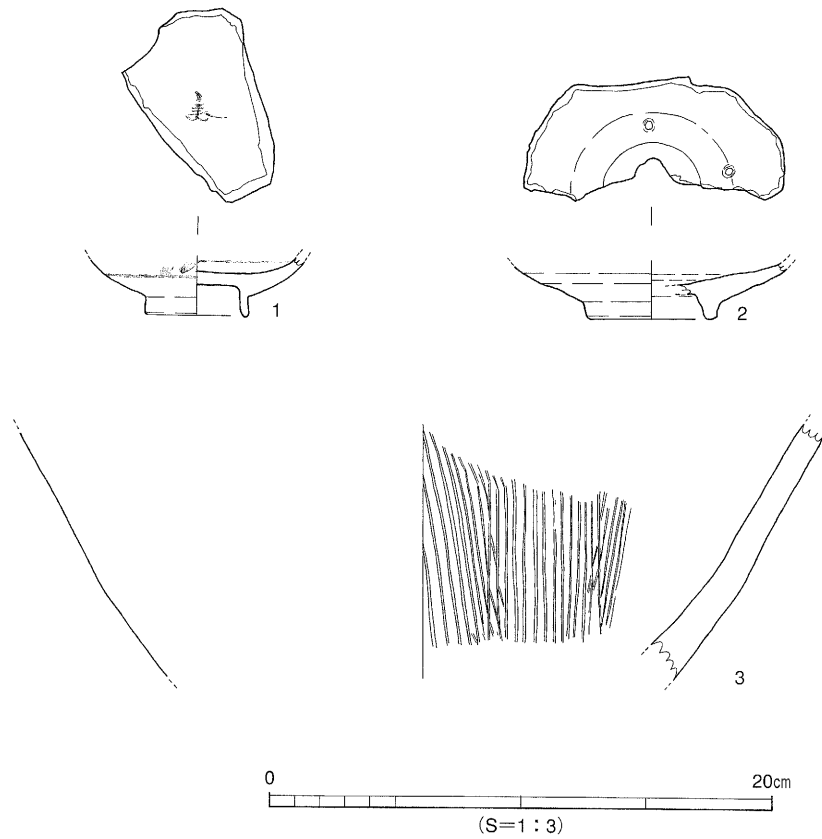


図5 1区出土遺物実測図

した。

時期：出土遺物がなく不詳であるが、前者（SP 1～6）は近現代の水田耕作土を埋土とすることより近現代に属し、後者（SP 7～11）は暗灰色土（暗褐色土混）を埋土とすることより、他の調査区における成果から古代～中世の遺構である可能性が高い。

表土より出土した遺物（図5）

図5 1は染付碗の底部で、見込み中央に文字様の文様が入る。呉須の発色が鮮明であることから、近現代に属するものと考えられる。2は見込みに小さな目痕を2ヶ所残す青磁碗の底部で、全面施釉の後高台底面のみ釉を削りとる。3は陶器のすり鉢で、内面におろし目が下から搔き上げるように刻まれる。

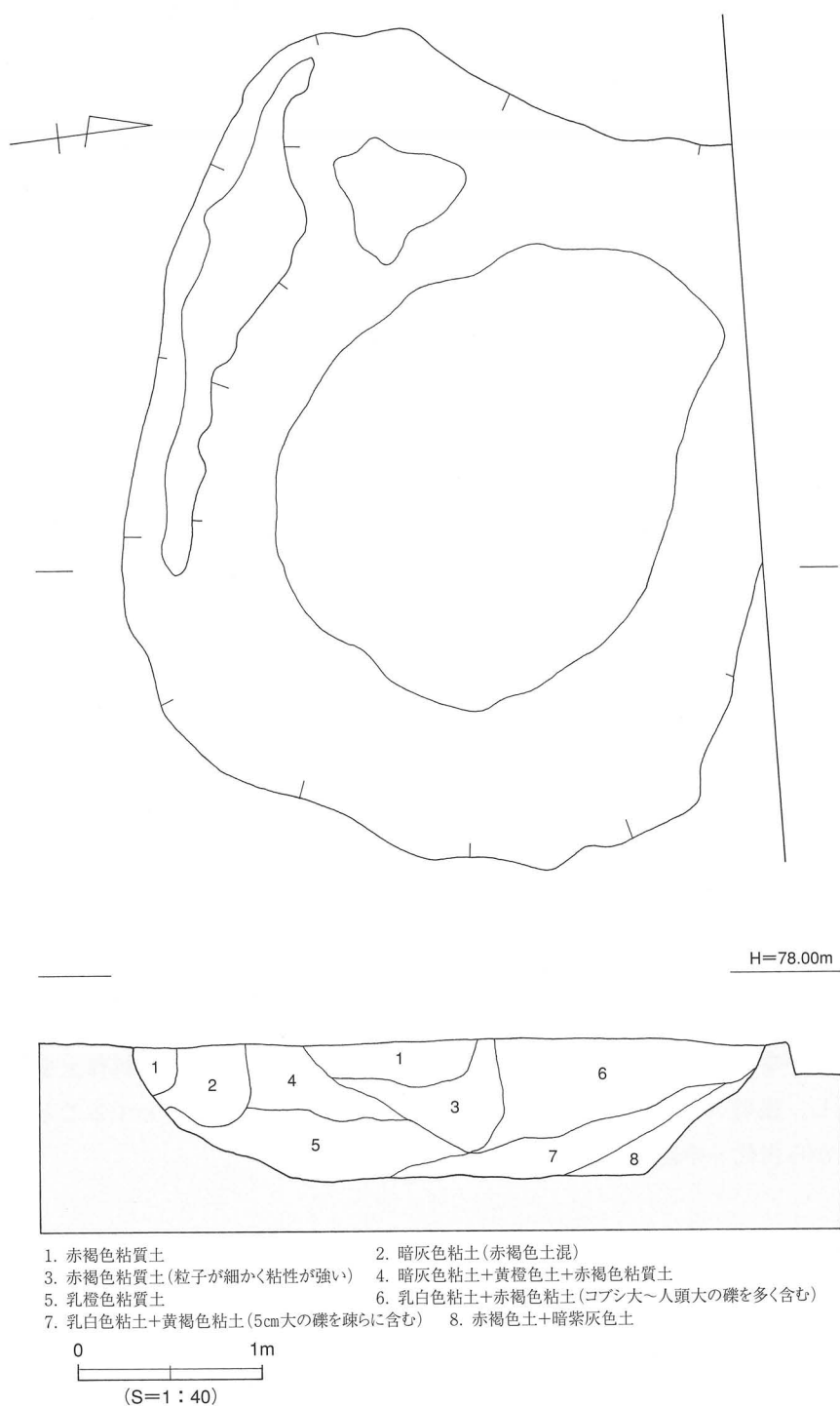


図6 1区 倒木1測量図

4. 2区の調査

当調査区では、積石遺構1基、倒木痕4基、ピットを59基確認した。ピットの中には直線状に連なり柱列を構成するもの(SA1・2)や、掘立柱建物跡(掘立1)が含まれる。

(1) 土層

2区の土層は、調査地全体の層位の項で前述したもののうち第I層、第II層及び第V層に分けるこ

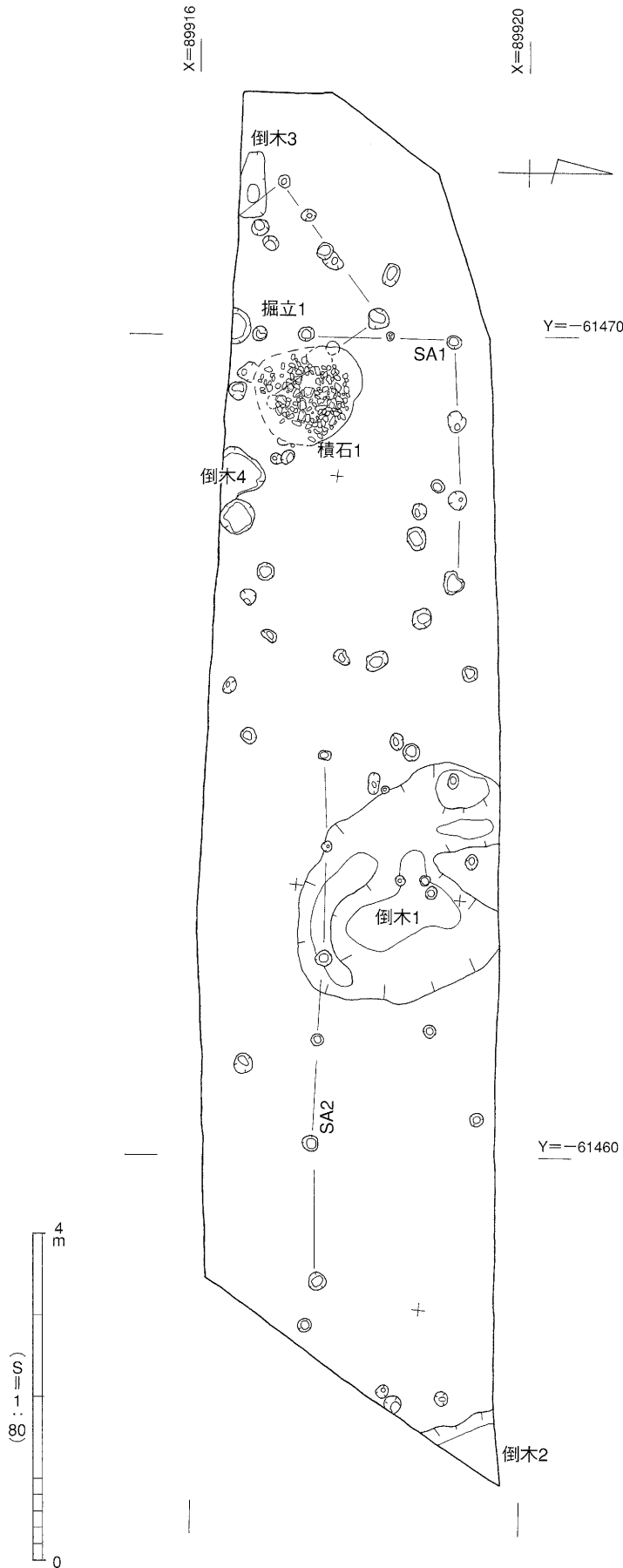


図7 2区 遺構配置図

とができる。また、第I層に関しては5つの層(I a~I e)に細分することが可能である。

全ての遺構は、第V層上面にて検出した。

(2) 遺構と遺物

積石遺構1〔積石1〕

(図9)

直径約1.2m、深さ5cm弱を測る浅い皿状の凹地内部に拳大の河礫を集めた円形の積石遺構である。

上部および内部に遺物を含まないため時期及び性格は不詳であるが、下苅屋遺跡3次調査例などに見られる積石を伴う近世墓の一部である可能性が高い。

時期：掘立1よりも新しいことより、中世以降に属すると考えられる。

倒木痕 (図10)

1区と同様に、大きな倒木痕を2基(倒木1・2)、小さな倒木痕を2基(倒木3・4)検出した。倒木1は2.4~3.2mほどの楕円形状を呈し、深さ約50cmを測る。倒木2は3区にて検出した倒木2と一連のものと考えられ、直径3.6~4m以上を測る。

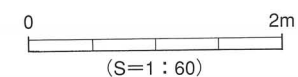
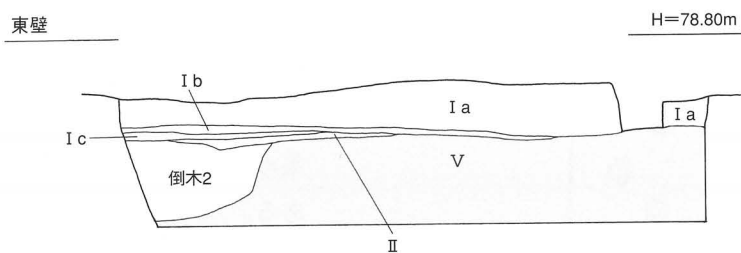
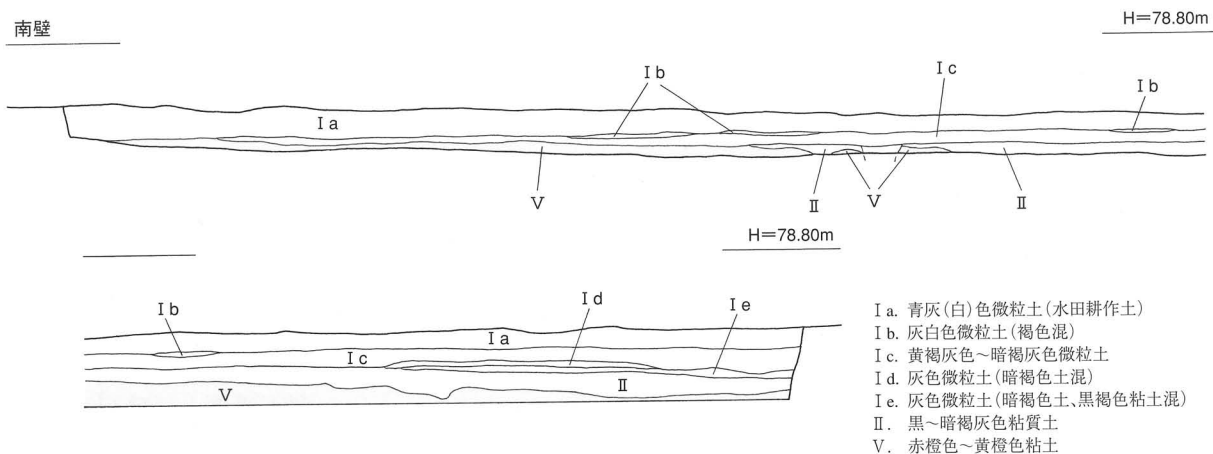


図8 2区壁面土層測量図

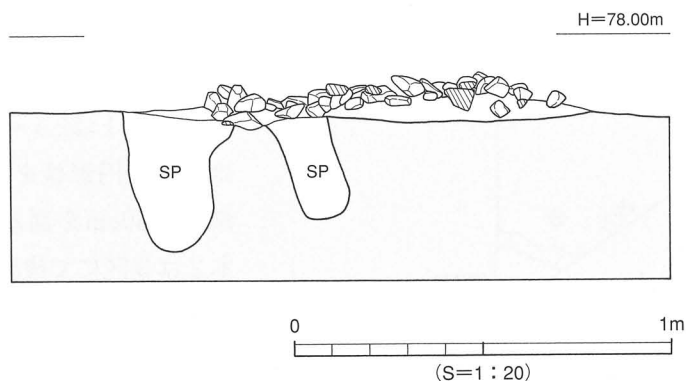
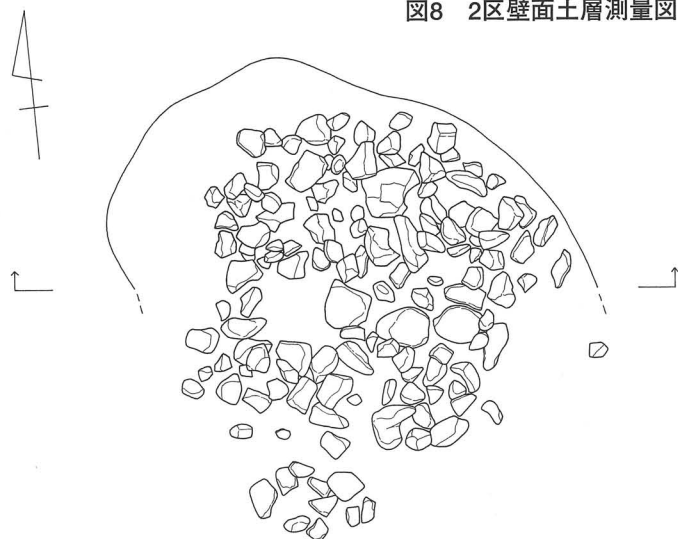


図9 2区 積石1測量図

時期：倒木1は、SA1に切られることより中世以前に属し、他の倒木痕に関してもそれ以上のことは分からない。

掘立柱建物跡1〔掘立1〕
(図11)

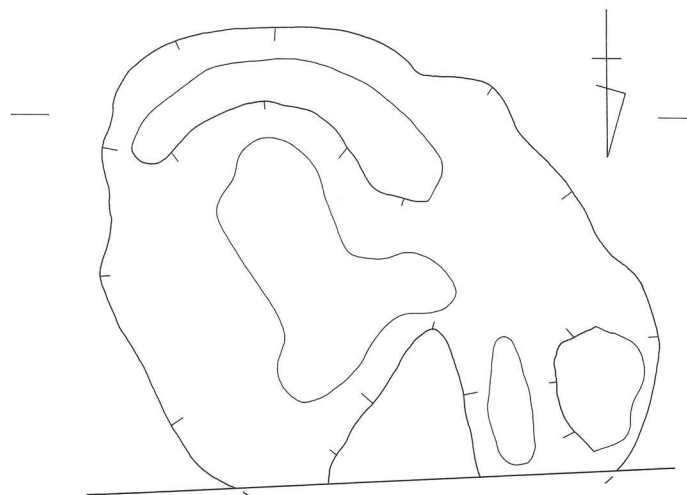
梁間が2間、桁行2間以上の側柱建物である。柱穴の埋土はいずれも暗灰色土(暗褐色土混)で、建物が廃絶した後、その上面に積石遺構が作られる。

時期：柱穴内から遺物の出土はみられなかったが、他の調査区における成果より14世紀前半~中頃の遺構である可能性が高い。

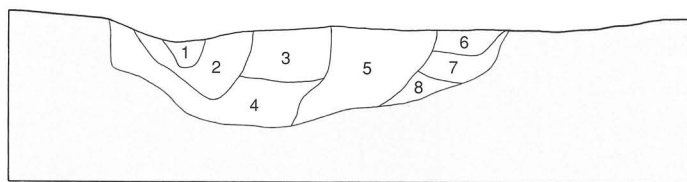
柱列1〔SA1〕(図12)

合計6個の柱穴により構成さ

2 区 の 調 査



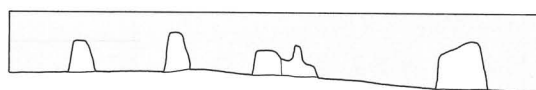
H=78.20m



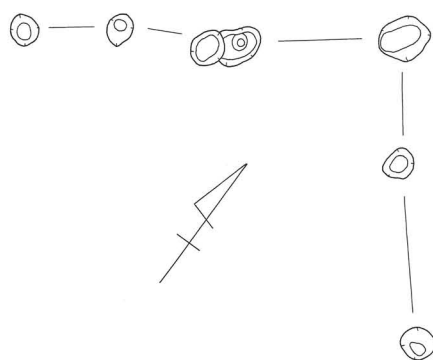
- | | |
|----------------------------------|------------------|
| 1. 暗褐色粘質土+黄褐色粘質土 | 2. 黄褐色粘質土+赤橙色粘質土 |
| 3. 赤橙色粘質土(黒褐色粘土混) | 4. 赤橙色粘質土+黄褐色粘質土 |
| 5. 乳白色粘土+橙色粘土+暗灰色粘土中にコブシ大の礫を多く混入 | |
| 6. 暗褐色粘質土+赤褐色粘質土 | 7. 赤橙色粘質土+黄褐色粘質土 |
| 8. 橙色粘土+黄褐色粘土 | |

0 1m
(S=1:40)

図10 2区 倒木1測量図



H=77.90m



H=77.90m

0 1m
(S=1:40)

図11 2区 掘立1測量図

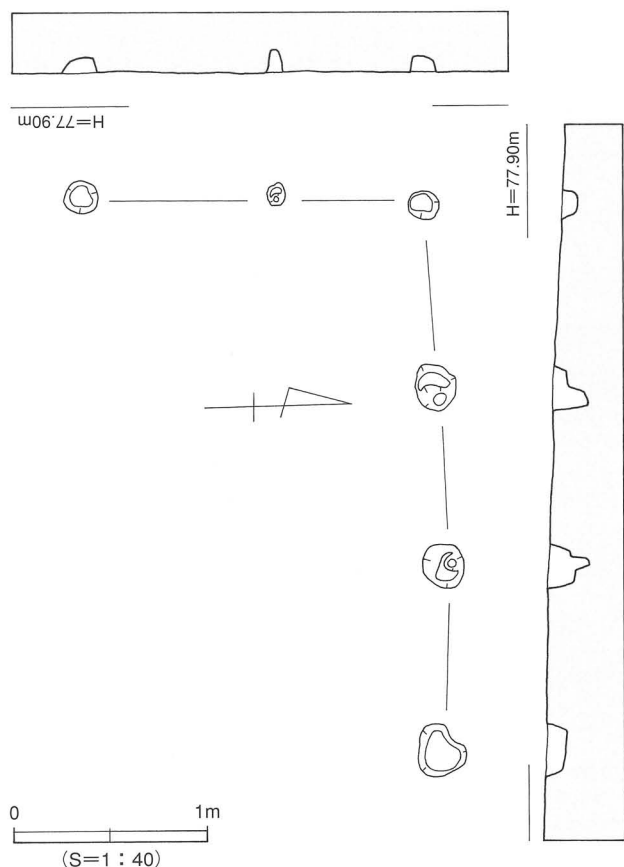


図12 2区 SA1測量図

れるL字状の柱列である。柱穴は直径20cm前後を測り、埋土は暗灰色土（暗褐色土混）を呈する。掘立1と平面的に切り合い関係を有し、同時に存在したとは考えられない。

時期：出土遺物がなく詳細は不明であるが、隣接する3区掘立1などと主軸が同じであることから、13世紀後半～14世紀前半頃の遺構であると考えられる。

柱列2〔SA2〕(図13)

合計6個の柱穴によって構成される柱列で、東西方向に伸びる。遺構の軸がSA1とほぼ同じであることから、SA1と関係をもつ同時期の遺構である可能性が高い。埋土は暗灰色土（暗褐色土混）で、10～20cm程の柱穴によって構成される。

時期：出土遺物がなく不詳であるが、SA1と同様に13世紀後半～14世紀前半頃に属する可能性が高い。

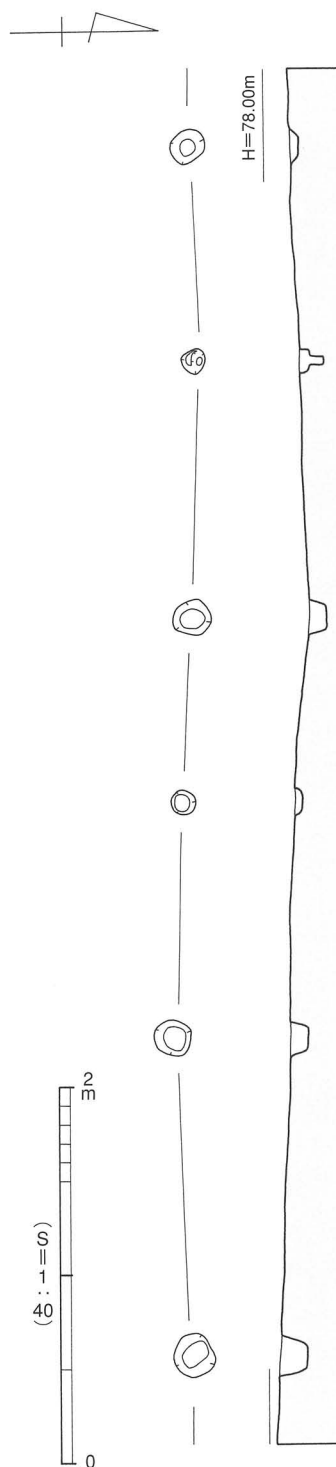


図13 2区 SA2測量図

2 区 の 調 査

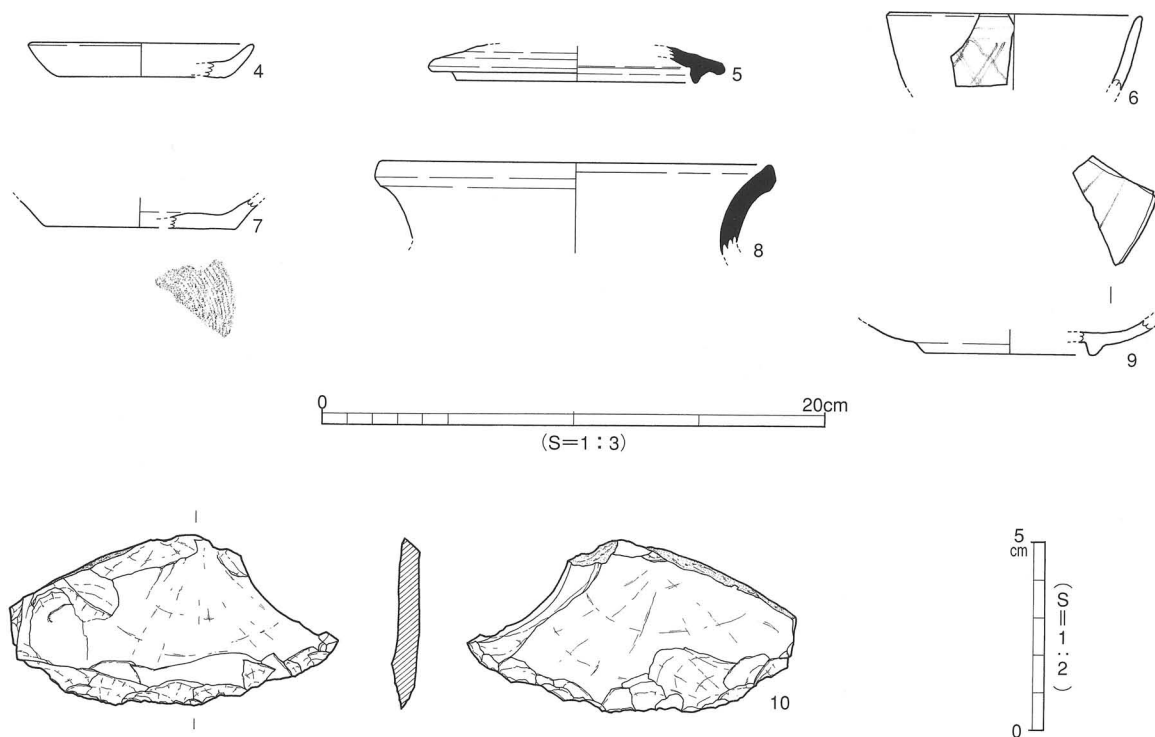


図14 2区出土遺物実測図

表土より出土した遺物 (図14 4～10)

図14 4は土師皿で、摩滅が著しいため詳細は分からないが、底部を回転糸切によって切り離すと考えられる。5は須恵器の杯蓋で、口縁部に短いかえりを有する。6は染付の磁器碗で、外面に二重の斜め格子と一重の斜め波文を組み合わせた文様(斜よろけ格子文)を施す。7は土師質の杯で、底部に回転糸切痕を有する。8は焼成がやや甘い須恵器の甕で、口縁端部外面を肥厚させる。9は染付の磁器皿で、見込みに二本の線がみえるが、どのような文様であるのか分からない。10は横長の翼状剥片を使用する安山岩製のスクレイパーで、上部には原礫面が残る。

5. 3区の調査

当調査区では、ピットを93基、溝を2条、倒木痕を3基検出した。ピットの中には掘立柱建物跡3棟を含み、また調査工程の都合より、倒木2に関しては掘り下げ調査を実施していない。

(1) 土層

3区の土層は7に分けることが可能で、それらは調査地全体の層位の項で述べたもののうち、第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅴ層に相当する。

全ての遺構は、第Ⅰ層および第Ⅱ層を取り除いた段階、すなわち第Ⅴ層の上面にて検出した。

(2) 遺構と遺物

掘立柱建物跡1〔掘立1〕(図17)

桁行2間(3.9m)、梁間1間(2.6m)の掘立柱建物で、SD1と切り合い関係を有しSD1よりも新しい。また、柱穴の埋土は黒～暗灰色粘質土(暗褐色、褐色混)で、南北棟の側柱建物である。

出土遺物 (図20 11~14)

11、12は瓦器で、11は口縁端部を丸く納める瓦器皿、12は瓦器椀である。13、14は底面を回転糸切により切り離す土師質の杯である。また図化できなかったが、亀山焼系の甕胴部片などの出土がある。

時期：出土遺物より13世紀後半～14世紀前半頃の遺構であると考えられる。

掘立柱建物跡2〔掘立2〕(図18)

桁行2間、梁間1間の掘立柱建物で、梁間2.2m、桁行が5.6m(2.6m+3.0m)を測る。南北棟の側柱建物で、SD2よりも古く、埋土の色は黒～暗灰色(暗褐色、褐色混)を呈する。建物の主軸およ

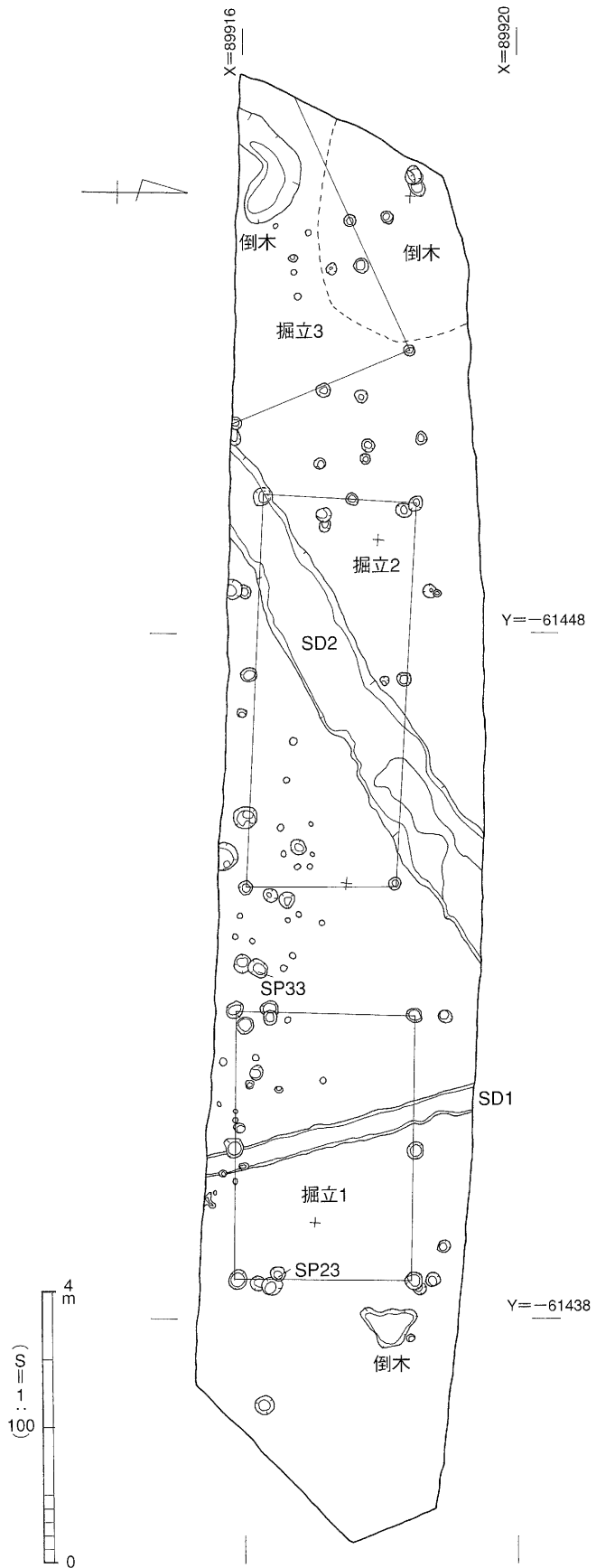


図15 3区 遺構配置図

3 区 の 調 査

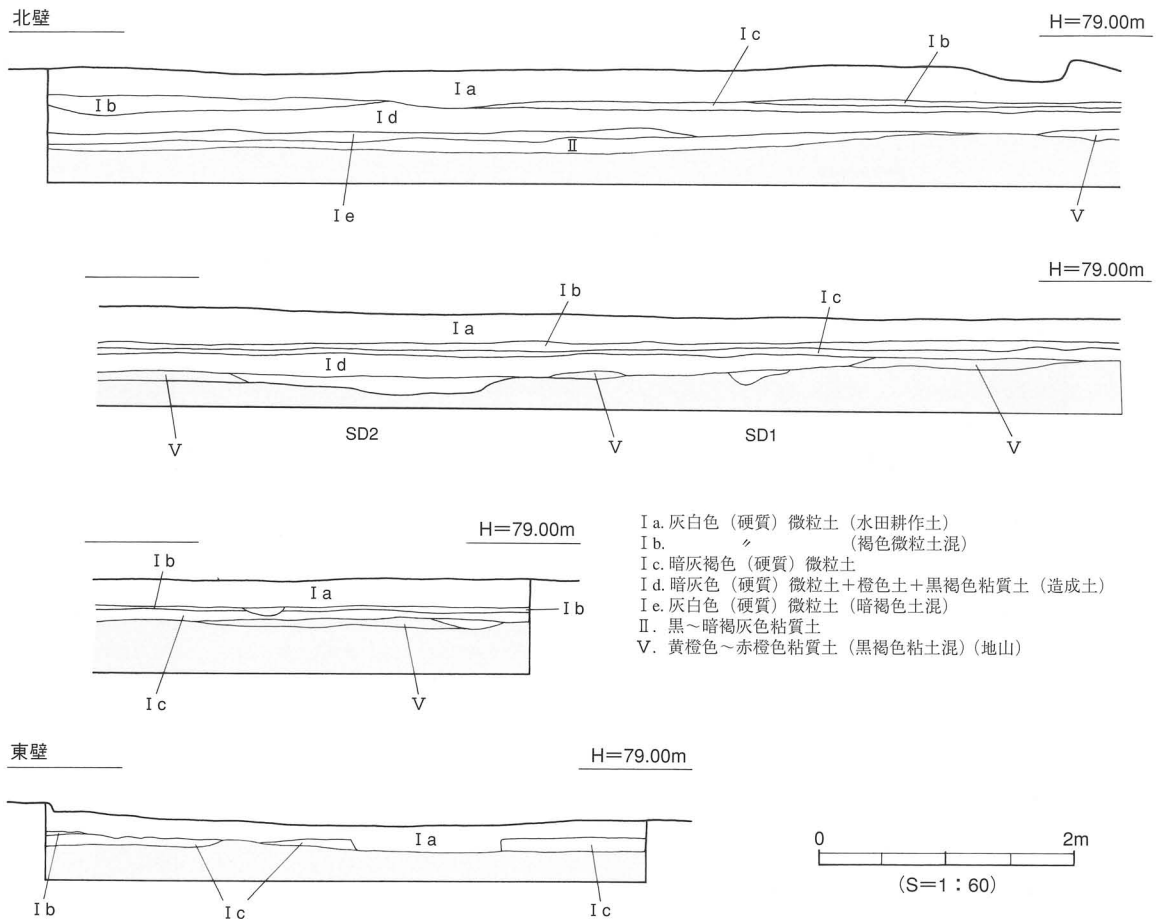


図16 3区壁面土層測量図

び位置関係などから、掘立1と同時期の遺構である可能性が高い。

出土遺物 (図20 16)

16は、須恵器高杯の脚部である。また、これ以外に底部に回転糸切痕を有する土師質杯の小片が出土している。

時期：掘立1と同時期、すなわち13世紀後半～14世紀前半頃の遺構であると考えられる。

掘立柱建物跡3〔掘立3〕(図19)

調査区の西端にて検出した桁行2間(2.1m×2)以上、梁間2間(2.74m)の側柱建物で、軸を北東-南西方向に有する。建物の軸が他の2棟と大きく異なることから、掘立1および掘立2との関連は考えられず、傍に設けられているSD2との関連が想定される。柱穴の埋土は黒～暗灰色粘質土(暗褐色、褐色混)である。

出土遺物 (図20 15)

15は瓦器皿で、口縁端部を丸く納める。また、この他に底部を回転糸切によって切り離す土師質杯の小片が出土している。

時期：出土遺物より14世紀前半～中頃の遺構である可能性が高い。

第 3 次 調 査

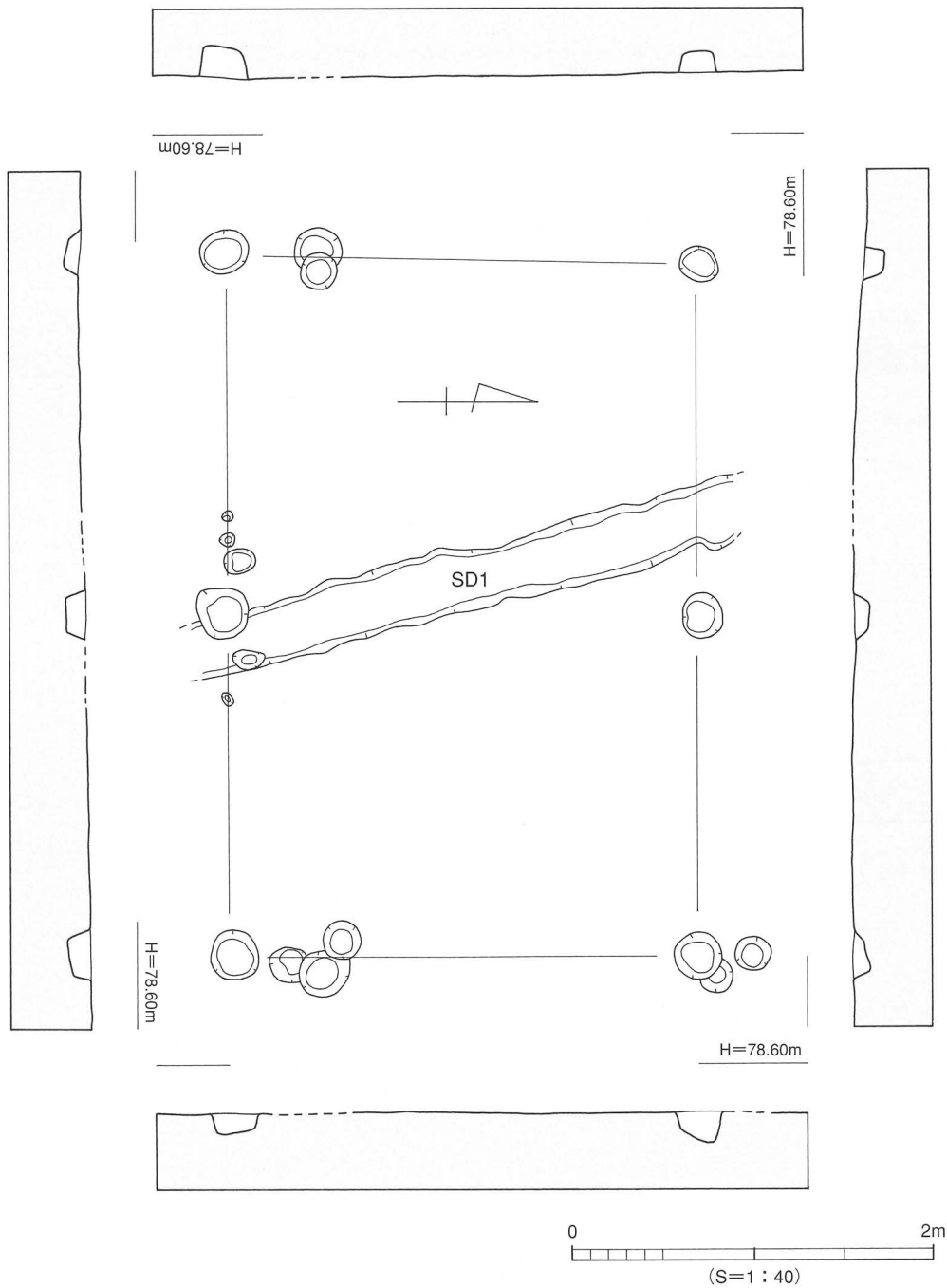


図17 3区 掘立1測量図

溝1〔SD1〕

調査区東半部、南より北に向かって緩やかに下る溝で、検出長約4.1m、幅26~40cm、深さ1~10cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土を主体に暗灰色土を混入し、掘立1よりも古いことが判明している。

出土遺物

図化し得なかったが、須恵器小片の出土がみられた。

3 区 の 調 査

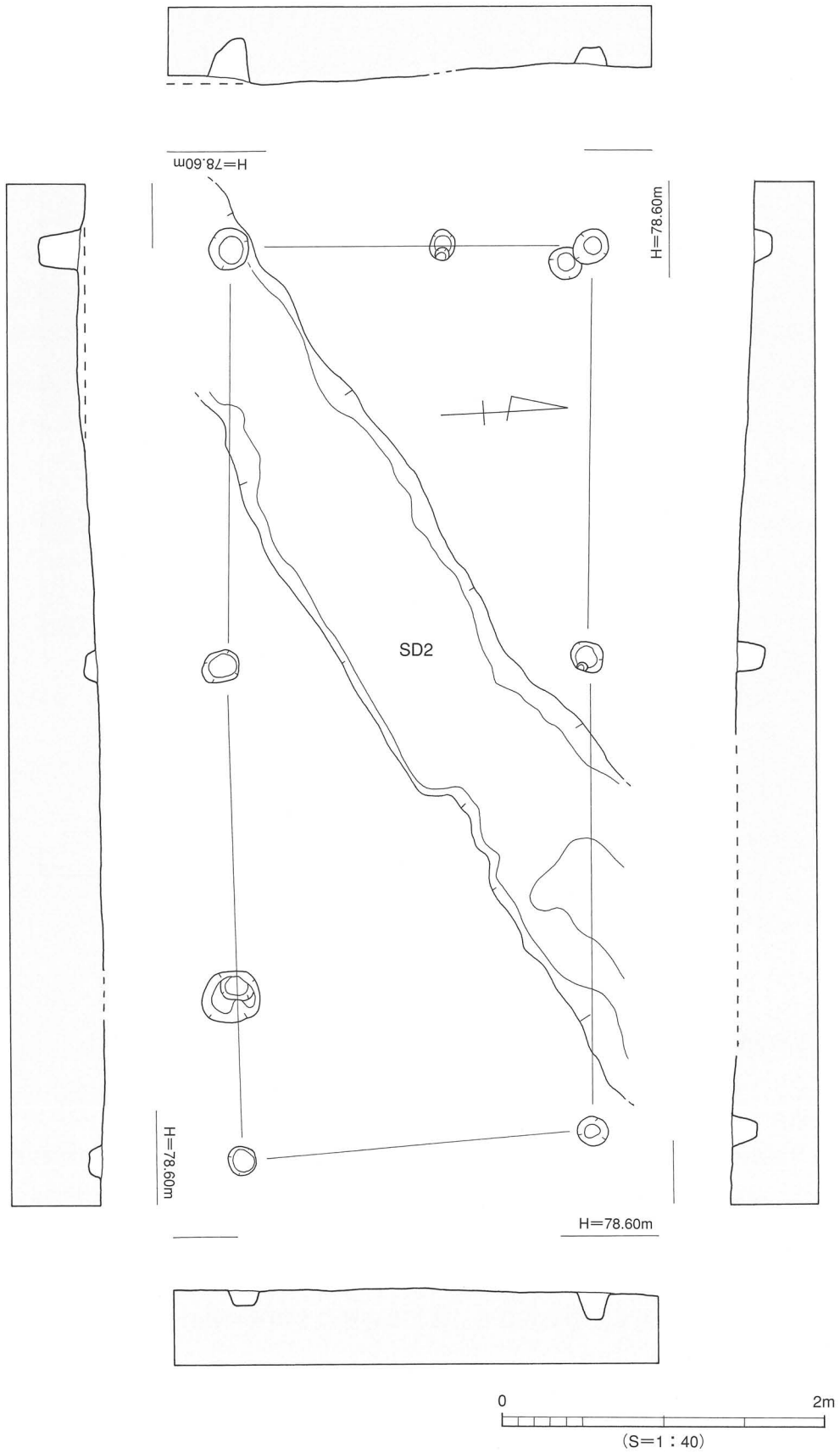


図18 3区 掘立2測量図

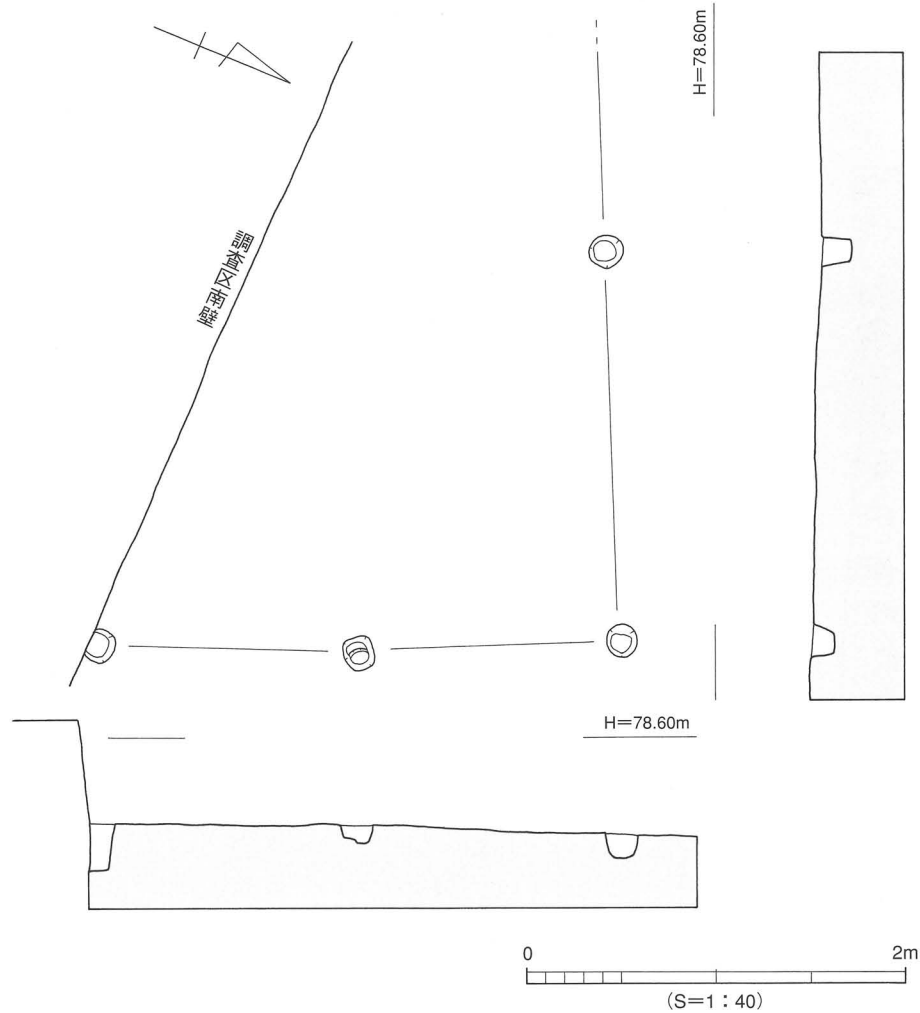


図19 3区 掘立3測量図

時期：埋土の特徴などより古墳時代後期～古代に属する遺構である可能性が高い。

溝2〔SD2〕

灰色微砂（黄褐色微砂混）を埋土に持つ溝で、調査区の中央部にて検出した。断面形態は皿状で、検出長約7m、幅80～120cm、深さ3～10cmを測る。底部レベルに高低差がほとんど認められないことから、主に区画的な機能を有するものであった可能性が高い。

出土遺物（図20 22）

22は鉄器で、釘の一部であると考えられる。またこの他に土師質の杯、須恵器などが出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期：掘立2との切り合い関係より、14世紀前半以降の遺構であると考えられる。

その他の遺構および表土より出土した遺物（図20 17～21）

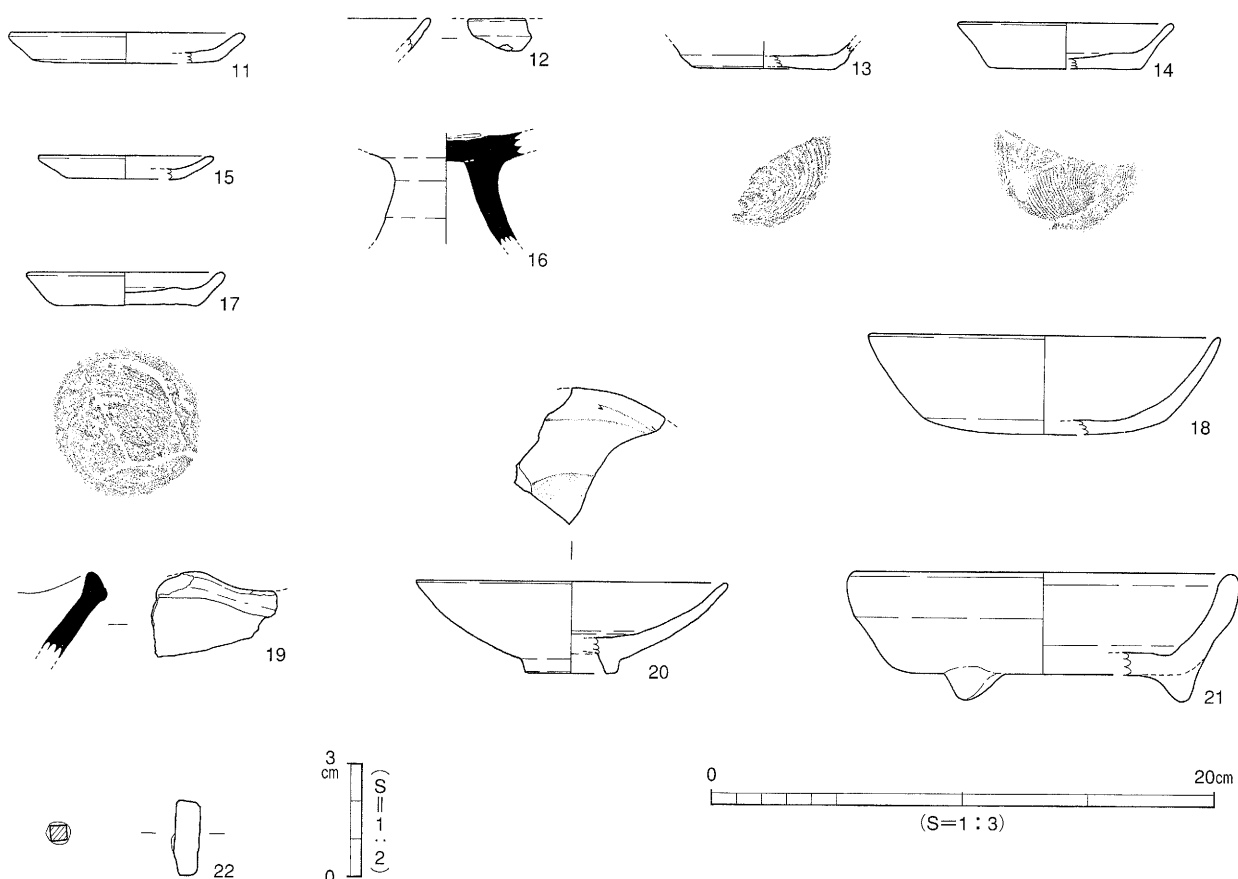


図20 3区出土遺物実測図

図20 17及び19はピット（S P 33及びS P 23）から出土したもの、他は表土から出土した遺物である。17はほぼ完形の土師皿で、底部に回転糸切痕を有する。18は土師質の杯で、表面の摩滅が著しいが底部をヘラ切により切り離すものである。19は東播系のこね鉢である。20は染付皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎした後には砂目積みする焼成技法がうかがえる。また高台内は無釉で、成形は轆轤成形による。21は土師質の香炉と考えられるもので、内外面に煤が付着し、底部には三角すい状の脚が3つ付くと考えられる。

6. 4 区 の 調 査

当調査区では、ピットを26基、土坑を1基、竪穴式住居址を1基、倒木痕を3基、近現代の水路を1条検出した。ピットの中には、柱列1条および竪穴式住居址の主柱穴1基が含まれる。

(1) 土層

4区の土層は、調査地全体の層位の項で前述したもののうち、第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅴ層に分けることができる。また、第Ⅰ層に関しては5つの層（Ia～Ie）に細分することが可能であり、特にIc～Ie層は近現代まで機能していた水田耕作に伴う水路の内部に堆積した土層である。

全ての遺構は、第Ⅰ層のIa・Ibおよび第Ⅱ層を取り除いた段階、すなわち第Ⅴ層上面にて確認した。しかしながら壁面土層測量図に表れているように、一部の遺構は第Ⅱ層の上面より掘り込まれていたものと考えられる。

(2) 遺構と遺物

竪穴式住居址 1〔SB1〕

(図23)

調査区のほぼ中央部にて検出した隅丸(長)方形の竪穴式住居で、北辺長2.2mを測る。住居の南側は近現代の水路建設時に破壊されており、辛うじて破壊を免れた部分についても床面から10cm前後が遺存するに過ぎない。住居は、特にその中央部に白色粘土及び焼土が集中する傾向が見られるが、これと関連する特別な遺構や遺物は見つからなかった。住居に伴うものとしては、住居内北東側に掘り込まれた直径40cm、深さ30cm前後の主柱穴を1基検出したのみであるが、その位置から判断するに住居の屋根は4本の柱によって支えられていた可能性が高い。

出土遺物 (図25 23)

23は土師器甕形土器の口縁部から頸部で、緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部を有する。

時期：出土遺物より5世紀以降に廃絶された遺構であると考えられる。

土坑1〔SK1〕(図24)

調査区西半部において検出した達磨形の二段掘土坑で直径1.2m、くびれ部幅約1mを測る。埋土は上層が黒褐色粘土(暗褐色土、灰色土混)、下層が暗灰色粘土(暗褐色土、黒褐色土混)の2層で構成されるもので、深さは上段;16cm、下段;26cmを測る。

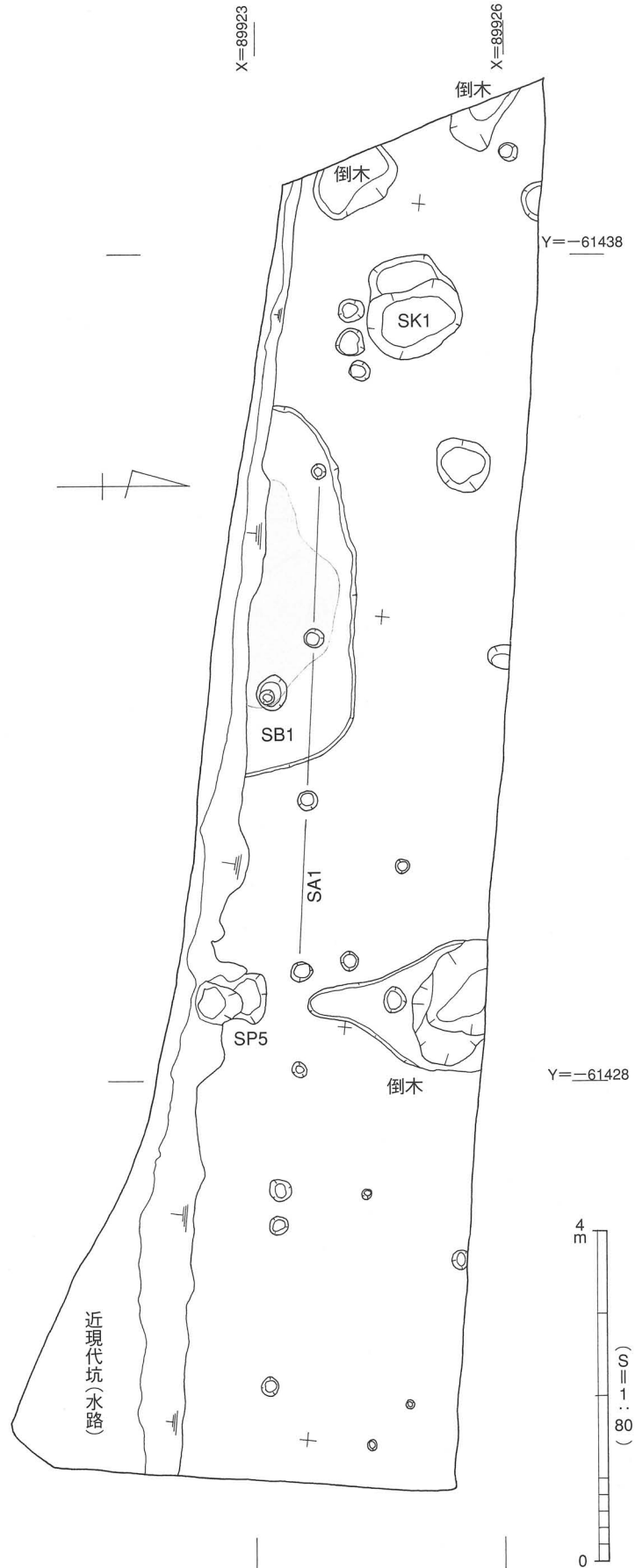


図21 4区遺構配置図

4 区 の 調 査

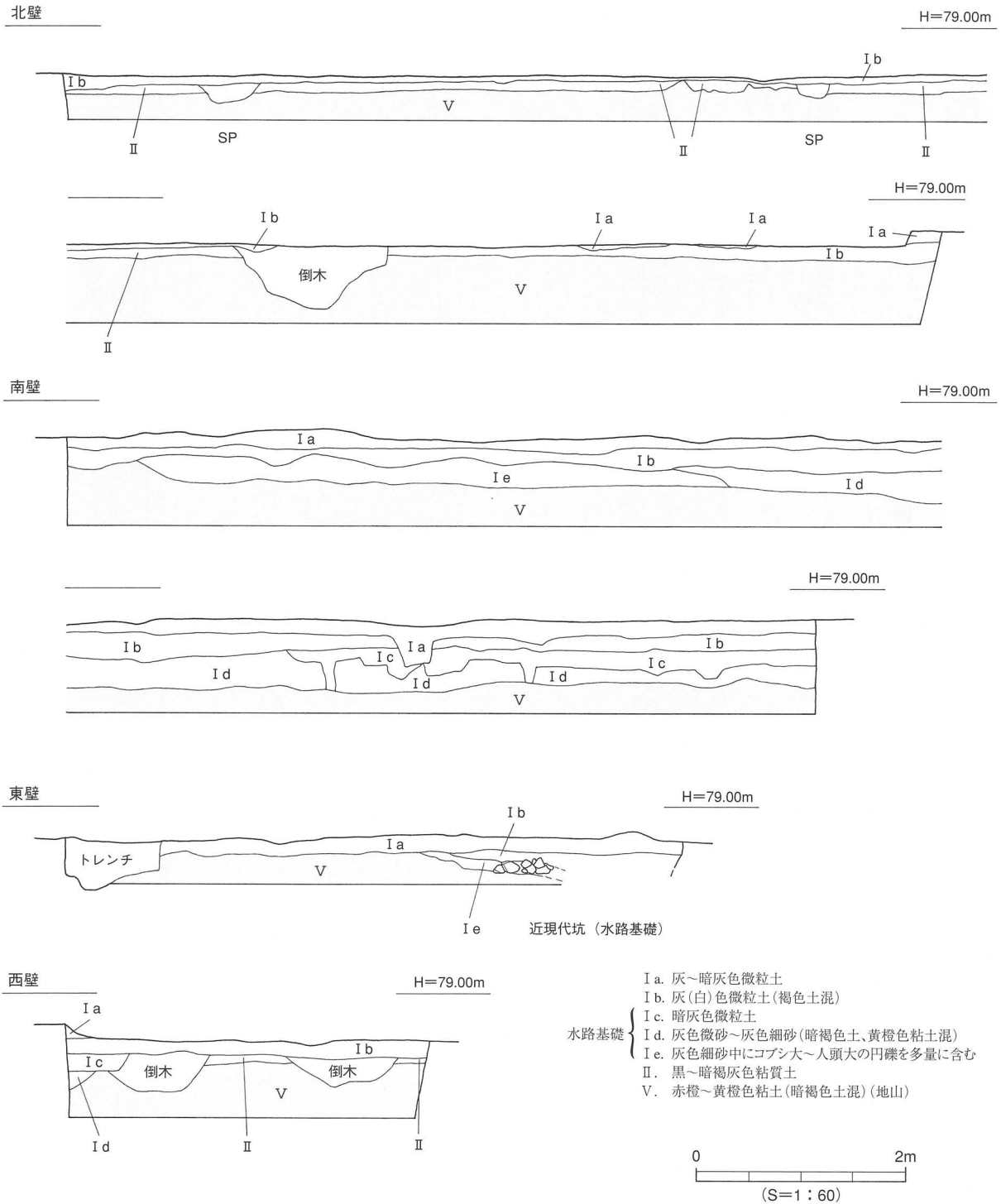


図22 4区壁面土層測量図

出土遺物

小片の為図化できなかったが、4~5世紀頃と考えられる土師器高杯が出土した。

時期：出土遺物および埋土の特徴より、SB1と同時期の遺構である可能性が高い。

柱列1〔SA1〕(図23)

直径18~26cmのピット4基によって構成される柱列で、調査区の中央部にて検出した。一列に直線で繋ぐことが可能であり、各ピット間の距離が約2.0mと共通することから柱列として認定した。

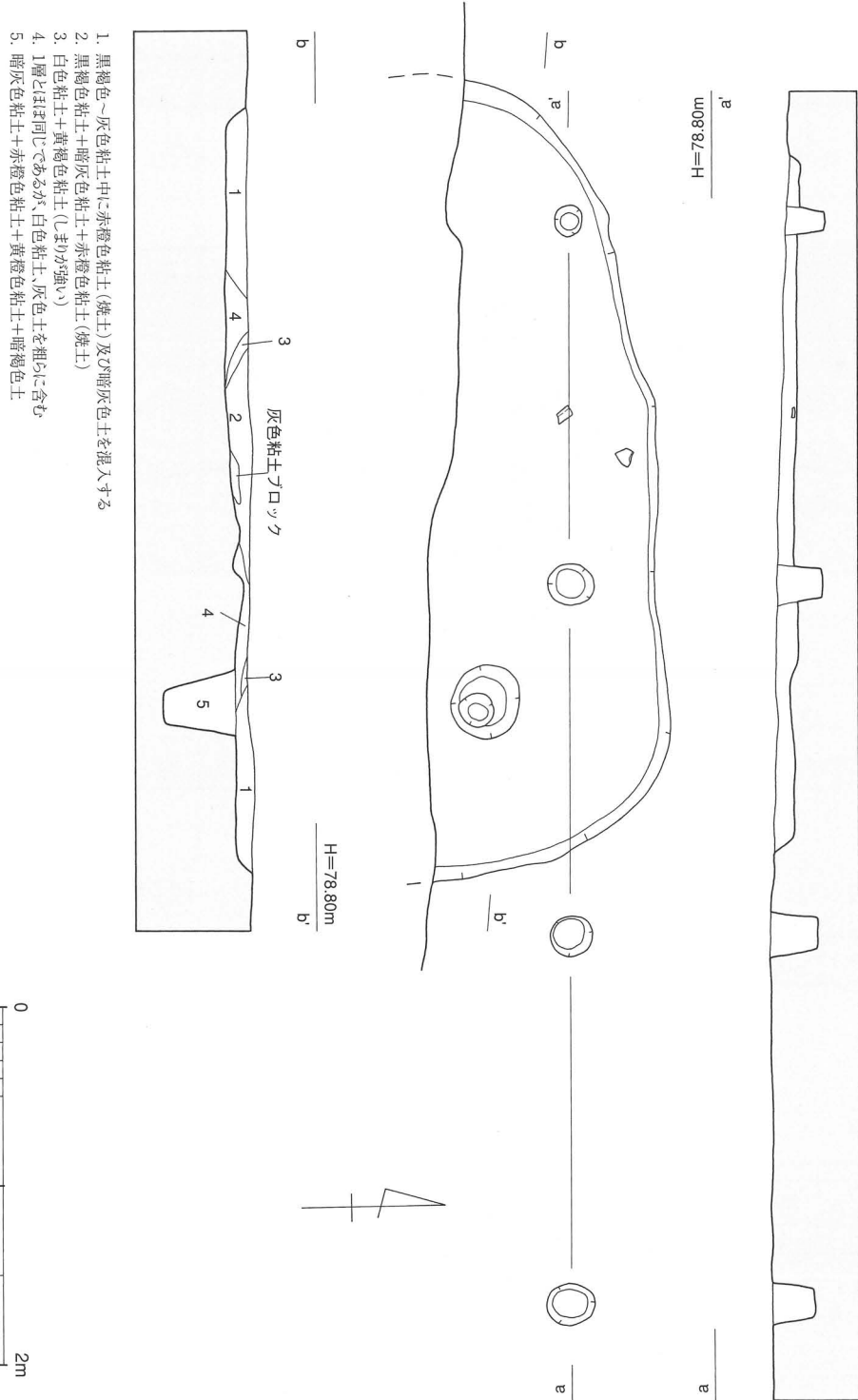


図23 4区 SB1・SA1測量図

調査区の南側に掘立柱建物跡として展開する可能性もある。柱穴の埋土は黒～暗灰褐色土で、柱穴がSB1を切り込んで掘り込まれることからSB1よりも新しい遺構である。

出土遺物

土師器の小片が出土しているが、小片の為図化できない。

時期：3区で検出している掘立1や掘立2と軸が共通することから13世紀後半～14世紀前半頃の遺構である可能性が高い。

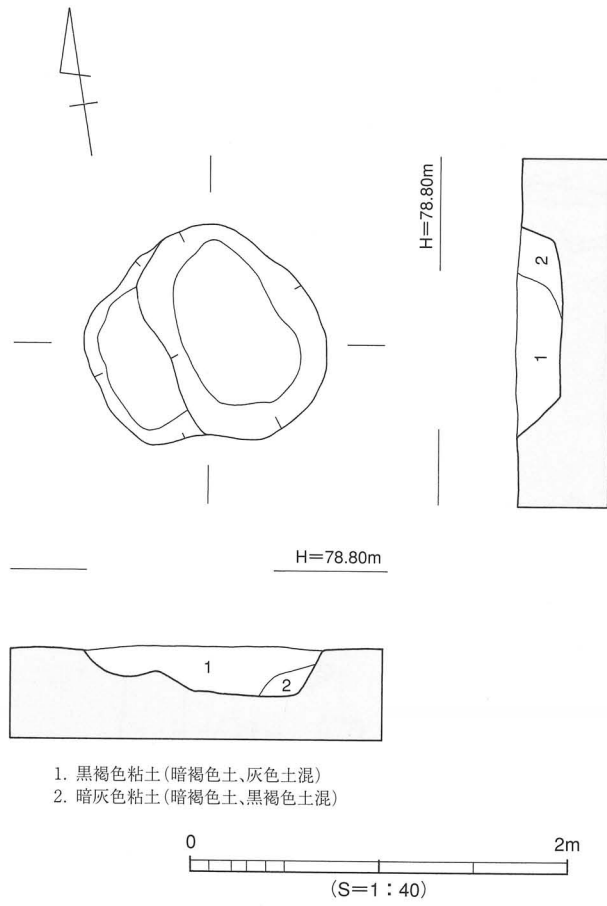


図24 4区 SK1測量図

その他の遺構より出土した遺物

(図25 24~34)

24、25はピット (SP5) から出土したものである。24は土師質の羽釜、25は円盤高台状にやや突出した底部を有する土師質の杯で、底部にヘラ切痕が残る。

26~34は調査区の南壁沿いに検出した近現代坑 (水路) より出土した遺物である。26~29は古墳時代後期~古代の須恵器で、26は杯蓋、27は壺の口縁部、28は底部を回転ヘラ切によって切り離す杯、29は底部外周の端部付近に高台を有する杯身である。30および31は、土師質羽釜の口縁部及び脚部、32は備前焼すり鉢の口縁部、33は見込みに劃花文を施文する青磁碗、34は東播系のこね鉢である。

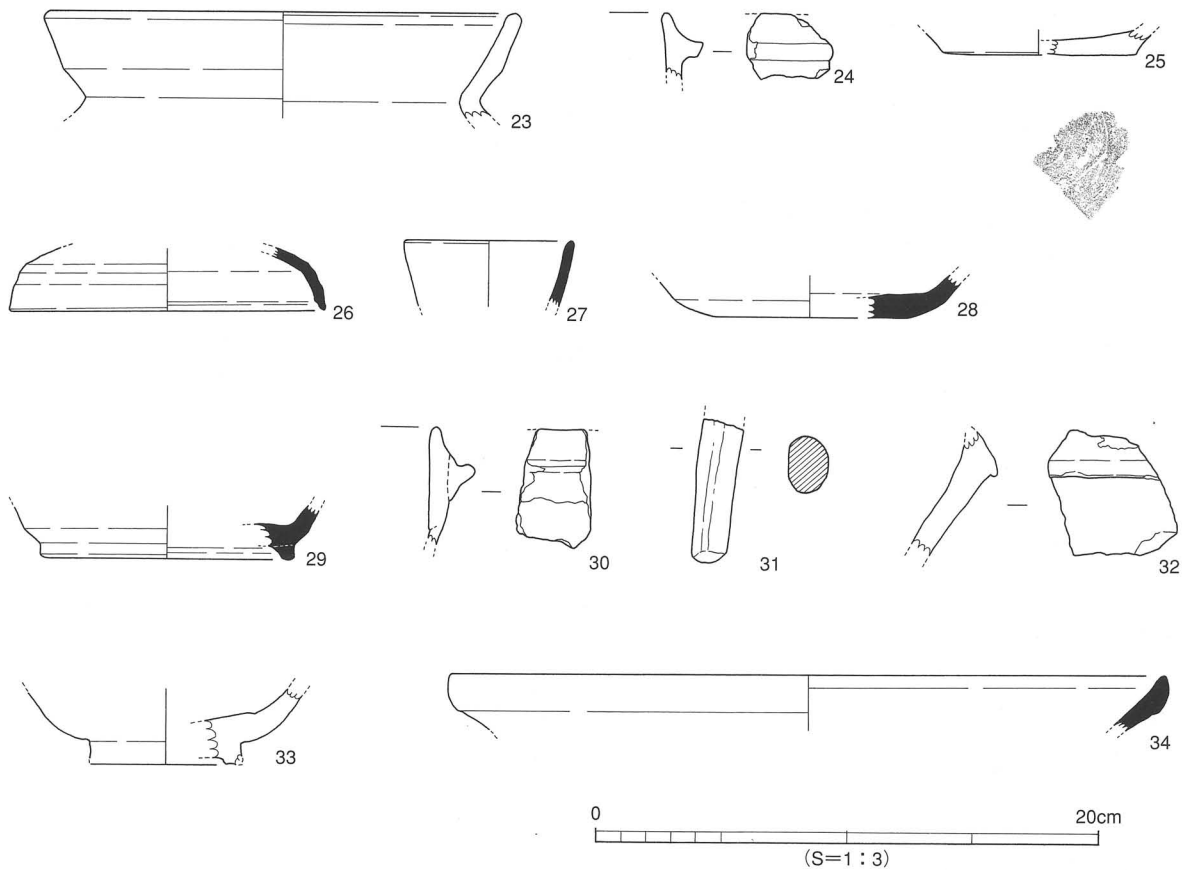


図25 4区出土遺物実測図

7. 5区の調査

当調査区では、ピットを72基（うち掘立柱建物跡2棟）、土坑を2基、溝を3条、倒木痕を1基、性格不明遺構を3基検出した。

(1) 土層

5区の土層は10に細分することが可能で、それらは調査地全体の層位の項で述べたものうち、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅳ層および第Ⅴ層に相当する。

当調査区では、北壁沿いに土層観察用の幅広のトレンチを設定したため、地山の堆積状況がある程度把握できた。それによると、暗灰色土を混入する赤橙色粘土の下位に黄橙色粘土が堆積し、その下位に乳白色の硬質土が堆積する。

全ての遺構は、第Ⅰ層、第Ⅱ層及び第Ⅳ層を取り除いた後、すなわち第Ⅴ層の上面にて確認した。しかしながら壁面土層測量図に表れているように、一部の遺構に関しては第Ⅱ層の上面より掘り込まれていたものと考えられる。

(2) 遺構と遺物

掘立柱建物跡1〔掘立1〕

(図28)

調査区東端で検出した側柱建物で、東側に展開して6区の掘立3へと繋がる。桁行3間、梁間3間、長さは梁間約4m、桁行が約5.2mを測る。

出土遺物 (図48 108)

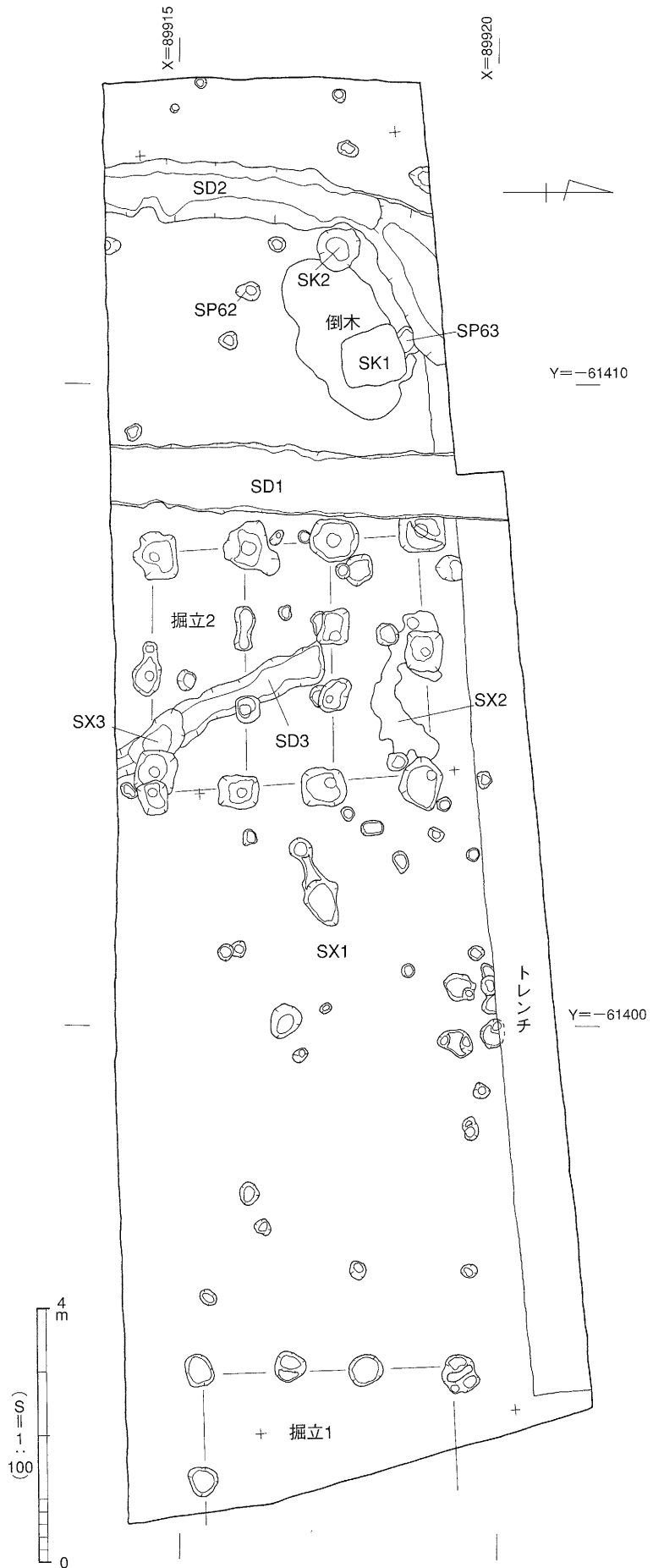


図26 5区遺構配置図

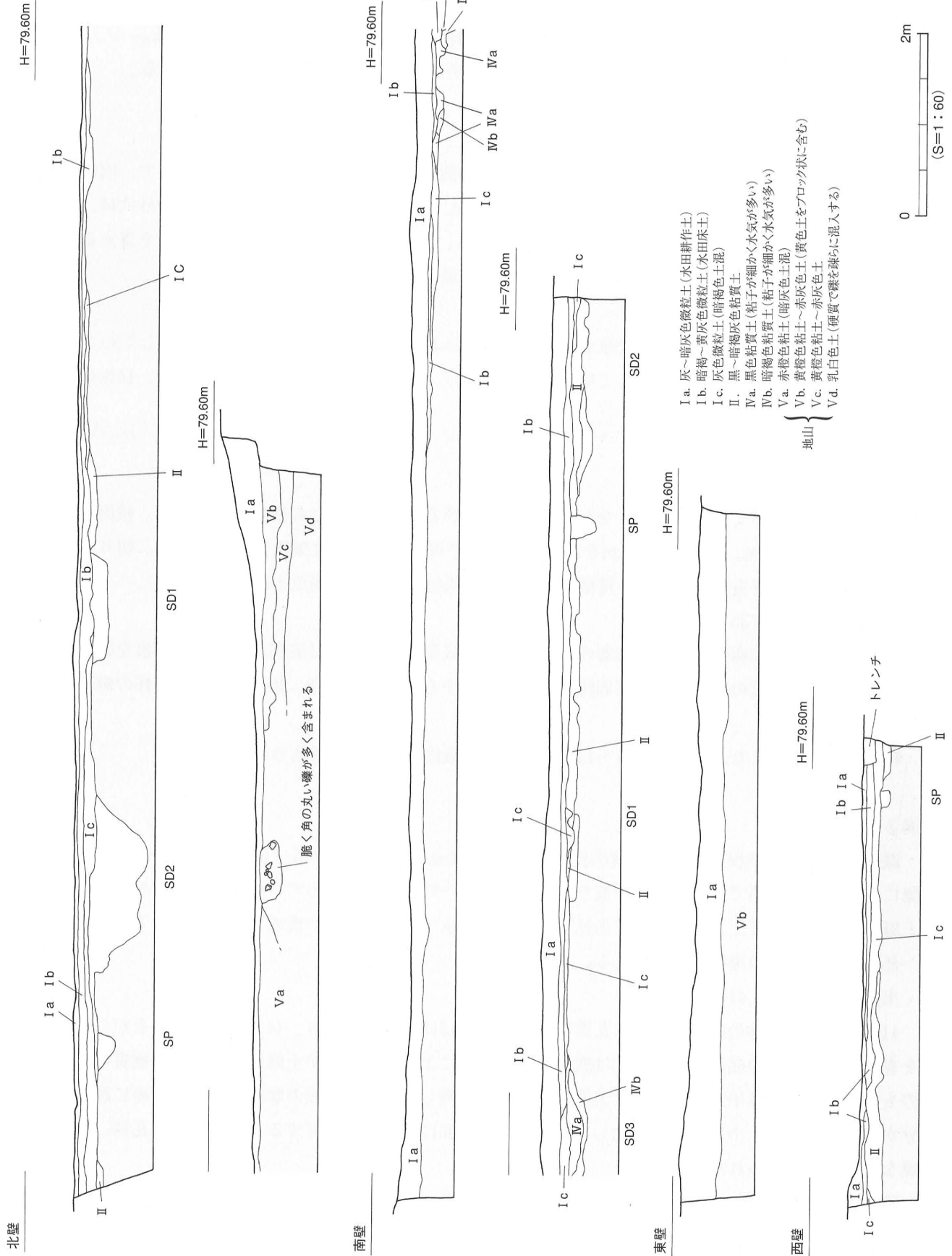


図27 5区壁面土層測量図

5区において検出した柱穴の内部から遺物の出土はみられなかったが、6区で掘立1の柱穴である可能性を有するピット（SP40）より遺物の出土があるので参考までに掲載する。

108は体部下半をヘラ削り調整し、底部を回転ヘラ切によって切り離す土師質の杯である。

時期：6区の掘立6に切られることより、14世紀前半より以前の遺構であると考えられる。

掘立柱建物跡2〔掘立2〕(図29)

調査区中央にて検出した桁行3間(4.2~4.4m)、梁間2間(3.7~3.8m)の掘立柱建物で、内部に床束の小穴を4基配することから高床の建物であったと考えられる。屋根を支える外側の柱穴は、基本的に短辺約50cm×長辺約70cmの隅丸長方形を呈し、深さ15~40cmを測る。また、床を支える内部の小穴は30cm~50cm程度の円形あるいは不定形状を呈し、深さ10~20cmを測る。

出土遺物

小片の為に図化できないが、柱穴埋土内より土師器および、7世紀代の杯蓋などが出土している。

時期：柱穴の一部がSD1によって切られることから、SD1よりも古い時期の遺構で、14世紀前半より以前に属すると考えられる。

溝1〔SD1〕

南から北に向かって緩やかに下りながら真直ぐに伸びる溝で、掘立2の西側で検出した。検出長約6m、幅90cm~1m、深さ4~13cmを測り、底部は平坦で両岸が垂直気味に立ち上がる。切り合い関係より掘立2よりも新しい時期の遺構で、埋土は黒灰色粘質土(暗褐色土混)である。

出土遺物(図32 35~40)

35は土師器甕の口縁部、36は須恵器の杯身、37は和泉型瓦器椀、38は底部に回転ヘラ切痕を残す円盤高台を持つ土師質の杯、39は底部周縁部に高台を有する土師器の杯身、40は須恵器で高杯の脚部と考えられる。

時期：出土遺物より、13世紀後半~14世紀前半頃に機能していたと考えられる。

溝2〔SD2〕

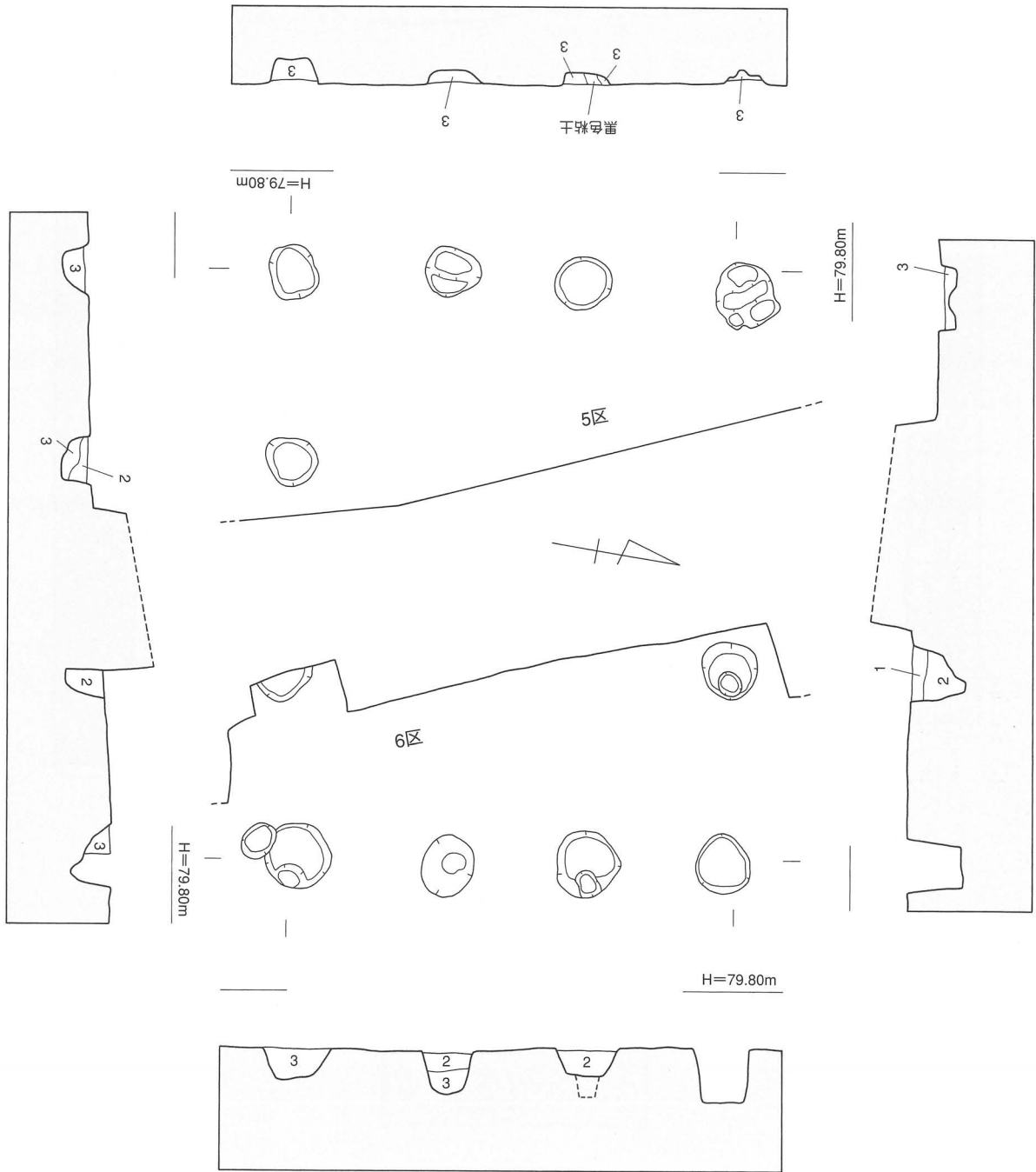
調査区の西端で検出した溝で、検出長約5.2m、幅54cm~1.2m、深さ6~61cmを測る。南側から北側に水を流す導水路で、北側に深い掘り込みを設けて一時的に水を溜めていたと考えられる。埋土は上層；暗褐色粘質土、中層；黒灰色粘土、下層；黒色~黒灰色粘土で構成され、中層と下層の間に一部灰色粘質微砂の堆積が認められる。

出土遺物(図32 41~45、52)

41は東播系こね鉢の口縁部、42は瓦質羽釜の鏝部、43は須恵器の杯身、44は底部に僅かながら高台を有する須恵器壺の底部である。45は底部を回転糸切によって切り離す土師皿で、薄手で硬質な作りのものである。52は平瓦の破片で、上面に布目圧痕を残し、下面は表面の摩滅が著しいために詳細が分からない。また、小片の為に図化しなかったが、底部にヘラ切痕を有する土師質の杯や瓦器、備前焼などの出土がみられた。

時期：出土遺物より、中世末~近世初頭頃に機能を失ったと考えられる。

5 区 の 調 査



1. 暗褐色粘質土 (しまりが強く、黄褐色土を少量混入する)
2. 暗(褐)灰色粘質土 (黄褐～黄橙色土を多く含む)
3. 暗褐色粘質土 (黄褐～黄橙色土を疎らに含む)

図28 5区 掘立1 [6区 掘立3] 測量図

第 3 次 調 査

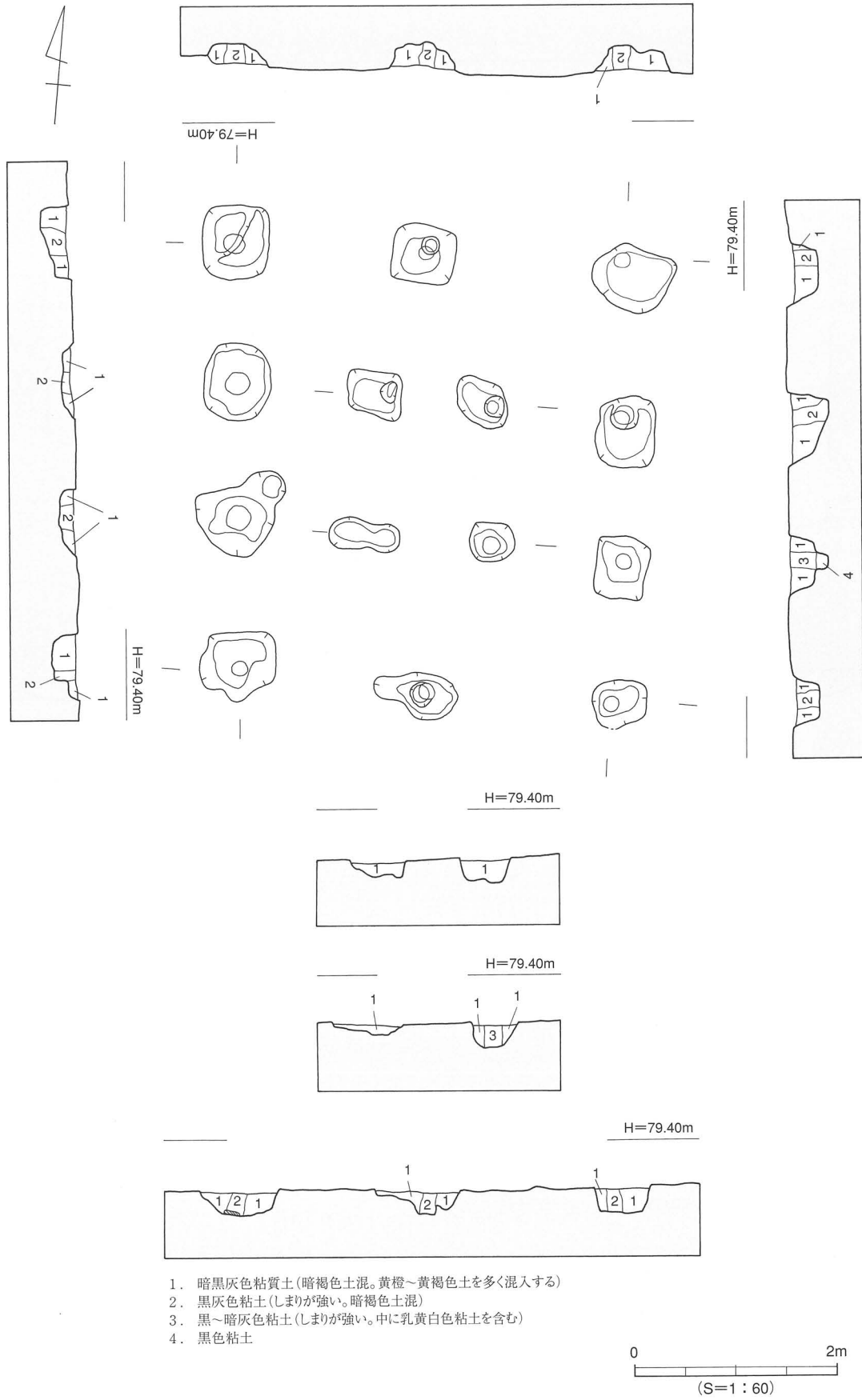


図29 5区 掘立2測量図

溝 3 [SD3]

調査区のほぼ中央部、掘立2と重複した位置に検出した溝で、検出長約3.8m、幅40~60cm、深さ5.4~12cmを測る。埋土はしまりの強い暗褐色粘質土（暗灰色土混）で、切り合い関係より掘立2より古い時期の遺構である。

時期：出土遺物が1点もないため不詳であるが、埋土の特徴より古代以前に属する可能性が高い。

土坑1 [SK1] (図30)

SD1とSD2に挟まれた地点、SK2の東側において検出した隅丸長方形の土坑墓である。規模は70~90cm×1mを測り、深さ4~7cmを測る。埋土は灰（白）色硬質土で、棺桶の痕跡は確認できなかった。床面直上の位置より漆器（杯）、土師器小鉢、人骨（歯）が出土した。歯の出土地点より、頭部を北側にして埋葬されたと考えられる。

出土遺物 (図32 50、図34 77)

図32 50は土師質の小鉢で、器壁は厚く内外面には丁寧なナデが施される。底部はヘラ状工具によって切り離れた後、ナデ消している。図34 77は漆器の杯で、朱色を呈する漆の皮膜のみが残存して

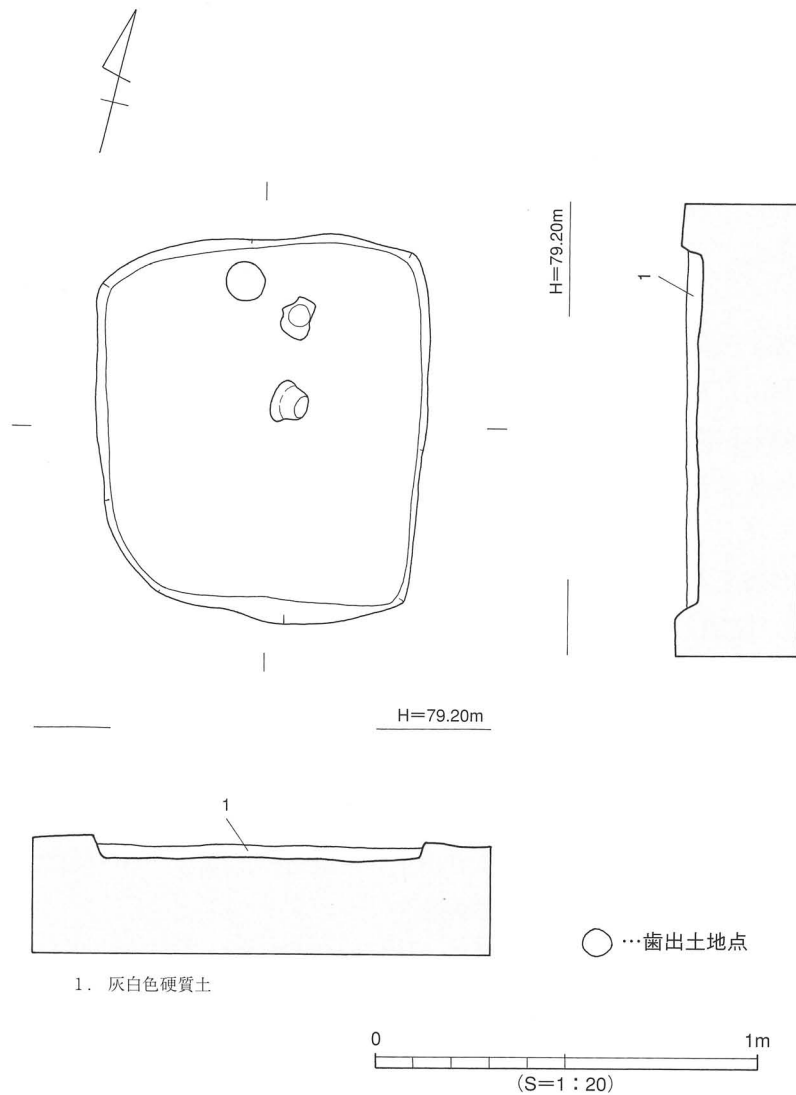


図30 5区 SK1測量図

いる。

時期：出土遺物より、16世紀頃の遺構
 であると考えられる。



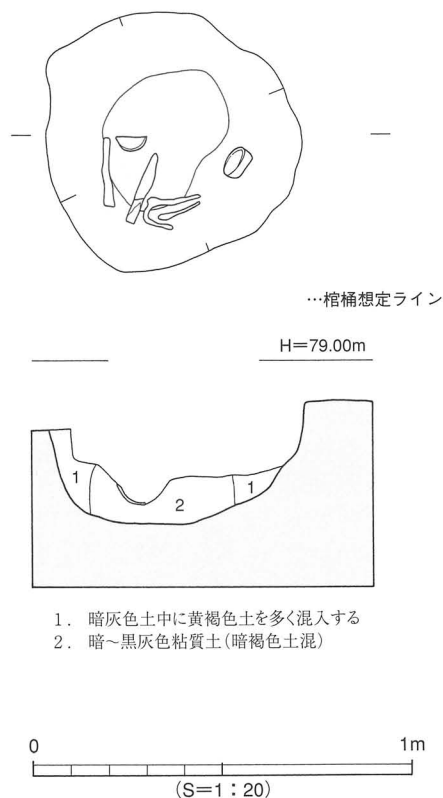
土坑2〔SK2〕(図31)

SK1の西側で検出した土坑墓で、直
 径約65cmを測る円形の掘り込みに50×
 40cm程の長方形をした棺桶が据えら
 れていたと考えられる。埋土は暗灰色～
 黒灰色粘質土で、棺桶の内部に相当する
 土の中から漆器(杯)、土師質の杯、人
 骨などが出土した。

出土遺物(図32 49、図34 78)

図32 49は土師質の杯で、器壁は厚く
 内外面に丁寧なナデが施される。底部に
 は回転ヘラ切痕が残る。図34 78は漆器
 の杯で、木質は腐敗し朱色の漆皮膜のみ
 が残存する。

時期：出土遺物より、16世紀頃の遺構
 であると考えられる。



- 1. 暗灰色土中に黄褐色土を多く混入する
- 2. 暗～黒灰色粘質土(暗褐色土混)

図31 5区 SK2測量図

性格不明遺構〔SX1～3〕

調査区中央部に検出した不整形の凹地
 状遺構で、粒子の細かい黒～暗褐色土をその埋土に持つ。出土遺物はなく、木の根等の木質が腐敗し
 た痕跡である可能性も考えられる。

その他の遺構および表土より出土した遺物

(図32 46～48、51、図33 53～68、図34 69～76)

46はSP62より出土した遺物、47及び48はSP63より出土した遺物、51は倒木1より出土した遺物
 である。

図32 46は灰白色を呈する土師質の碗、47は土師質の杯、48は底部を回転ヘラ切によって切り離す
 と考えられる須恵質の杯、51は土師質で高杯等の脚部と考えられるものである。

図33 53～68及び図34 69～76は表土中より出土した遺物で、図33 53～68は土器及び陶磁器、図
 34 69は石製品、70～76は鉄器および鉄滓である。

53は灰白色を呈する土師質の杯、54は須恵質の碗、55は土師質鉢の口縁部である。56、57は土師質
 の杯で、それぞれ底部にヘラ切痕および、回転糸切痕の後に板状圧痕の跡が残る。58、59は須恵器で、
 58は杯蓋、59は杯身である。60は肥前陶磁の陶器小皿で、61は白磁碗、62は青磁碗である。63は亀山
 焼系の甕、64は国産陶器壺の底部である。65、66は羽釜の口縁部で、65は瓦質、66は土師質のもので

5 区 の 調 査

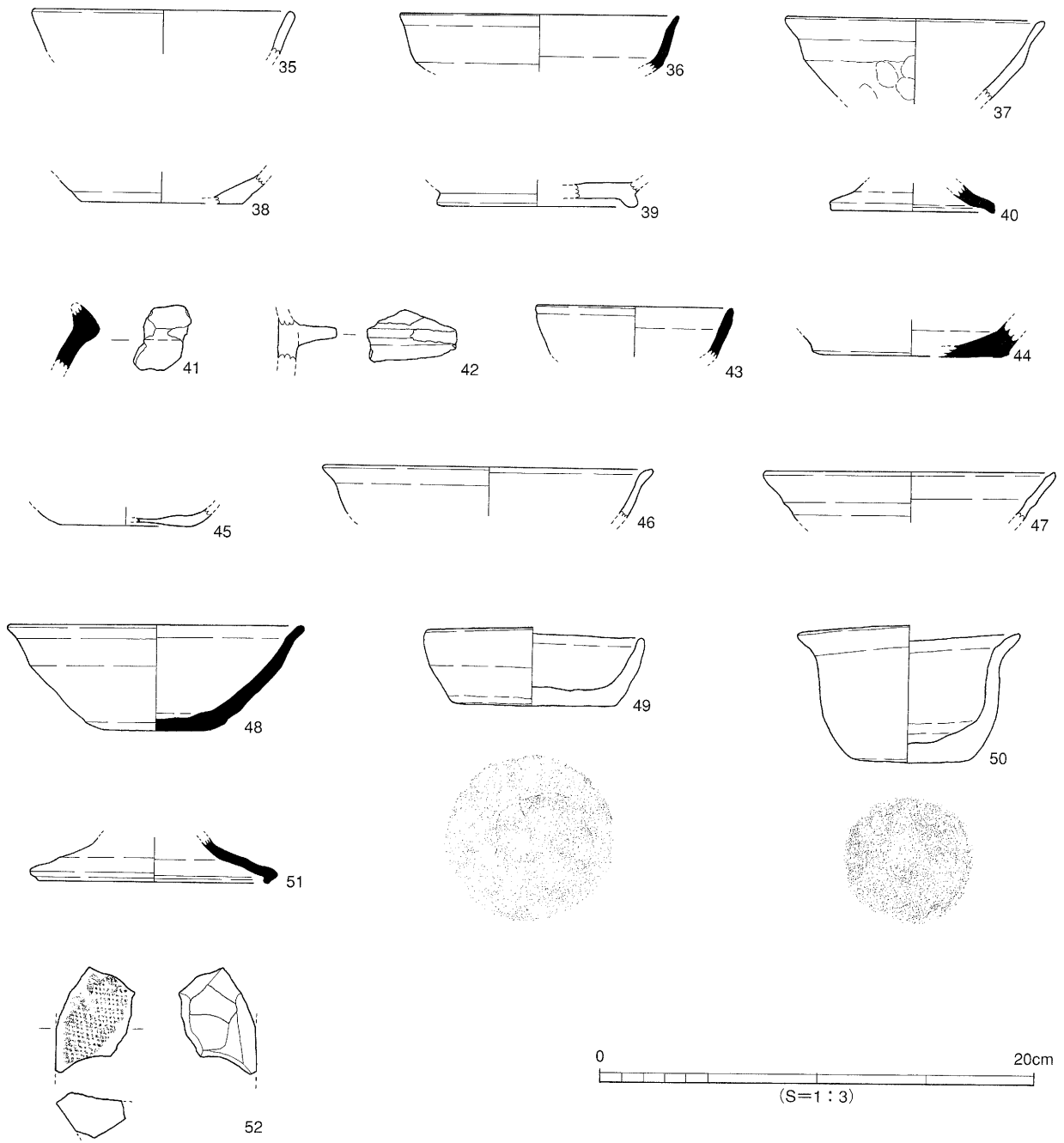


図32 5区出土遺物実測図(1)

ある。67及び68は備前焼すり鉢の口縁部で、67は内外面の色調が灰～暗灰色を呈し、内面に凹線状の段が顕著に残る。

図34 69は赤紫色を呈する頁岩製の長方硯で、陸部の一部がわずかに観察できる。

70は鉄製の釘で、先端部がL字状に折れ曲がる。71は鉄鏝の先端部、72は刀子の茎部、73～76は鉄滓である。

第 3 次 調 査

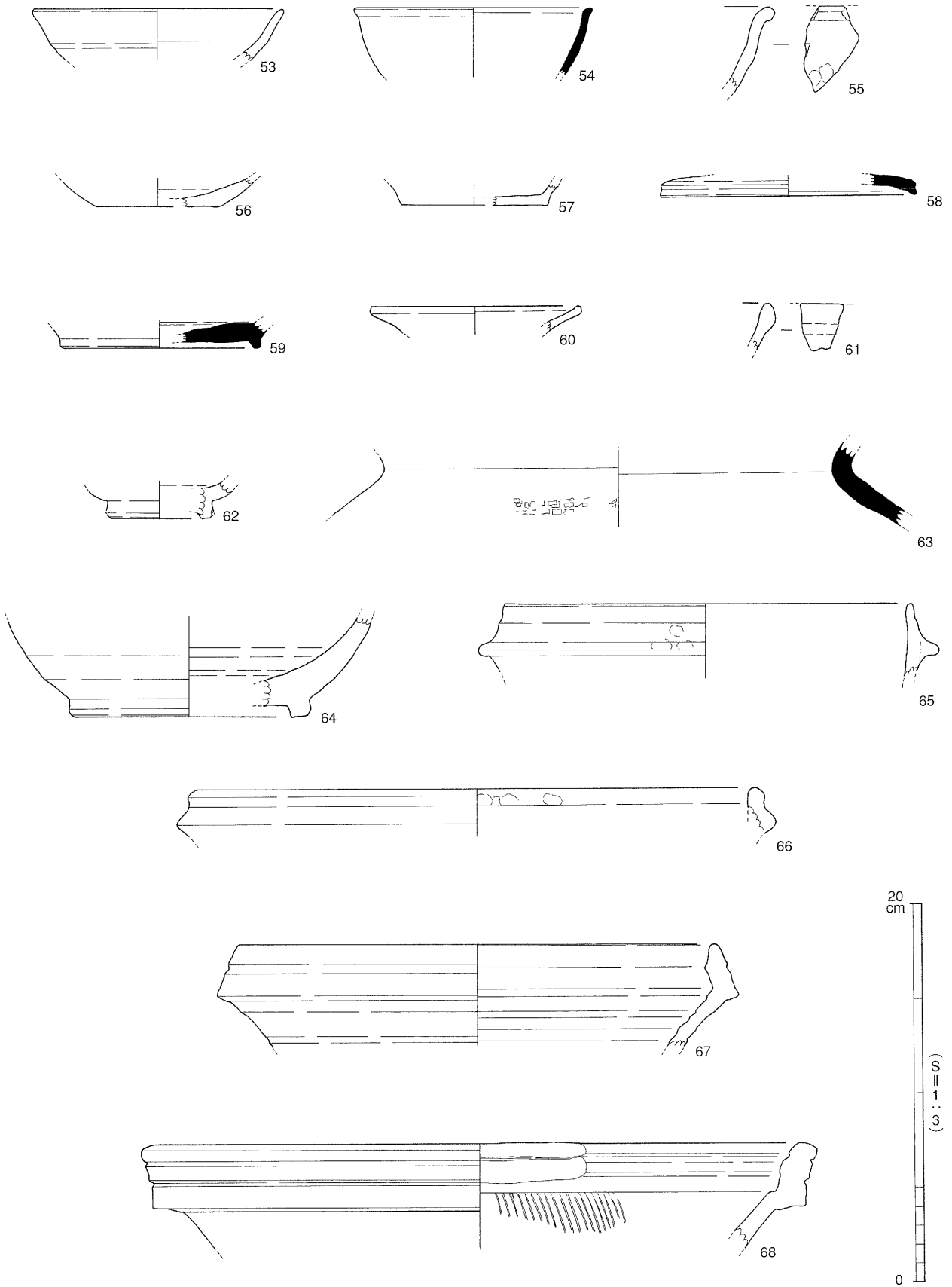


图33 5区出土遺物実測图(2)

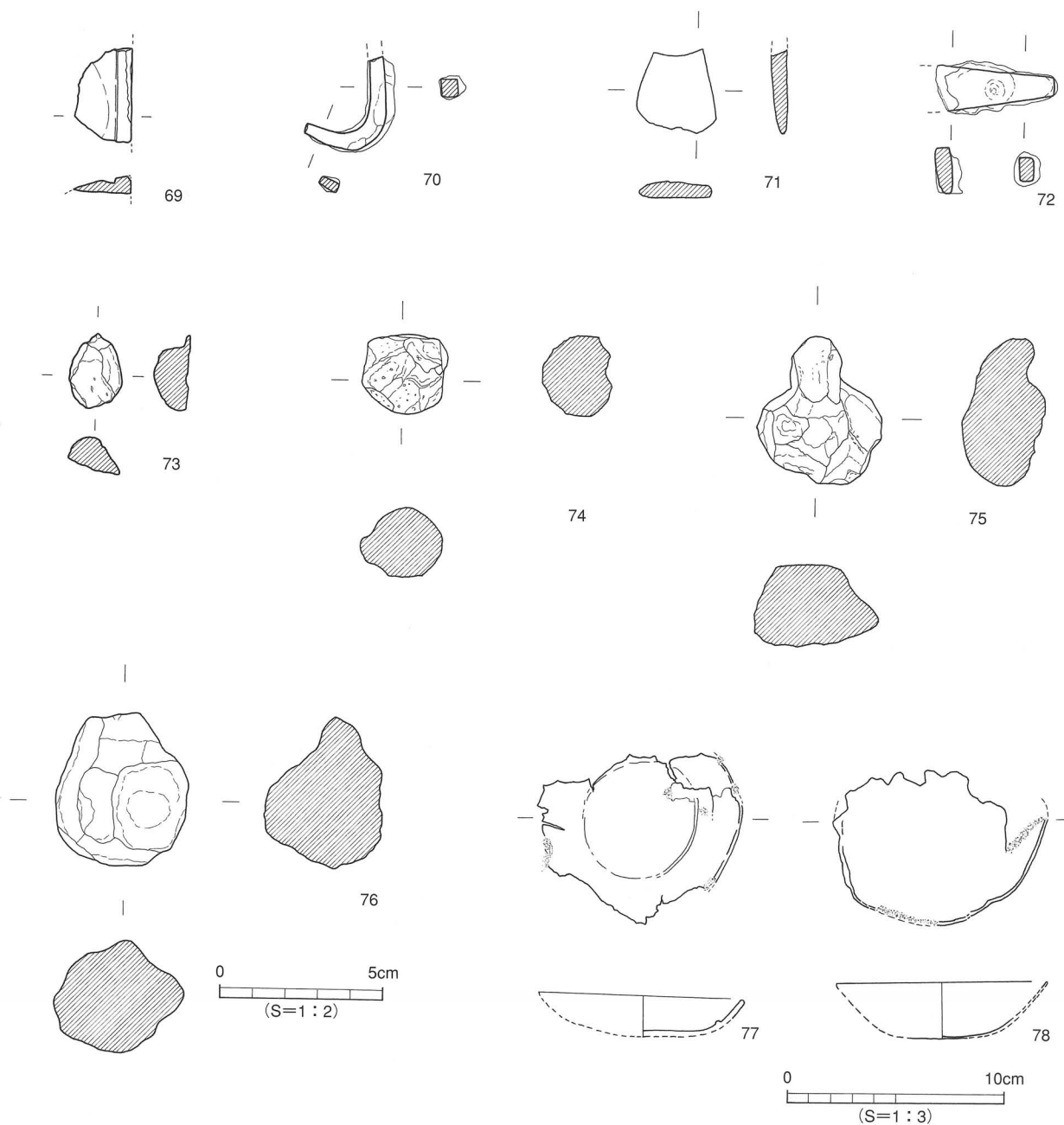


図34 5区出土遺物実測図(3)

8. 6 区 の 調 査

当調査区では、ピットを216基（うち掘立柱建物跡7棟）、土坑を3基、溝を4条、井戸を1基検出した。

(1) 土層

6区の土層は、調査地全体の層位の項で前述した通り、第Ⅰ層～第Ⅴ層に分けることができる。第Ⅰ層（Ⅰa～Ⅰe）は、近現代の水田耕作に伴って形成された耕作土および導水施設の設置に伴う基礎である。第Ⅱ層及び第Ⅲ層は、自然流路の氾濫によって形成されたと考えられる堆積層で、それぞれ黒～暗褐灰色粘質土および暗～黒灰褐色粘質土である。第Ⅳ層は、地表に堆積した腐植土と考えられ

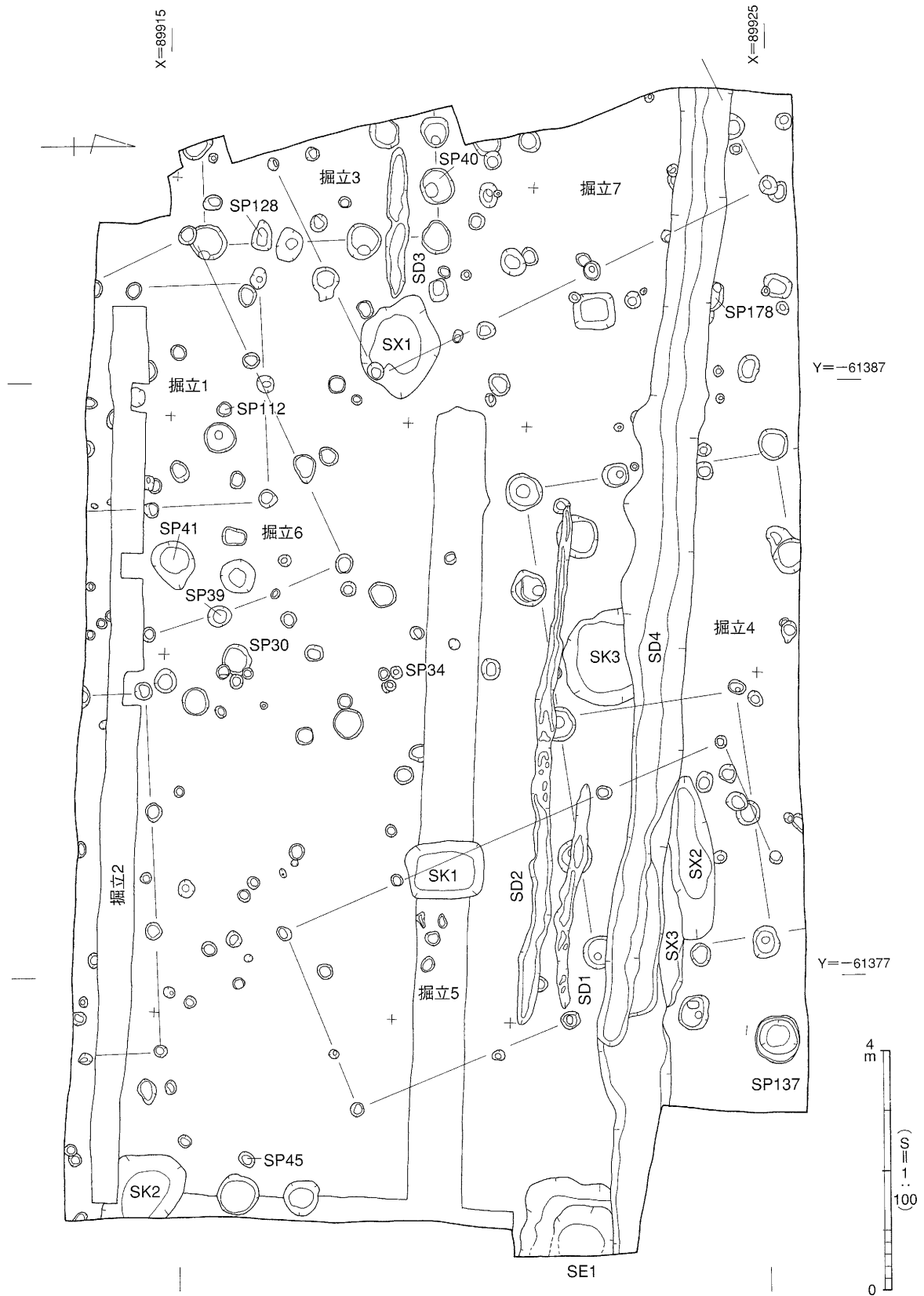


図35 6区遺構配置図

北壁

H=80.00m

H=80.00m

南壁

H=80.00m

H=80.00m

西壁

H=80.00m

東壁

H=80.00m

I a. 灰色微粒土(水田耕作土)
 I b. 灰色微粒土(5~10cmの礫を多量に含む)(水路の基礎)
 I c. 暗灰色微粒土(褐色混)
 I d. 灰白色~暗褐色微粒土
 I e. 暗灰色粘質微粒土(暗褐色土混)

II. 黒~暗褐色粘質土
 III. 暗~黒灰褐色粘質土(暗灰~灰色土混)
 IV a. 黒(褐)色粘質土(粒子が細かく、水気が多い)
 IV b. 暗褐色粘質土(粒子が細かく、水気が多い)
 V. 黄褐色~褐色粘質土(暗灰褐色土混)(地山)

図36 6区壁面土層測量図

- 41 -

第 3 次 調 査

るもので、上層 (IVa) が締まりのない黒 (褐) 色粘質土、下層 (IVb) が締まりのない暗褐色粘質土である。第V層は、当遺跡においてはこれより下位に遺構の存在する可能性の低い基盤層 (地山) と認定したもので、黄橙色～褐色粘質土 (暗灰褐色土混) である。なお、当調査区に関しては、S P41 の壁面 (第V層) 中より1点の石器が見つかった為、調査の終盤に遺構・遺物の検出に努めたが、

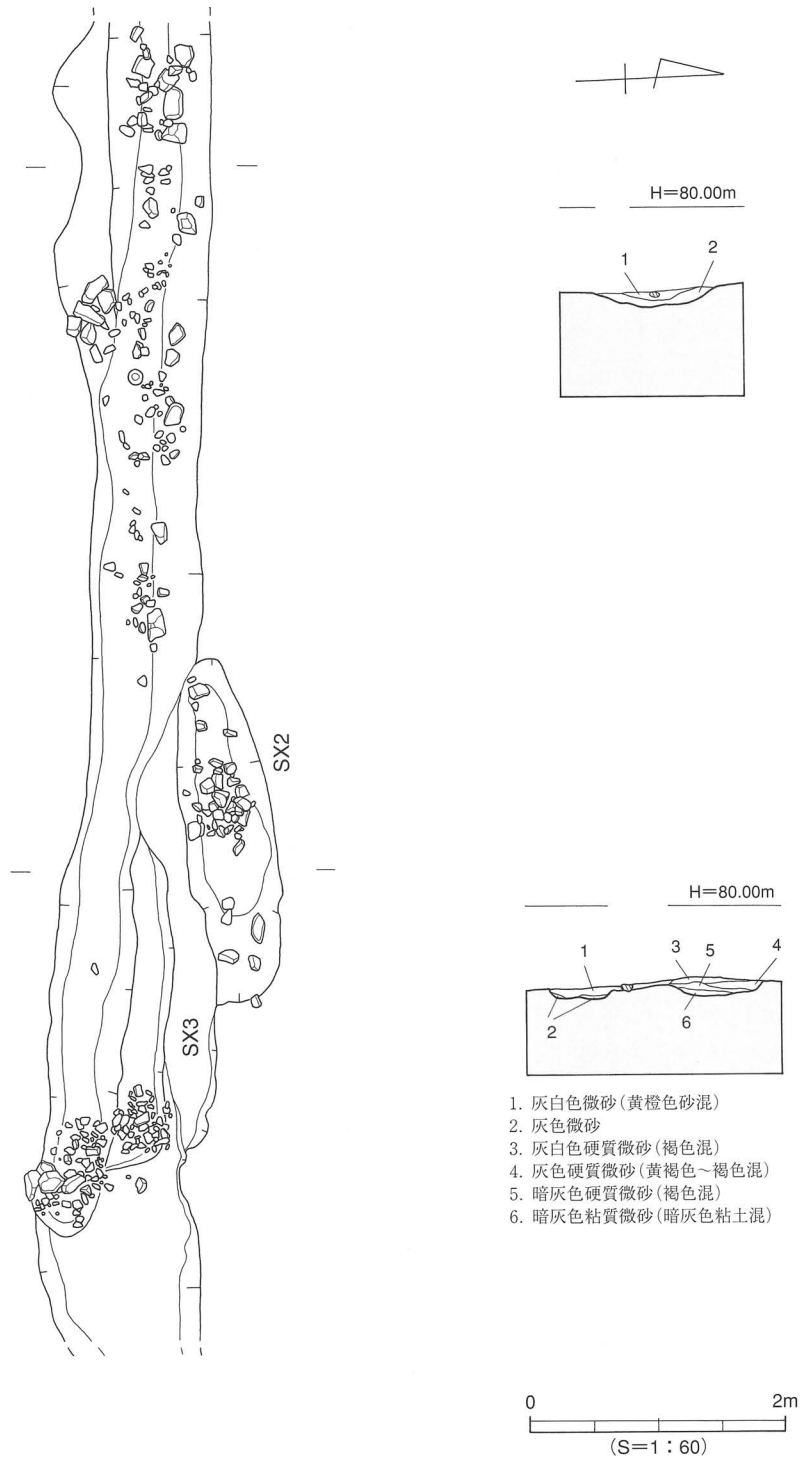


図37 6区 SD4・SX2・SX3測量図

新たにその事実を補強する資料を追加・確認することはできなかった。

当初、遺構の検出を第Ⅱ層の上面で試みたが、第Ⅱ層と第Ⅲ層の見極めが難しく、全ての遺構を検出することができなかった。その為、最終的に第Ⅱ層および第Ⅲ層をほとんど取り除いた状態で遺構の確認・検出作業を実施した。

遺構の中には、SE1及びSD4などのように第Ⅱ層の上面から掘り込まれるものと、第Ⅱ層が堆積する以前に掘り込まれていたものが存在する。

(2) 遺構と遺物

溝1〔SD1〕・溝2〔SD2〕・溝3〔SD3〕

深さ1～4cm、幅20～30cmほどの溝で、埋土は灰色微砂である。溝幅および溝の間隔より農作に伴う鋤の痕跡であると考えられ、さらにSD4と平行して設けられることからSD4と同時期の遺構である可能性が高い。また、SD1およびSD2は切り合い関係より掘立4よりも新しい時期の遺構である。

出土遺物 (図47 79・80)

79及び80は須恵質の杯で、SD2およびSD3から出土した。80は底部にヘラ切痕を有する。

時期：埋土の特徴や方向よりSD4と同時期である可能性が高く、17世紀後半頃の遺構であると考えられる。

溝4〔SD4〕 (図37)

調査区の北部にて検出した溝で、内部に5mm以下の小礫および20cm前後の川原礫をまばらに含む。検出長約20m、深さ3～14cmを測り、東側から西側に向けて流れていたものと考えられる。鋤痕跡の可能性が高いSD1～SD3と平行することや、本遺構の東部に水口あるいは水戸と考えられる浅い掘り込み(SX2及びSX3)が存在することなどから、農作に伴う水路である可能性が高い。また切り合いより、掘立4、掘立7、SK3、SE1よりも新しい時期の遺構である。

出土遺物 (図47 81～93、図55 233・235、図56 236・238)

図47 81及び82は須恵器の杯蓋である。83は須恵器の器台、84は須恵質の杯である。85は土師質羽釜の口縁部、86は底部に回転糸切痕を有する土師皿である。87は青磁蓮弁文碗C群、88～90は東播系こね鉢である。91は見込みを蛇の目釉剥ぎする肥前陶磁の陶器小皿である。92は須恵器の甕、93は土師質の甕である。

図55 233、235及び図56 236は石器である。233は赤色珪質岩製の平基打製石鏃、235は石英片岩製の磨製石斧、236は緑色片岩製の石器素材である。

238は鉄器で釘と考えられる。

時期：出土遺物より、17世紀後半頃の遺構であると考えられる。

土坑1〔SK1〕 (図38)

試掘調査時に検出した遺構で、約90cm×1.2mの隅丸長形状を呈し、深さ約30cmを測る土坑墓である。土坑の底面に接した状態で、漆器の杯および腐食の著しい棺材(板)を検出した。板の上には土壌化の進んだ人骨が認められ、板材よりも南側の位置から歯および前述した漆器が出土している。出

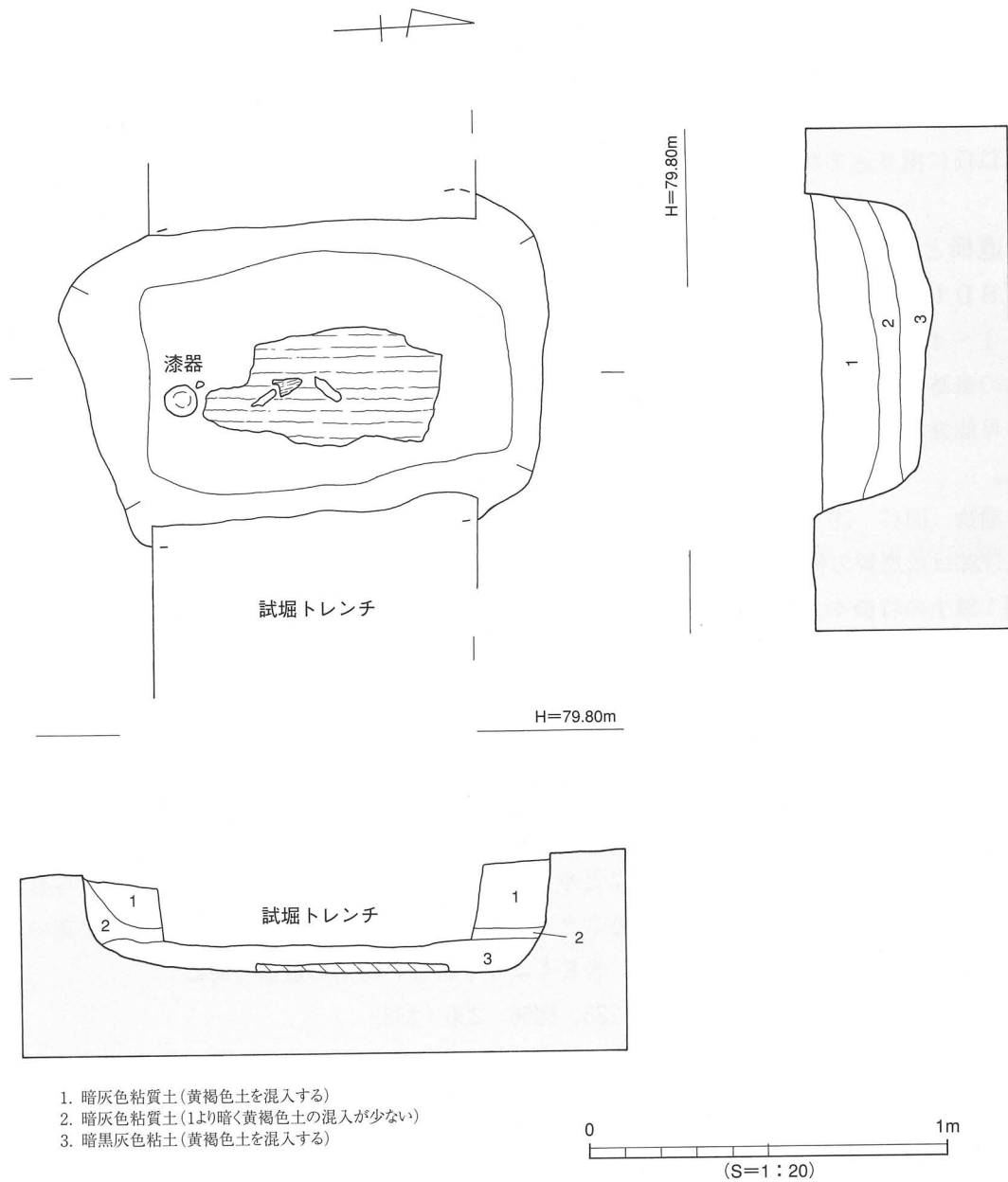


図38 6区 SK1測量図

土した人骨（歯）のなかには、咬耗によるダメージが大きい大臼歯が含まれることから、埋葬者は成人であった可能性が高い。

出土遺物（図47 94・95）

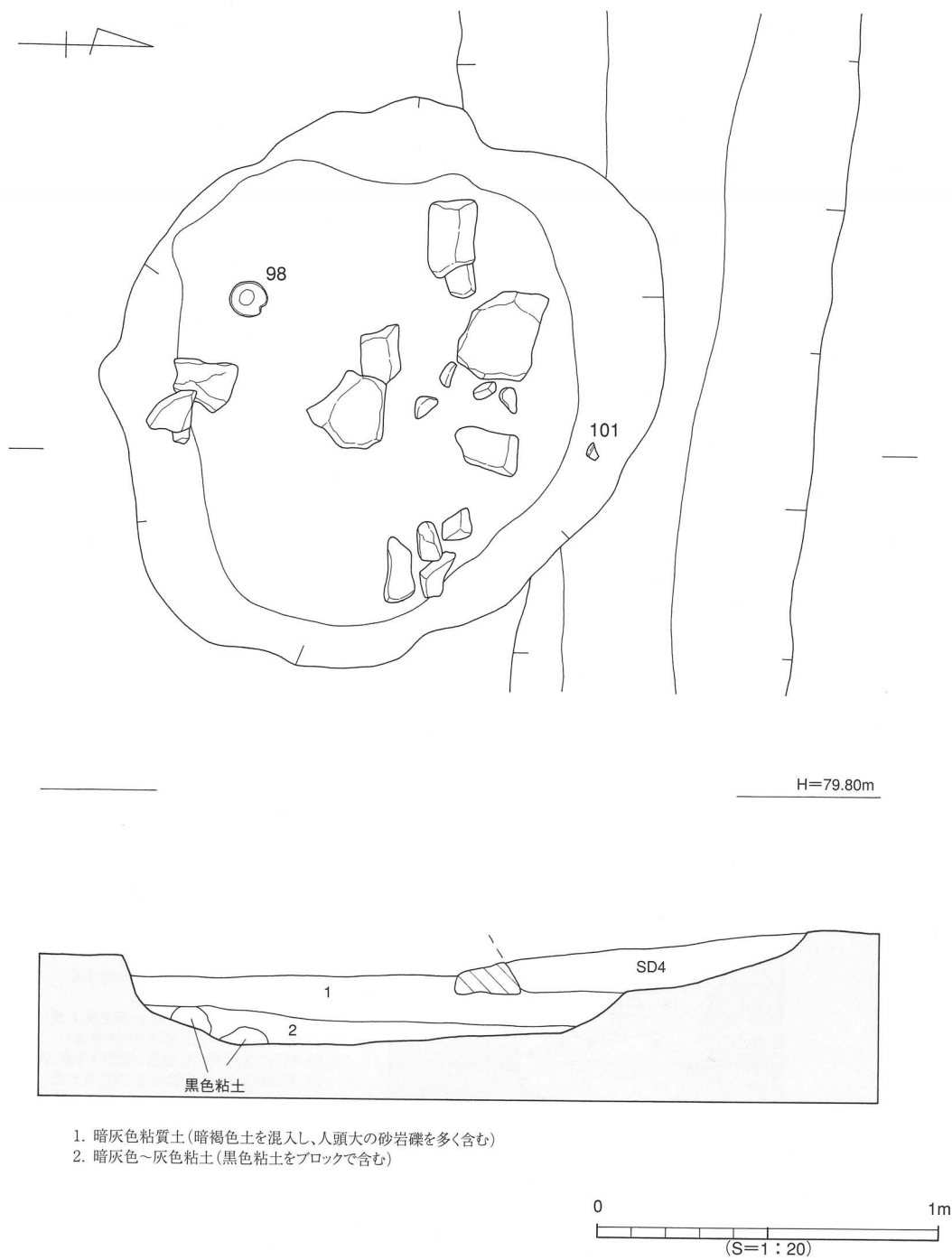
94は底部に回転糸切痕を残す厚手の土師皿、95は底部に静止糸切痕を有する厚手の土師皿である。漆器に関しては取り上げが困難で、図化できなかった。

時期：出土遺物より16世紀中頃以降の遺構であると考えられる。

土坑2〔SK2〕

調査区の南東隅にて検出した土坑で、約1.2×1.6mの楕円形状を呈するものと考えられる。埋土は暗黒灰色粘質土で、深さ20cmほどを測るが遺物の出土はない。

時期：出土遺物が無いため不明であるが、中世後期以降に属すると考えられる。

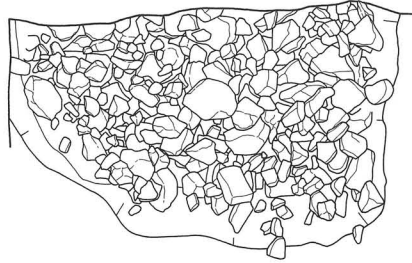


1. 暗灰色粘質土(暗褐色土を混入し、人頭大の砂岩礫を多く含む)
2. 暗灰色～灰色粘土(黑色粘土をブロックで含む)

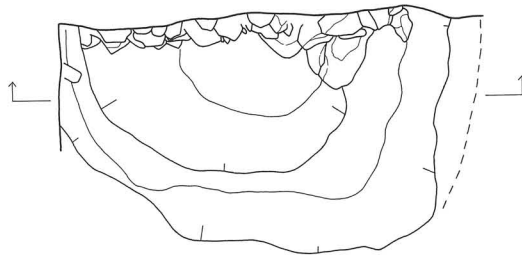
図39 6区 SK3測量図

土坑 3 [SK 3] (図39)

調査区の中央部北側、掘立 4 の建物内部に相当する位置にて検出した円形の土坑で、直径約1.6m、深さ15~24cmを測る。SD 4 よりも古い時期の遺構で、埋土の上層より拳大~人頭大のカドのとれた



遺構内礫検出状況



遺構完掘状況

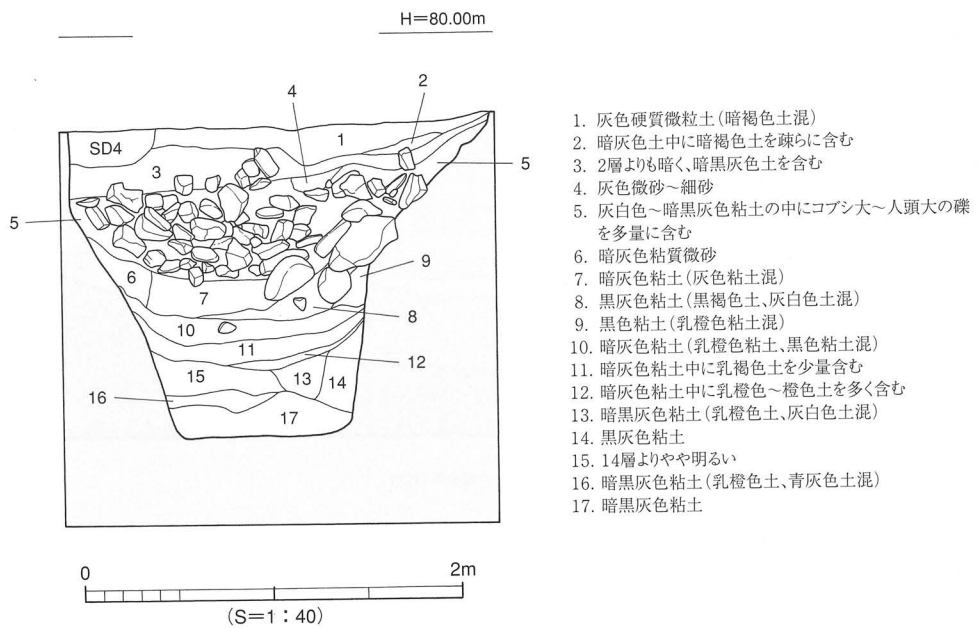


図40 6区 SE1測量図

砂岩礫を検出した。

出土遺物 (図47 96~101)

96は土師質羽釜の脚部である。97は底部に回転糸切痕を有する土師皿、98は底部を静止糸切により切り離す厚手の土師質杯、99は底部切り離しの後に痕跡を丁寧にナデ消す土師質の皿である。100は須恵器杯身、101は白磁碗である。

時期：出土遺物より16世紀中頃以降の遺構であると考ええる。

井戸1〔SE1〕(図40)

上部の直径約2.1m、基底部の直径約90cmを測る円形の井戸で、調査区の北東隅で検出した。最深部で約1.6mを測り、掘り込みは上面から60cm程度下がるレベルまでは緩やかであるが、このレベルを境にして垂直な掘り込みに変わる。硬く締まった地山に掘り込むため、井戸の下部に曲物あるいは石組みなど壁面補強のための構造はみられない。井戸は廃絶に伴って人為的に埋め戻されることが確認されており、その方法は拳大~人頭大の石材と灰色系の粘土を用いてある程度埋め戻した後に、その上部を灰色系の土砂で覆い固めるものである。また、井戸の廃絶後しばらくしてSD4が掘り込まれることが判明している。

出土遺物 (図48 102~107・110、図56 237・241、図57 243~250)

図48 102および103は土師質の杯である。104は染付碗で器壁が薄く、呉須の発色が良好である。105・106は底部に回転糸切痕を有する土師質の杯で、特に105は薄手で焼成が良い。107は肥前陶磁の陶器碗で、口縁外面に二条の文様を施す。110は土師質羽釜の脚部である。

図56 237は鉄製の釘で、使用により先が曲がる。241は北宋銭で大観通寶と読める。

図57 243~250は木製品である。243および244は後に薪材として使用したと考えられるもので、部分的に焼け焦げの跡がみられる。245および246は杭で、共に先端部を欠損している。245は竹製で、先端部切断面にノコギリ様の工具痕がみられる。247から249は桶の底板と考えられるもの、250は桶のタガで素材は竹である。

時期：出土遺物より、本遺構は17世紀初頭~前半頃に機能し、SD4が機能を開始する前に廃絶された可能性が高い。

掘立柱建物跡1〔掘立1〕(図41)

直径25~30cmのピットによって構成される梁間1間(約2m)×桁行2間(約3.6m)の建物で、東西方向に2間、南北方向に2間以上の規模である。建物の主軸及び柱穴埋土の特徴より、掘立2と同時期の建物である可能性が高い。また、柱穴内部より遺物の出土はみられなかった。

時期：建物の主軸が3区掘立1等と共通することより、13世紀後半~14世紀前半頃の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物跡2〔掘立2〕(図42)

調査区東側南壁際において検出した梁間1間(1.3m)以上、桁行3間(約6m)の側柱建物で、土層断面より直径7~15cm程度の柱を立てたことが分かる。遺物の出土はみられなかったが、建物の主軸や埋土の特徴より掘立1と同時期の建物である可能性が高い。

時期：掘立 1 同様、建物の方向から判断して13世紀後半～14世紀前半頃の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物跡 3〔掘立 3〕(図28)

調査区西部で検出した側柱建物で、西側に展開して 5 区掘立 1 へと繋がる。遺構の詳細については 5 区〔掘立 1〕の項で説明済みの為、省略する。

掘立柱建物跡 4〔掘立 4〕(図43)

梁間 3 間(約4.3m) × 桁行 4 間(約7.9m) の掘立柱建物で、調査区の北側において検出した。梁方向よりも桁方向に用いる柱穴の方が大きいことが特徴で、また建物内部の東側に東柱を設け、部分的に高床構造にして利用した可能性が高い。柱穴の一部が S D 1、S D 2、S D 4 に切られることから、それらよりも古い時期の遺構であることが判明している。

出土遺物(図48 109・111～114、図49 132)

図48 109および図49 132は須恵器で109は高杯の蓋、132は壺の口縁部である。図48 111及び113は土師質羽釜の口縁部である。112は白磁壺の底部で、表土から出土している遺物(図54 223～225)と同一個体である可能性が高い。114は常滑焼甕の肩部である。

時期：出土遺物より、13世紀後半～14世紀前半頃の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物跡 5〔掘立 5〕(図44)

梁間 3 間(約3.2m) 桁行 4 間(約8.2m) の建物で、直径15～30cm程度の小穴によって構成される。調査区の東部で検出した南北棟の側柱建物で、柱穴の中には、底に平らな石を据えるものが含まれる。S D 1、S D 2、S D 4、S X 2、S X 3、S K 1、掘立 4 等と平面的に切り合い関係にあることから、これらの遺構との同時性は考えられない。建物の方向より、掘立 6 及び掘立 7 と同時期の建物である可能性が高い。

出土遺物(図48 115)

115は体部が内湾しやや厚みのある土師質の杯で、底部の切り離し方法は摩滅のため分からない。

時期：出土遺物および掘立 6 の成果より、14世紀前半～中頃の遺構であると考えられる。

掘立柱建物跡 6〔掘立 6〕(図45)

梁間 3 間(約3.5m) 以上、桁行 3 間(約6.1m) の側柱建物で、調査区南西部にて確認した。掘立 5 および掘立 7 と主軸が共通することから同時期の建物である可能性が高い。掘立 5 と同様、柱穴の中には底に平らな石を据えるものが含まれる。掘立 1 と平面的に切り合い関係をもつことより同時性は考えられず、また掘立 3 よりも新しい時期の遺構であることが判明している。

出土遺物(図48 116～120)

116は青白磁の合子である。117～120は土師質の杯および皿で、118は底部に回転ヘラ切痕、119及び120は回転糸切痕を有する。

時期：出土遺物および建物の方位等より判断して、14世紀前半～中頃の遺構であると考えられる。

6 区 の 調 査

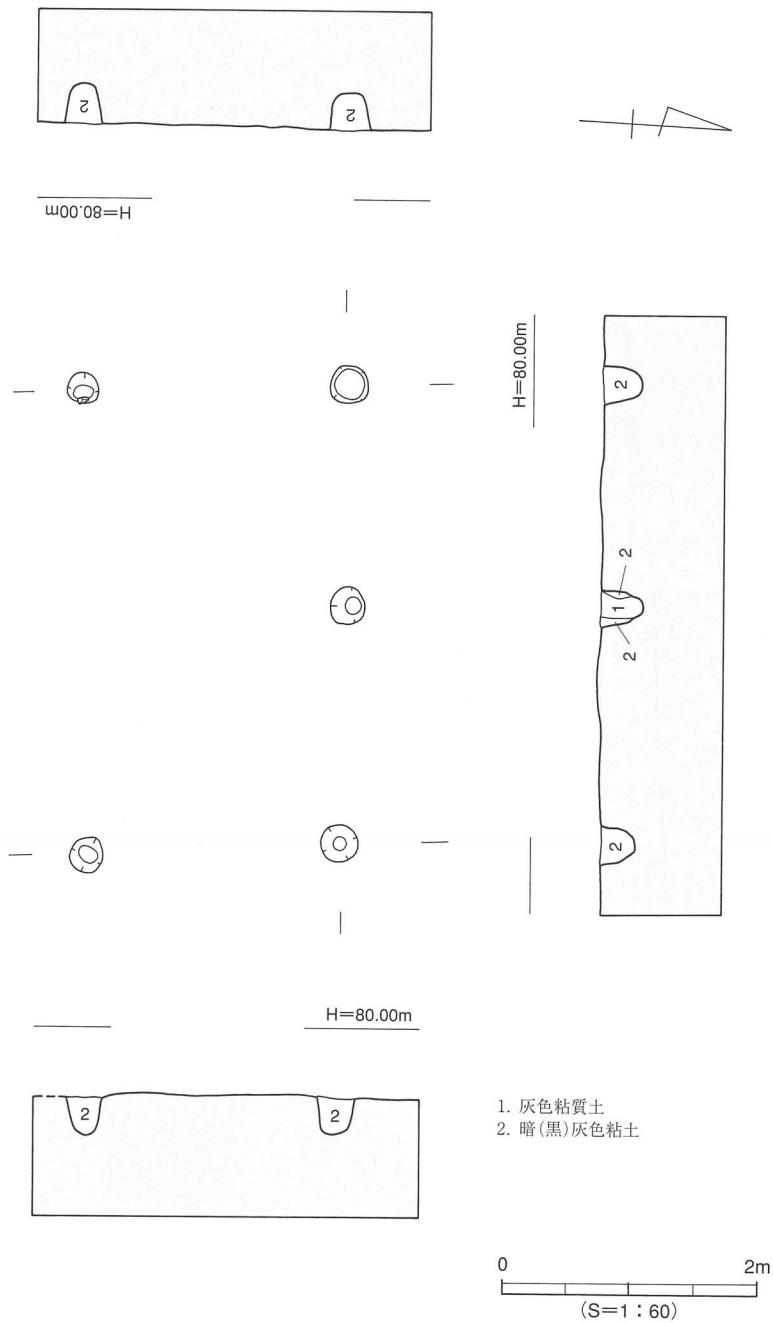


図41 6区 掘立1測量図

掘立柱建物跡7〔掘立7〕(図46)

調査区の北西部にて検出した梁間2間(約3.9m)以上、桁行4間(約7.3m)の側柱建物である。柱穴の一部がSD4に切られ、また平面的に掘立3と重なり合うことから同時並存は考えられない。掘立5および掘立6と主軸が共通することから、同時期の遺構である可能性が高い。柱穴の埋土から遺物の出土はみられなかった。

時期：建物の方位より14世紀前半～中頃の遺構であると考えられる。

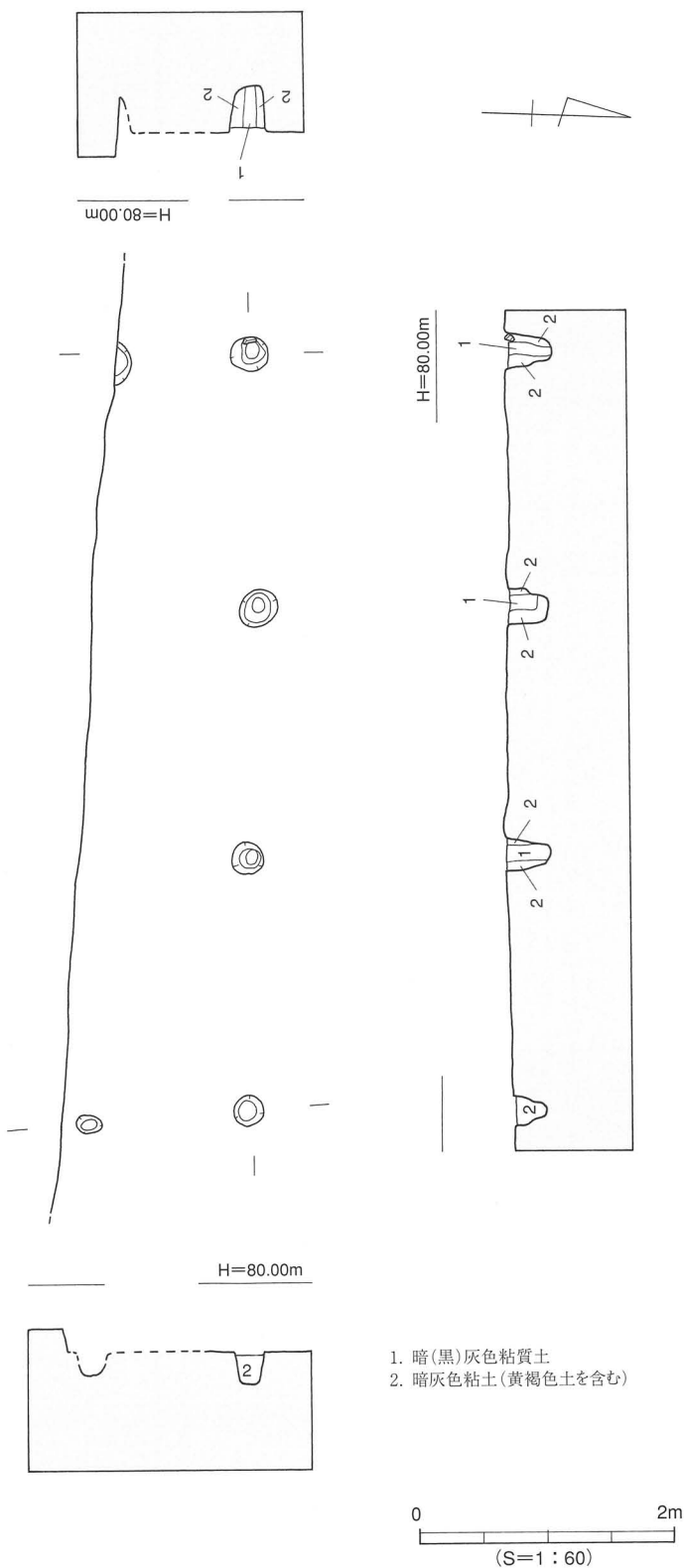
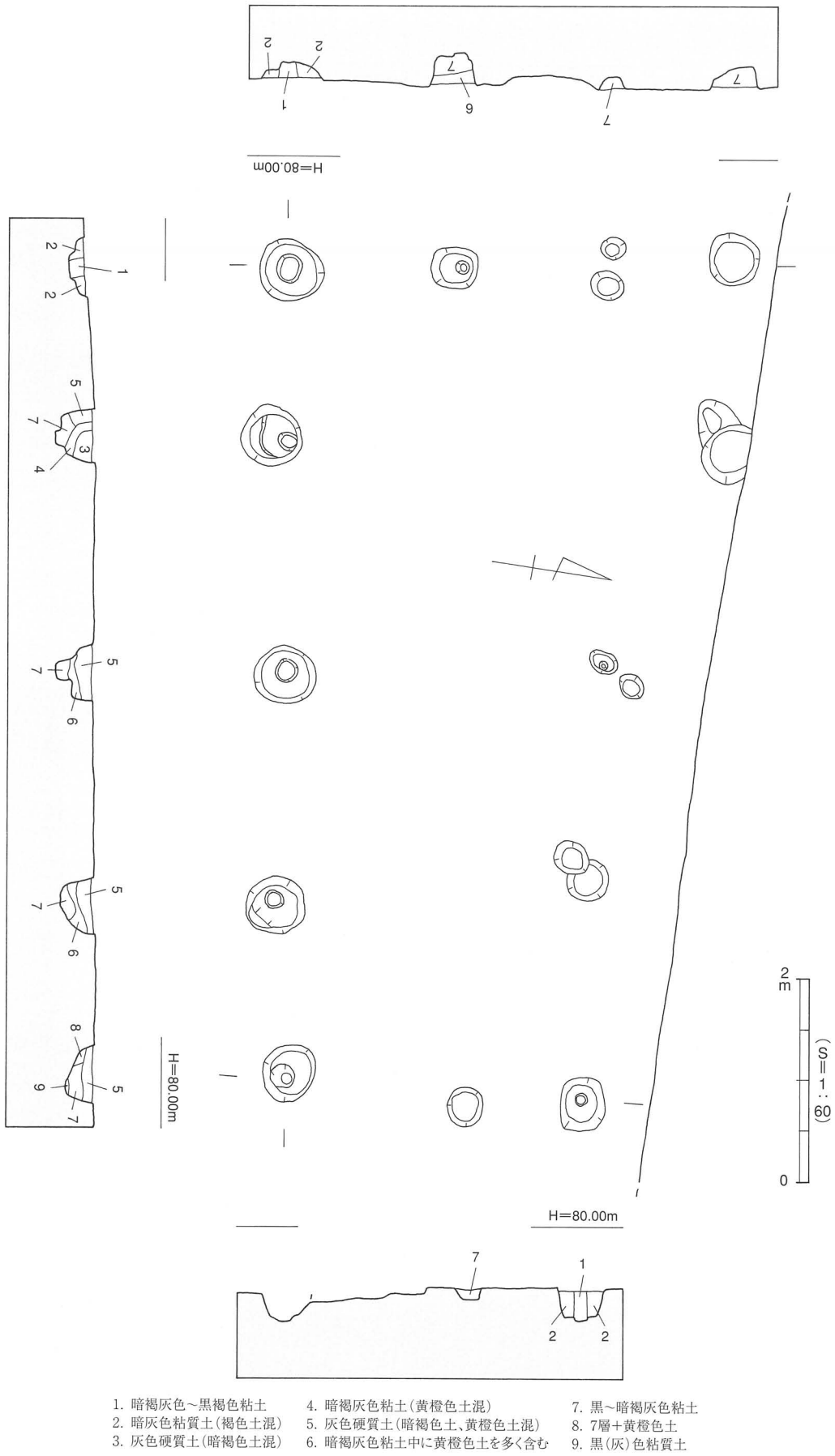


図42 6区 掘立2測量図

6区の調査



- | | | |
|-----------------|-----------------------|--------------|
| 1. 暗褐色灰色~黒褐色粘土 | 4. 暗褐色灰色粘土(黄橙色土混) | 7. 黒~暗褐色灰色粘土 |
| 2. 暗灰色粘質土(褐色土混) | 5. 灰色硬質土(暗褐色土、黄橙色土混) | 8. 7層+黄橙色土 |
| 3. 灰色硬質土(暗褐色土混) | 6. 暗褐色灰色粘土中に黄橙色土を多く含む | 9. 黒(灰)色粘質土 |

図43 6区 掘立4測量図

第 3 次 調 査

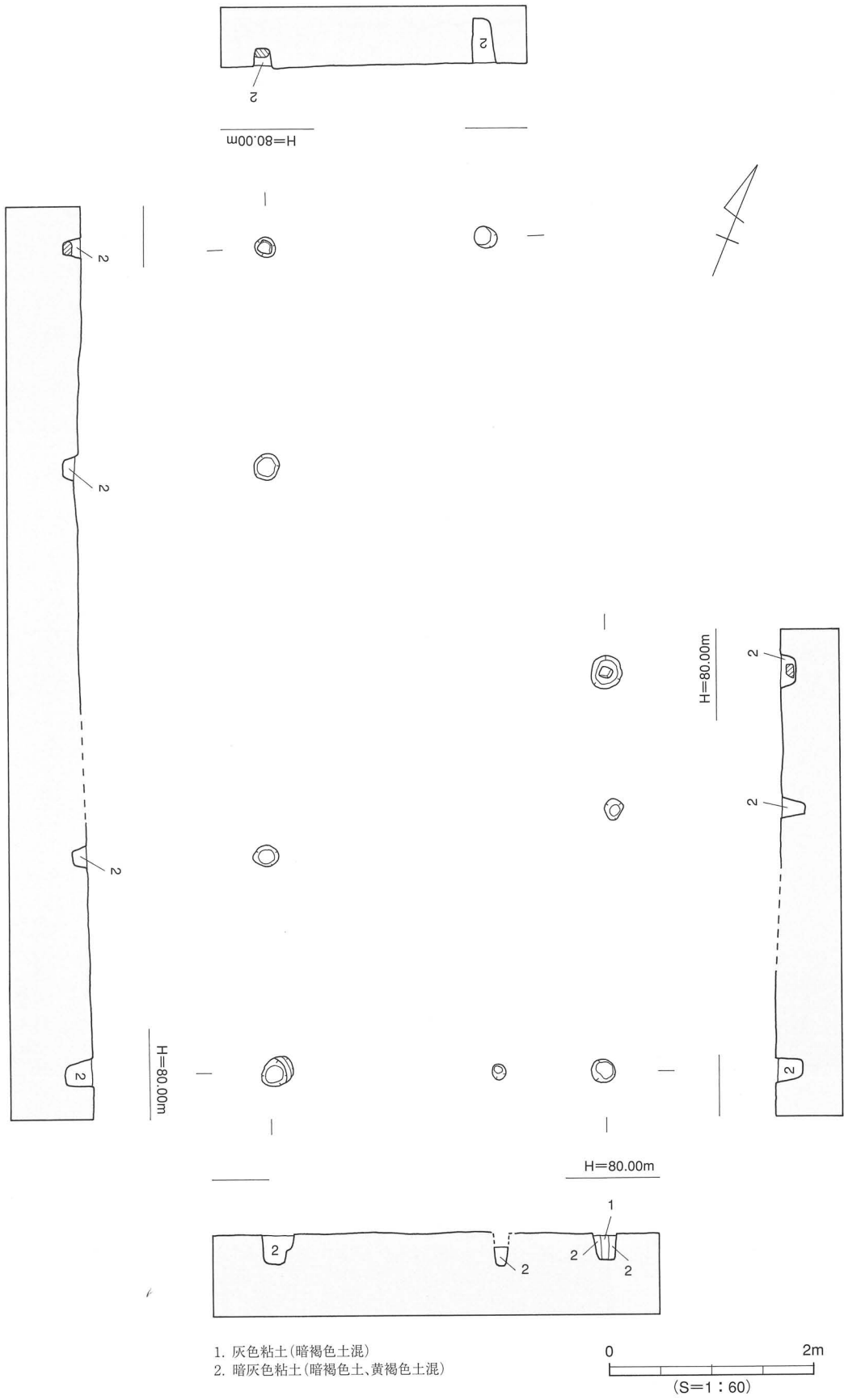


图44 6区 掘立5測量図

6 区 の 調 査

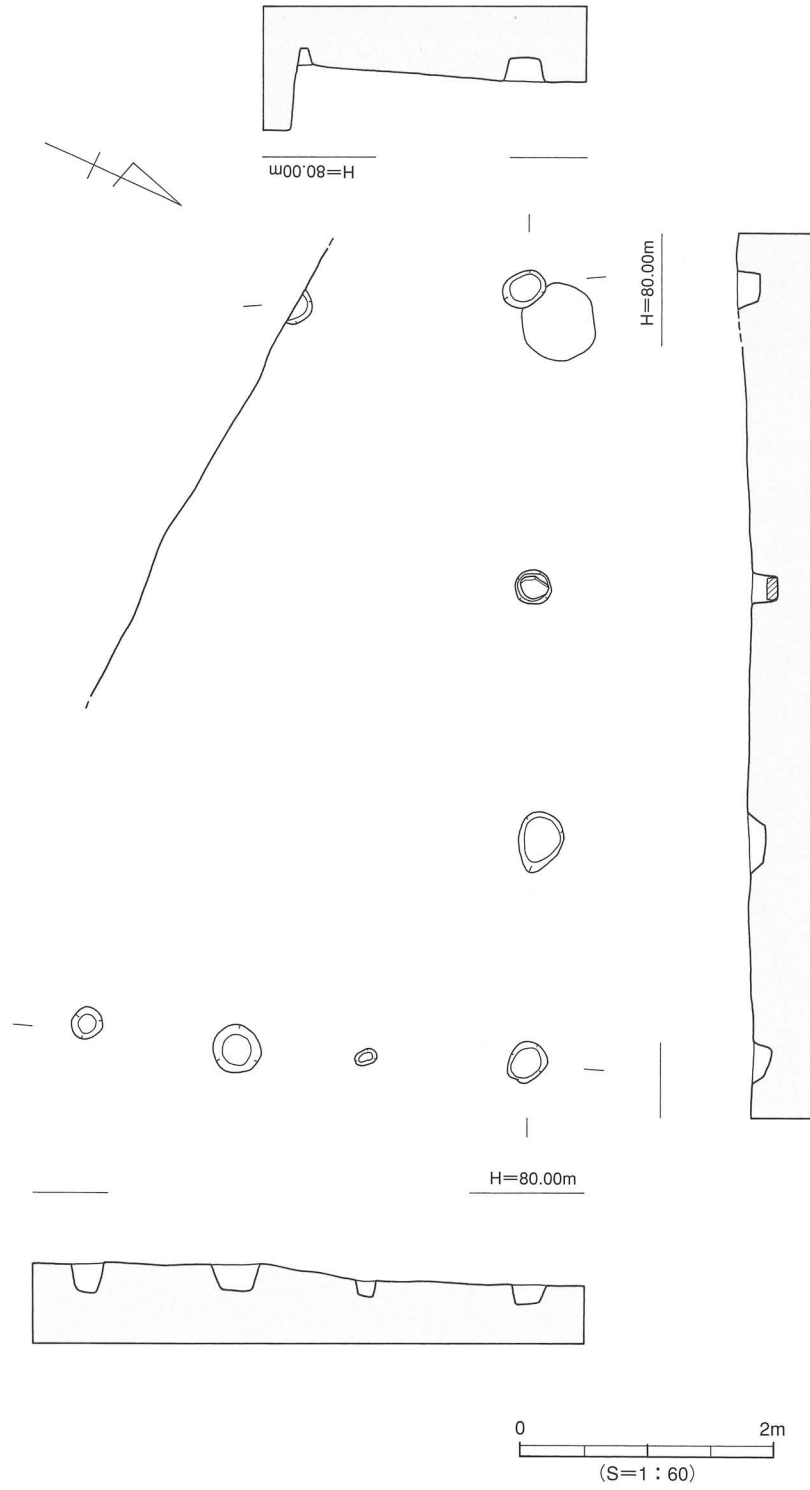


図45 6区 掘立6測量図

第 3 次 調 査

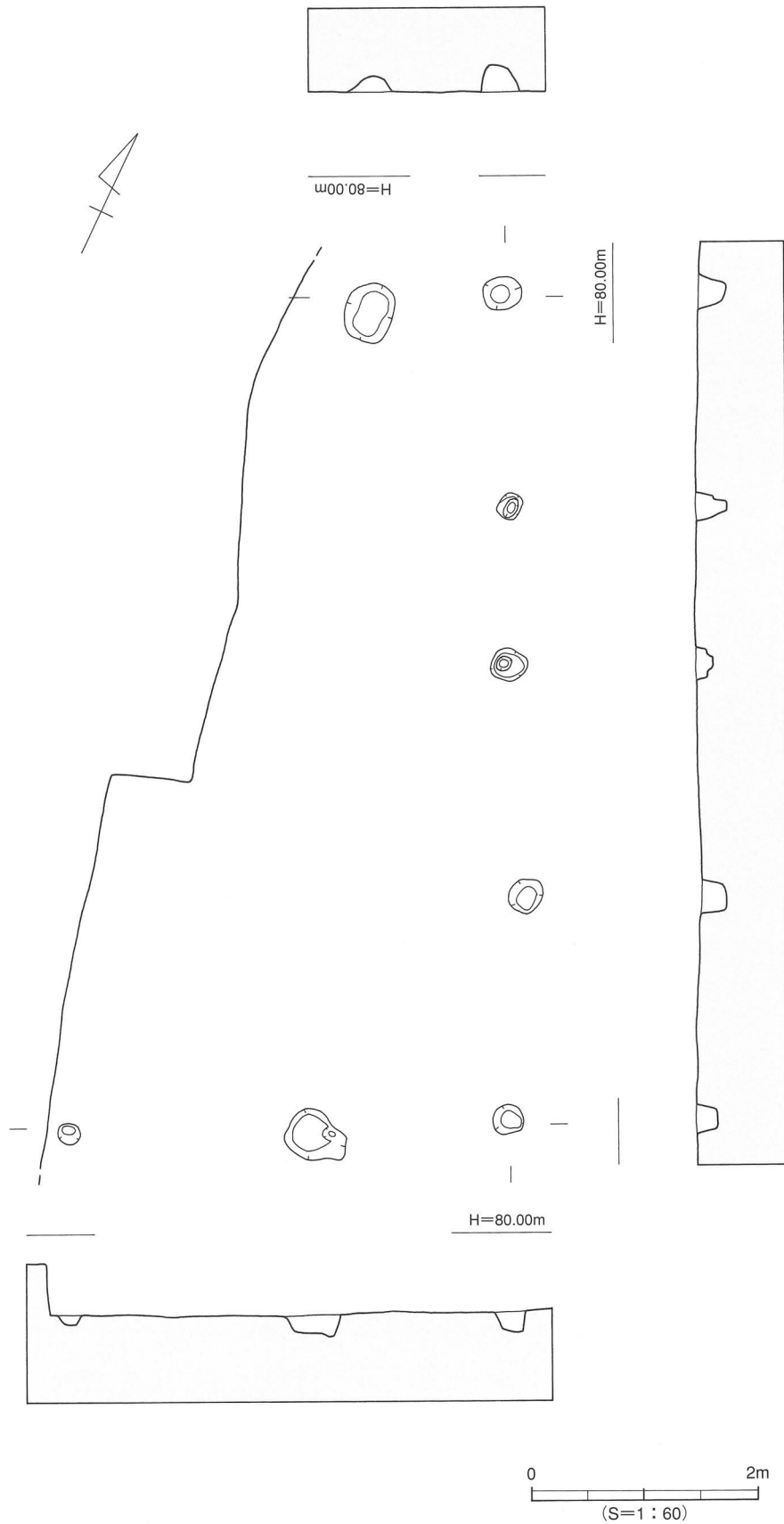


图46 6区 掘立7測量図

その他の遺構および表土より出土した遺物

(図49 121～131・133～142、図50～図54、図55 230～232・234、図56 239・240・242)

図49 121～131・133～142、図55 234はピット内より出土した遺物、図56 239はS X 1より出土した遺物である。

図49 121はS P 30より出土した土師質の杯で、摩滅のため不詳であるが底部をヘラ切により切り離すと考えられる。122は青磁碗の口縁部で、S P 34より出土している。123はS P 39より出土した土師質の杯で、底部に回転糸切痕を有する。124は底部を回転ヘラ切によって切り離す須恵質の杯で、S P 45より出土している。

125～127及び131はS P 41より出土した遺物である。125及び126は土師皿で、底部に回転糸切痕を有する。127及び131は土師質の杯で、底部の切り離し方法がそれぞれ回転ヘラ切および、回転糸切である。

図49 128は土師皿でS P 112より出土した。底部の切り離し方法は、摩滅のため分からない。129及び130は土師質杯の底部で、S P 128より出土した。129に関しては、摩滅のため底部の切り離し方法が分からないが、130は糸で切り離した後に擦痕が残る。133はS P 198より出土した東播系こね鉢の口縁部で、重ね焼きの為に口縁端部外面のみ色調が異なる。134は須恵質杯の口縁部で、S P 178より出土した。

135～142はS P 137より出土した遺物である。135は土師皿で、底部に糸切痕を有する。136～141は土師質の杯で、136・137及び141は底部に糸切痕を有する。142は土師質羽釜の脚部である。

図55 234はS P 41の壁面に突き刺さった状態で出土したスクレイパーである。石材は頁岩でやや暗い灰白色を呈する。

図56 239は鉄製の刀子で、S X 1より出土した。

図50～図54、図55 230～232、図56 240・242は表土及び包含層より出土した遺物である。

図50 143及び144は縄文土器の鉢で、早期に属すると考えられる。143は押型文土器で、外面に小型楕円文を施文し、口縁端部内面に短い刻目を有する。また、口縁を少し突出させた箇所に円孔を有し、緩やかな波状口縁を呈しているものと考えられる。胎土は精製されており、約1mmの長石粒をわずかに含む。器厚は薄く、0.4～0.5cm程度である。144は内外面に指頭による押圧痕を残し、口縁端部内面に刻目を有する無文土器である。胎土は粗く、中に1～3mmの長石及び石英を多く含む。また、器厚は0.7～0.9cmを測る。

145及び146は弥生土器の甕である。146は口縁外面に浅い凹線を三本廻らせる。147は甌の把手である。

148～156は須恵器の蓋杯、157～159及び161は須恵質の杯である。159は底部をヘラ切する際に、若干削り残した箇所が高台状になる。

図50 160・162～164、図51 165～170は須恵器の壺および甕で、162・166・167・170は平安時代以降に属すると考えられる。171及び173は須恵器の高杯、172は須恵器の器台である。

図51 174～181、図52及び図54 218は土師質および瓦質の製品である。174～181は土師質の皿および杯で、174は底部に小さな輪高台を持つもの、175は円盤高台を有するもの、それ以外は底部を回転糸切によって切り離す。

図52 182～189は土師質の羽釜である。190は土師質の甕、191は瓦質の香炉、192および193は土師

第 3 次 調 査

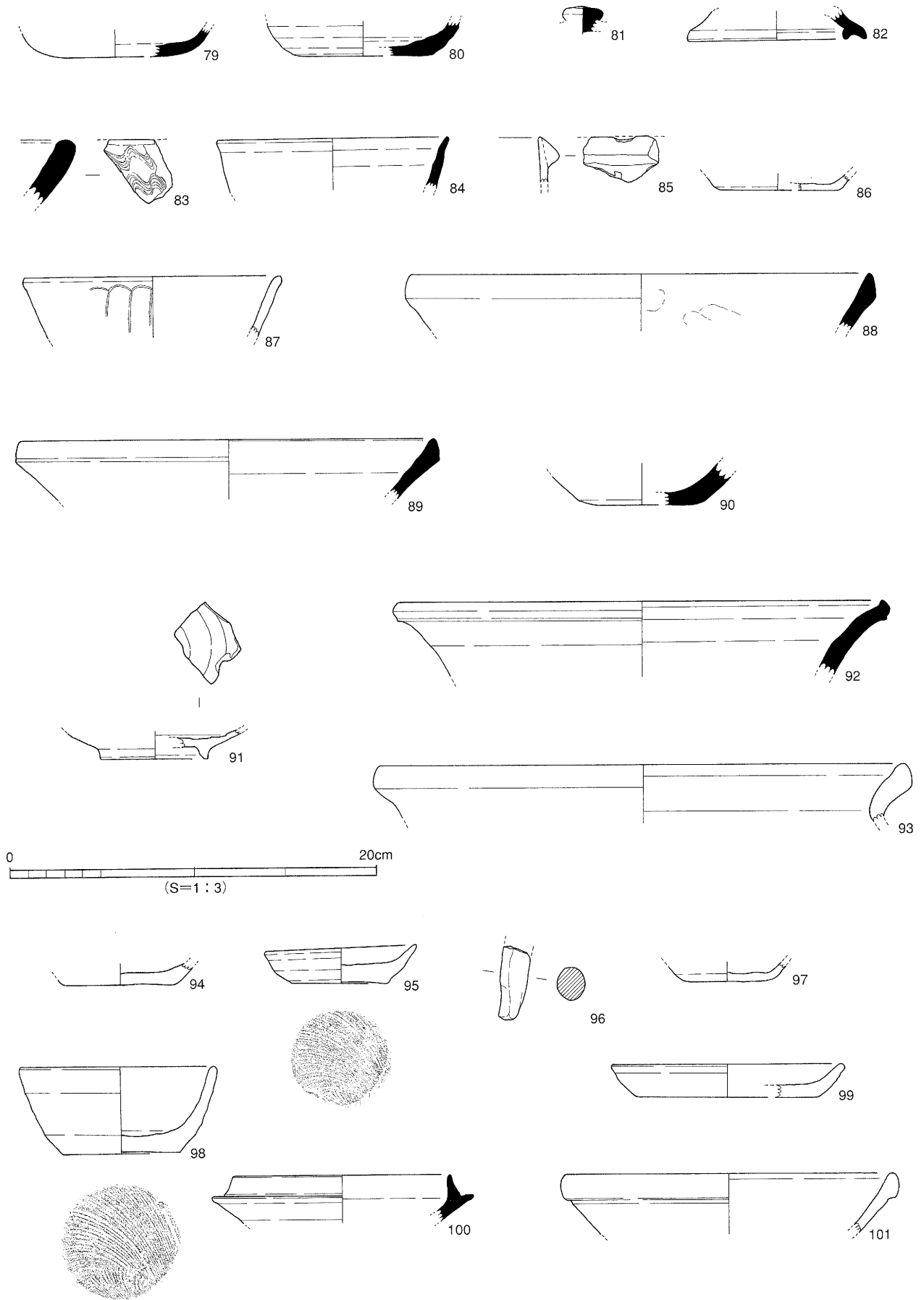


图47 6区出土遗物实测图(1)

6 区 の 調 査

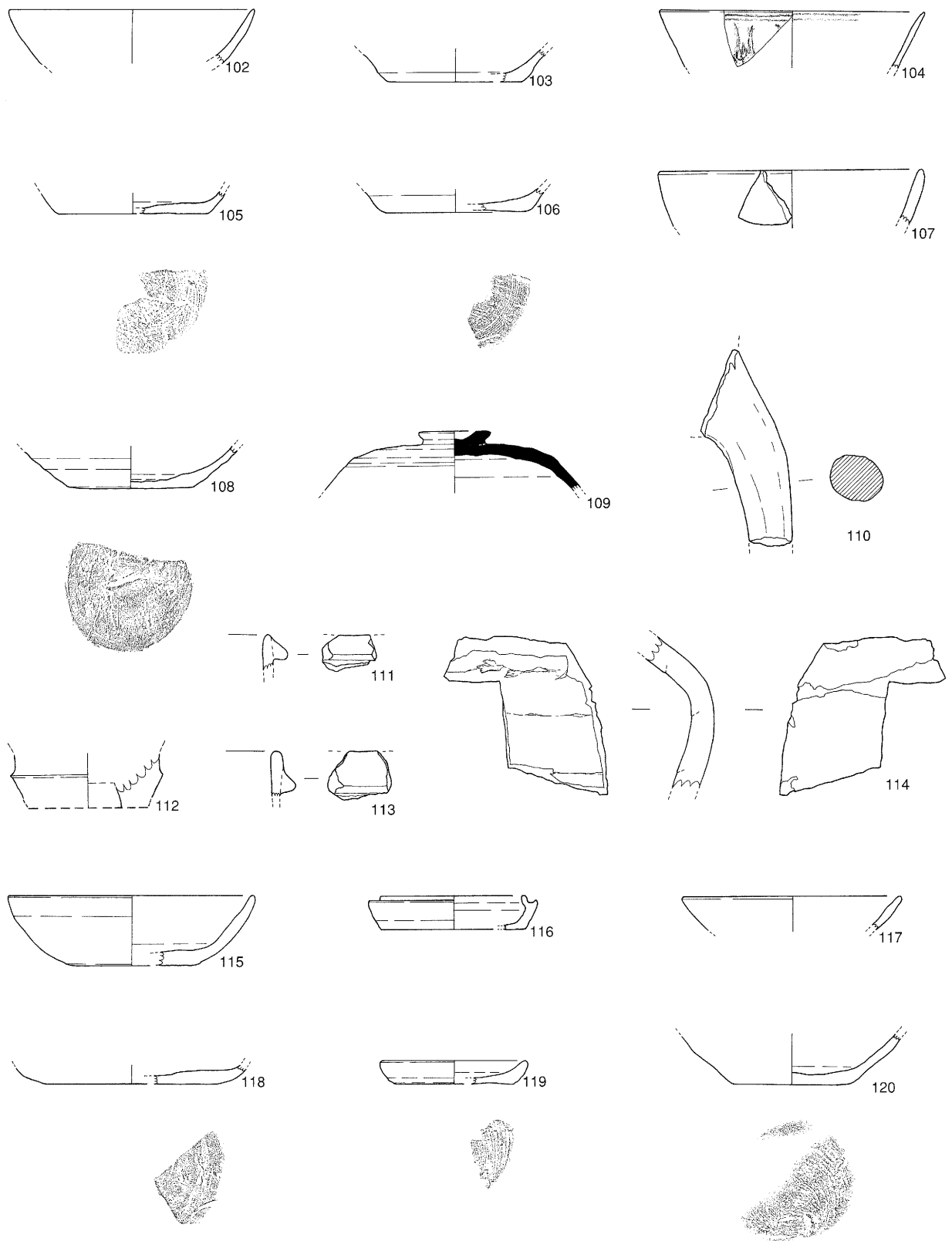


图48 6区出土遺物実測図(2)

第 3 次 調 査

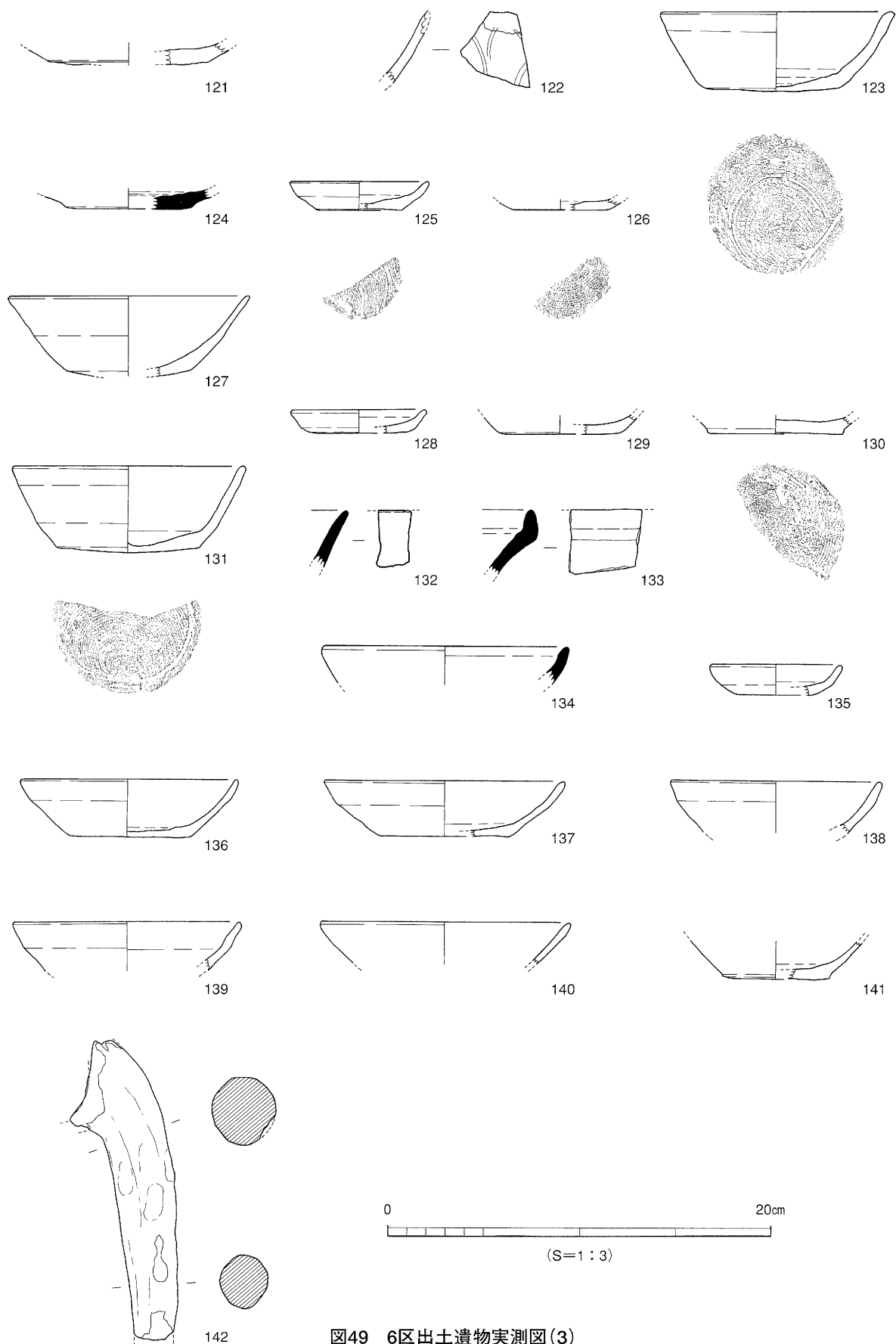


图49 6区出土遺物実測図(3)

6区の調査

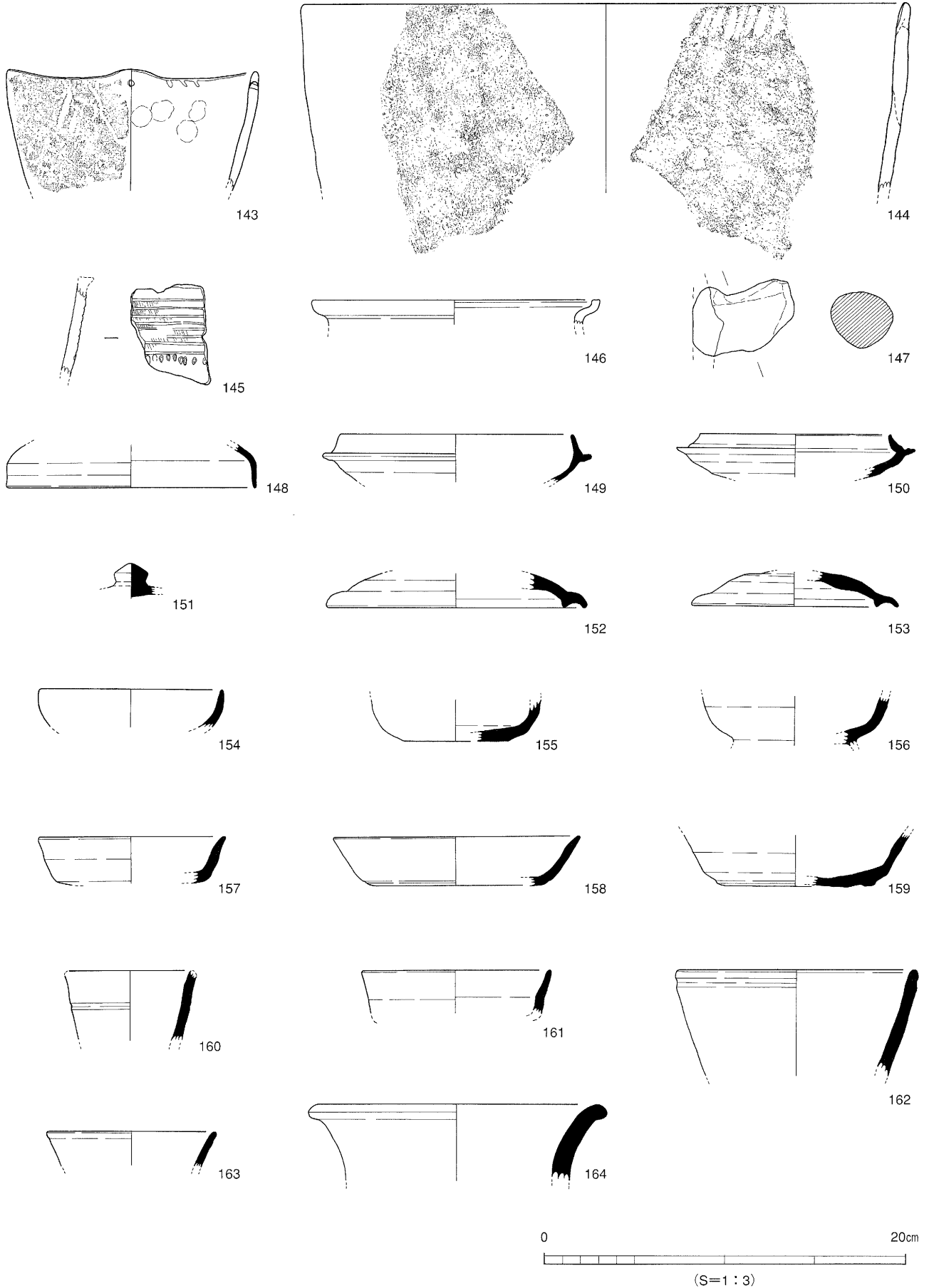


図50 6区出土遺物実測図(4)

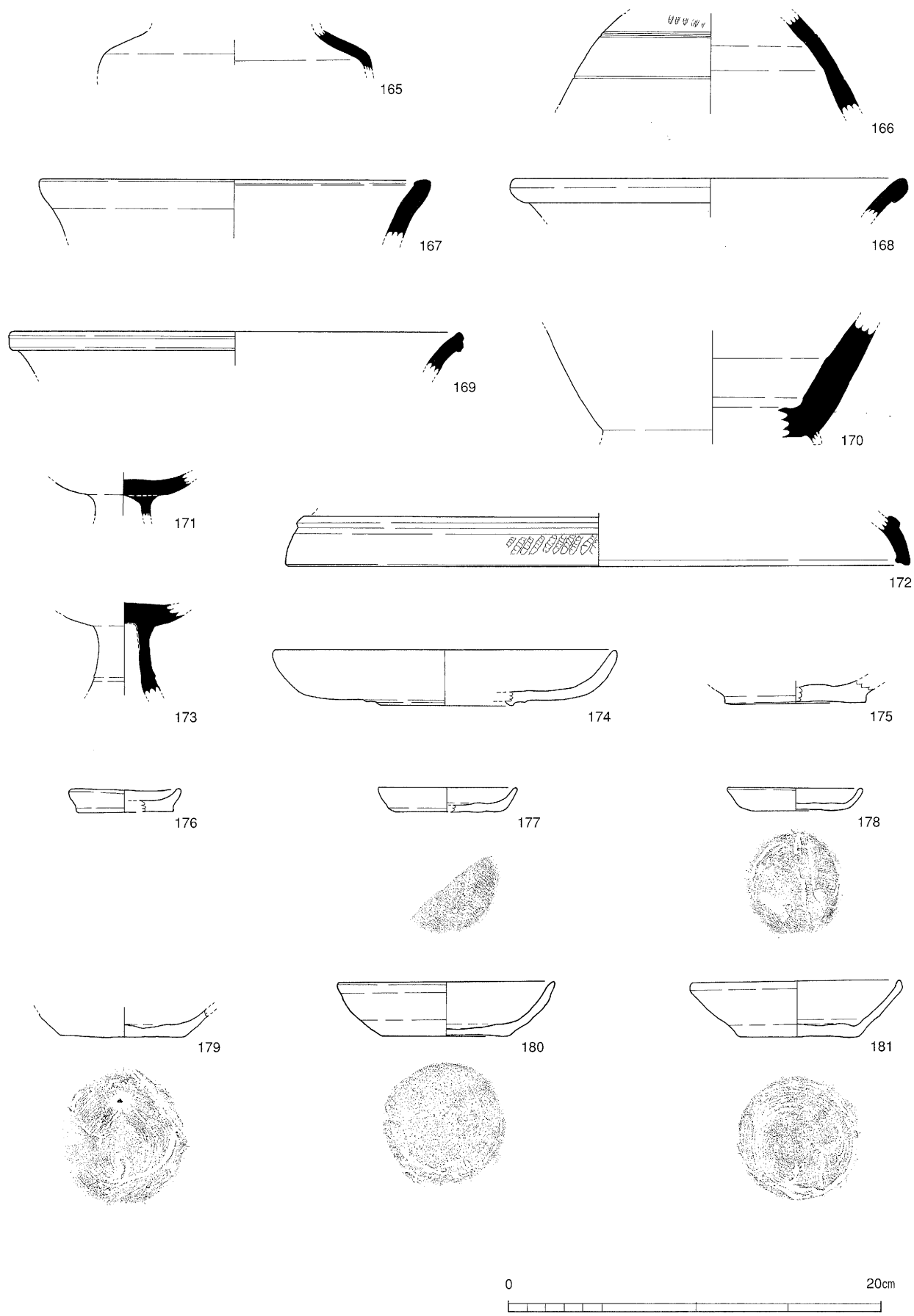


图51 6区出土遺物実測図(5)

6 区 の 調 査

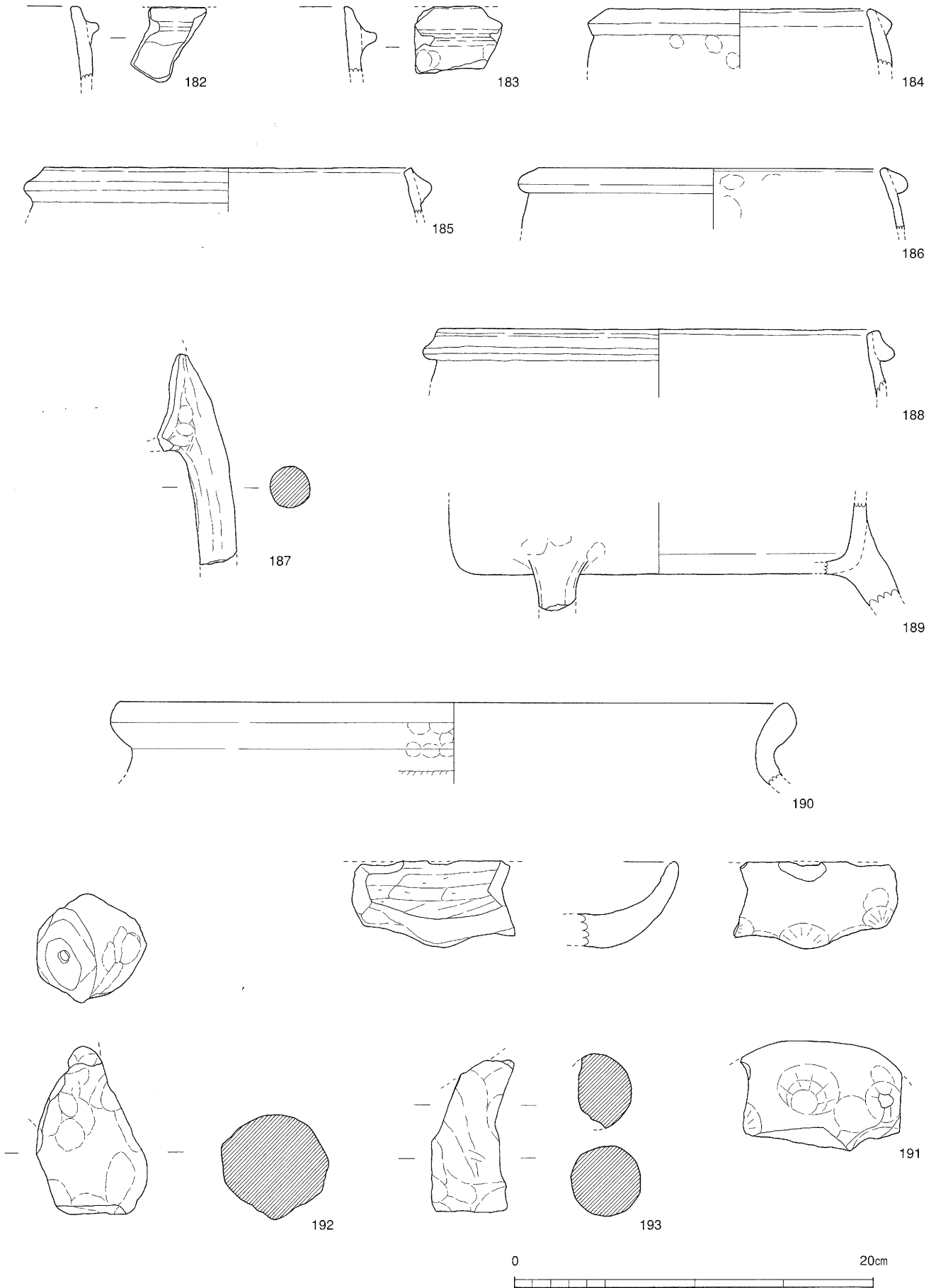


図52 6区出土遺物実測図(6)

第 3 次 調 査

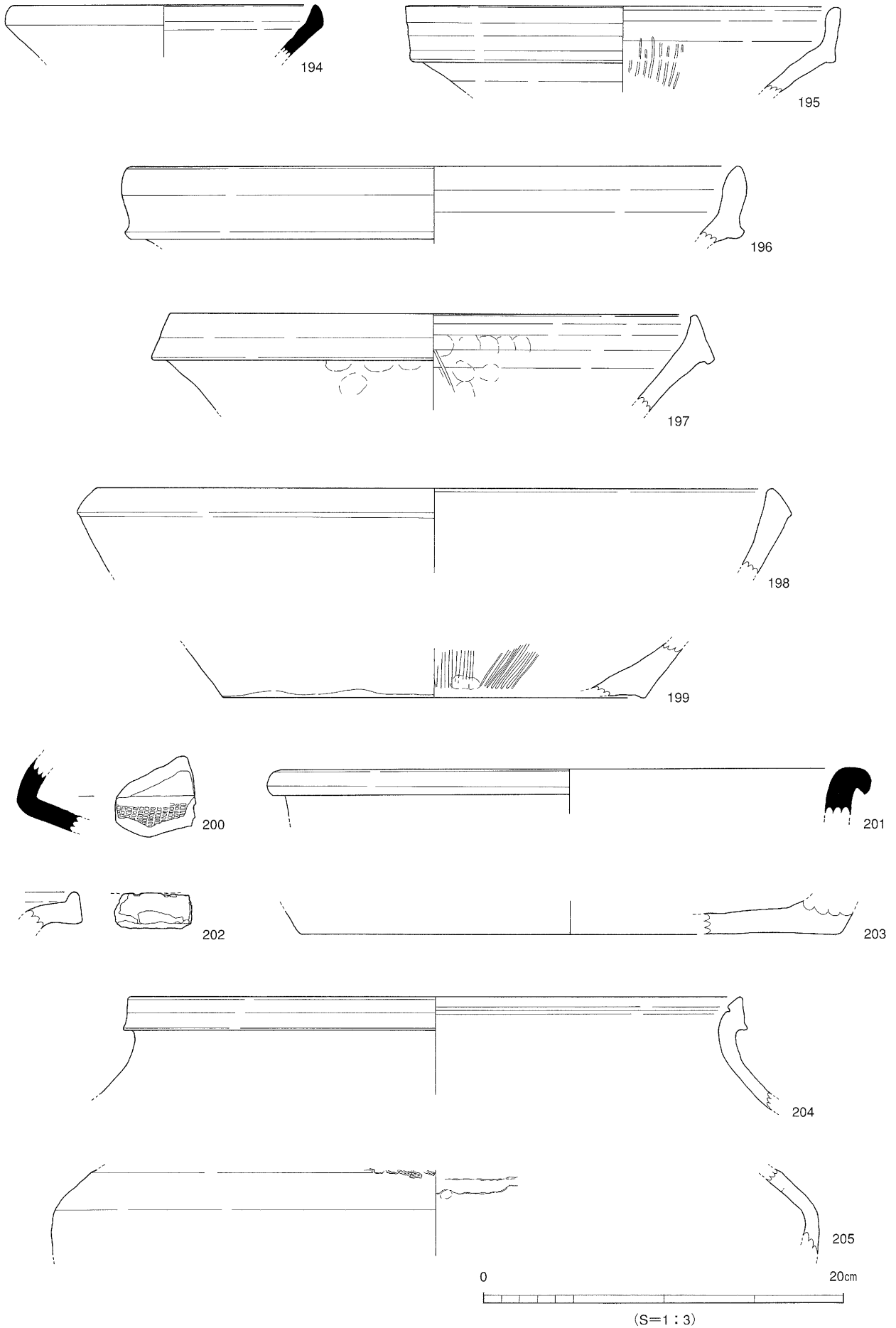
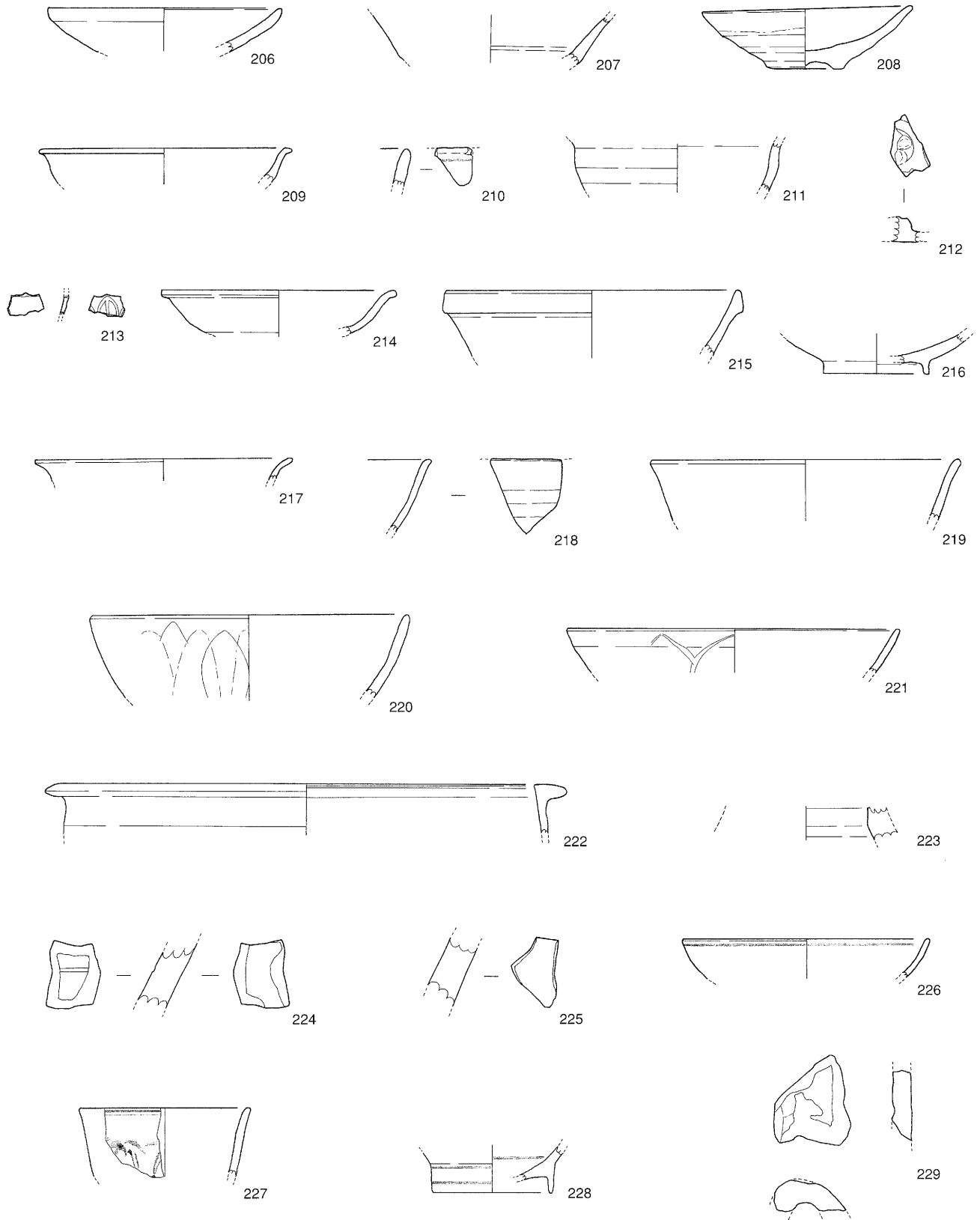


图53 6区出土遺物実測图(7)

6 区 の 調 査



0 20cm

(S=1:3)

图54 6区出土遺物実測图(8)

第 3 次 調 査

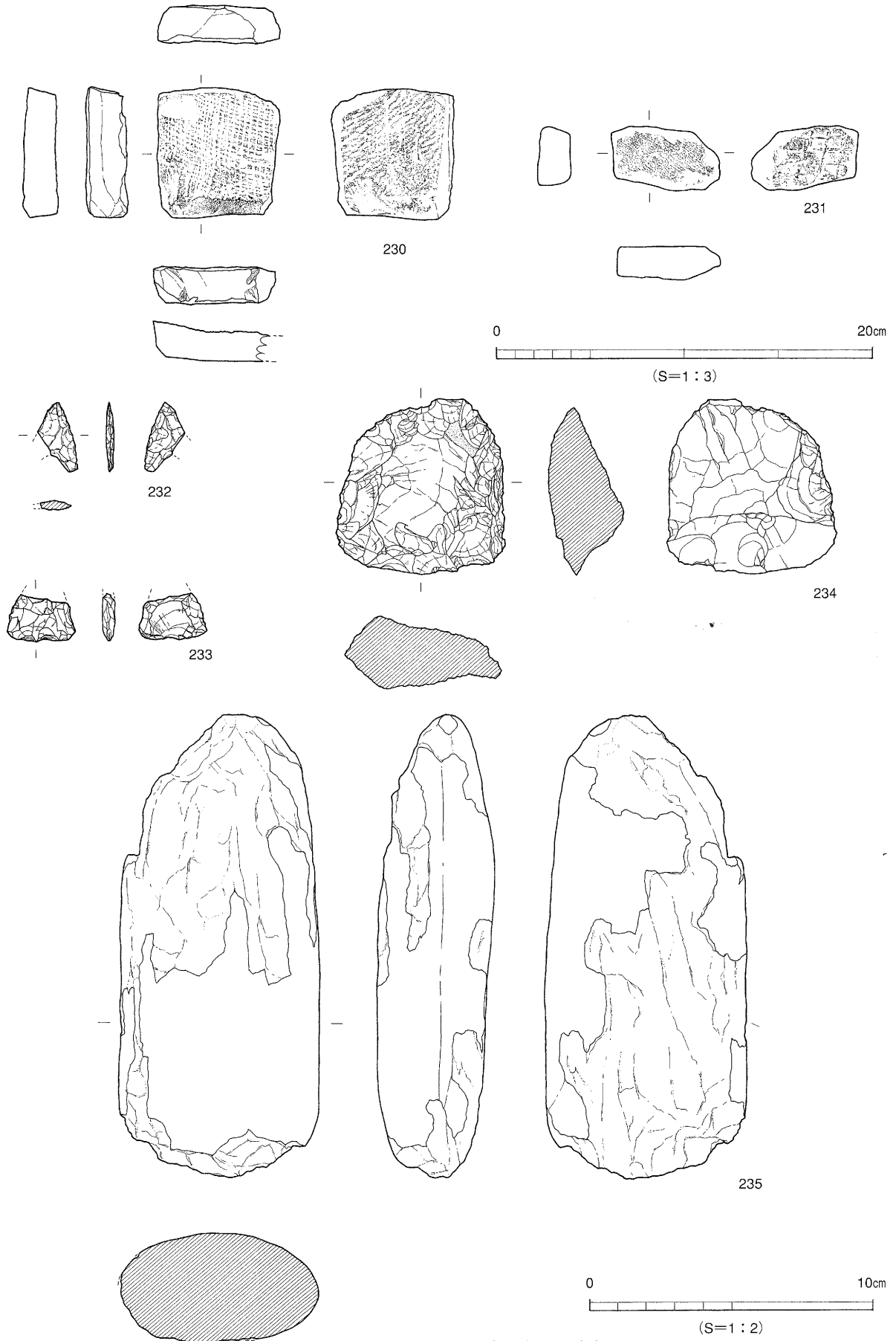


図55 6区出土遺物実測図(9)

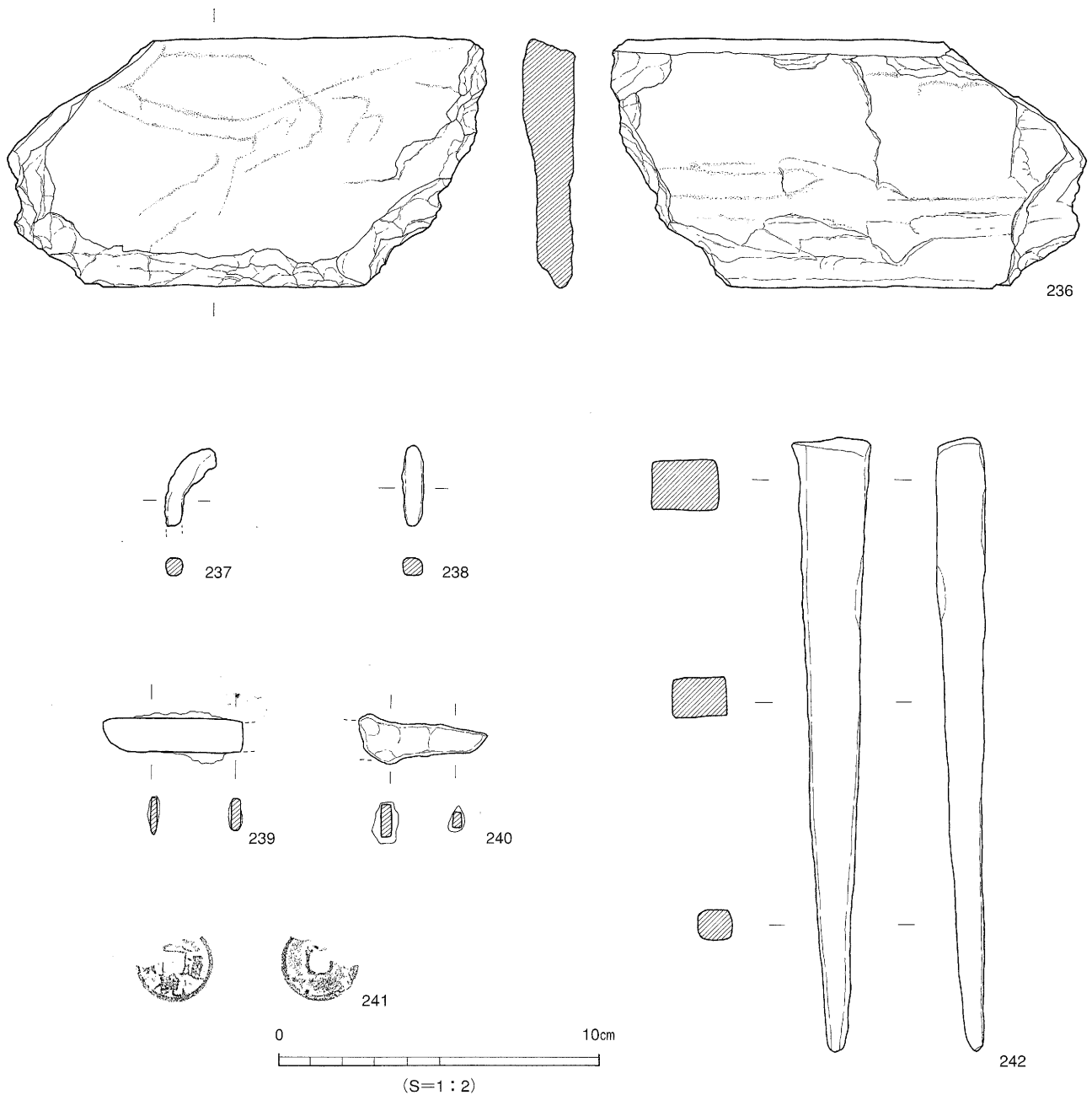


図56 6区出土遺物実測図(10)

質容器を支える獣脚である。図54 218は土師質碗の口縁部である。

図53及び図54 206～217、219～228は中世以降に属する須恵器及び陶磁器である。

図53 194は東播系のこね鉢である。195～199は備前焼のすり鉢、203は備前焼の甕底部である。200は亀山焼系の甕頸部、201は須恵器の甕で、分厚い口頸部から口縁部が小さく外方にのびる。202・204及び205は常滑焼の甕で、205は肩部外面に押印文がみられる。

図54 206～209及び217は肥前陶磁の陶器皿である。210は肥前陶磁の磁器碗で、外面に染付を施す。211は天目碗で、黒褐色を呈する。212は陶器の蓋で、上面に灰釉を施す。213は陶器の小碗あるいは小壺の胴部と考えられるもので、外面に線を貼付状に突出させる形で蓮弁文が表現される。

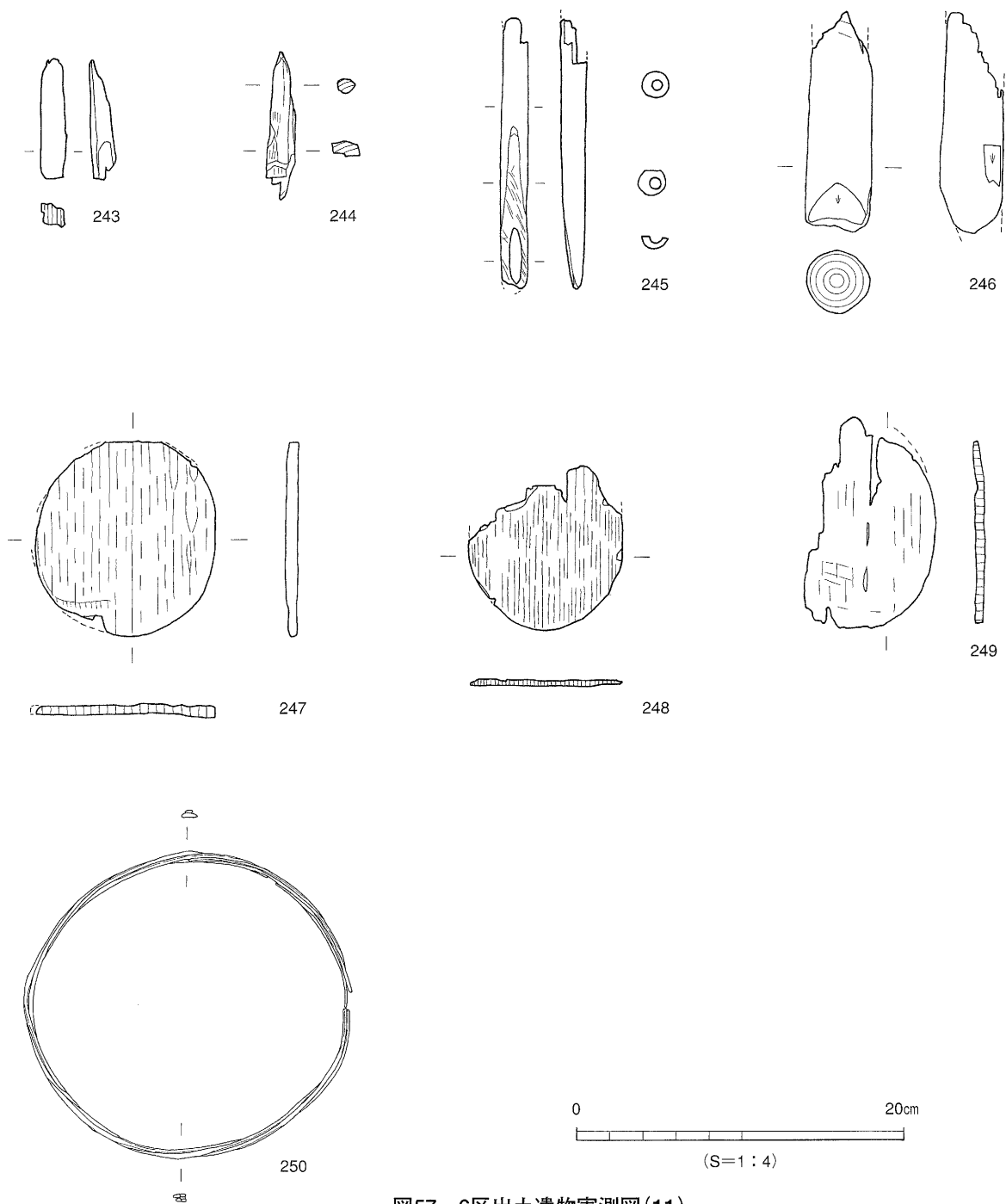


図57 6区出土遺物実測図(11)

図54 214～216は白磁碗、219～221は青磁碗、222は青磁の盤である。223～225は白磁壺の頸部および胴部下半の破片で、掘立4より出土している図48 112と同一個体のものである可能性が高い。226～228は染付で226は磁器小皿、227は外面に笹文を施す磁器小杯、228は磁器碗の底部である。

図54 229は轆の羽口である。図55 230及び231は瓦で、230は三辺に刀子による切斷・加工がみられることから、熨斗瓦等の道具瓦であろう。

図55 232は安山岩製の凹基打製石鏃である。図56 240及び242は鉄器で、240は刀子の茎部、242は釘である。

9. 7 区 の 調 査

当調査区では、ピットを31基（うち掘立柱建物跡1棟、壁面検出ピット5基を含む）、溝を2条検出した。

(1) 土層

7 区 の 土 層 は 9 に 細 分 する こと が 可 能 で、それらは調査地全体の層位の項で述べたもののうち、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅳ層及び第Ⅴ層に相当する。

遺構は、第Ⅱ層の上面より掘り込むものと、第Ⅱ層によって埋没するものが存在すると考えられるが、遺構の確認および検出作業は第Ⅴ層の上面において実施した。

(2) 遺構と遺物

溝1〔SD1〕(図60)

調査区の東壁中央に端を発し、「く」の字状に折れて南壁に消える溝である。検出長は約5.9mを測り、幅は約50cmとほぼ均一で深さ5~16cmを測る。埋土は暗~黒灰色粘土で、西側に進むにつれて下位に黒色粘土の堆積が見られる。また、底面付近より拳大の円礫を疎らに検出した。

出土遺物 (図63 251)

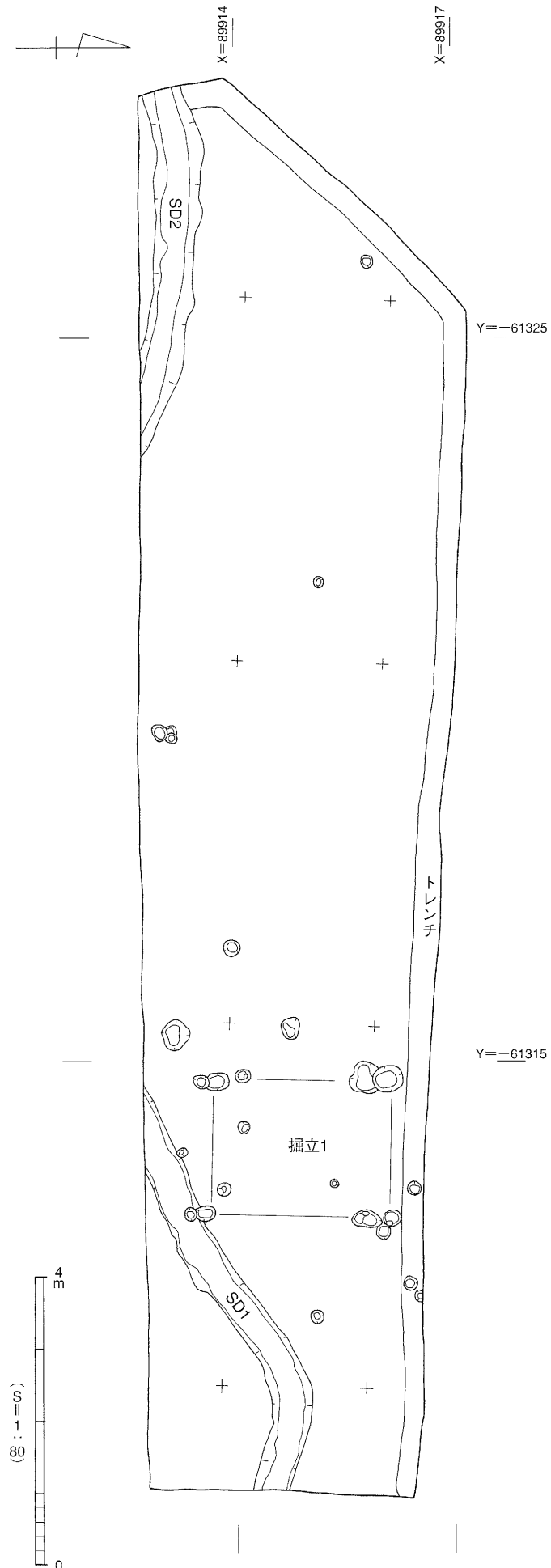


図58 7区遺構配置図

図63 251は、須恵器杯蓋のツマミ部である。

時期：出土遺物より、8世紀以降に属すると考えられる。

溝2〔SD2〕(図61)

北側に緩やかな弧を描きながら東より西に向けて流れる溝で、調査区の南西隅にて確認した。検出長約5.1m、幅50~60cm、深さ35~48cmほどを測り、流路内部には拳大~人頭大の河原礫が多く堆積する。

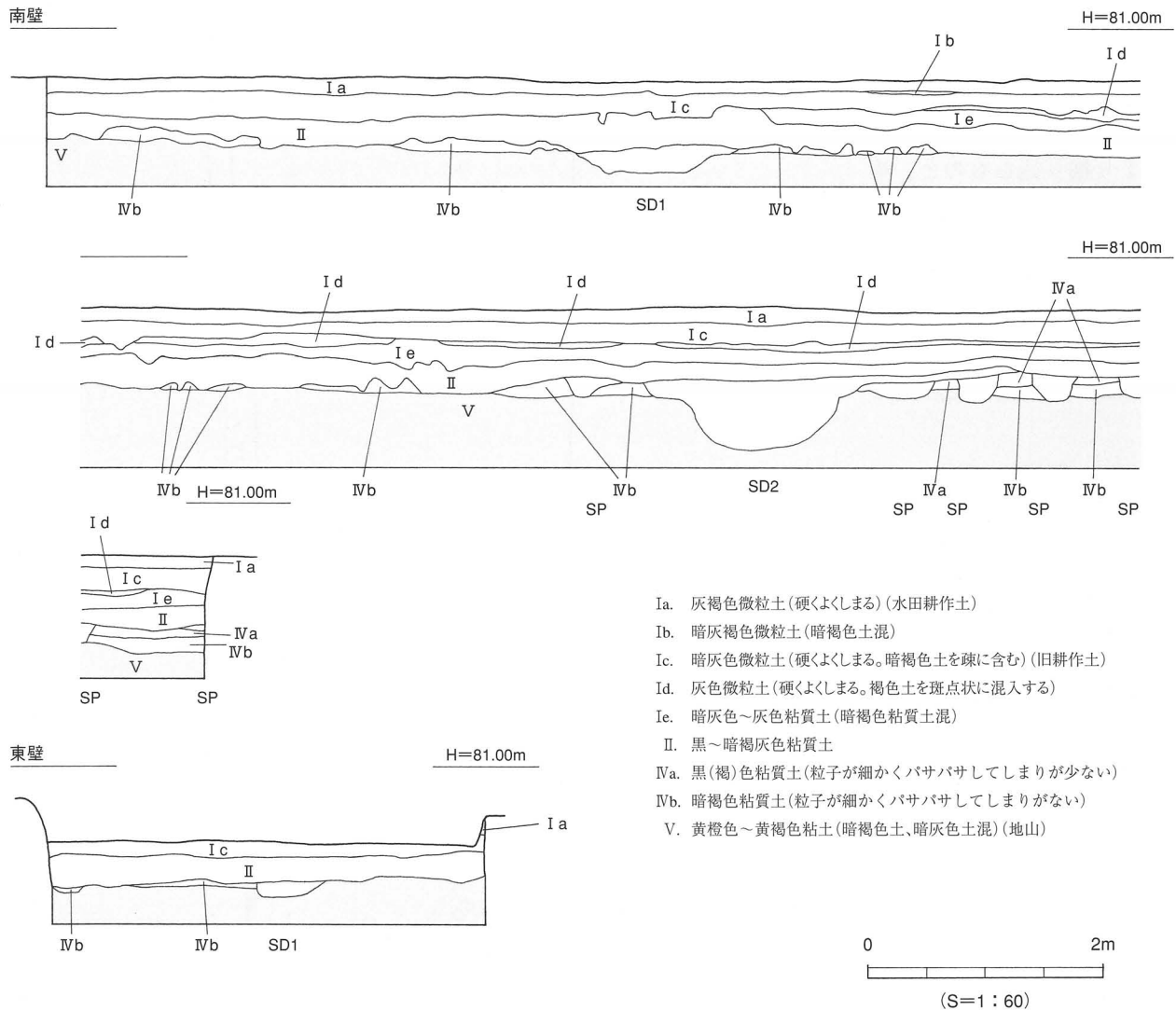


図59 7区壁面土層測量図

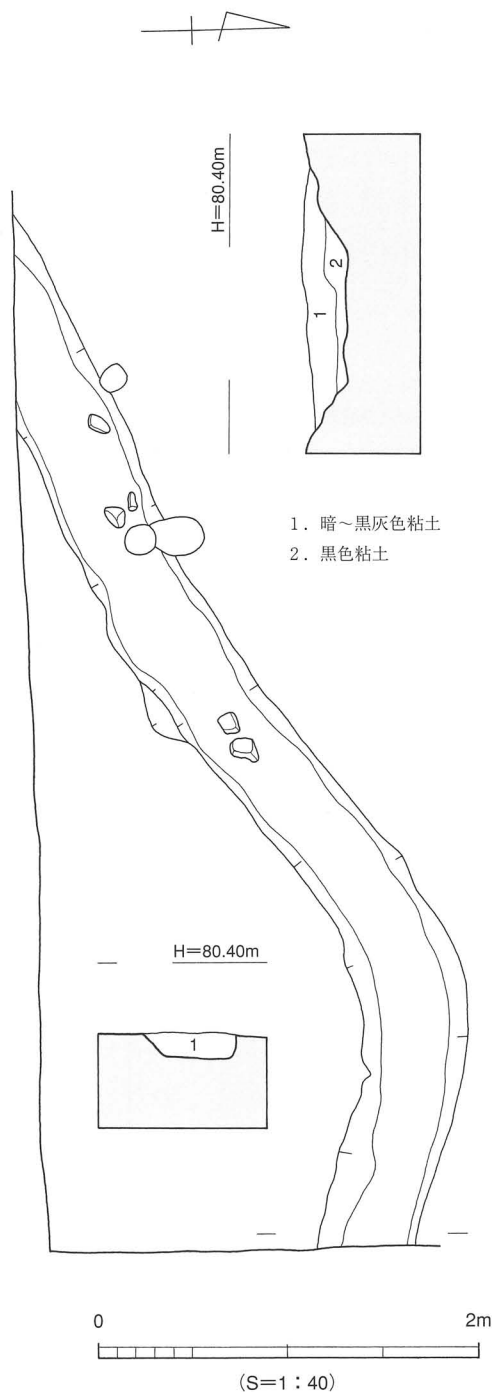


図60 7区 SD1測量図

出土遺物 (図63 252・255)

図63 252は、土師器甕形土器の口縁部である。器面調整は、内外面共にナデ調整が施される。255は須恵器高杯の脚部で、二段の長方形透かしを三方向に施すものと考えられる。

時期：出土遺物より、6世紀後半以降に属すると考えられる。また、埋土の特徴や幅などSD1と共通する点が多いことから、SD1と同時期の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物跡1〔掘立1〕

(図62)

調査区の東部にて検出した梁間1間、桁行1間以上の掘立柱建物である。柱穴によって埋土の色調がやや異なるが、複数の柱穴がそれぞれの位置に集中して配置されることから、短期間で建て替えが行われた可能性がある。また、SD1の上面に掘り込まれることから、SD1よりも新しい時期の遺構である。

出土遺物

(図63 253・254・256)

253は須恵器の杯身で、内面に自然釉の付着が著しく、焼成時の変形が大きい。254および256は土師質の杯で、底部の切離し方法は摩滅のため分からない。

時期：出土遺物より、中世以降に属すると考えられる。

第 3 次 調 査

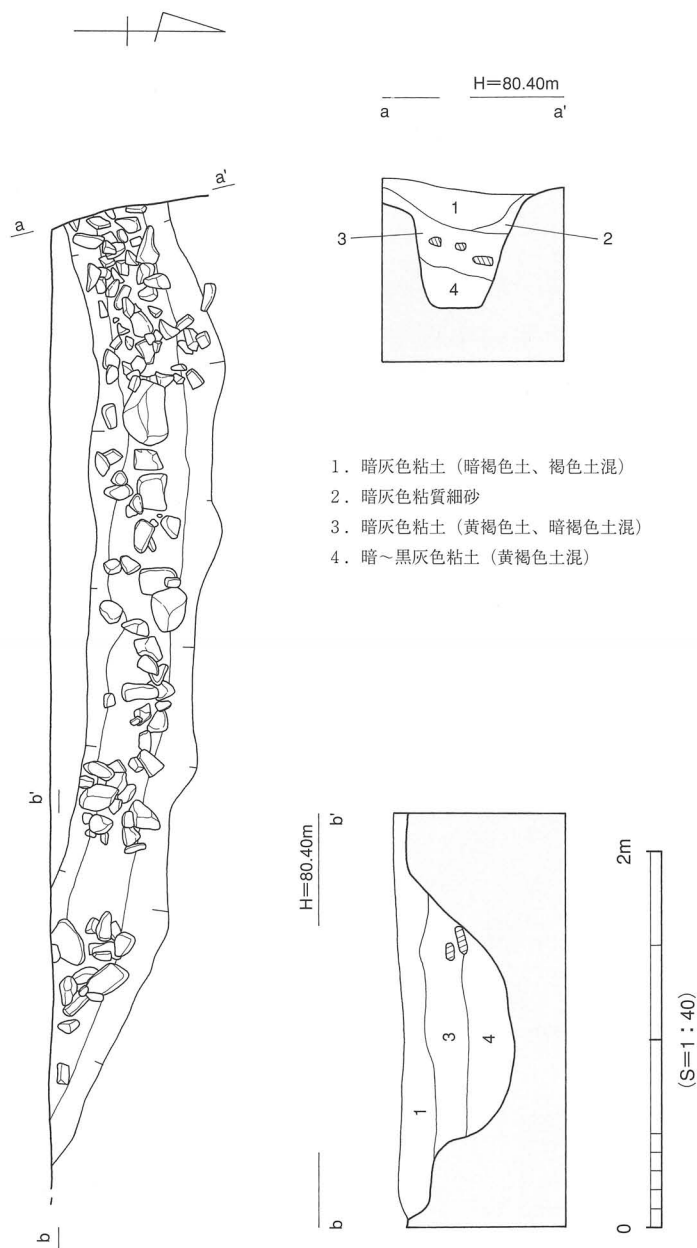
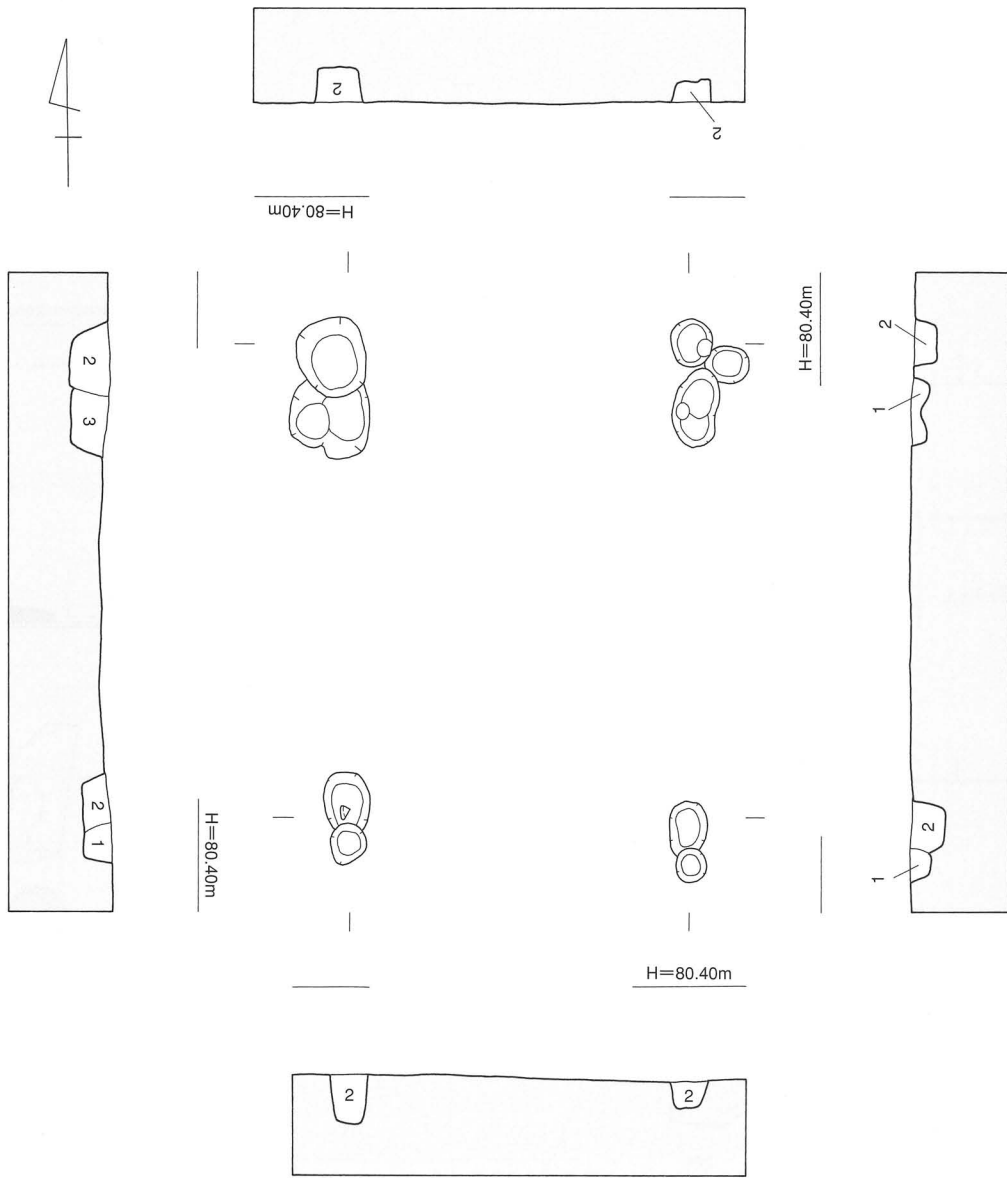


図61 7区 SD2測量図

表土より出土した遺物 (図63 257~268)

257は弥生土器の底部で、外面にミガキ調整を施す。258・259は土師器で、甕形土器の口縁部および鉢の口縁部である。260は須恵器の杯蓋で、口縁端部内面の返りがほとんど無い。261は須恵器の杯身で、底部に高台を有する。262及び263は土師質の杯で、それぞれ底部に糸切痕を有する。264および265は土師質羽釜の脚部である。266は中空の持ち手を有する調理具で、須恵質のものである。267は備前焼の底部、268は安山岩製の凹基打製石鏃である。

7 区 の 調 査



- 1. 暗灰色粘質土 (灰色粘質土混)
- 2. 灰色粘質土 (暗灰色粘質土混)
- 3. 暗灰色粘質土中に黄褐色土を少量混入する

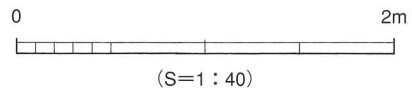


図62 7区 掘立1測量図

第 3 次 調 査

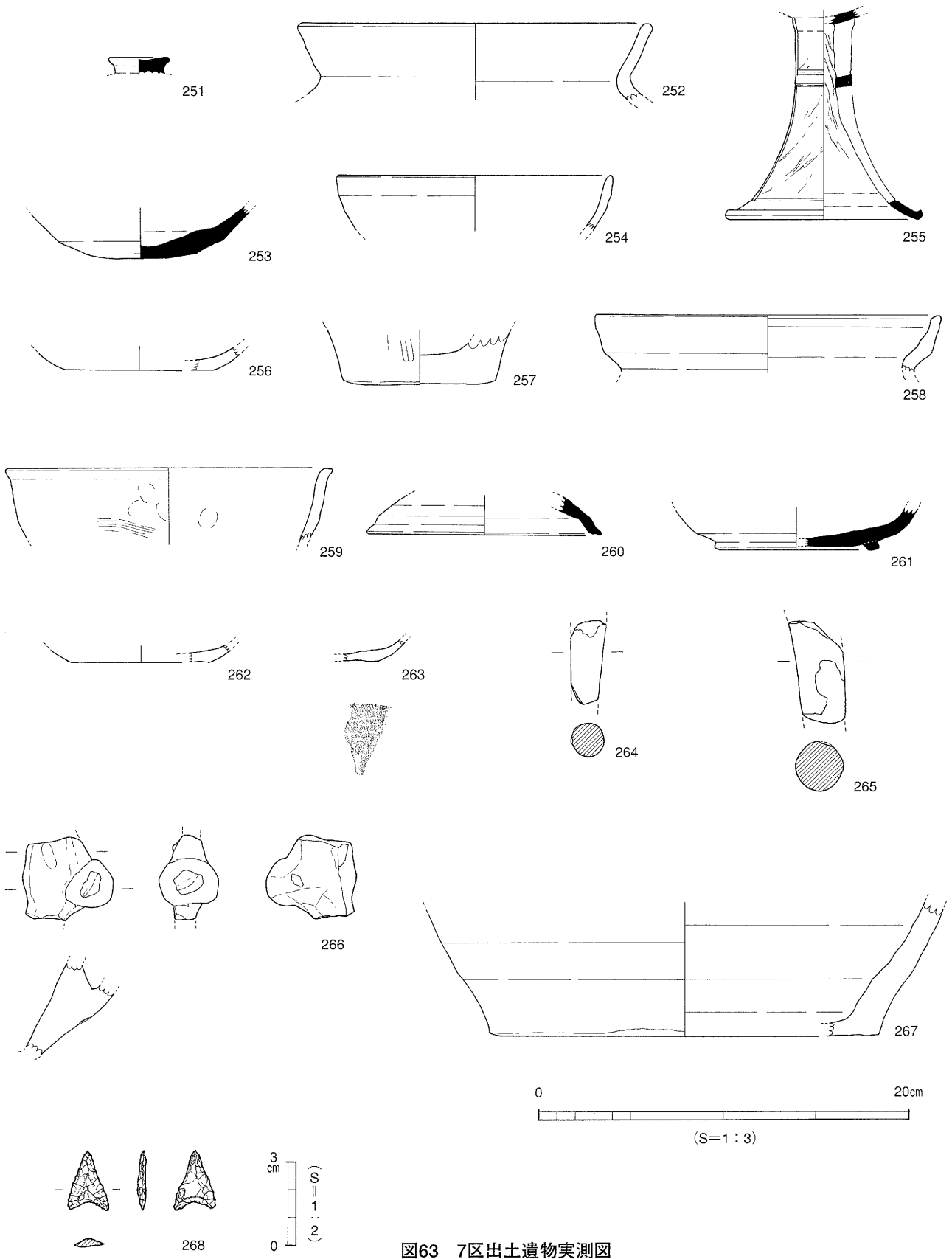


图63 7区出土遺物実測図

10. 8 区 の 調 査

当調査区では、ピットを16基（うち掘立柱建物跡2棟）、性格不明遺構を1基検出した。

(1) 土層

8 区 の 土 層 は、 調 査 地 全 体 の 層 位 の 項 で 前 述 し た も の の う ち、 第 I 層、 第 II 層、 第 III 層 お よ び 第 IV 層 に 分 け る こ と が 可 能 だ る。 ま た、 第 I 層 は 6 つ（I a ～ I f）、 第 III 層 は 2 つ（III a、 III b） に 細 分 す る こ と が 可 能 だ る。 調 査 を 終 了 す る 直 前 に 深 掘 り に よ る 土 層 確 認 作 業 を 実 施 し た 結 果、 IV 層 の 下 位 に 同 じ く IV 層（IV b 層： 暗 褐 色 粘 質 土 / 粒 子 が 細 かく パ サ パ サ し て し ま り が 少 な い） を 確 認 し、 ま た そ の 下 位 に V a 層（ 黄 橙 色 粘 質 土） 及 び V b 層（ 乳 白 色 ～ 黄 橙 白 色 粘 質 微 砂） を 確 認 し た。

遺構は、第III層あるいは第IV層の上面で検出したが、第III層上面より掘り込まれていたと考えられる。

(2) 遺構と遺物

掘立柱建物跡1〔掘立1〕（図66）

梁間2間（約4.2m）、桁行2間（約3.5m）以上の側柱建物で、調査区西半部より検出した。調査区外（南側）に向かって展開する可能性があるが、遺構の遺存状態が悪い為詳細は分からない。

出土遺物

柱穴の埋土中より、須恵器及び土師器の小片が出土しているが、図化に耐え得るものではない。

時期：出土遺物より、古墳時代後期以降に属すると考えられる。

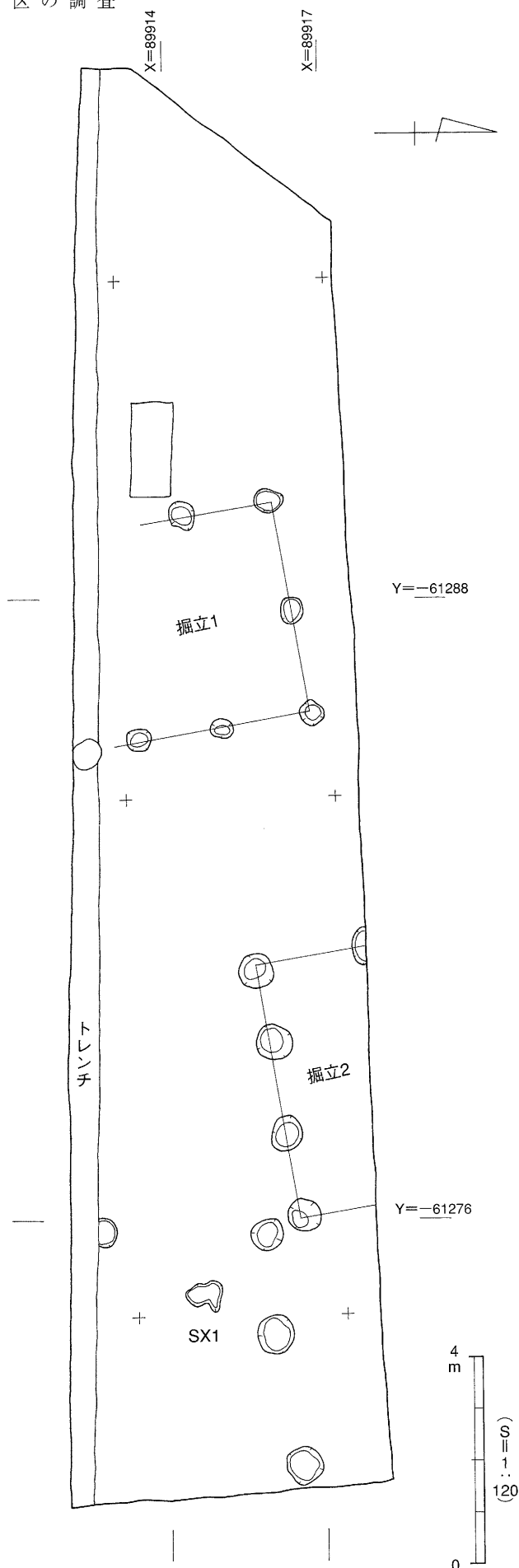


図64 8区遺構配置図

第 3 次 調 査

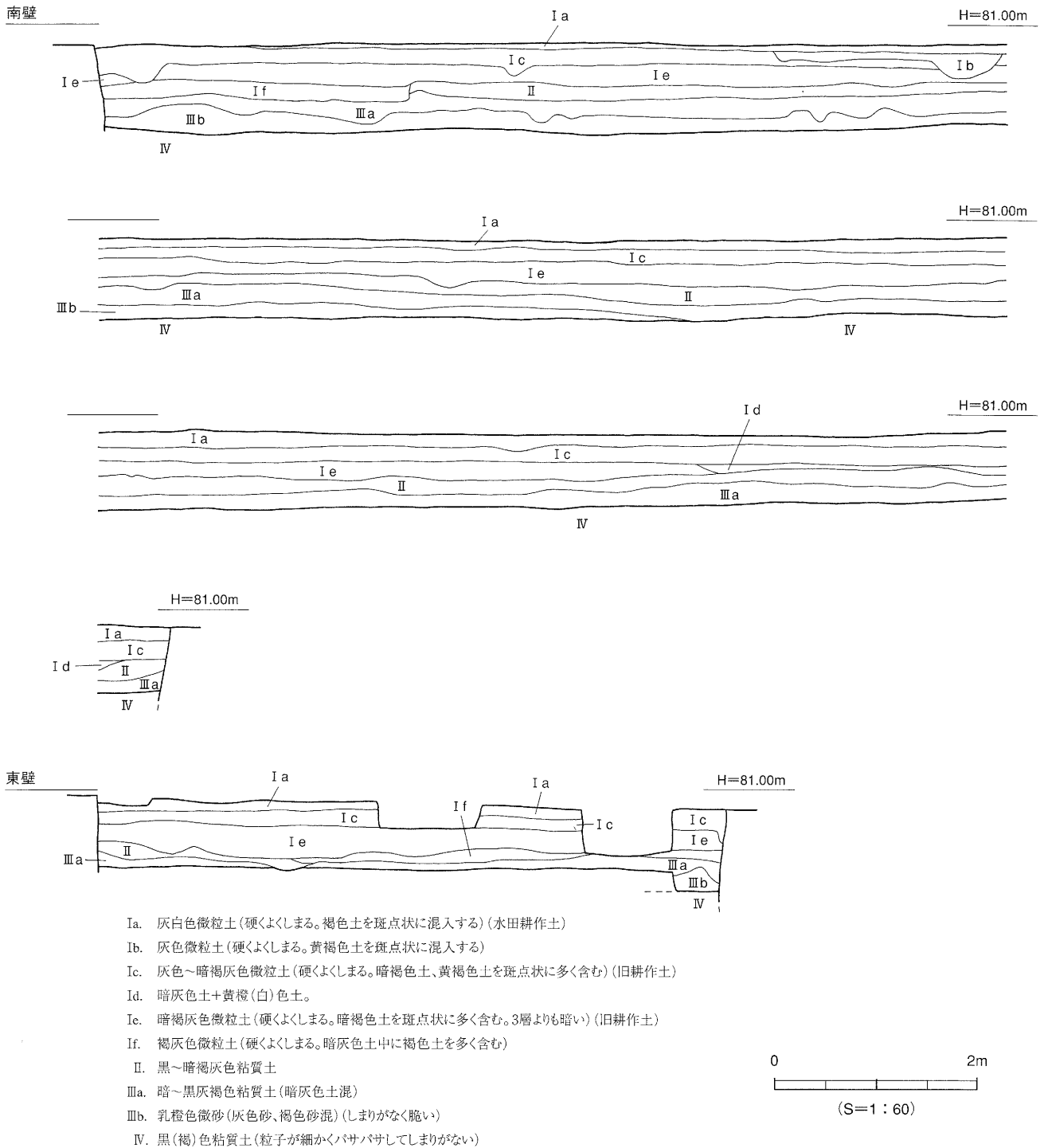


図65 8区壁面土層測量図

掘立柱建物跡 2 [掘立 2] (図67)

梁間 1 間 (約 2.3m) 以上、桁行 3 間 (約 4.8m) の掘立柱建物で、調査区の東半部にて検出した。調査区の北側に向かって展開すると考えられるが、地形的な制約により詳細は分からない。建物の主軸が掘立 1 とほぼ同じであることより、同時期の建物である可能性が高い。

出土遺物

柱穴の埋土中より土師器小片の出土があるが、図化に耐え得るものではない。

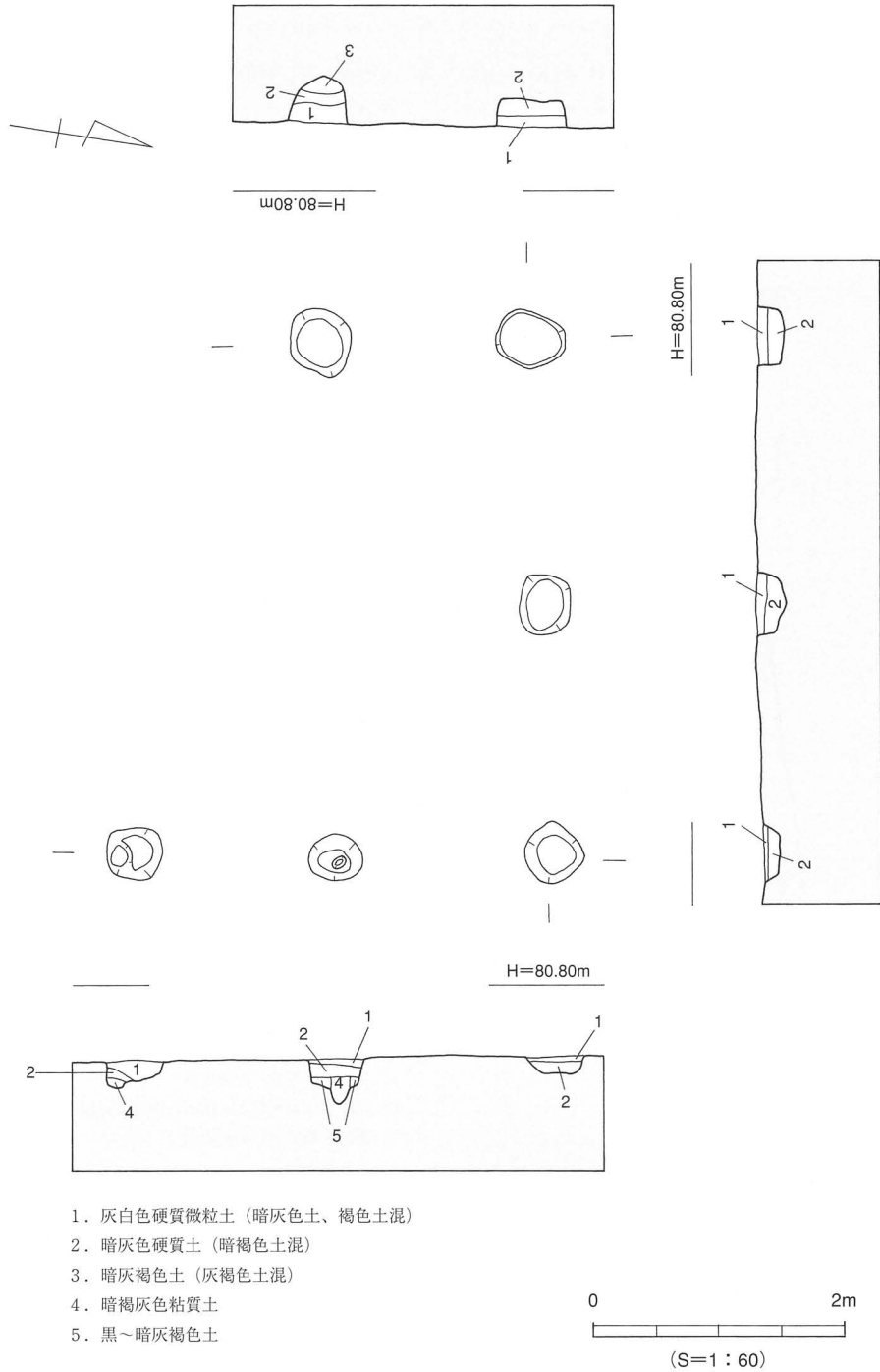


図66 8区 掘立1測量図

時期：建物の主軸より判断して、古墳時代後期以降に属すると考えられる。

性格不明遺構〔SX1〕

幅36~60cm、長さ約70cm、深さ8~10cm程を測る不整形の掘り込みで、掘立2の南東側にて検出した。

出土遺物（図68 272）

272は須恵器杯身の口縁部である。

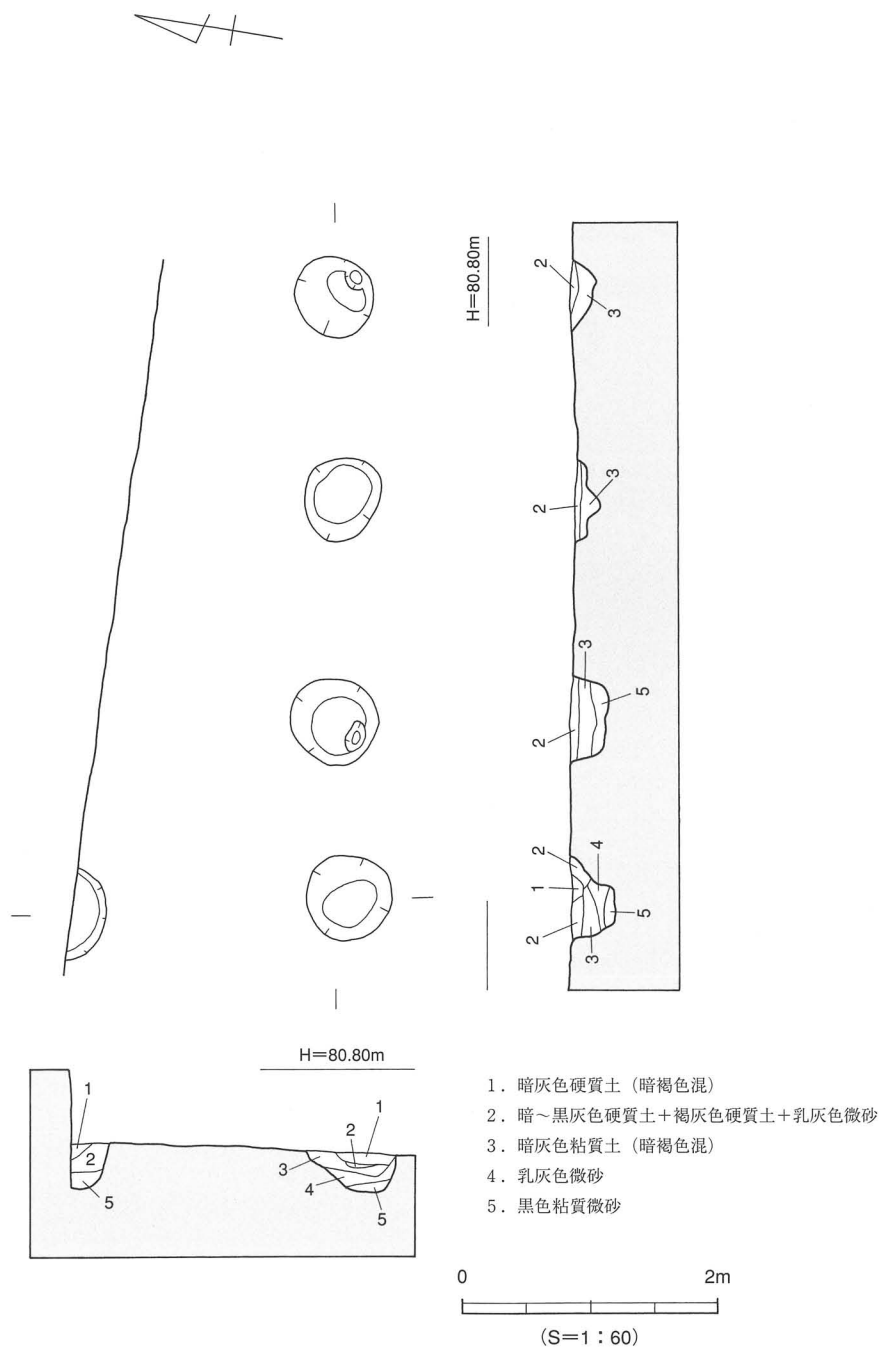


図67 8区 掘立2測量図

時期：出土遺物より、7世紀以降に属すると考えられる。

表土より出土した遺物（図68 269～271・273・274）

269及び270は壺形土器の口縁部で、弥生時代前期末～中期に属する。271は弥生時代後期に属する壺形土器の頸部である。273は須恵器の杯で、8世紀代に属する。274は、土師質土釜の脚部である。

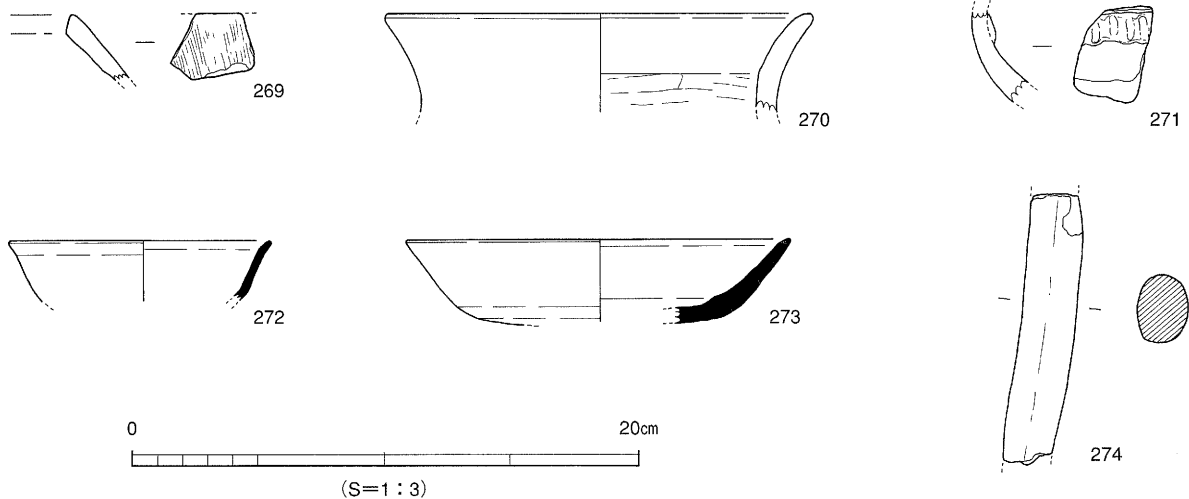


図68 8区出土遺物実測図

11. 9区の調査

当調査区では、ピットを64基（うち掘立柱建物跡1棟）、自然流路を1条、溝を2条、性格不明遺構を3基検出した。

（1）土層

9区の土層は、9に細分することが可能で、それらは調査地全体の層位の項で述べたもののうち、第Ⅰ層（Ⅰa～Ⅰc）、第Ⅲ層（Ⅲa～Ⅲc）、第Ⅳ層、第Ⅴ層（Ⅴa、Ⅴb）に相当する。遺構は第Ⅲ層の上面より掘り込まれ、第Ⅲ層および第Ⅳ層の存在しない範囲（SR1以東）に関しては、第Ⅴ層の上面より掘り込まれる。

（2）遺構と遺物

溝1〔SD1〕

調査区のほぼ中央を南から北側に向けて緩やかに流れる溝である。規模は検出長約6.8m、幅80cm前後、深さ10～25cmを測り、埋土は上層が暗灰色硬質土、下層が暗黒灰色土である。

出土遺物（図73 275）

275は土師器の皿で、摩滅により詳細は分からないが、内外面にミガキ調整を施し、特に内面には斜め方向に暗文様のミガキを施すものである。

時期：出土遺物より8世紀代に属すると考えられる。

溝2〔SD2〕

第 3 次 調 査

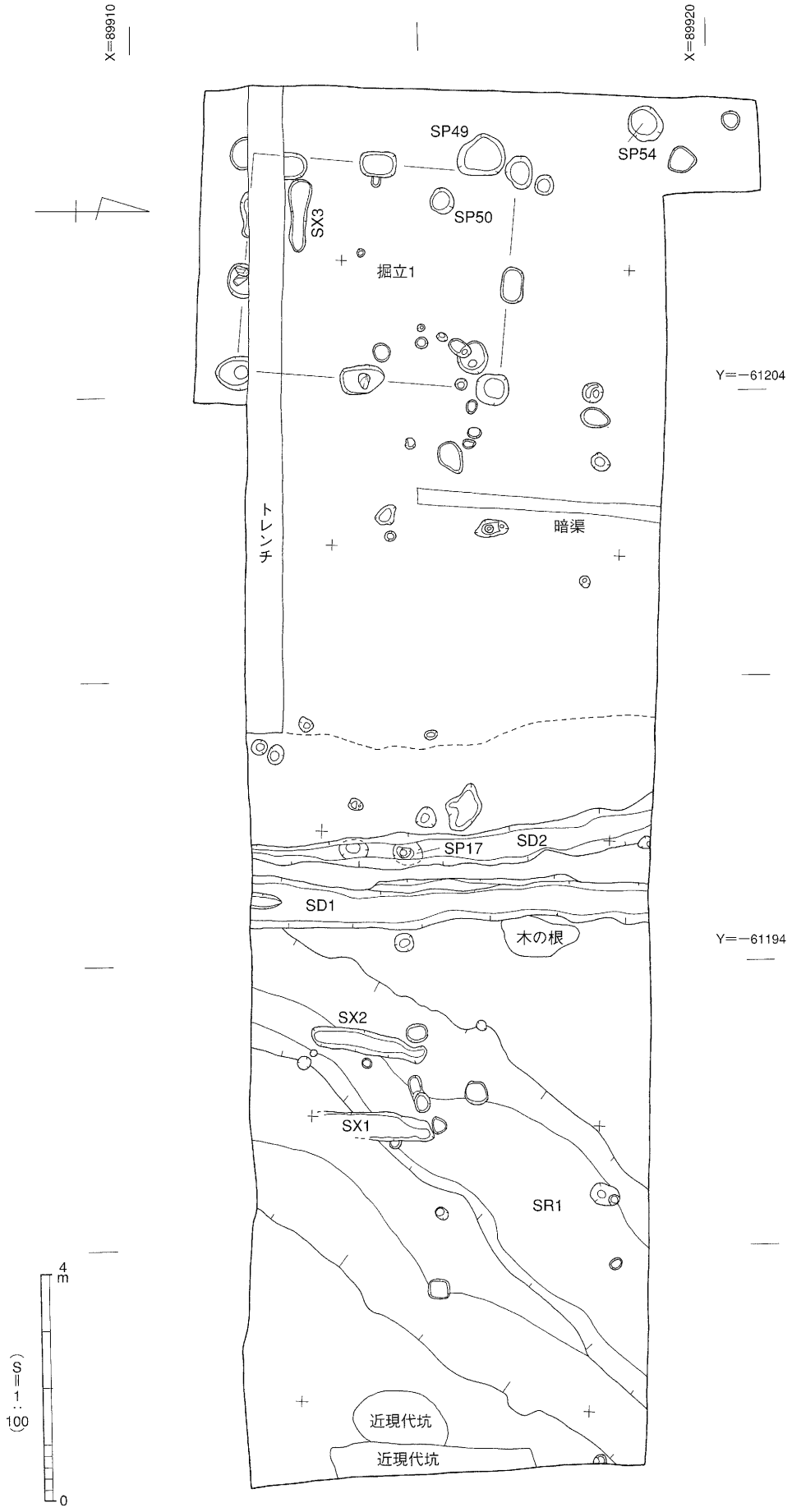


図69 9区遺構配置図

SD1 とほぼ平行して流れる溝で、SD1 の西側にて検出した。SD1 同様、南側から北に向けて流れていたと考えられ、南側に行くにつれて溝底のレベルが高くなり最終的に遺構検出面と重なる。規模は検出長が約6.8m、幅20~75cm、最深部における深さ16cmを測る。埋土は上層；暗灰色硬質土、下層；暗褐色粘質土で、内部より遺物の出土はみられなかった。

時期：埋土の特徴およびその位置関係よりSD1 と関連の深い遺構である可能性が高く、8世紀に機能した遺構であると考えられる。

自然流路1〔SR1〕(図71)

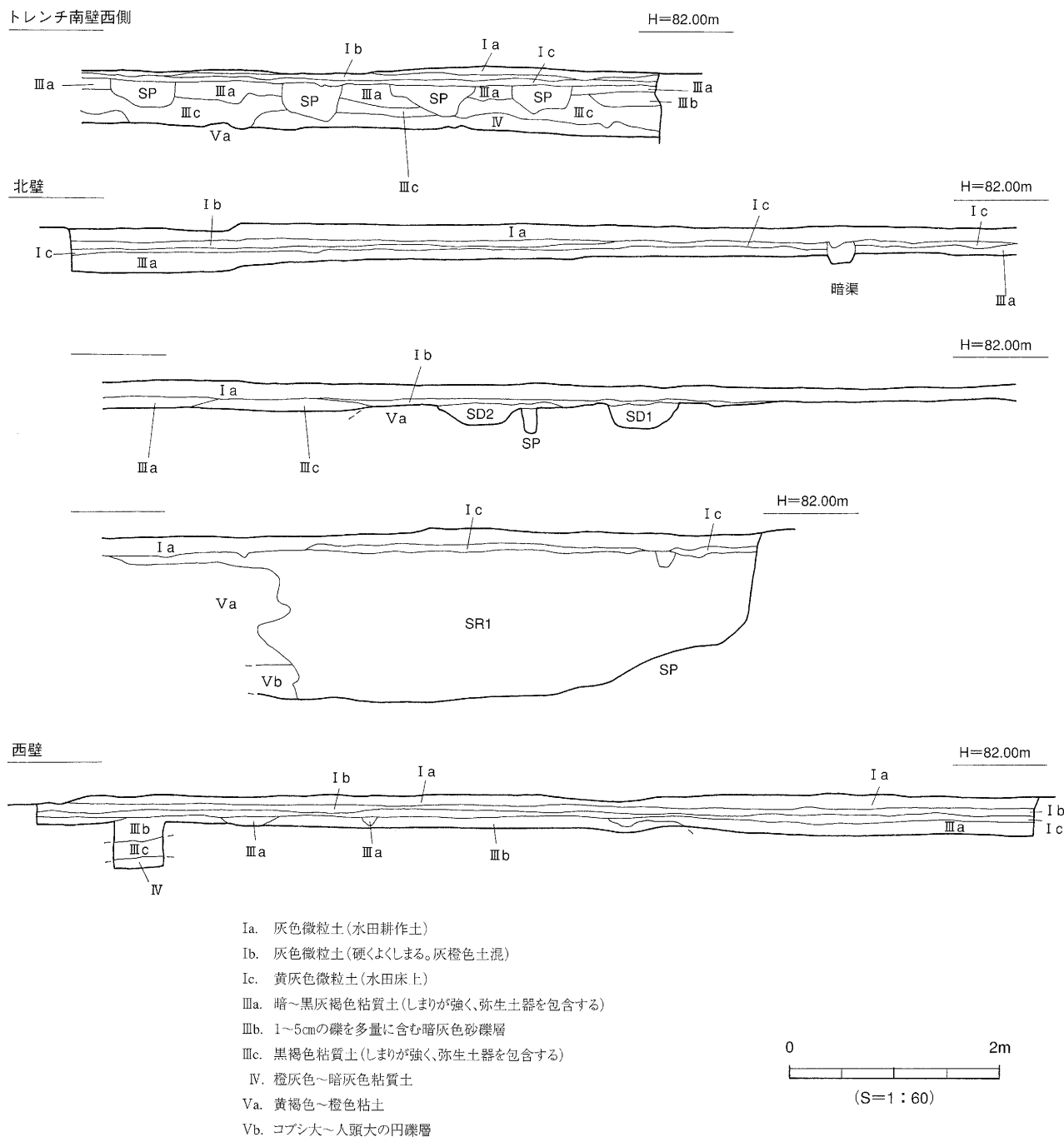


図70 9区壁面土層測量図

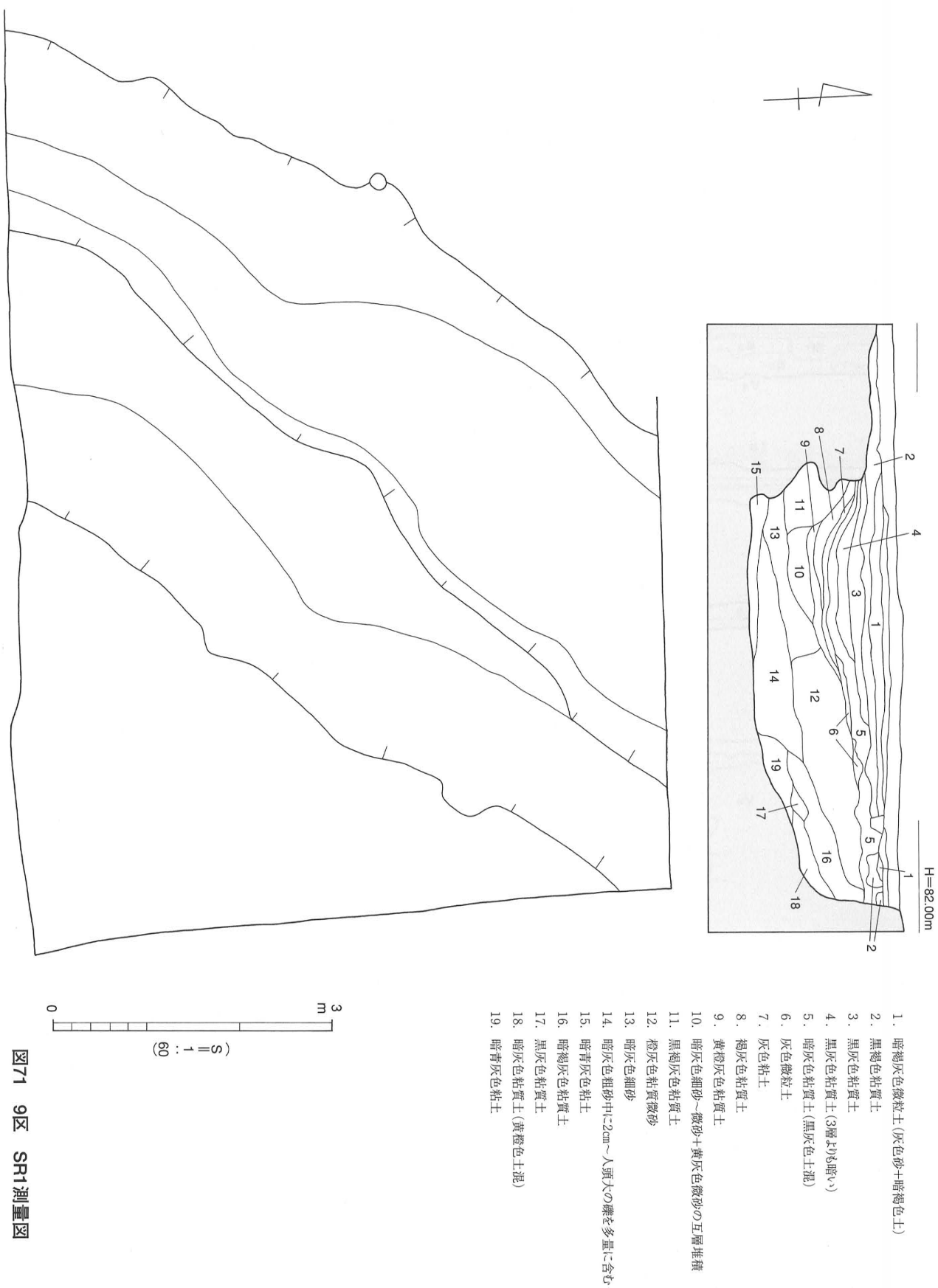


図71 9区 SR1測量図

調査区の東部で検出した自然流路で、北東より南西に向けて流れていたと考えられる。検出長は約10mで、幅約4.5m、深さ1～1.5mほどを測る。流路の埋没後、上面よりSD1、SX1、SX2及び複数のピット等、8世紀以降に属する遺構が掘り込まれる。

出土遺物（図73 276～280、図75 339）

図73 276～279は弥生土器である。276は壺形土器の口縁部、277及び288は甕形土器の口縁部、279は壺形土器の底部である。280は黒釉のかかる陶器で、上面より掘り込む遺構に含まれていた、いわゆる混入品であろう。図75 339は石核で、石材はにぶい青灰色に白色及び暗青灰色のスジが入るチャートである。

時期：弥生時代前期末～中期に属する土器の出土割合が高いことから、本遺構は弥生時代中期以前に流れ、遅くとも8世紀には埋没して安定した状態であったと考えられる。

掘立柱建物跡1〔掘立1〕（図72）

梁間2間（約3.8m）×桁行2間（約4.6m）の側柱建物で、柱穴の中には内部に10～25cm程度の扁平な石材を据えるものが認められる。柱穴は基本的に円形を呈し、特に各辺の中央に位置する柱穴に関しては楕円形を呈する。埋土は灰色微粒土で、まばらに炭化物を混入する。

出土遺物（図73 281～293、図75 340）

図73 281及び282は土師器甕の口縁部、283は土師器壺の口縁部である。284～290は土師器の杯で、284～286及び288は内外面にミガキ調整が施される。291は須恵器の杯蓋、292及び293は須恵器の杯である。図75 340は鉄製の刀子である。

時期：出土遺物より、8世紀前半に属すると考えられる。

性格不明遺構〔SX1・SX2・SX3〕

SR1の上面（SX1・SX2）及び、掘立1の内側に相当する位置（SX3）にて検出した、南北あるいは東西に短くのびる溝状の遺構である。埋土は、いずれも灰（白）色微粒土中に暗褐色土、暗灰色土、黄橙色砂を混入するもので、水田耕作等に伴う耕作痕である可能性が考えられる。切り合い関係よりSR1よりも新しい時期の遺構であることが判明しており、また遺物の出土はみられなかった。

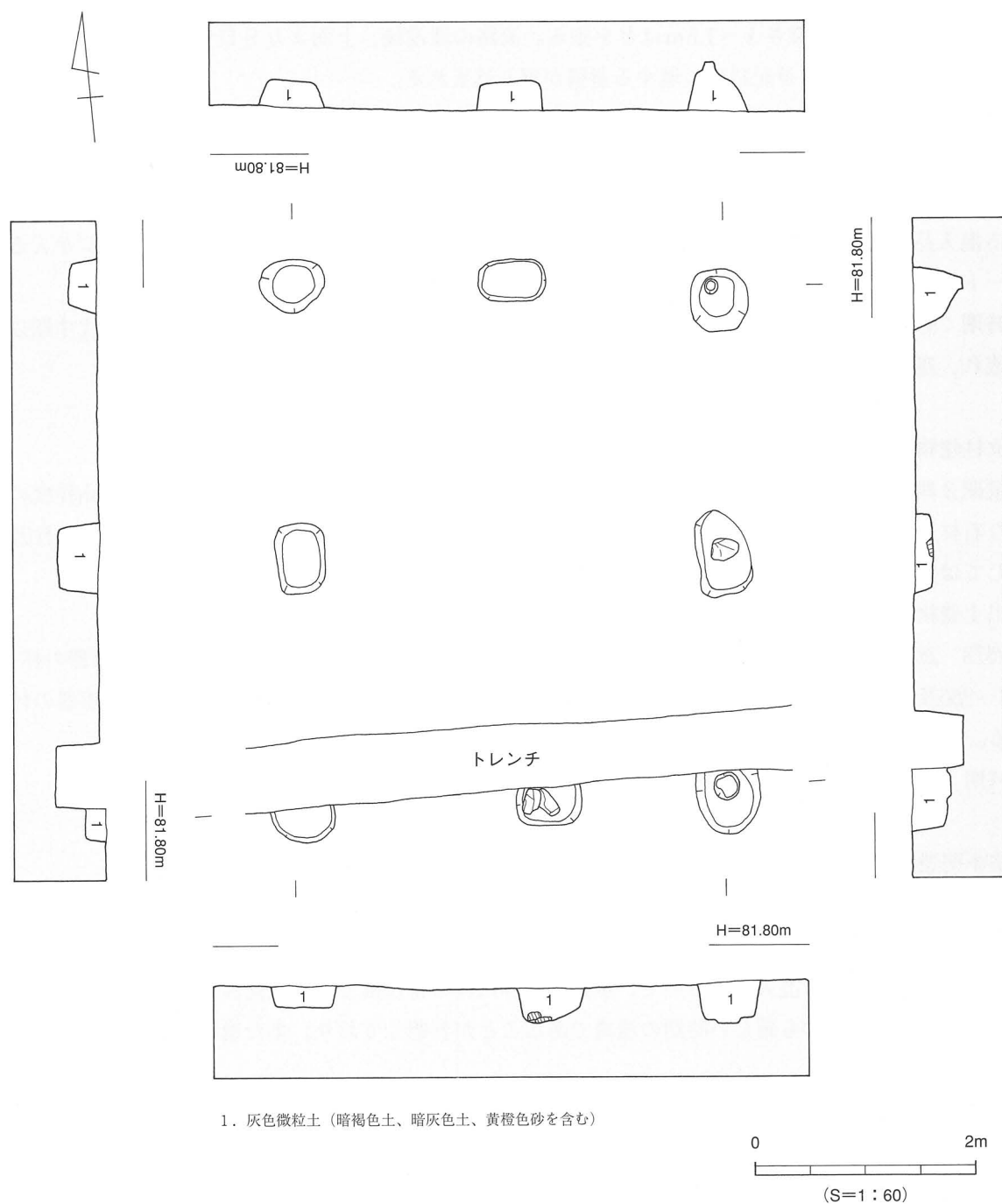
その他の遺構および表土より出土した遺物（図73 294～296、図74、図75 321～338）

図73 294～296、図74 297～301及び図75 338は、掘立柱建物跡1以外のピット内より出土した遺物である。

図73 294は土師器甕の口縁部で、SP17より出土した。295は全体の約2分の1を遺存する須恵器の杯身で、SP50より出土した。296はSP49より出土した土師器の皿で、内外面にミガキ調整を施す。また、内面には「井」と読むことのできる線刻を有する。

図74 297～301及び図75 338は、SP54より出土したものである。297～299は土師器の杯で、298及び299の内外面にはミガキ調整が施される。300及び301は須恵器の杯および壺である。338は管玉で、質の粗悪な暗灰色の石材を用いる。

図74 302～320、図75 321～337は、表土及び包含層より出土した遺物である。



1. 灰色微粒土（暗褐色土、暗灰色土、黄橙色砂を含む）

図72 9区 掘立1測量図

図74 302～307は土師器の杯で、8世紀代に属する。摩滅により不明な個体が含まれるが、内外面にミガキ調整を施す。また特に、303及び306の内面には暗文様のミガキがみられる。308は土師器の皿で、内面にミガキ調整の痕跡が残る。図74 309～320および図75 329～334は須恵器の杯で、8世紀代に属する。図75 321～325は須恵器の皿、326～328は須恵器の杯蓋で8世紀代に属するものである。335は須恵器子壺の底部で底面が回転ヘラ切によって平らに切り離される。336は須恵器平瓶の把手で、手に持つ際に荷重のかかる底面を指の形に合わせてナデており、それ以外の面は刀子によって

9 区 の 調 査

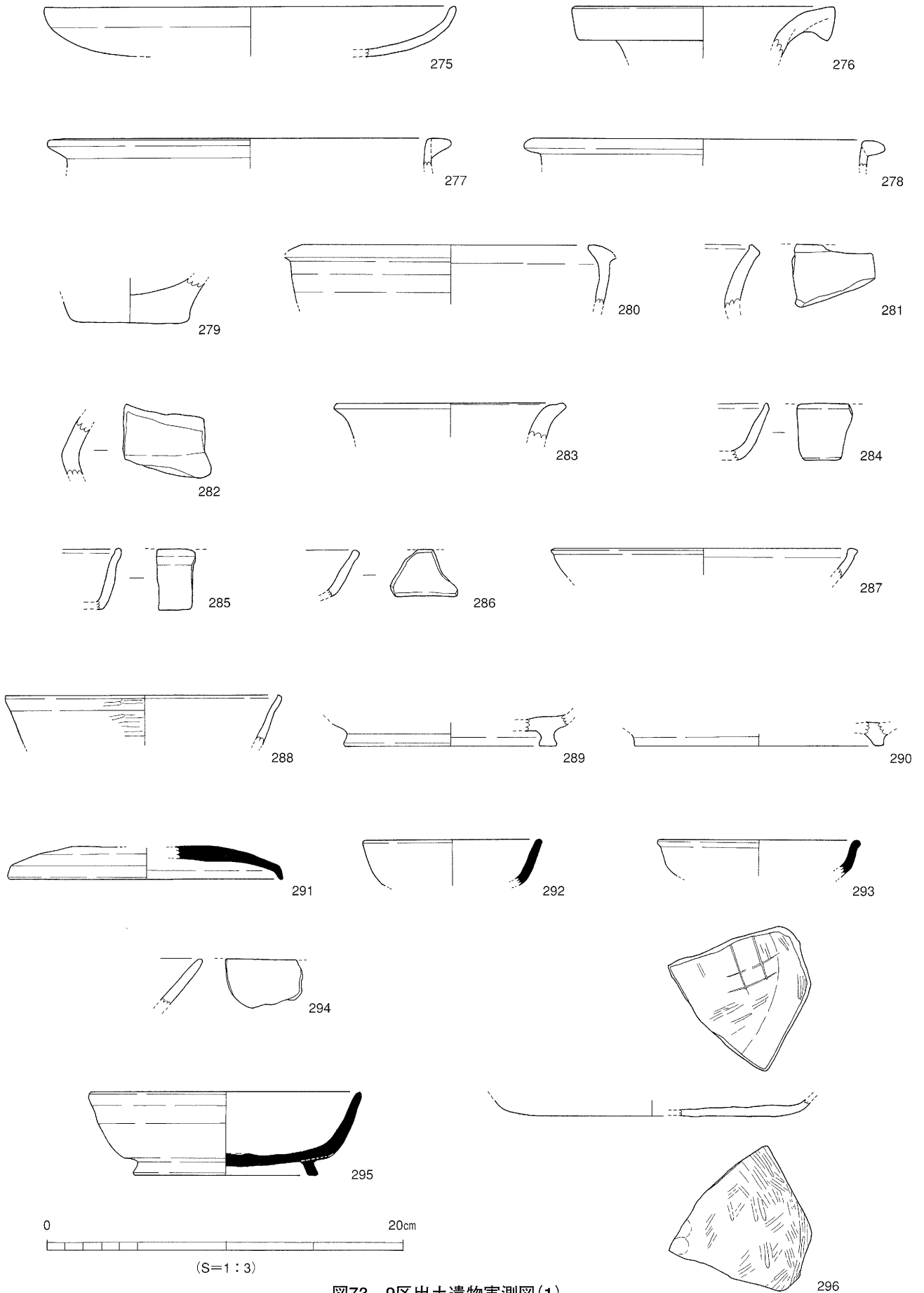


图73 9区出土遺物実測図(1)

第 3 次 調 査

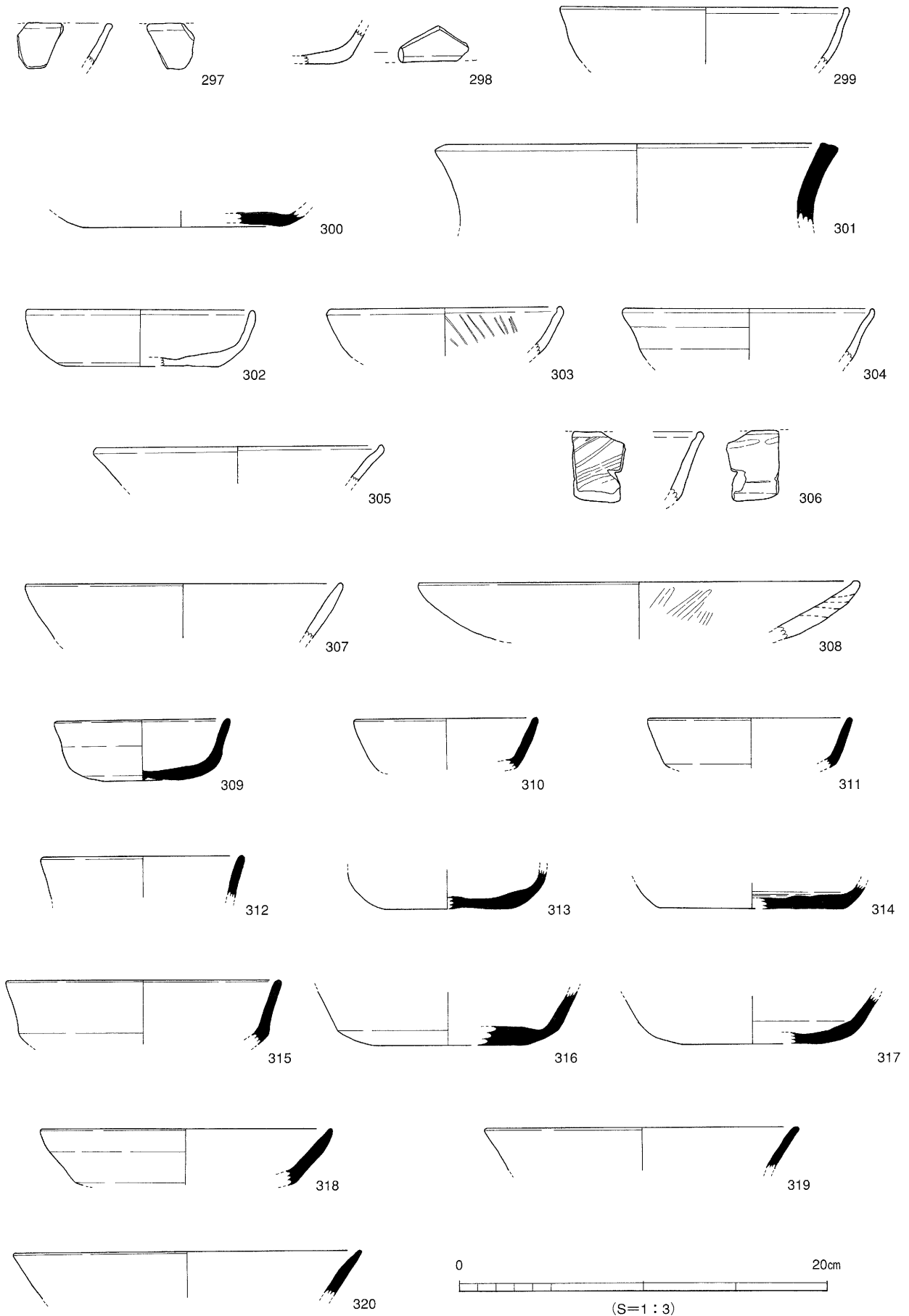


图74 9区出土遺物実測図(2)

9 区 の 調 査

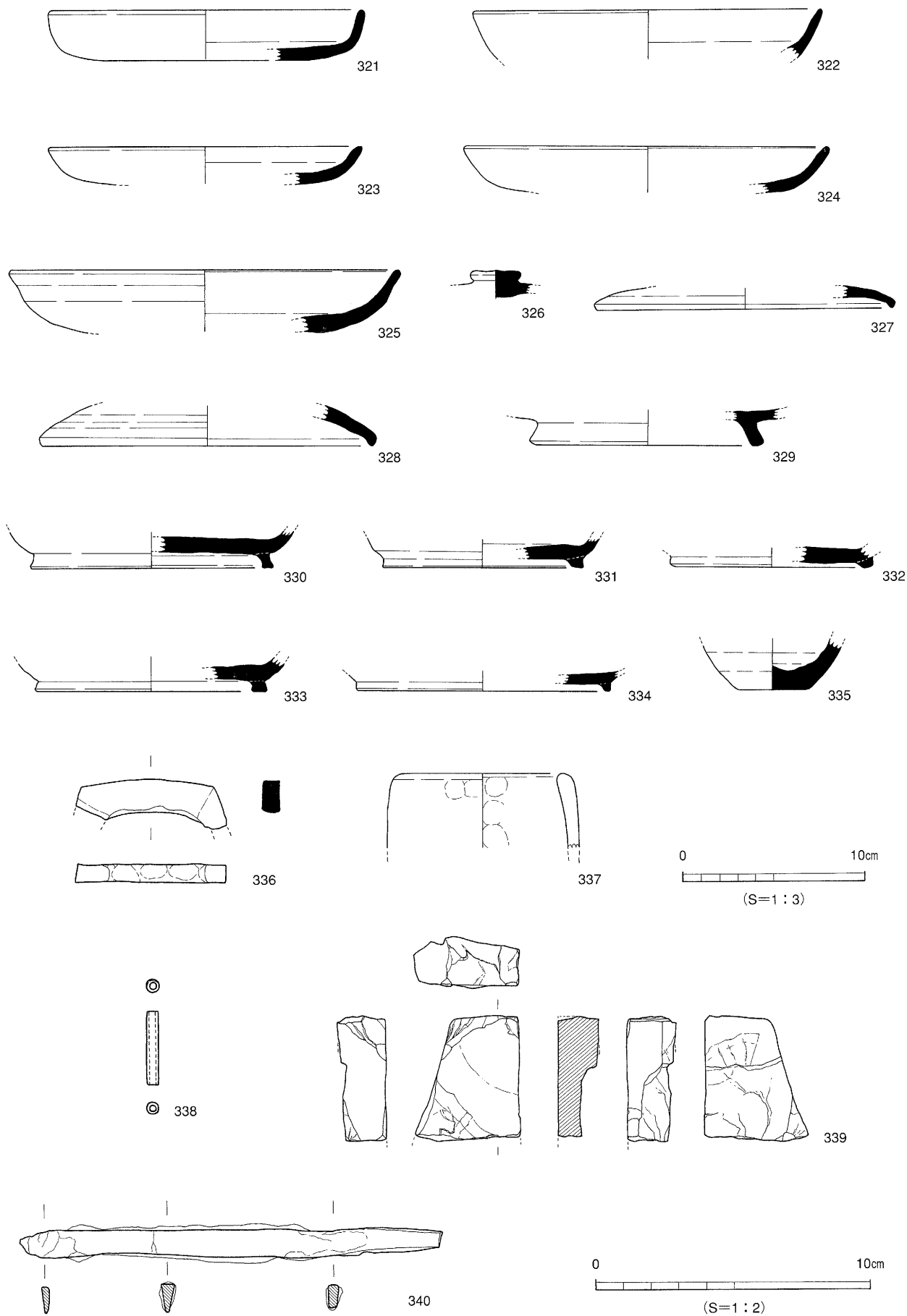


图75 9区出土遺物実測図(3)

平らに削り取る。337は弥生土器の鉢で、内外面にナデ調整が施される。

12. 10区の調査

当調査区では、ピットを3基、自然流路を2条検出した。

(1) 土層

10区の土層は、調査区全体の層位の項で述べたもののうち、第I層、第V層に分けることが可能である。また、第I層は5つ（Ia～Ie）、第V層は3つ（Va～Vc）に細分することができ、遺構は第V層上面より掘り込まれる。

(2) 遺構と遺物

自然流路1〔SR1〕

調査区の南壁沿いに北岸のみ検出した自然流路で、検出長約25m、深さ20～65cm程を測る。東より西側に向かって流れており、東側に隣接する11区で検出した自然流路〔11区SR1〕と一連の流路であると考えられる。また、当調査区内においては、遺物の出土はみられなかった。

時期：11区SR1における調査成果より、弥生時代中期～古墳時代後期に機能していたと考えられる。

自然流路2〔SR2〕

調査区の北壁沿いに検出した流路で、西側でSR1と合流する。東側に向かって次第に高くなる地形を水田耕作の為に削平していることから、流路の東端がやや不規則に断絶する。規模は、断絶する部分を含め検出長が約26m、幅40cm～1m、深さ2～30cm程を測る。

出土遺物（図78）

図78 341及び342は弥生土器の底部である。343は須恵器の杯身、344は安山岩製の凹基打製石鏃である。

時期：SR1同様、弥生時代中期～古墳時代後期に機能していたと考えられる。

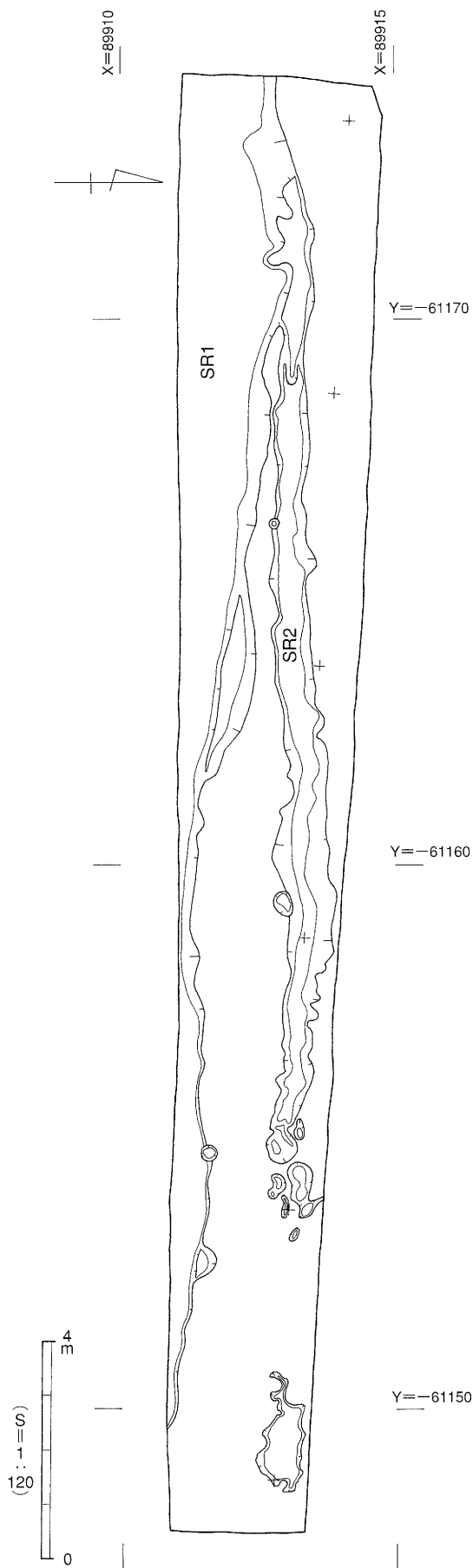
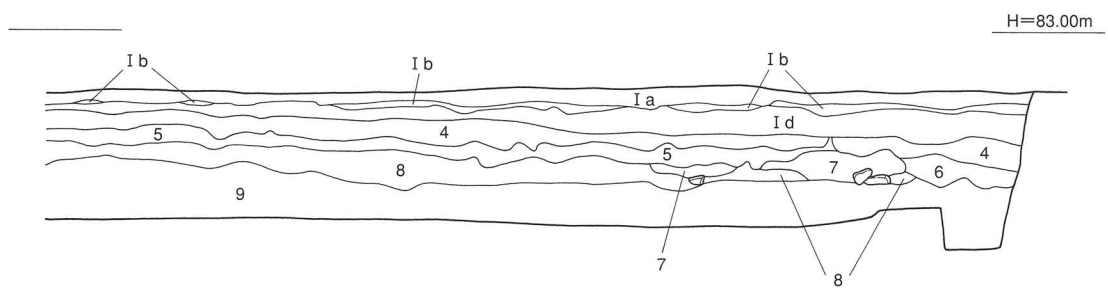
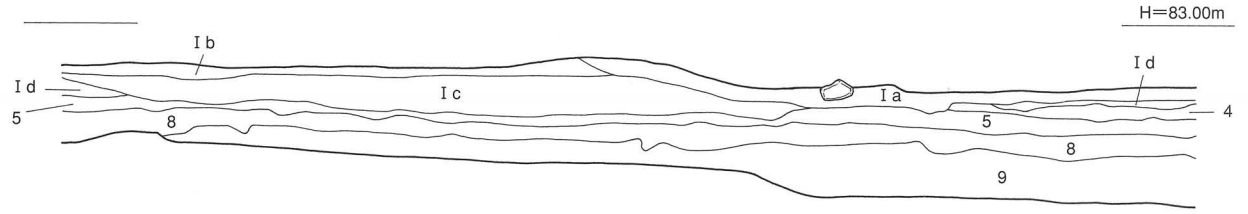
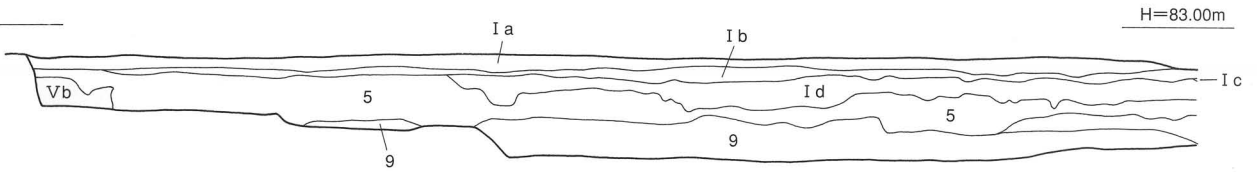


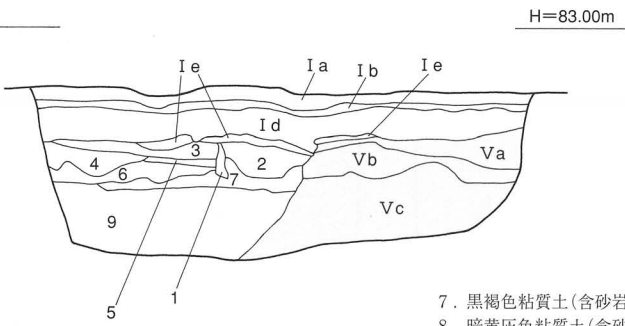
図76 10区遺構配置図

10区の調査

南壁



西壁



- Ia. 灰色微粒土(耕作土)
- Ib. 黄灰色微粒土(床土)
- Ic. 砂礫(客土)
- Id. 暗緑褐色粘質土(含砂岩小塊)
- Ie. 暗緑褐色粘質土(含砂岩小塊)。4層よりも砂岩の混入が多い
- 1. 黄灰色粘質土(砂粒を多く含む)
- 2. 黒褐色粘質土(SR2埋土)
- 3. 暗緑褐色粘質土(4層よりも砂岩の混入が少ない)
- 4. 暗緑黄褐色粘質土
- 5. 暗緑黄褐色~暗黄褐色粘質土
- 6. 暗黄褐色粘質土
- 7. 黒褐色粘質土(含砂岩小塊)
- 8. 暗黄灰色粘質土(含砂岩小塊)
- 9. 暗灰色砂礫層

- 地山
- Va. 暗褐~橙色粘土(砂礫小塊を含む)
 - Vb. 黄褐色粘土(砂礫小塊を含む)
 - Vc. 黄褐色粘土(砂礫小塊を含む)+砂

※1及び3~9はSR1埋土

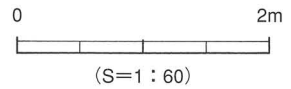


図77 10区壁面土層測量図

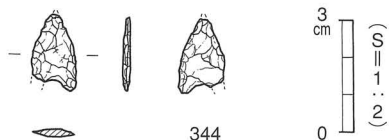
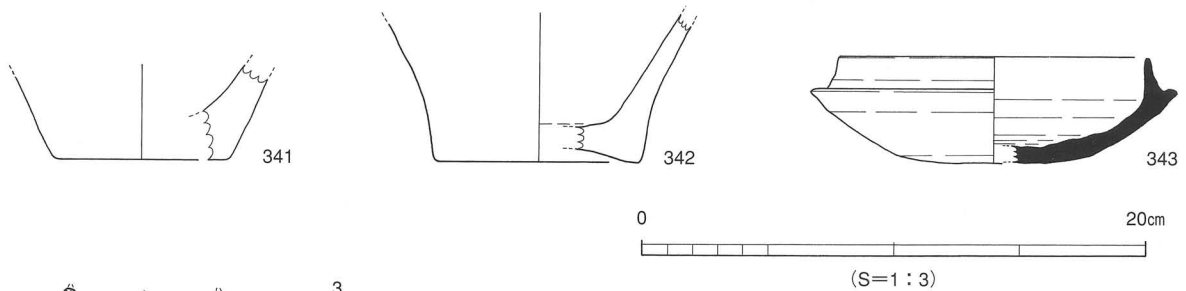


図78 10区出土遺物実測図

13. 11区の調査

当調査区では、10区のSR1に繋がる自然流路を1条検出した。

(1) 土層

11区の土層は11に細分することが可能で、それらは調査地全体の層位の項で述べたもののうち、第I層（Ia～Id）、第V層、および遺構〔SR1〕内部に堆積した土層（1～6）に相当する。遺構は第V層を切り込み、またその一部が第V層の上面に堆積することが判明している。

(2) 遺構と遺物

自然流路〔SR1〕

調査区のほぼ前面にわたって検出した流路で、調査区の西端において北岸の一部を確認した。周辺の地形より判断するに、東より西側に向かって流れていたと考えられ、西側で10区SR1に繋がると考えられる。

出土遺物

(図81 345～355、図82)

図81 345～352は弥生土器で、弥生時代前期末～中期に属する。345は、端部が水平気味に外方に広がる壺形土器の口縁部である。346は、ほぼ水平に折れ曲がる口縁部を有する甕形土器で、口縁直下の胴部外面にハケ目工具を使用した弱い凹線を横方向に施すものである。

347～352は底部で、薄く平らな347を除き、中央がやや上げ底状を呈する。

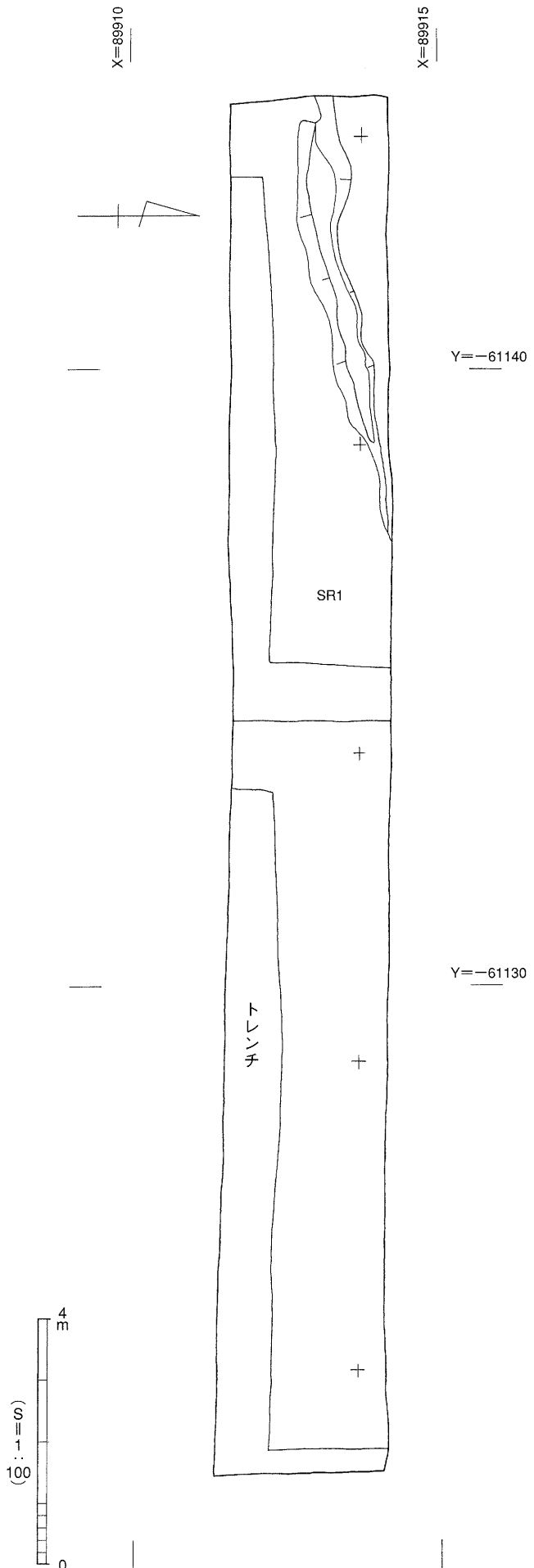
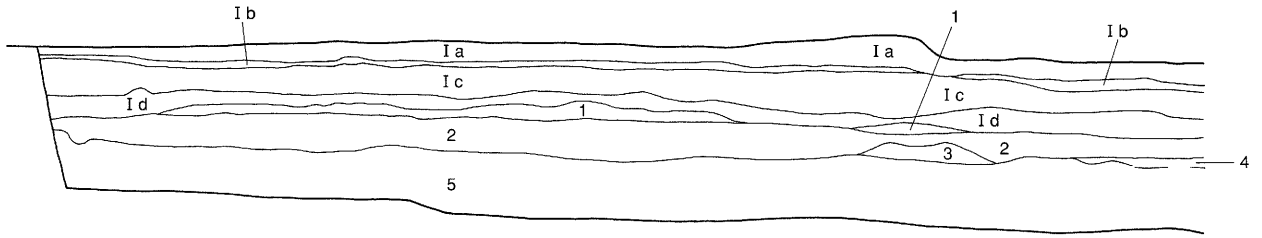


図79 11区遺構配置図

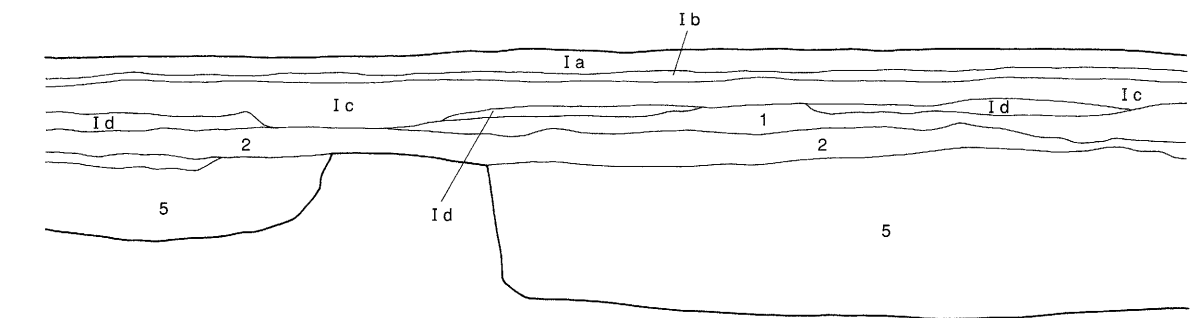
11区の調査

南壁

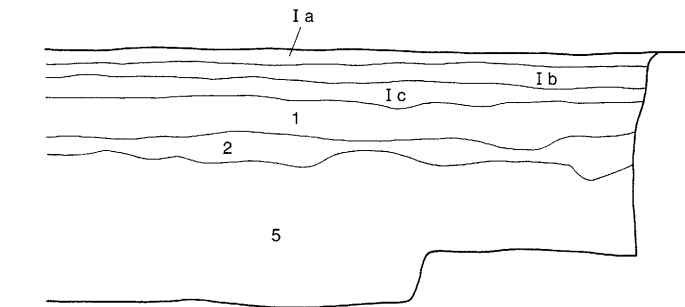
H=84.00m



H=84.00m

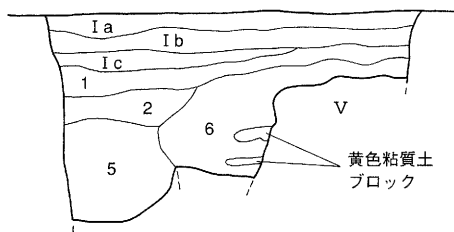


H=84.00m



西壁

H=84.00m



- I a. 灰色微粒土(耕作土)
- I b. 黄灰色微粒土(床土)
- I c. 暗緑褐色粘質土(含砂岩小塊)
- I d. 含礫黄灰色粘質土

- SR1 {
 - 1. 暗緑黄褐色~暗黄褐色粘質土
 - 2. 暗黄褐色粘質土
 - 3. 黄灰色粘質土
 - 4. 黒褐色粘質土(含砂岩小塊)
 - 5. 暗灰色砂礫層
 - 6. 黒褐色粘質土(黄色シルトをブロック状に含む)
- V. 黄橙~黄褐色粘土(地山)

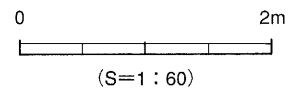


図80 11区壁面土層測量図

第 3 次 調 査

353は、古墳時代中期に属する土師器高杯の杯部上半部で、胎土は緻密、色調は赤橙色を呈する。

354及び355は須恵器の杯蓋および杯身で、古墳時代後期後半に属する。

図82 361～364は安山岩製のスクレイパーである。365及び366は剥片で、石材に安山岩を用いる。

図82 367は鉄器で、先端が鑿頭状を呈する方頭鎌である。

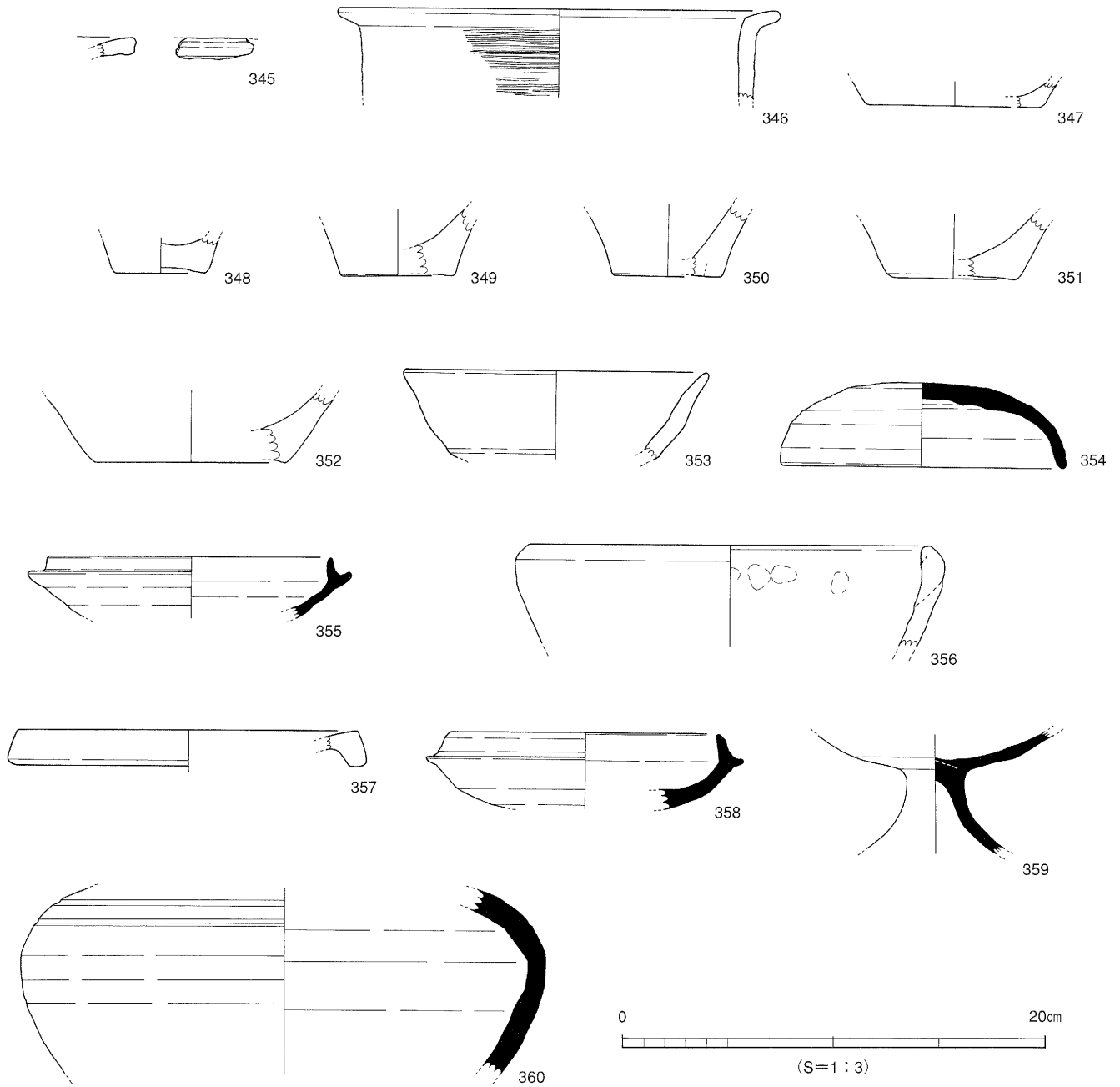


図81 11区出土遺物実測図(1)

表土より出土した遺物 (図81 356~360)

図81 356は口縁部が袋状にやや膨らみながら立ち上がる縄文時代後期~晩期に属する深鉢で、外面に巻貝条痕の後にナデ調整を、内面にナデ調整を施す。357は弥生時代に属する壺形土器で、外方に大きく広がる口縁部の先端が下方に拡張される。

358~360は須恵器で、358は杯身、359は高杯で焼成がやや甘い。360は壺の胴部で、肩部に二本の凹線がめぐる。

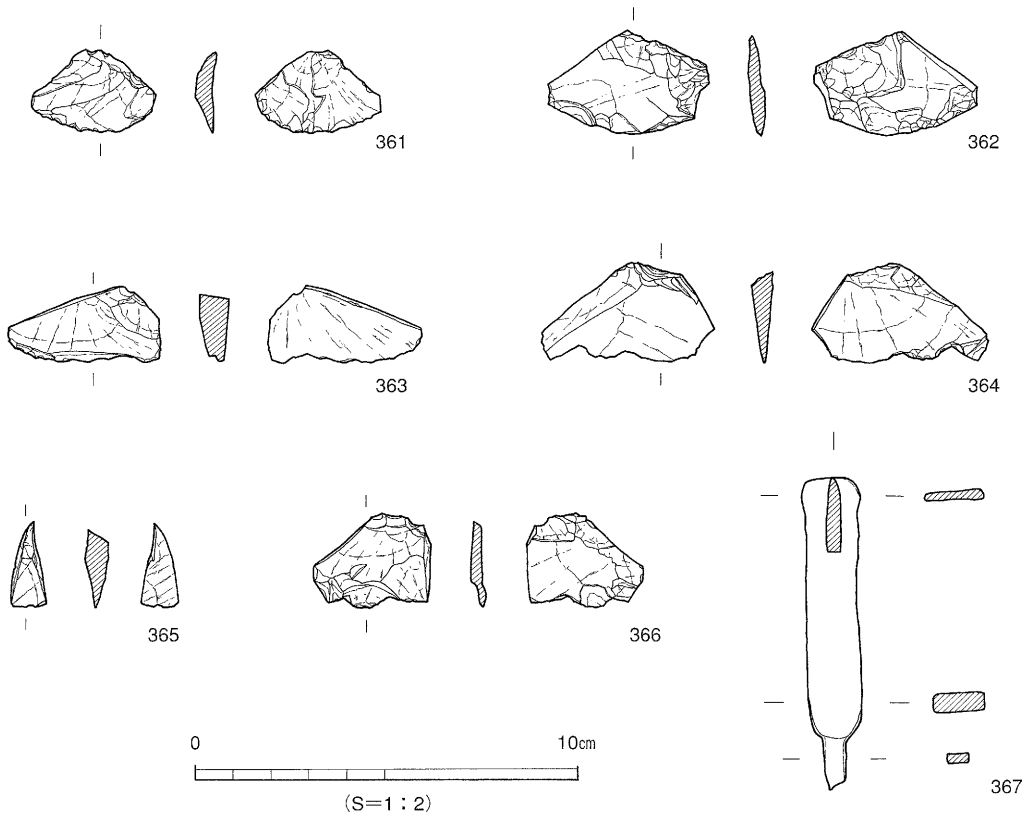


図82 11区出土遺物実測図(2)

14. 小 結

今回の調査では、縄文時代から近世の遺構や遺物を確認することができ、当地域が縄文時代から現代に至るまで脈々と人々の生活と深いつながりを持った地域であることが判明した。以下、時代ごとに調査で得られた成果および課題について述べる。

〔縄文時代〕

縄文時代に属すると断言できる遺構の検出には至らなかったが、6区の包含層中出土資料として早期中葉頃の押型文土器および無文土器を得ることができた。松山市周辺において当期の資料は類例に乏しく、今回新たな資料を追加できたことは大きな成果であった。今回掲載できたのは2点のみで、多く見ても数個体分の破片しか得られていないことから散布地と言うべきであるが、今後調査地の近隣で何らかの生活痕跡が見つかる可能性がある。また、6区SP41の壁面（黄橙色粘質土）に突き刺さった状態で出土したスクレイパーは、縄文時代早期以前に属する可能性が高く、今後の調査によって正確な所属時期を解明しなければならない。

〔弥生時代〕

調査地の東部に位置する9区～11区において、自然流路（9区SR1、10区SR1、11区SR1）を確認した。各流路の内部からは、弥生時代前期～中期、古墳時代後期に属する遺物が出土しており、また特に9区SR1に関しては8世紀には埋没して、安定した状態であったことが判明している。これらの特徴は、過去に松山市道「平井・水泥線」の建設に伴い調査した「古市遺跡」、「下苺屋遺跡2次調査地」、「下苺屋遺跡3次調査地」で確認されている自然流路、あるいは自然流路に注ぐ小流路の様相と共通することから、互いにつながる可能性が高い。

〔古墳時代〕

4区において、古墳時代中期頃に属する竪穴式住居址および、土坑を確認した。調査地の周辺ではこの時期に属する遺構の検出例が少なく、断片的ではあるが今回確認できたことは大きな成果であった。また、調査区の北側に同一時期の集落が展開する可能性が高く、今後の調査に期待するところが大きい。

3区において検出したSD1に関しても、古墳時代に属する可能性が高いが、資料が限られており残念ながら詳細は分からない。

〔古代〕

ほぼ確実に古代に属することが判明している遺構には、7区SD1・SD2及び9区SD1・SD2・掘立1がある。8区で検出した掘立1および掘立2に関しては、出土遺物が少ない為に明確な根拠を示すことができないが、位置関係等から7世紀～8世紀頃に属する可能性がある。

9区では、8世紀前半頃に属する掘立柱建物跡と、それとほぼ平行した方向に走る二条の溝を確認した。調査区の南側は、弥生時代前期以降、自然流路が存在し、地盤がやや脆弱であったことを考えると、集落は調査区の北側に広がる可能性が高い。

〔中世〕

中世では13世紀後半～14世紀前半に属する掘立柱建物跡および溝〔2区 SA1・SA2、3区 掘立1・掘立2、4区 SA1、5区 掘立1（6区 掘立3）・掘立2・SD1、6区 掘立1・掘立2・掘立4〕、14世紀前半から14世紀中頃の掘立柱建物跡および溝〔2区 掘立1、3区 掘立3・SD2、6区 掘立5・掘立6・掘立7〕、16世紀代の土坑、土坑墓〔5区 SK1・SK2、6区 SK1・SK3〕を確認した。

13世紀後半～14世紀前半に属する遺構は、切り合い関係等より新旧二つの時期に細分することが可能で、5区 掘立1（6区 掘立3）、5区 掘立2、および6区 掘立4の三棟はやや古い時期に属すると考えられる。

〔近世〕

6区において、17世紀初頭～前半頃まで機能していたと考えられる井戸（SE1）および、17世紀後半頃に属する溝（SD1～4）を確認した。井戸の存在より17世紀前半までは居住域として利用され、溝の存在より17世紀後半頃には現在と同様に田畑（耕作地）として利用されるようになったことが分かる。

第3章 上苧屋遺跡第4次調査

1. 試掘調査

(1) 概要

第1章でも述べたように、平成14年8月1日付で確認申請をうけた文化財課は同年10月15日から10月31日にかけての間、図84に示されたように申請地内に23本のトレンチを設定することによって試掘調査を実施した。既往の調査と同様、水田畦畔や水路の保全が前提となっているため、対象地の水田一枚一枚にトレンチを設定することとなった。その結果、図示された申請地の西寄りに近い部分、T5～T9の区間、総長約70mの部分において、主に弥生時代の遺物を包含する土層や、各期の柱穴等の遺構が検出されたため、この部分については本格調査が必要と判断された。

(2) 試掘調査出土遺物 (図83)

弥生土器

甕 (368) T6出土の甕底部で、直径6.3cmの安定した平底を呈する。

須恵器

杯 (369) T8で採集された小片、復元口径11.8cmを測る。

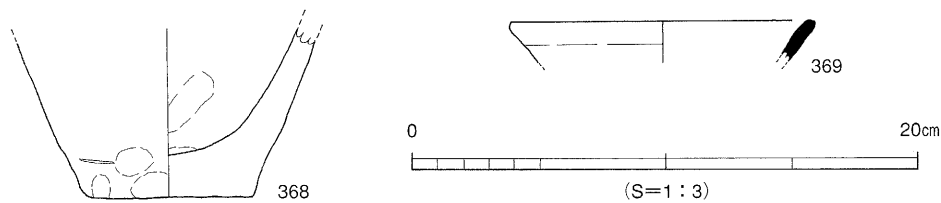


図83 試掘調査出土遺物実測図

2. 遺構と遺物

(1) 層序 (図85・86)

調査地は、東から西への傾斜をなしており、遺構面である地山面のレベルには、調査区東端と西端の間、おおよそ70mの間で1.2mの比高差がある。後述するように、調査地東寄りの部分は削平されているようであるので、本来はもっとレベル差があったものと思われる。層位は、基本的には4層に分けることができる。上層から追っていくと、第1層が現在の水田耕作土、第2層がこの水田の床土、第3層に無遺物の淡褐色シルトがあり、その下位の第4層、暗褐色～黒色シルトが若干の須恵器・土師器の混入はあるものの、主に弥生時代の遺物を包含する包含層となる。地山は、その上位が黄色シルト、下層に礫層が堆積するところまでは確認されている。調査区も東寄りになると、削平が著しく、第1・2層の現在の水田は地山直上に営まれ、第3層以下は存在しない。遺構は、地山面を切りこんで存在しているというのが基本である。

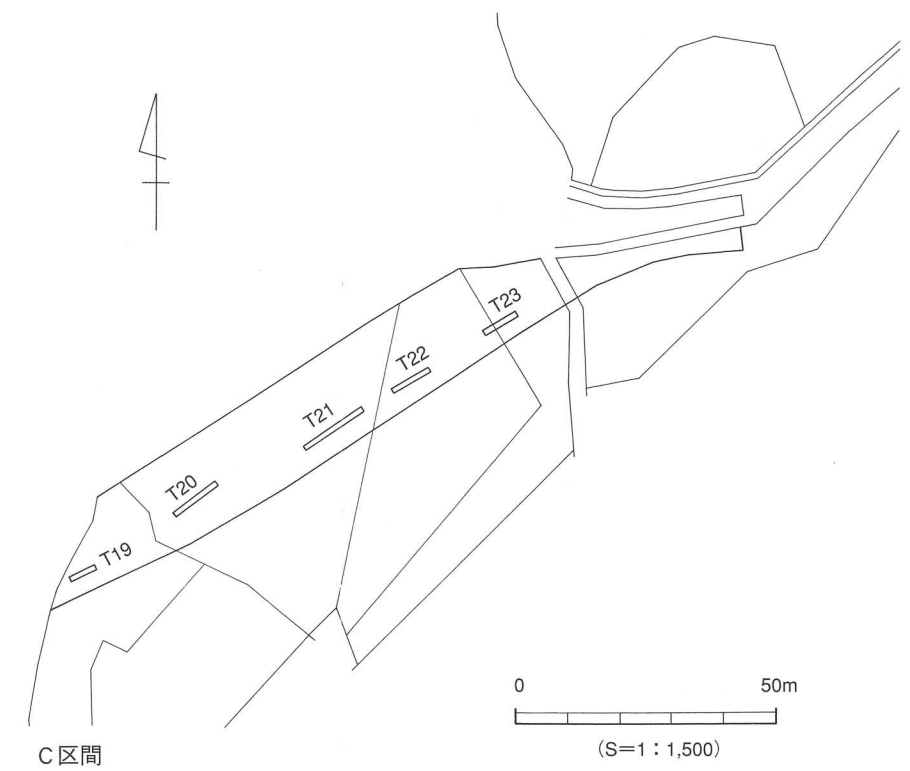
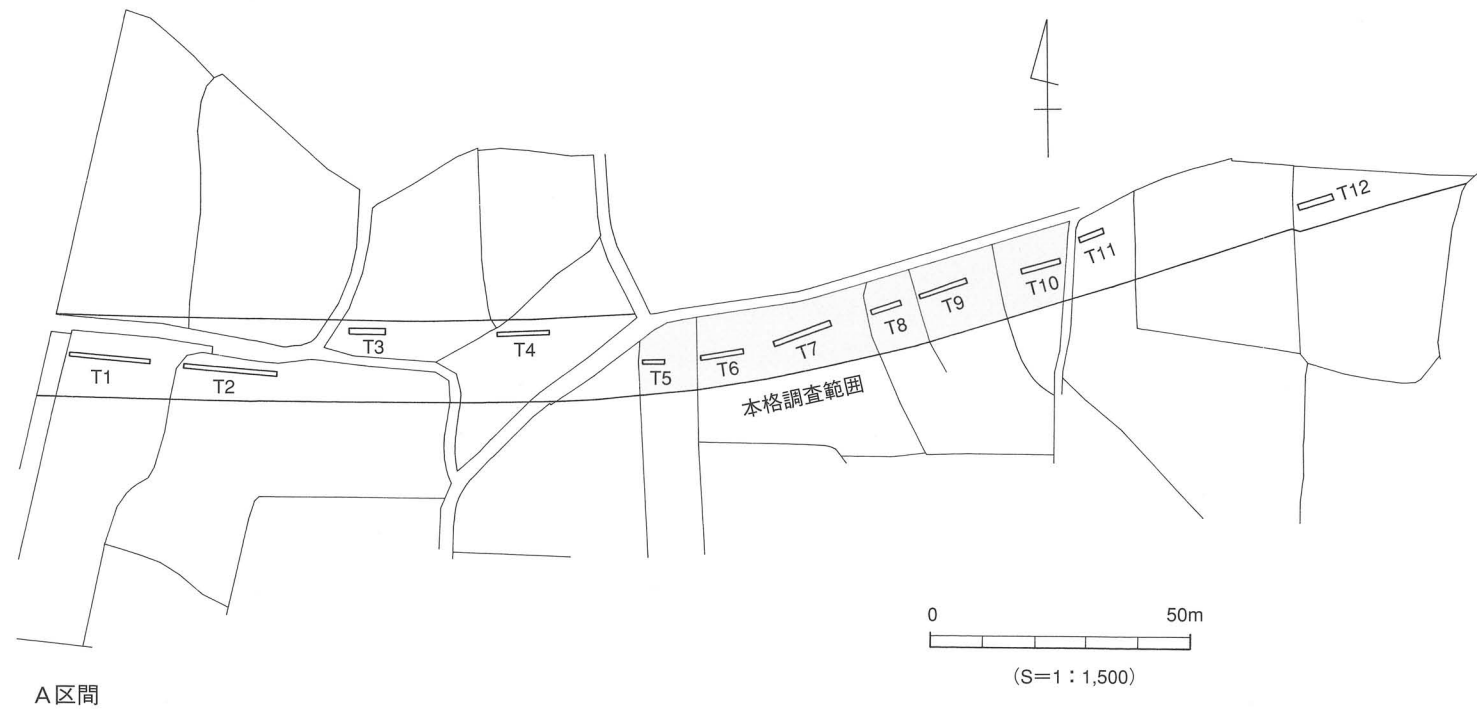
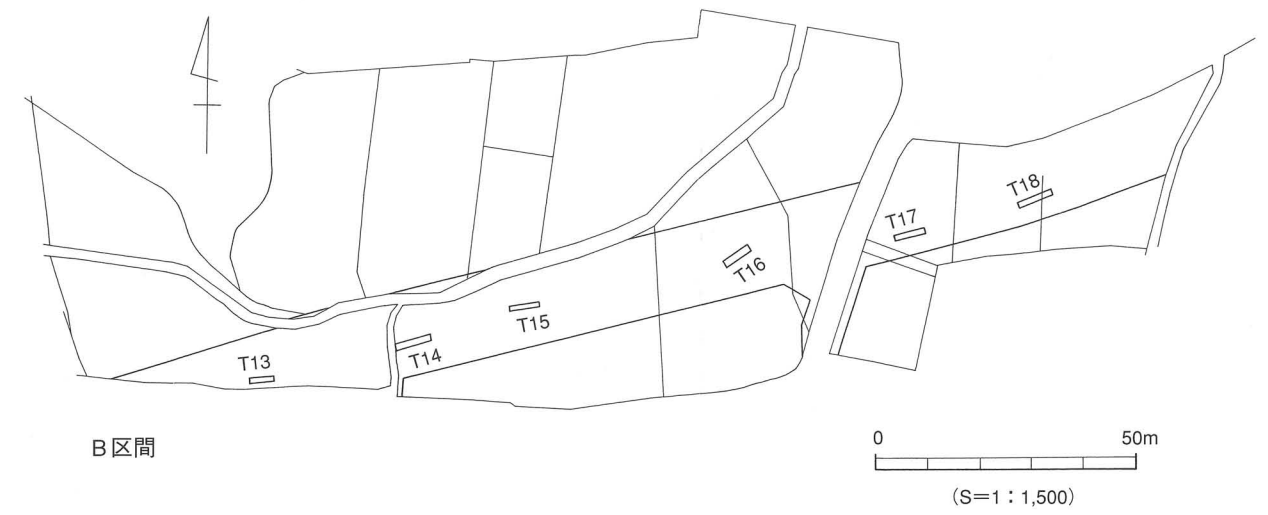
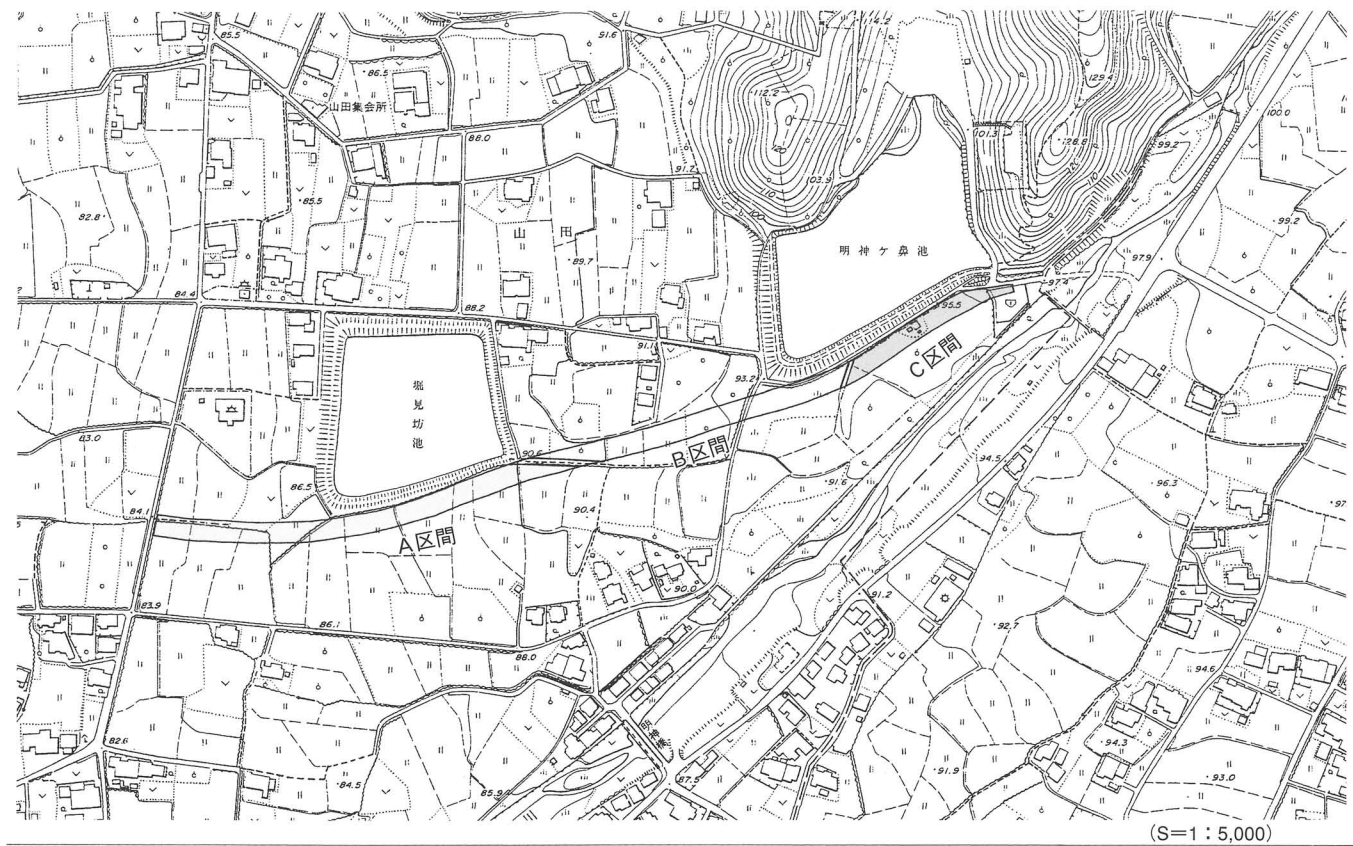
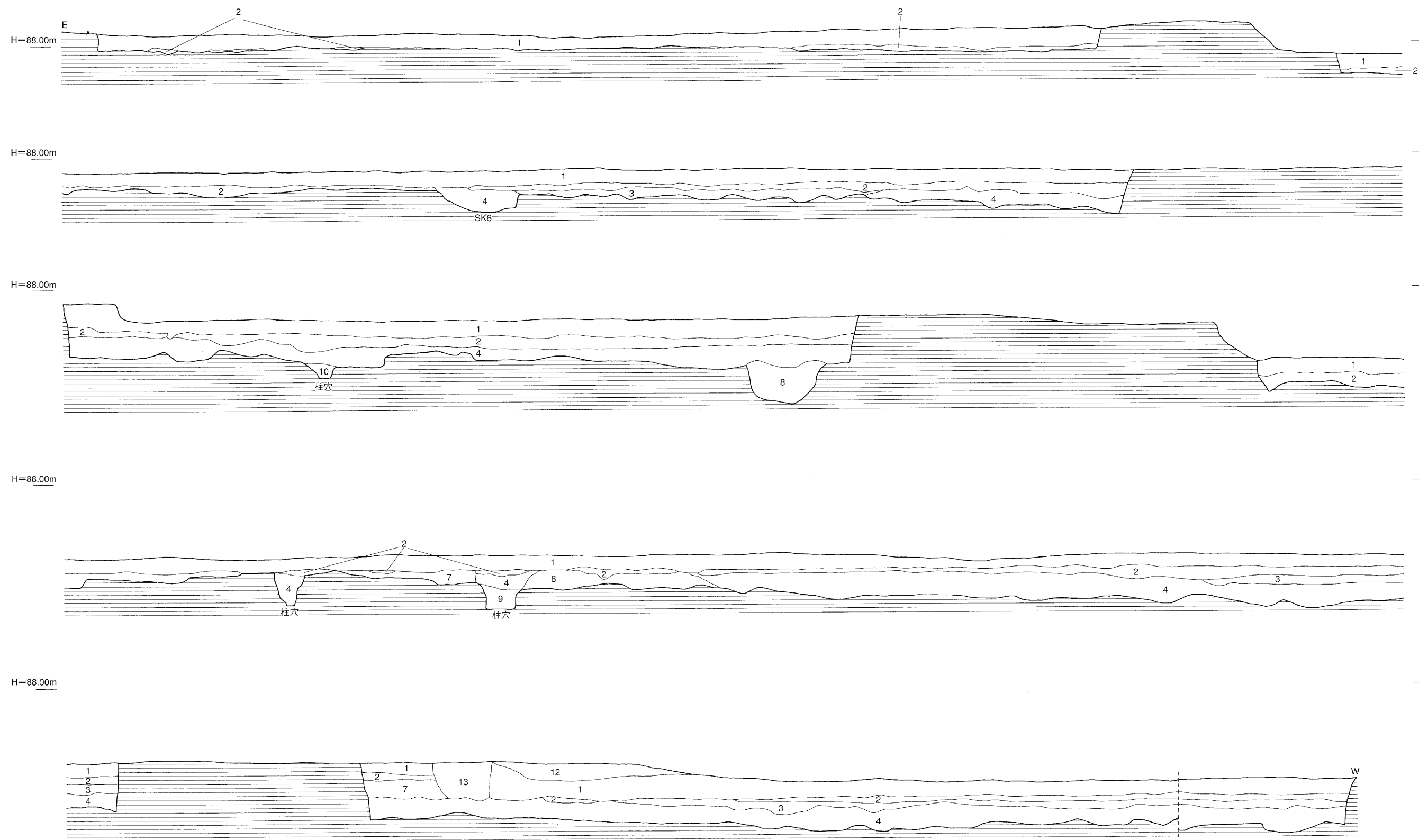


図84 試掘調査トレンチ配置図



1. 耕作土 2. 床土 3. 淡褐色シルト 4. 暗~黒褐色シルト 5. 4+黄色粘質土ブロック
 6. 砂礫 7. 3+礫 8. 暗茶褐色シルト 9. 4+礫 10. 4よりもやや明るい
 11. 5+礫 12. 客土 13. 水田境石積み

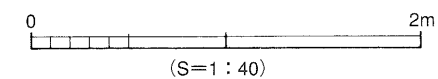
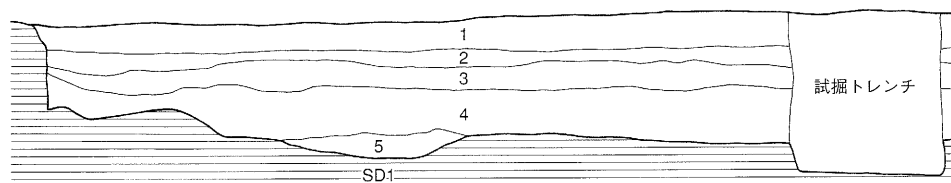


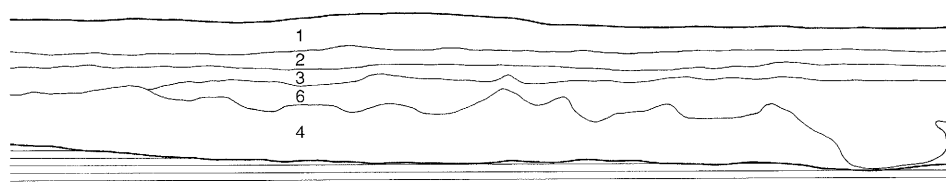
図85 調査区南壁土層断面図

遺構と遺物

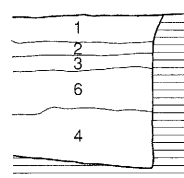
H=88.00m



H=88.00m



H=88.00m



- 1. 耕作土
- 2. 床土
- 3. 淡褐色シルト
- 4. 暗～黒褐色シルト
- 5. 4+黄色粘質土ブロック
- 6. 砂 礫

0 2m

(S=1:40)

図86 調査区東壁土層断面図

(2) 遺 構

検出された遺構は、土坑8基、溝1条、柱穴約170基、性格不明遺構2基で、遺物の出土により所属年代が判定できる遺構には弥生時代のものが多い。遺物を伴わなくとも、第4層とした暗褐色～黒色シルトは僅かに縄文晩期土器片や須恵器片などの混入はあるものの、基本的には弥生時代の遺物を包含する層であるから、この土の埋積した遺構やこの層に覆われた遺構は弥生時代もしくは、それ以前のものと考えてよい。その他、降ると考えられる遺構は、この第4層上面から切りこまれているか、もしくは第4層が存在しない調査地東部のエリアで検出され、黒色シルトではなく灰色系の埋土を持つ遺構群である。以下、時代ごとに概説してゆく。

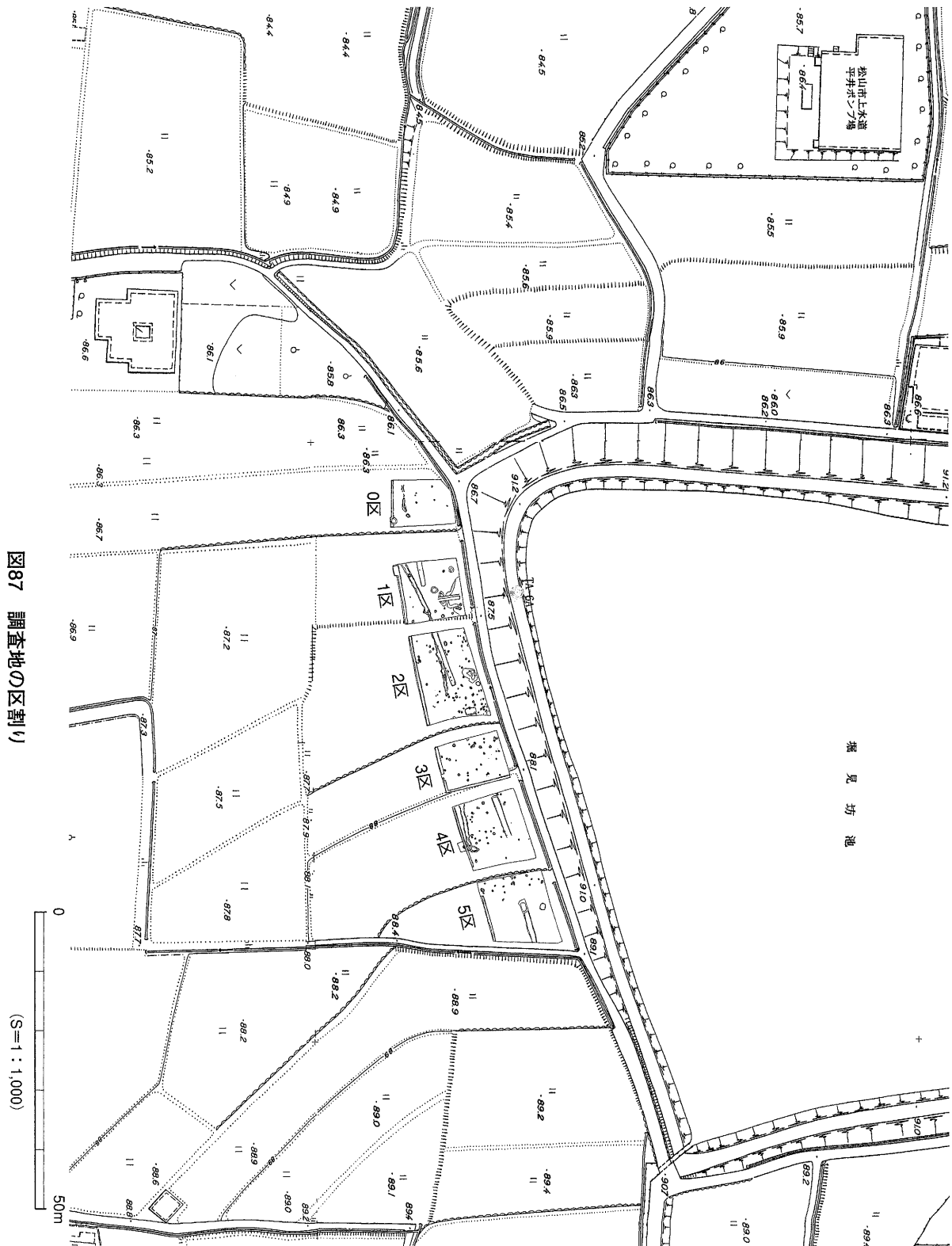


図87 調査地の区割り



图88 遺構全測図

a. 弥生時代の遺構と遺物

土 坑

S K 3 (図89) 径0.7m程度の不整円形プランで、深さは0.1mの遺存である。蓋、甕等の弥生土器を出土している。

S K 3 出土遺物 (図90)

壺 (370~372) 370は広口の短頸壺で、復元口径13.4cmを測る。頸部に2条の沈線を持つ。外面および口縁部の内面は入念に磨かれている。胴部内面も、指頭痕の上の磨きが看取できる。371は口縁部小片、丸くおさめられた端面に断面U字状の細かい刻みを施されている。372は、平底の底部小片である。

甕 (373・374) 373は、僅かな窪み底を呈する底部。374は折り曲げ口縁の甕の口縁から胴部上位の片。頸部に4条の沈線と、口端面に刻み目を施され、頸部以下の内外面を磨かれている。

蓋 (375) 口端面を僅かに欠くが、ほぼ完形

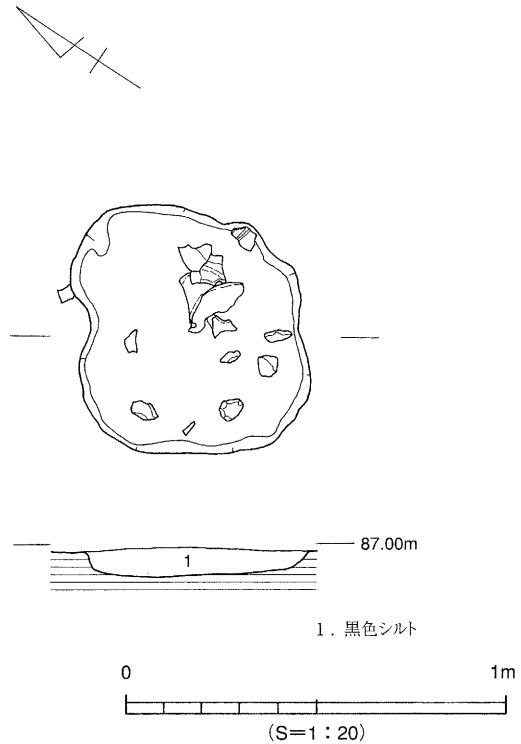


図89 SK3遺物出土状況

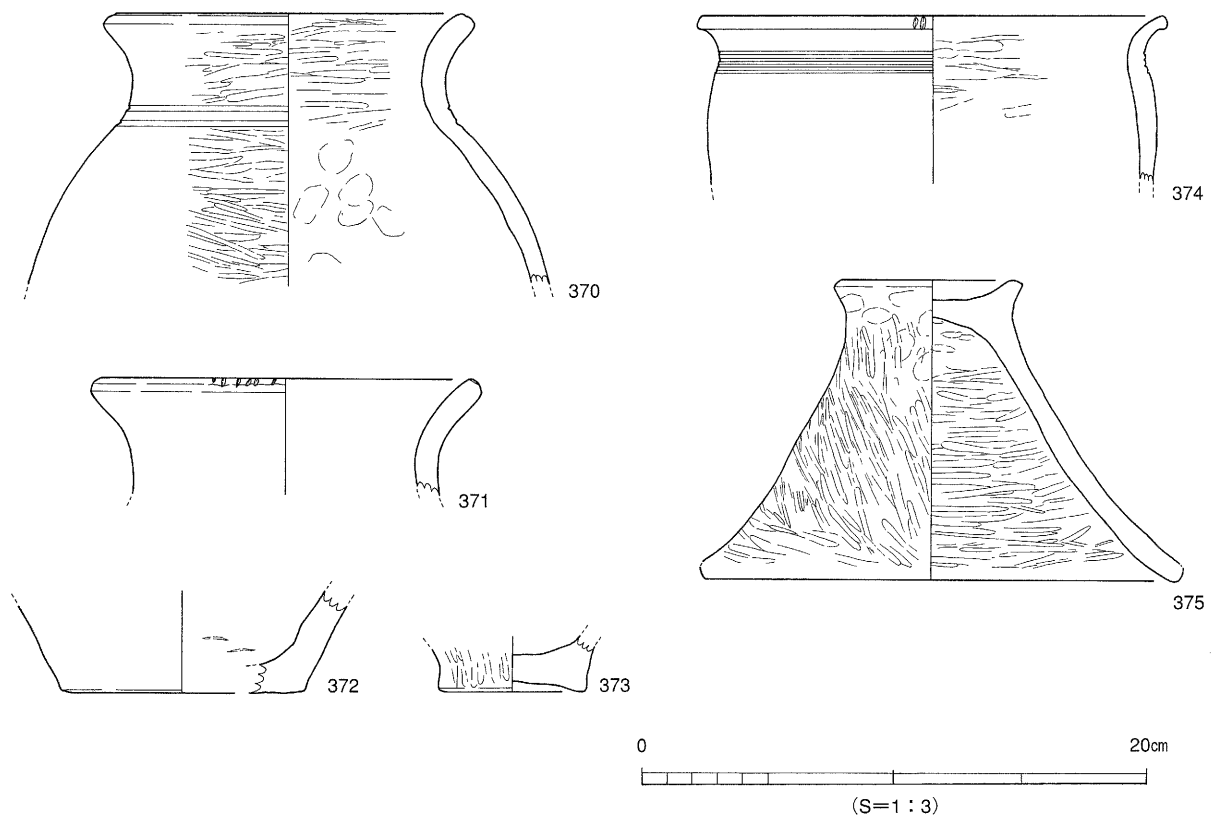


図90 SK3出土遺物実測図

に近い甕蓋。甕で言えば、くびれの上げ底状を呈する天井部からやや外反気味に開いて、径18.4cmを測る裾部に至る。器高11.9cm、天井部径6.9cmで、底部を除く内外面ともに磨かれている。磨きの方向は、外面が縦から斜め、内面は横となっている。

S K 4 (図91) プラン確認が非常に難しく、ある程度下がったところでプラン確認が可能であった。現況で長径1.2m、短径1.1m、深さ0.25mを測るが、本来ならば深さは0.4m程度あったものと思われる。ほぼ平面円形の土坑で、坑底はフラットな形状をなす。出土した土器には、壺・甕があるが、量としては壺が多く、器高1m近い大型品から、中・小型品が揃っている。石器には、石庖丁、敲石、台石などの調理具のほか石鏃がある。これらの土器や石器には二次的に火熱を受けているものが多く、埋土中に焼土を多量に含んでいるが、壁面や底面に火熱を受けた痕跡は見られない。なお、

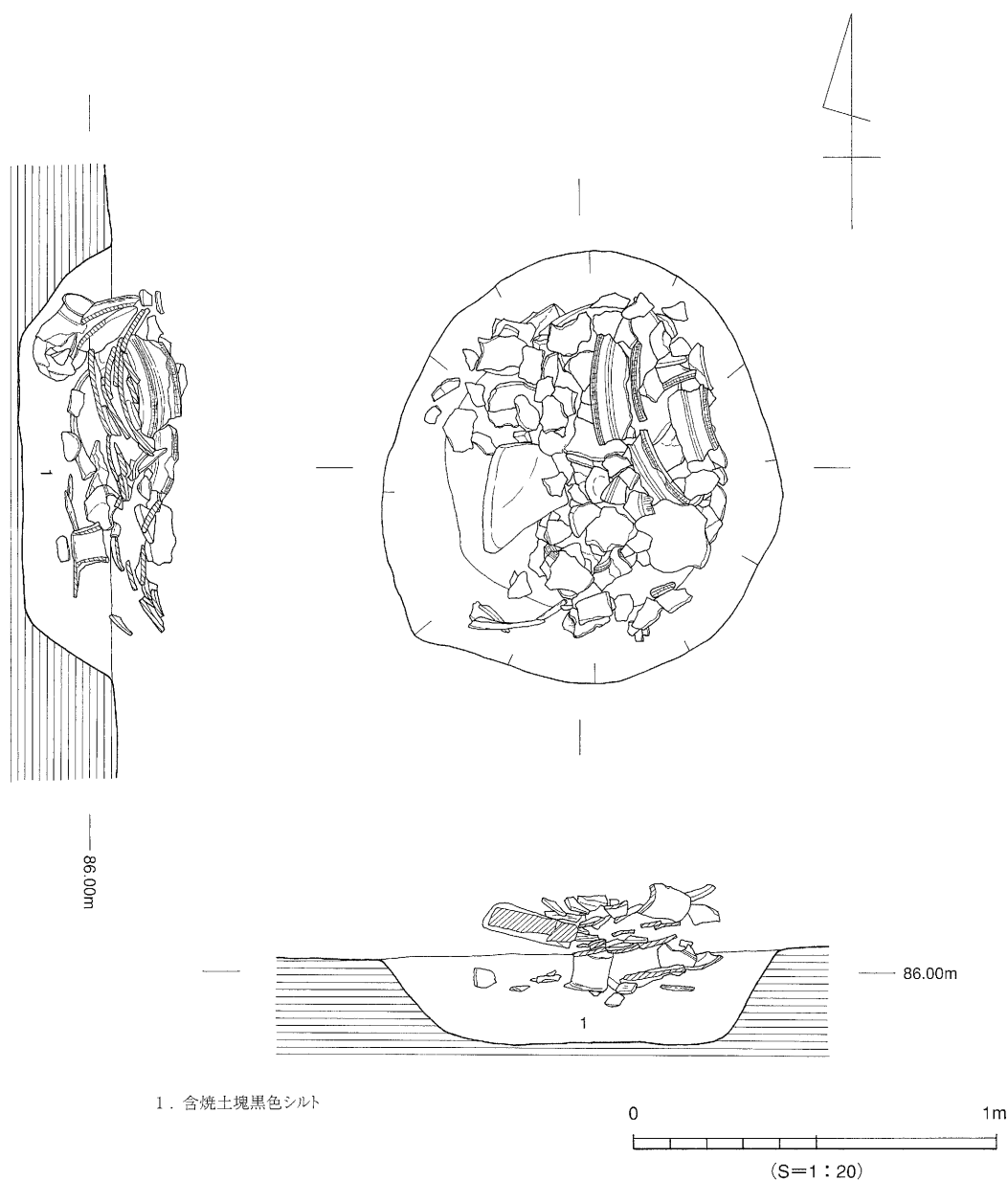


図91 SK4遺物出土状況図

土坑埋土中や周辺の土壌中から多量の炭化植物種実が検出された。これら種実の分析は第4章に譲る。

SK 4 出土遺物 (図92~97)

壺 (376~381) 376は、器高81.4cm、口径52.0cm、胴部最大径62.6cmを測る大型の短頸広口壺。短く外に開いた口縁の平坦な端面には2条の沈線を巡らせた後、縦方向の刻みを施している。口縁内

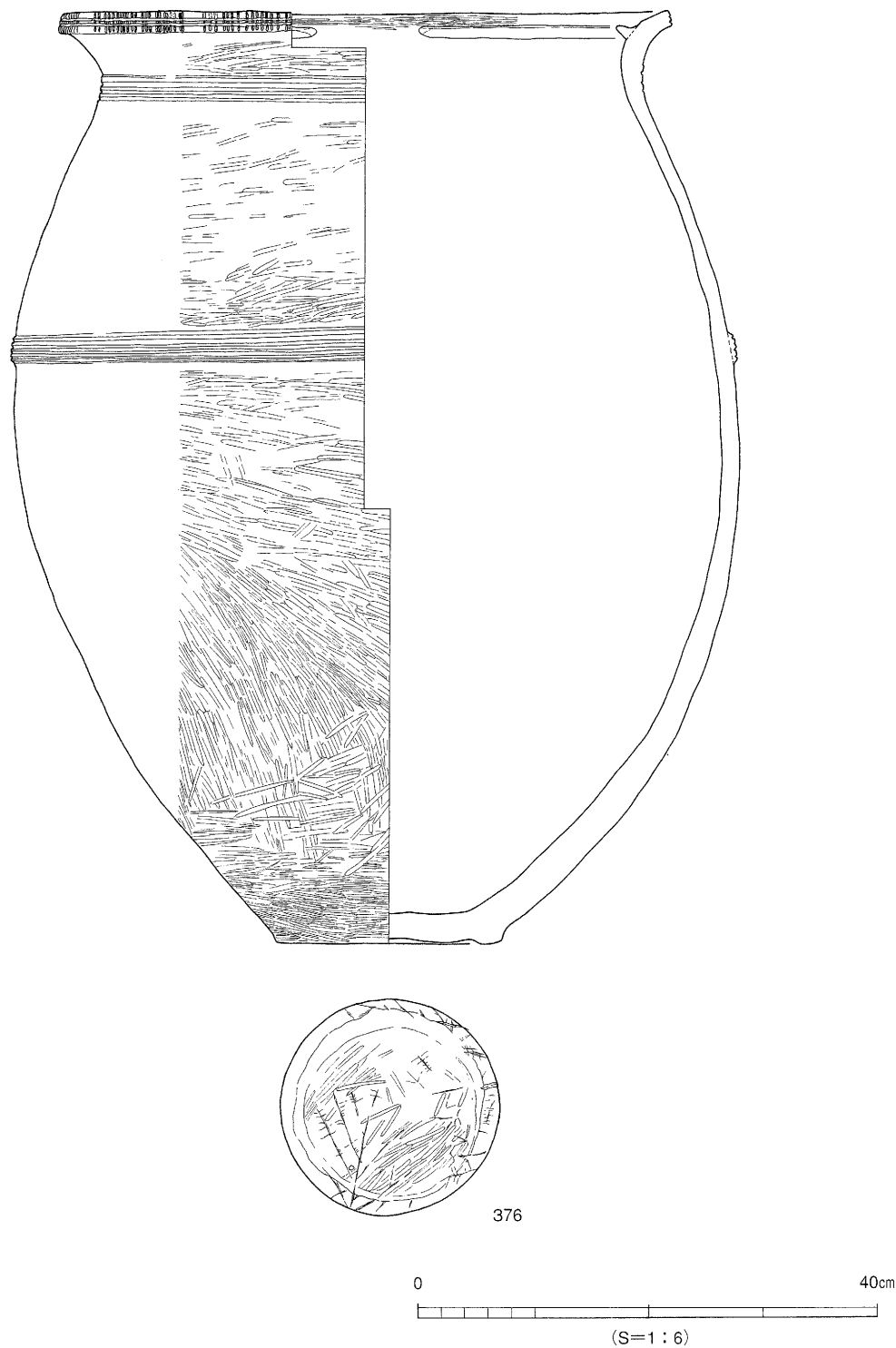


図92 SK4出土遺物実測図(1)

面には1条の断面三角形の貼り付け突帯を巡らせるが、全周はせず、1箇所注口状に途切れる部分がある。頸部には4条の沈線が巡り、胴部最大径部のやや上位に薄く貼り付けた突帯上にも4条の沈線を施している。径19.0cmの底部は、高台状に周縁が僅かに高くなる形状をなす。この底部外面には複数の葉の葉脈痕が残っている。外面の調整は、口縁部から底部の立ち上がりに至るまで、ヘラ磨きが観察できる。377は口縁部を欠くが、残存高47.5cmの中型品で、最大径41.3cmの球形に近い胴部と、外開きの筒状に立ち上がる頸部を持つ。器型は異なるものの、この個体も376と同様の口縁部内面突帯、4条の頸部沈線を施し、胴部最大径部やや上位に突帯を貼り付けている。胴部突帯は断面三角形形状の

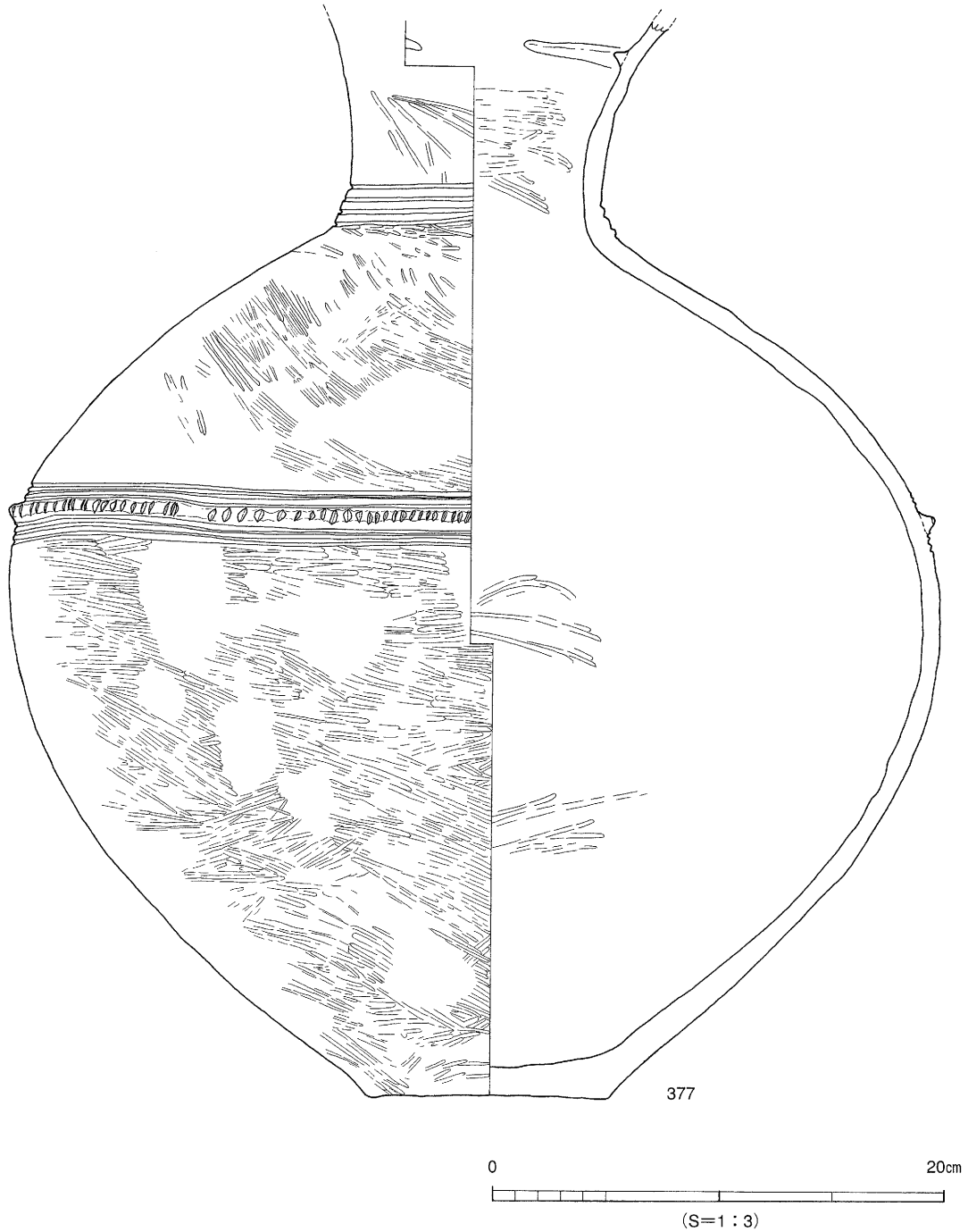


図93 SK4出土遺物実測図(2)

刻み目突帯で、その上下位に3条ずつの沈線を施文している。頸部沈線は、最上位、最下位のものを強く搔き取って、この部分を削り出し突帯のように仕上げている。二次的に被熱しているようで、器面の荒れが激しいが、底部外面を除く外面の全面を磨かれているのがわかる。378は、器高21.3cmの小型品。直径6.8cmと、器型のわりには大きめの安定した平底に、縦長の胴部、筒型の頸部から短く外に開く口縁部を持つ。頸部に2条の沈線が巡り、やはり胴部最大径部のやや上位に2条の沈線が部分的に認められるが、施文を意図したものかどうかは怪しい。胴部外面や口縁部内面は入念に磨かれている。379は、二次的被熱のためオレンジ色を呈し、特に頸部から肩部が焼成剥離のような小破片になってしまって接合できないが、本来は完形であったものである。偏球形の胴部には、最大径部の上位に沈線が巡る。確認できるのは3条までである。380は、肩部から胴部上位の破片で、これもまた被熱による剥離痕や器面の荒れがみられる。胴張り部以上の頸部下位付近までに沈線施文帯が3段ある。上から順に、4条、2条、3条の施文となっている。381は平底の底部片、胎土に長石粒を多く含む。

不明土製品(382) 器種、部位がはっきりしないので、図化した上下で説明を行う。外面に布目押圧文と沈線とを組み合わせた施文、逆し字状に内面に突出した部位の上面には竹管文が施されている。

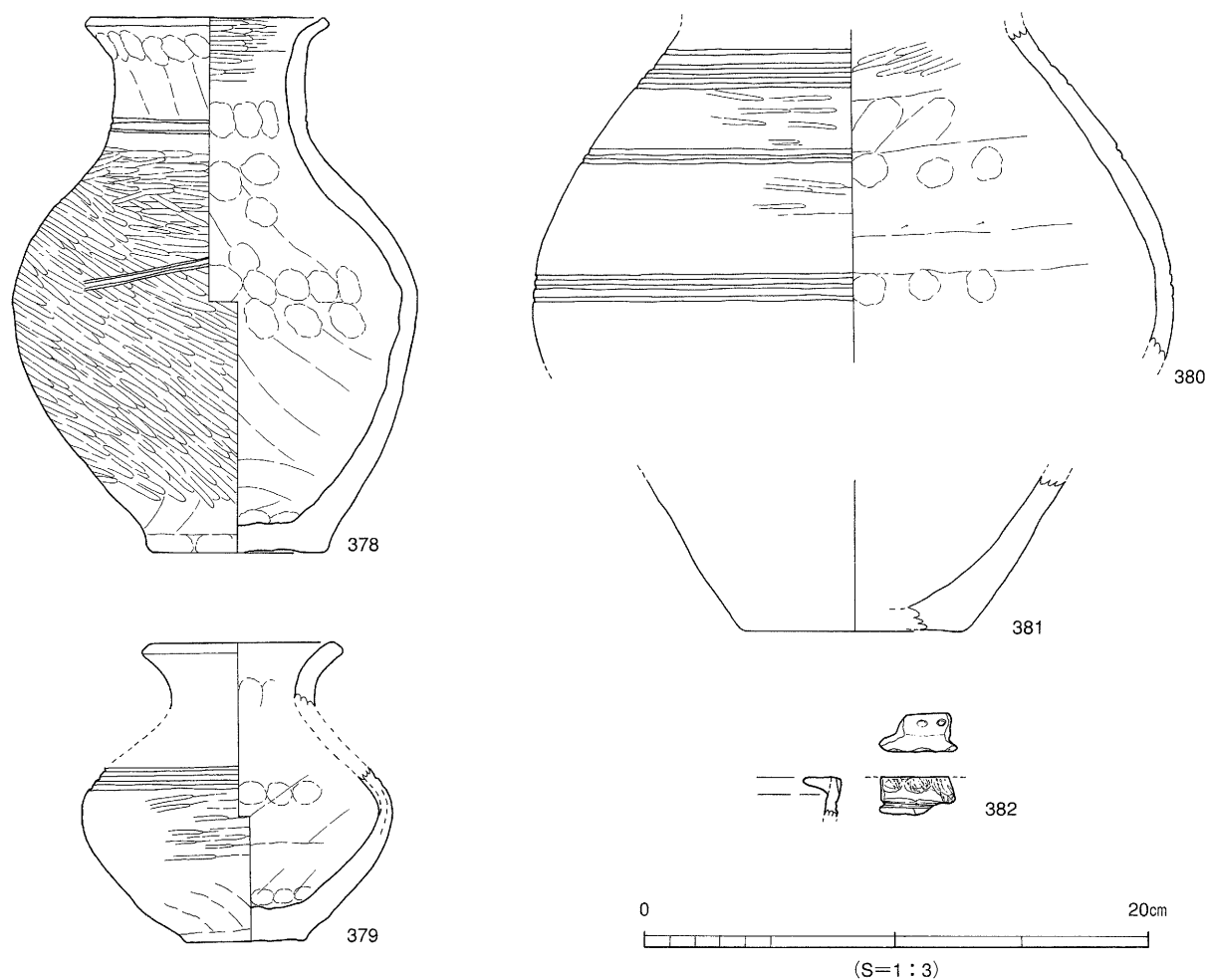


図94 SK4出土遺物実測図(3)

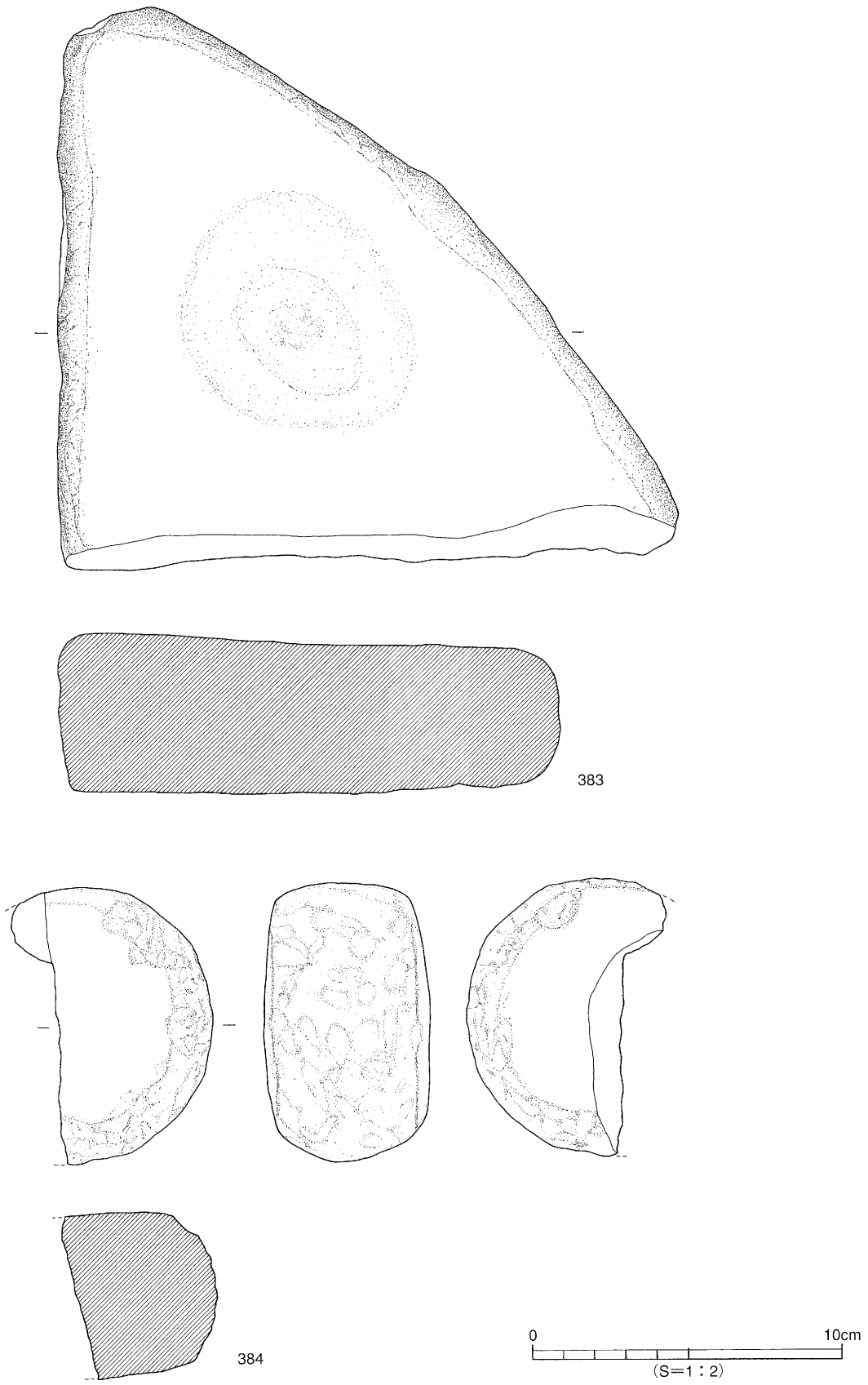


图95 SK4出土遺物実測図(4)

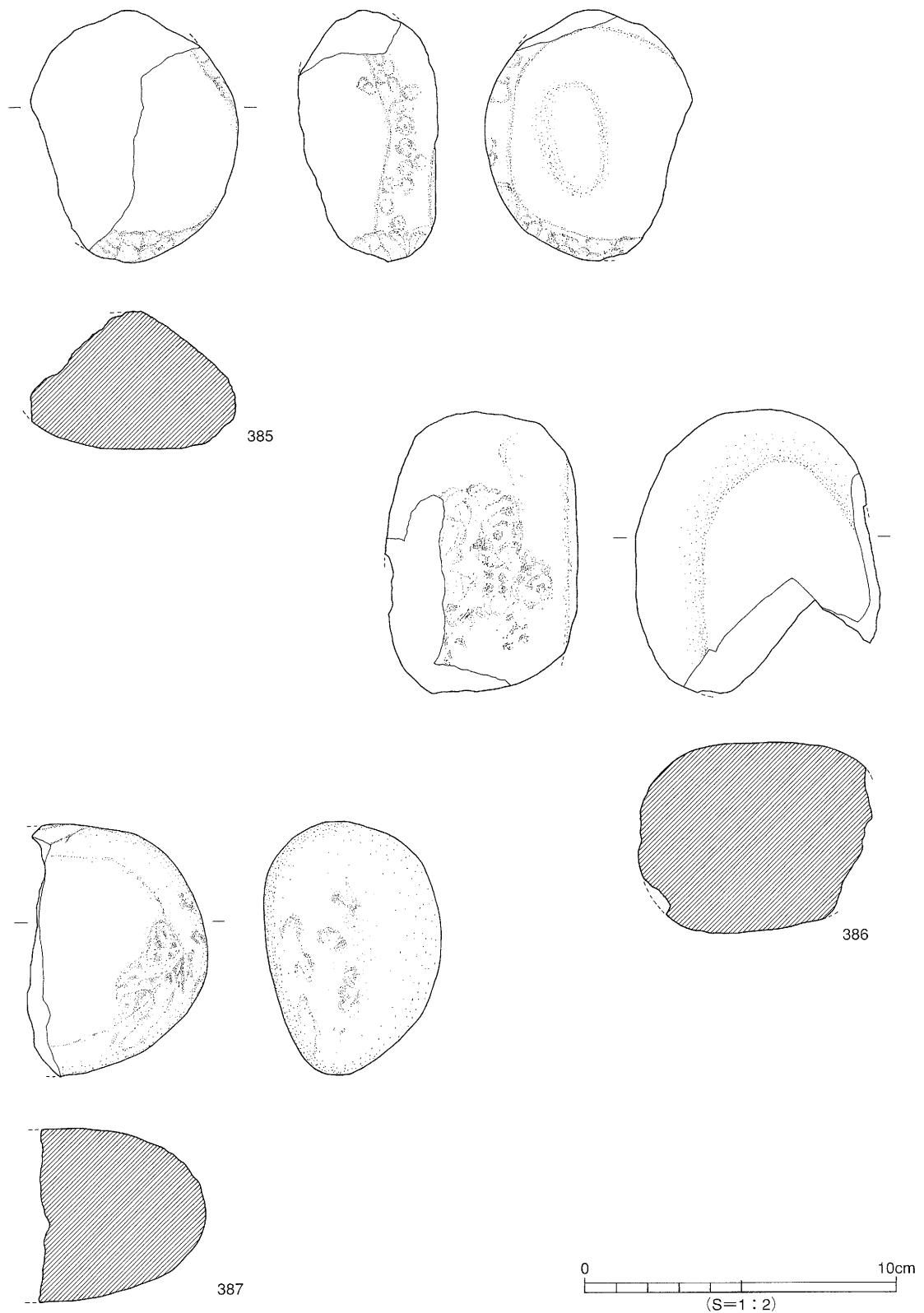


図96 SK4出土遺物実測図(5)

台 石 (383) 厚さ 8 cm 内外の不定形な砂岩転石の片面が敲打によって窪んでいる。被熱痕跡があり、その際に破損したものと考えられる。

擦り石・敲石 (384~387) いずれも砂岩の転石を素材とする破損品で、384・385には被熱痕跡が顕著である。384は円盤状の石の側縁を敲きに用い、平坦面で擦っている。385~387も基本的には同様の使い方をしている。

石庖丁 (388・389) いずれも緑泥片岩を素材とするもので、形態的には外湾刃半月形に属するものである。両者ともに被熱しており、特に389は焼土のような暗赤褐色に近い色調を呈している。形態、法量、両面穿孔など似通った部分が多いが、389の研ぎが両面から均等に行われているのに対して、388では片面に偏っている。

石 鏃 (390~395) すべてサヌカイト製の打製、凹基三角形鏃である。ほとんどのものが、重量 0.6 g 前後という小型品の中にあって、392は0.33 g と抜きん出て小さい。

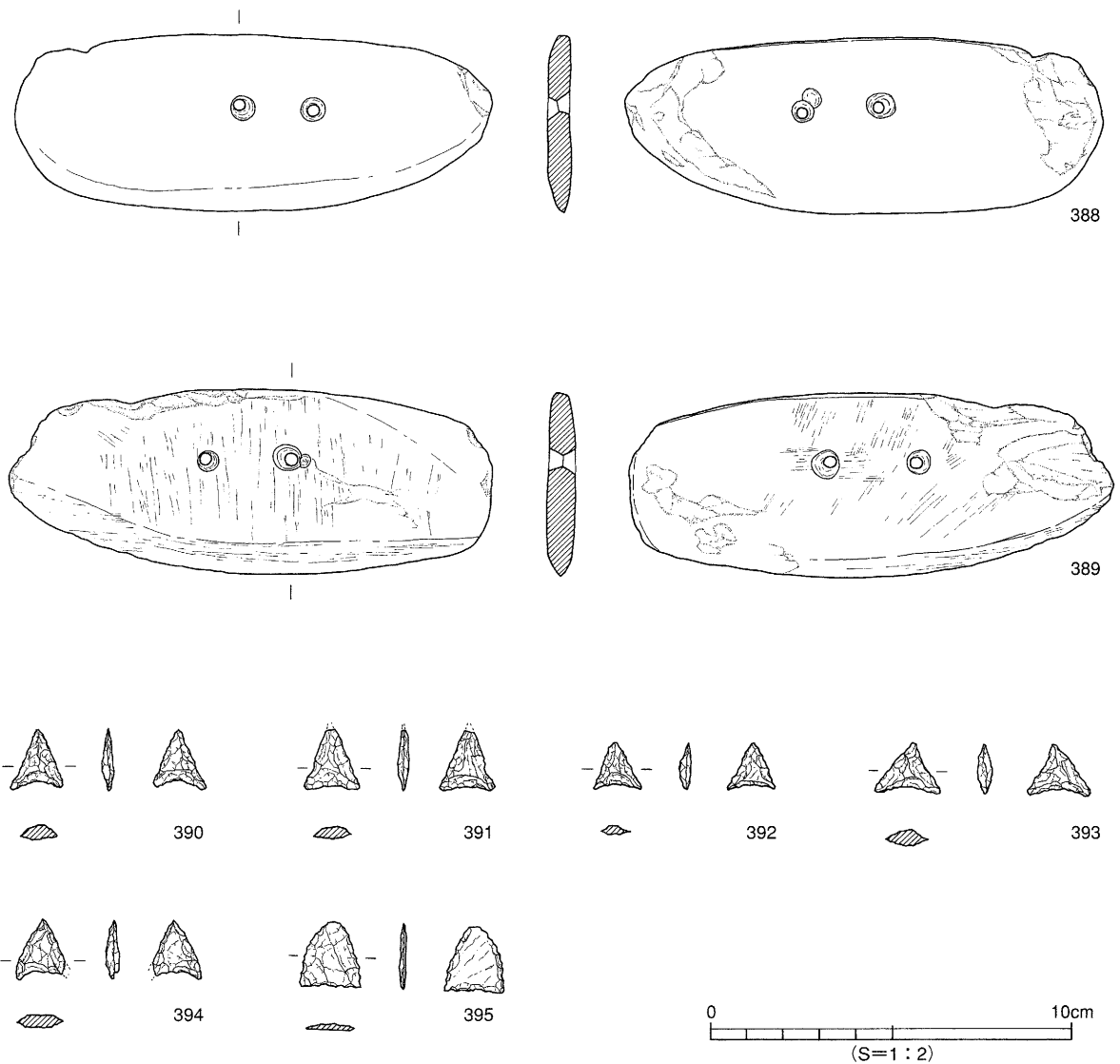


図97 SK4出土遺物実測図(6)

S K 5 (図98) 径0.4mの円形プランで、深さ0.35mを測る。人頭大の砂岩塊とともに壺下半部等の土器片が少量出土している。

S K 5 出土遺物 (図99)

壺 (396~398) 396は、短頸・広口の大型壺口縁部片。端面に1条の沈線と刻み目を持つ。397は、胴部の小片で、削り出した突帯上に3条の沈線を巡らせている。398壺底部から胴張り部は、内面に焼成剥離の痕跡が顕著である。外面は横方向に入念に磨かれているので、そのような痕跡は全くみられない。

台石 (399) 砂岩の転石を台石として利用している。破損品で、片面に擦った痕跡がみられるが、この残存部位にはあまり使い込まれた様子はみられない。

S K 6 (図100) 長さ2.75m、最大幅1.1mの舟形土坑で、V字形に近い横断面形状をなす。最深部で0.4mを測る。数点の弥生土器片の出土がある。いずれも浮いた状態での出土であるが、埋土からいけば弥生時代の遺構である。

S K 6 出土遺物 (図101)

壺 (400・401・406) 400は復元口径16.2cmを測る口頸部片で、頸部に1条の沈線が確認できる。端部を丸くおさめ、口縁部の内面と、外面の残存部位全体を磨いている。401は胴部中位の小破片で、貼り付けた断面三角形の突帯を長楕円形状に浅く刻み、この突帯直上の部位に3条の浅い沈線を施している。406は、平底の底部。底面までヘラ磨きされているところからみると、壺の底部であろう。

甕 (402~405) いずれも折り曲げ口縁と頸部沈線を持つ破片で、沈線は402・403が3本、404が4本である。口端面に刻み目をもつことも三者共通であるが、403・404は細かく鋭い刻みであるのに対して、402は壺401の突帯刻みと同様の、指で押しつぶしたような大きな刻み目である。405は平底の

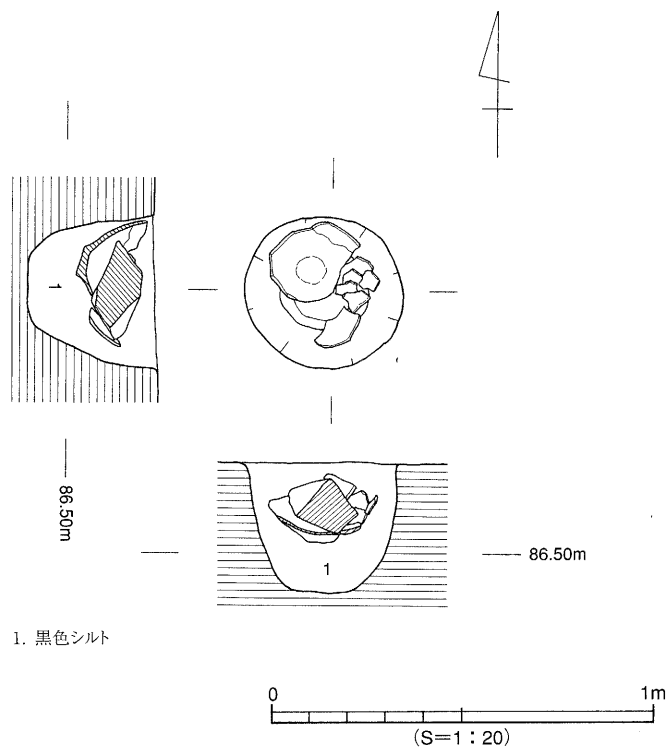


図98 SK5遺物出土状況図

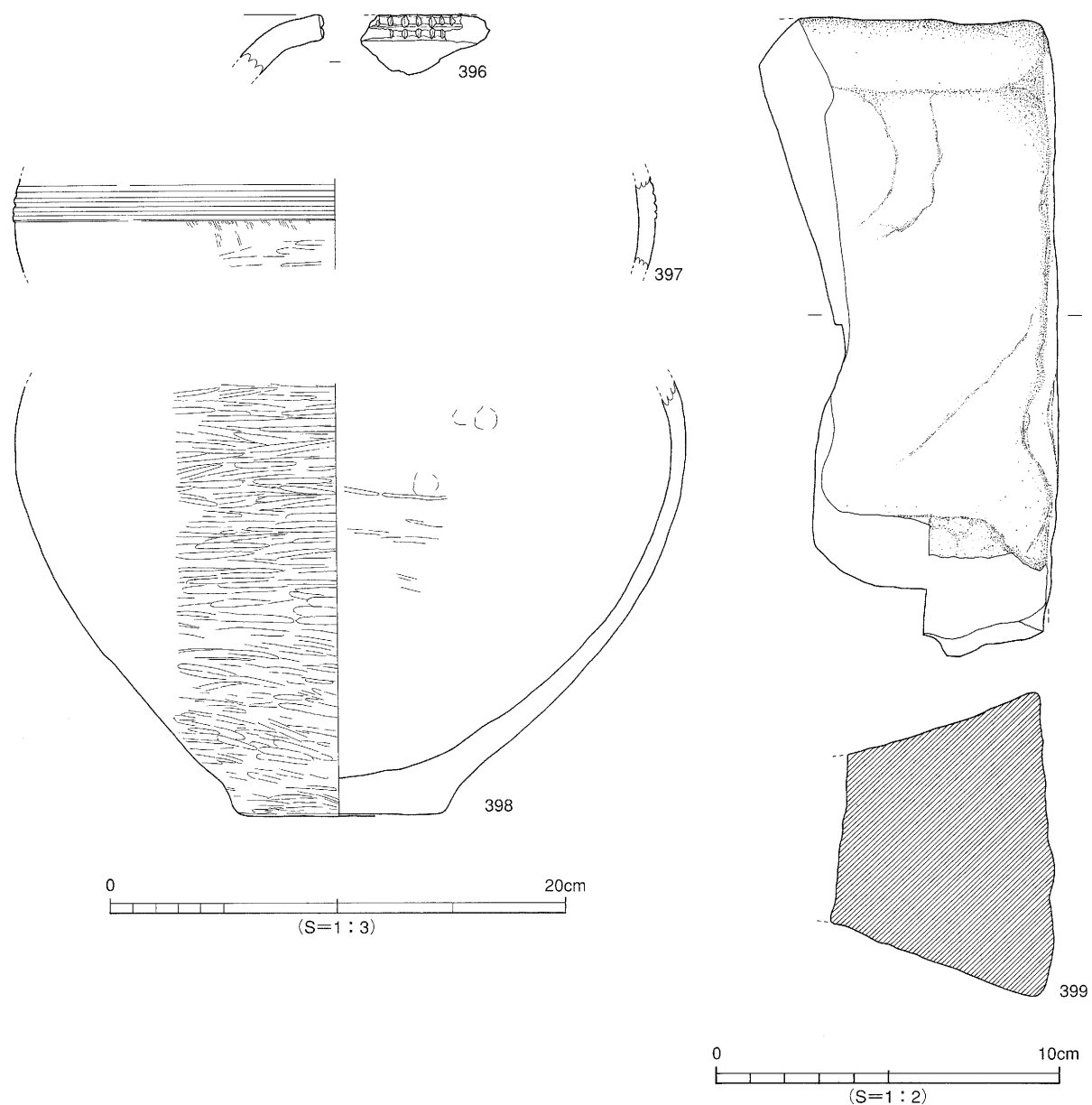


図99 SK5出土遺物実測図

底部である。

S K 7 (図103) 1.5×1.3mの隅丸長方形プラン、深さは0.15m程度の遺存である。出土遺物は弥生土器の小破片が僅かにあるのみであるが、埋土は他の弥生時代の遺構と変わるところはない。

S K 7 出土遺物 (図102)

甕 (407・408) 407は、如意形に折り曲げられた口縁部片、端面にD字状の刻み目を持つ。ちょうど頸部沈線の部分で折れるように割れているので、沈線施文を持っていたことがわかる。408は、貼り付け口縁の甕小片で、断面三角形の口縁端部に細かい刻み目を施され、頸部には櫛描き沈線文を持つ。

壺 (409) 胴部に押圧文の貼り付け突帯を持つ壺の小破片、突帯の直上の部位に沈線を3条確認

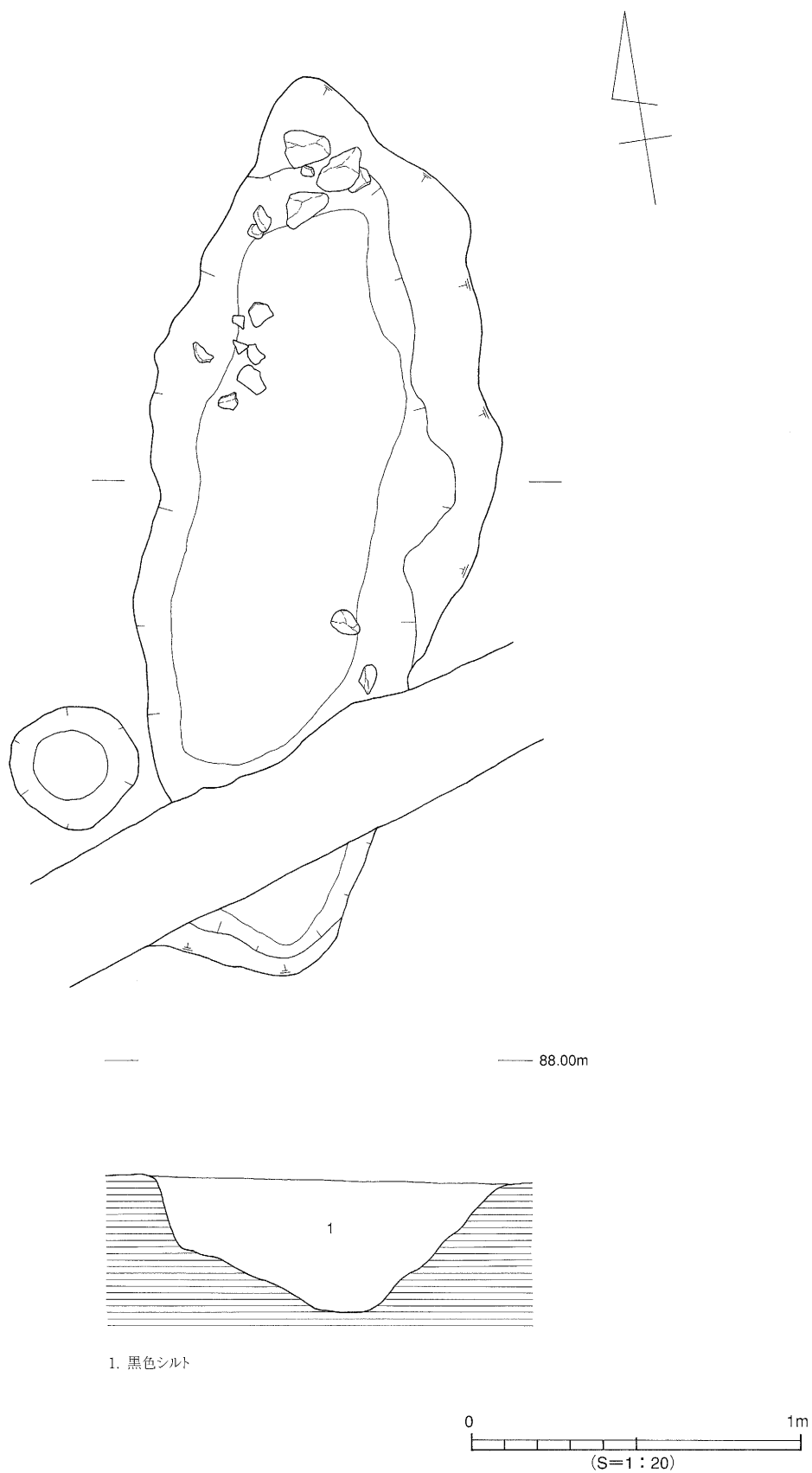


図100 SK6遺物出土状況図

第 4 次 調 査

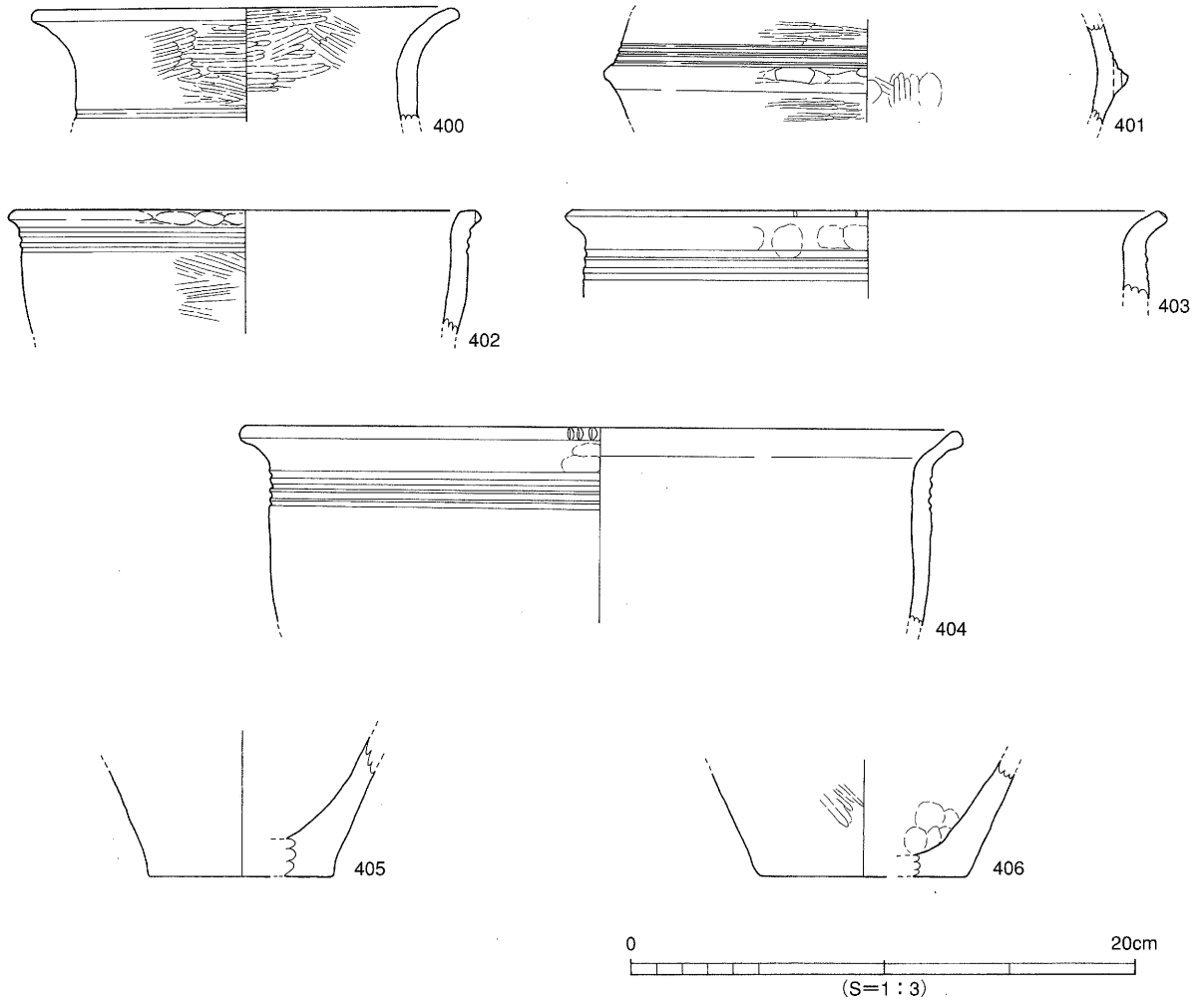


图101 SK6出土遺物実測図

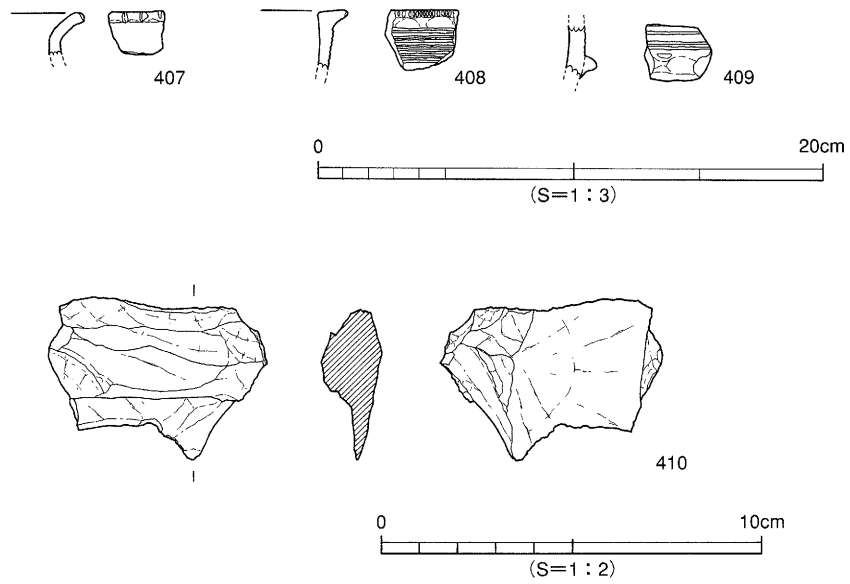


图102 SK7出土遺物実測図

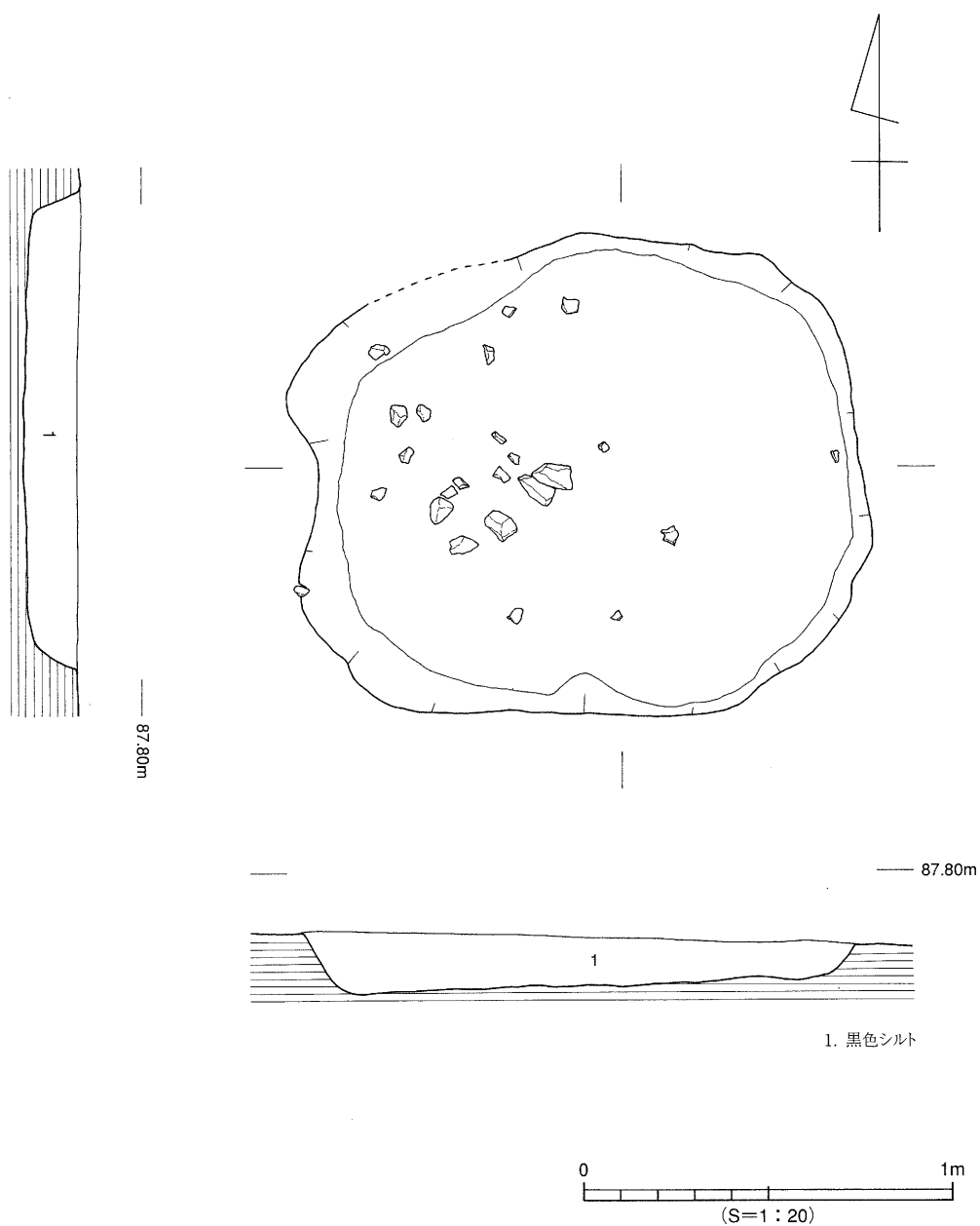


図103 SK7遺物出土状況図

することができる。

剥片 (410) 不定形のサヌカイト剥片。

SK 8 (図104) 平面プランは直径1.1mのほぼ円形、深さは0.4mを測る。形状、規模を含めて、多量の弥生土器、殊に壺を多く出土していることでSK 4と共通しているが、土器に二次的な被熱の痕跡がなく、調理具などの石器や種実、焼土を伴わない点で大きく異なっている。

SK 8 出土遺物 (図105~113)

甕 (411~417) 復元完形および、これに近いもの3個体と、上半部片2個体分、底部が2点ある。うち、口縁部折り曲げのものが411~413の3点で、貼り付けのものが414・415の2点である。411は、

底部を僅かに欠くが、ほぼ完形に近く復元できるもので、器高26.9cm、口径21.2cm、底径7.0cmを測る。外上方に強く折り曲げられた口縁部は端部を丸くおさめて刻み目を施す。頸部には比較的間隔のあいた沈線を3条巡らせている。口径が胴部最大径を凌ぐのは、この411と後述する415のみで、他はほぼ同じか、若干口径のほうが下回るものである。412は復元完形品、器高20.2cm、口径14.8cm、底径8.0cmと、サイズのわりには大きく分厚い安定した平底を持っている。口縁部は、短く外上方に軽く折り曲げられ、面をなした端部を刻み、頸部には浅い沈線を1条施す。413は上半部の遺存で、口径21.6cmを測る。折り曲げによる口縁部は端部に中窪みの面を持ち、この端面の下端を刻んでいる。頸部と、その若干下位の2段に、それぞれ6本からなる沈線施文帯を持つ。414を図上で復元すると、器高約22cm前後の図示したような器型になる。口縁部は、水平よりやや上方に短く開くように貼り付けられている。端部は摩滅が進行していることもあるが、観察できる範囲では刻み目を持たない。頸部には

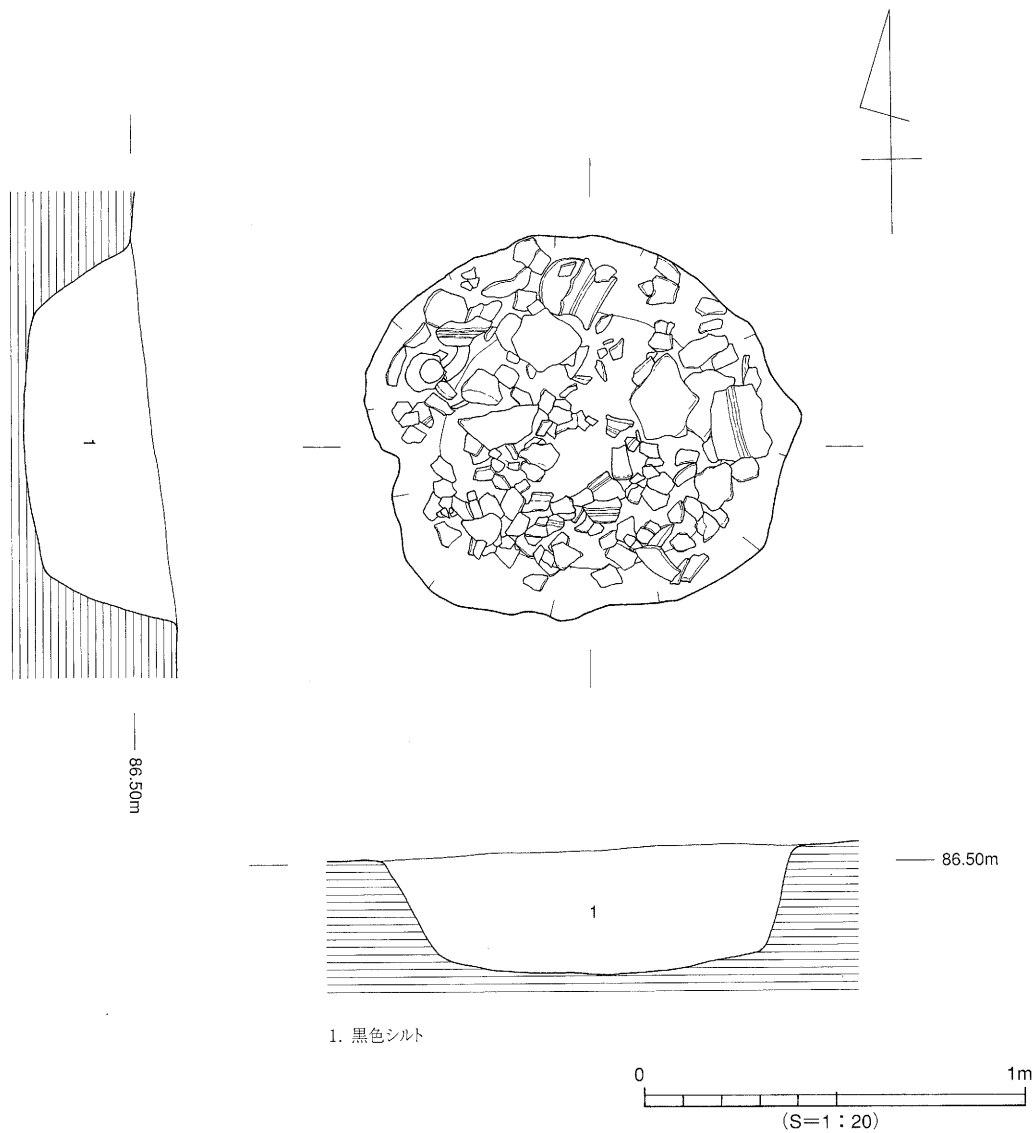


図104 SK8遺物出土状況図

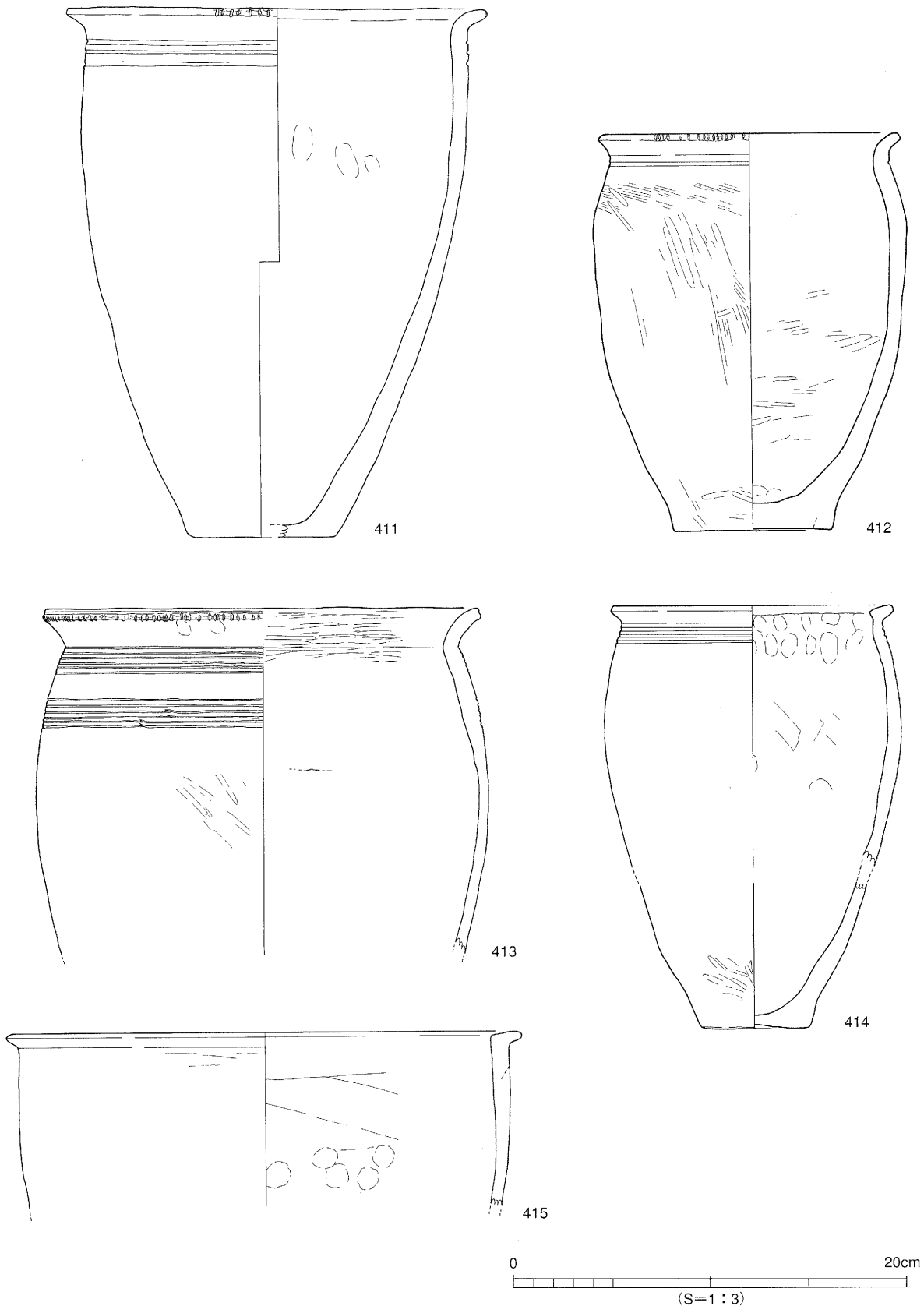


図105 SK8出土遺物実測図(1)

3本の沈線を施されている。頸部内面には、口縁部貼り付けの際のものと考えられる指頭痕が顕著である。415は、復元口径25.2cmを測る無文の口頸部片である。口縁部は、短く水平に貼り付けられている。底部は、2点ともに平底のものである。417では、周縁が僅かに高くなっているが、これは成形の過程で、先に粘土紐で作った輪の中に粘土を充填したことによるものであり、412の底部や、先



図106 SK8出土遺物実測図(2)

のSK4の大型壺376の底部にみられる技法と同一のものである。

壺(418~449) この土坑では甕に比べると壺の量が圧倒的に多く、凶化したものだけで32点を数える。418は、同一個体と判断した上半部と底部を推定器高40cm前後に凶上復元したものである。直径17.7cmを測る外開きの口縁部は、端面に1条の沈線を巡らせた後、刻み目を施している。頸部には、それぞれ3本ずつの沈線で構成される2段の沈線施文帯があり、この施文帯間に角錐状につまみ出した突起を列べた、特異な形状の突帯が貼り付けられている。沈線施文帯は、肩部と胴張り部の間にもあるが、このうち下位のもの6本からなっている。上位の部位は6本単位の最上位の部分に沈線ではなく、器面を削り取るように仕上げているため、削り出した段上に沈線5本を施した恰好になっている。底部は直径10.9cmの平底で、やはり充填のような痕跡がうかがえる。器面調整には内外面ともに磨きを多用しており、特に胴部の外面、口縁部内面は入念に磨かれている。419は底部を欠くが、遺存は比較的良い。残存高29.9cm、口径14.6cm、胴部最大径25.9cmを測る。球形に近い胴部と、筒状の頸部から緩やかに開く口縁部を持つ。頸部と胴張り部やや上位に施文帯がある。頸部の施文は、2本ずつの沈線間に棒状工具による円形刺突を加えるもので、胴部施文は3本の平行沈線によるものである。残存状況によると、底部はやや突出した平底であったものと思われる。420は、器高25.4cm、口径13.0cm、底径8.8cm、胴部最大径は21.8cmを測るもので、施文帯は419と同様の部位にある。安定した平底に、上下にややひしゃげた胴部から短い頸部を経て口縁部が開く。口端面は曖昧な面を持っている。頸部、胴部ともに施文は5本の平行沈線である。胎土に大粒の砂粒をふくんでおり、外面には焼成剥離痕が数カ所みられる。421は、長胴の胴部から短い口縁部が開く器型で、口径12.8cm、胴部最大径は22.6cmである。施文はやはり頸部と胴部に沈線が施されるものである。沈線はそれぞれ4本、この個体も胎土に大粒の砂粒を含み、外面には焼成剥離の痕跡が著しい。422は胴が大きく張る器型で、口径15.0cmに対して胴部最大径は36.4cmある。口端面には沈線を1条巡らせている。頸部と胴部の施文部位は先の数個体と同様で、頸部4本、胴部5本の平行沈線が施されている。内外面、特に内面には焼成剥離痕が多くみられる。423は壺の上半部であるが、他の個体と同様の施文を持つ。

424~430は、壺の口頸部片で、うち無文の428を除いたすべてが頸部に沈線施文を持つ。このうち、425、429、430の施文部位は、削り出し突帯状になっている。口端面に施文されるものには、425の沈線、加えて沈線に刻みを持つ427・430がある。429・430には、注口状の口縁部内面突帯が貼り付けられている。

431は頸部から胴部下位の片で、この間に3箇所施文部位がある。頸部と肩部は平行沈線で、前者が3本以上、後者が3本となっている。胴部最大径部やや上位の施文は、平行沈線と刻み目突帯を組み合わせたものである。上位の3本沈線と下位の2本との間に、横長の浅い楕円形に刻んだ突帯を配している。

432~436は胴部片で、そのいずれもが胴部沈線文を施されている。そのうち436は大型壺の胴部で、図は1/6で図示してある。SK4出土の壺376と同様の器型になるものと思われる。胴部中位よりも上の部位に幅広の薄い突帯を貼り付け、この突帯に2条の平行沈線を施している。

437、442、443、447は口縁部あるいは口頸部を欠く個体である。437の頸部には3条、肩部に2条の沈線が巡っている。胎土に多量の砂粒が含まれており、特に外面は器面の荒れが著しく、胴部中位に焼成剥離が集中している部分がある。一方、内面はよく磨かれているので、器面は整っている。75は、筒状の頸部、やや偏球気味の胴部に僅かに突出した平底の底部を持つもので、胴張り部に1条の

沈線が巡っている。頸部施文はない。443の胴部には6条の沈線が施文されている。平底の底部外面には、イネ朶と思われる圧痕が数ヶ所確認できる。447は無文の胴～底部。やや突出した平底の底部

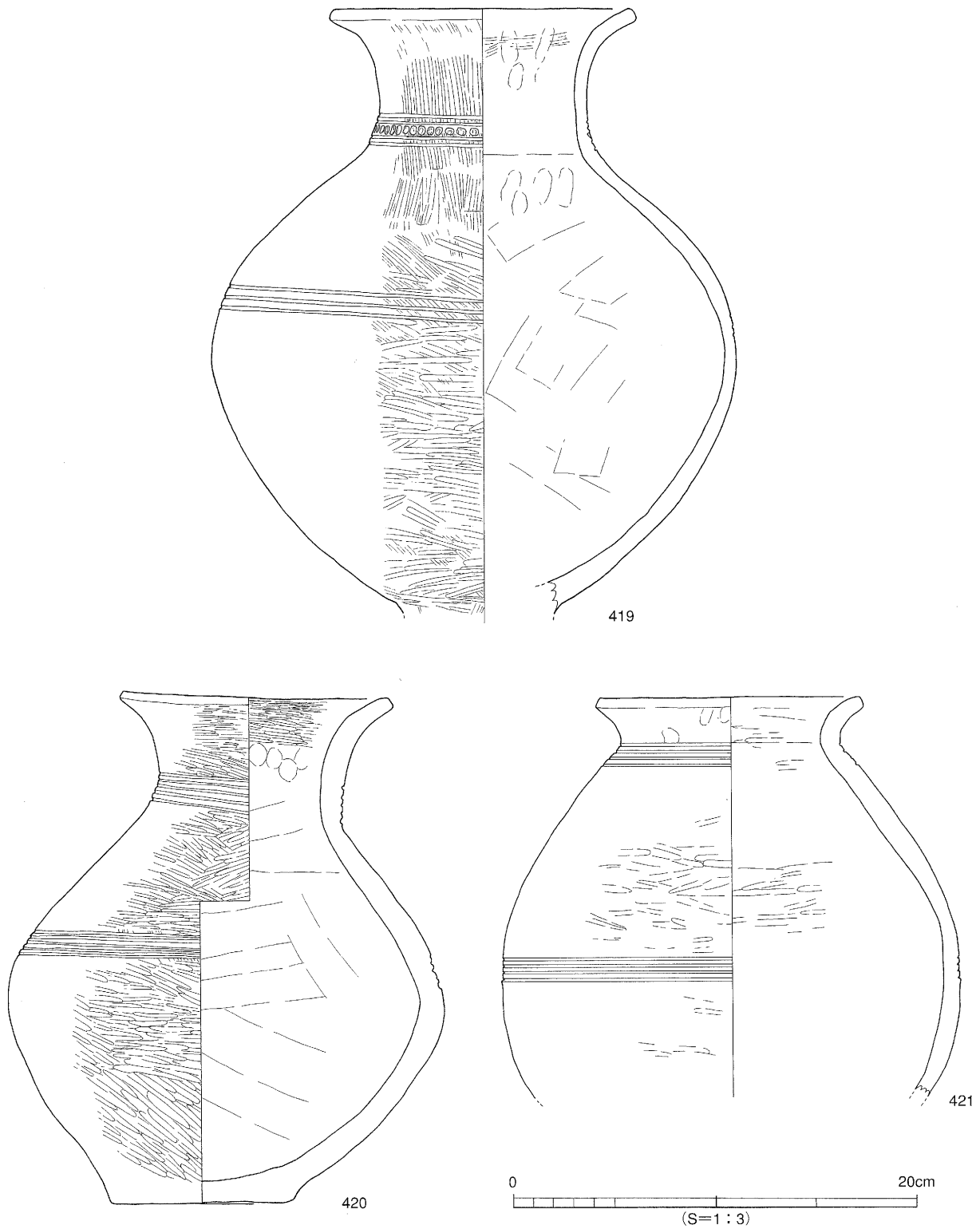


図107 SK8出土遺物実測図(3)

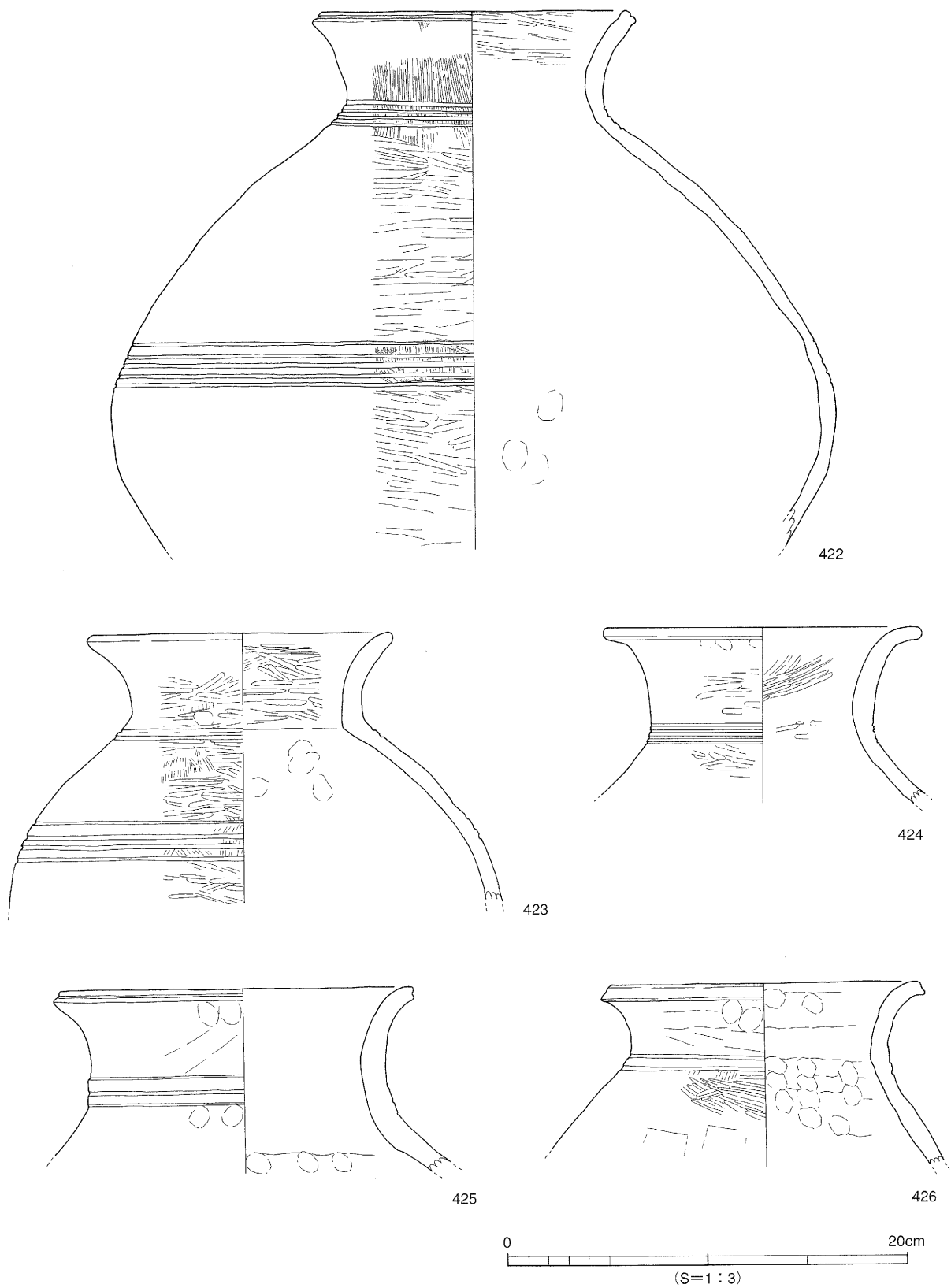


図108 SK8出土遺物実測図(4)

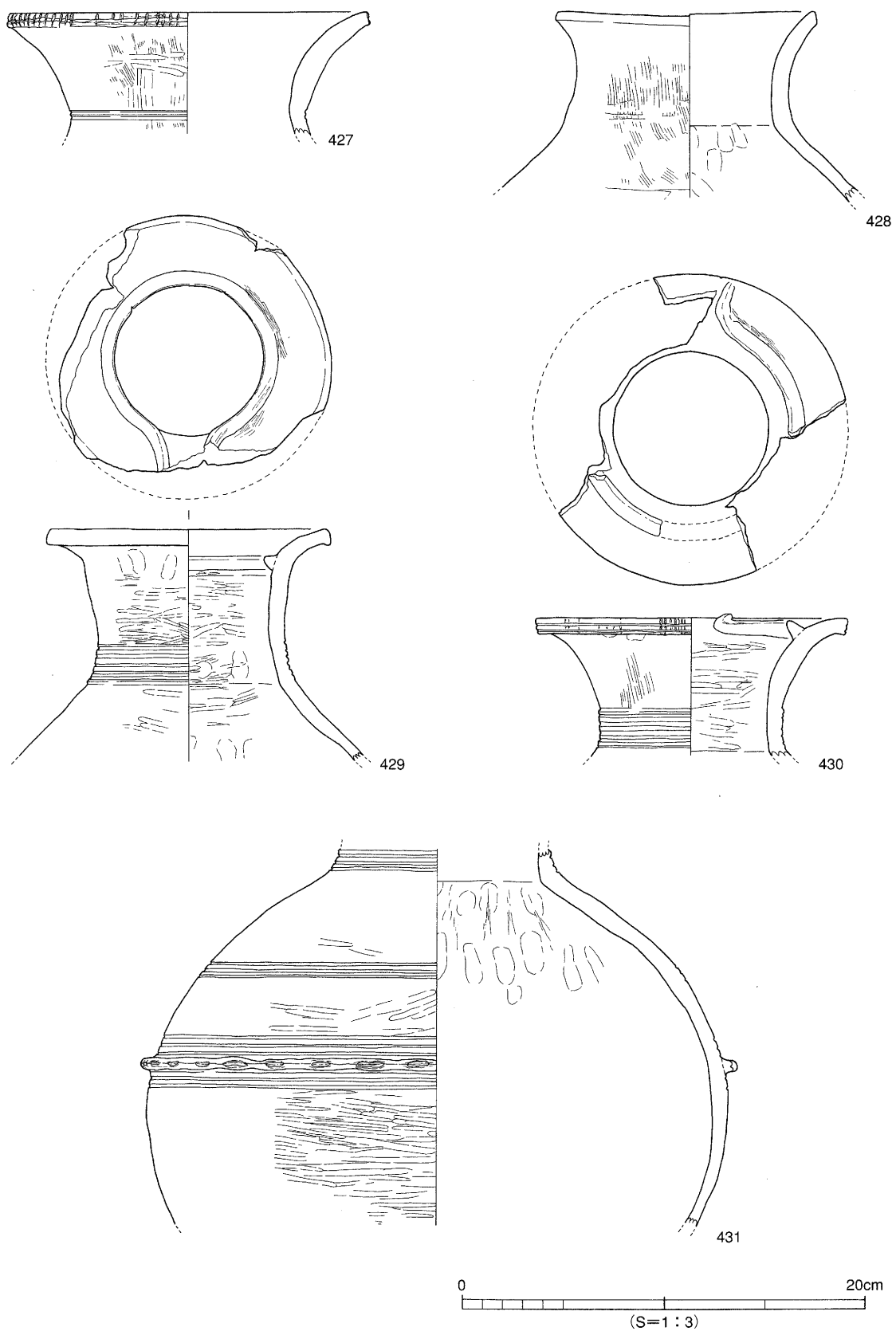


图109 SK8出土遺物実測図(5)

には充填の痕跡が残っている。438~441、444~446、448・449は、いずれも平底あるいは僅かな窪み底になる壺底部である。

石 鏃 (450) 脚部を僅かに欠く、サヌカイト製の凹基三角形鏃。現況で、重量0.53 gを量る。

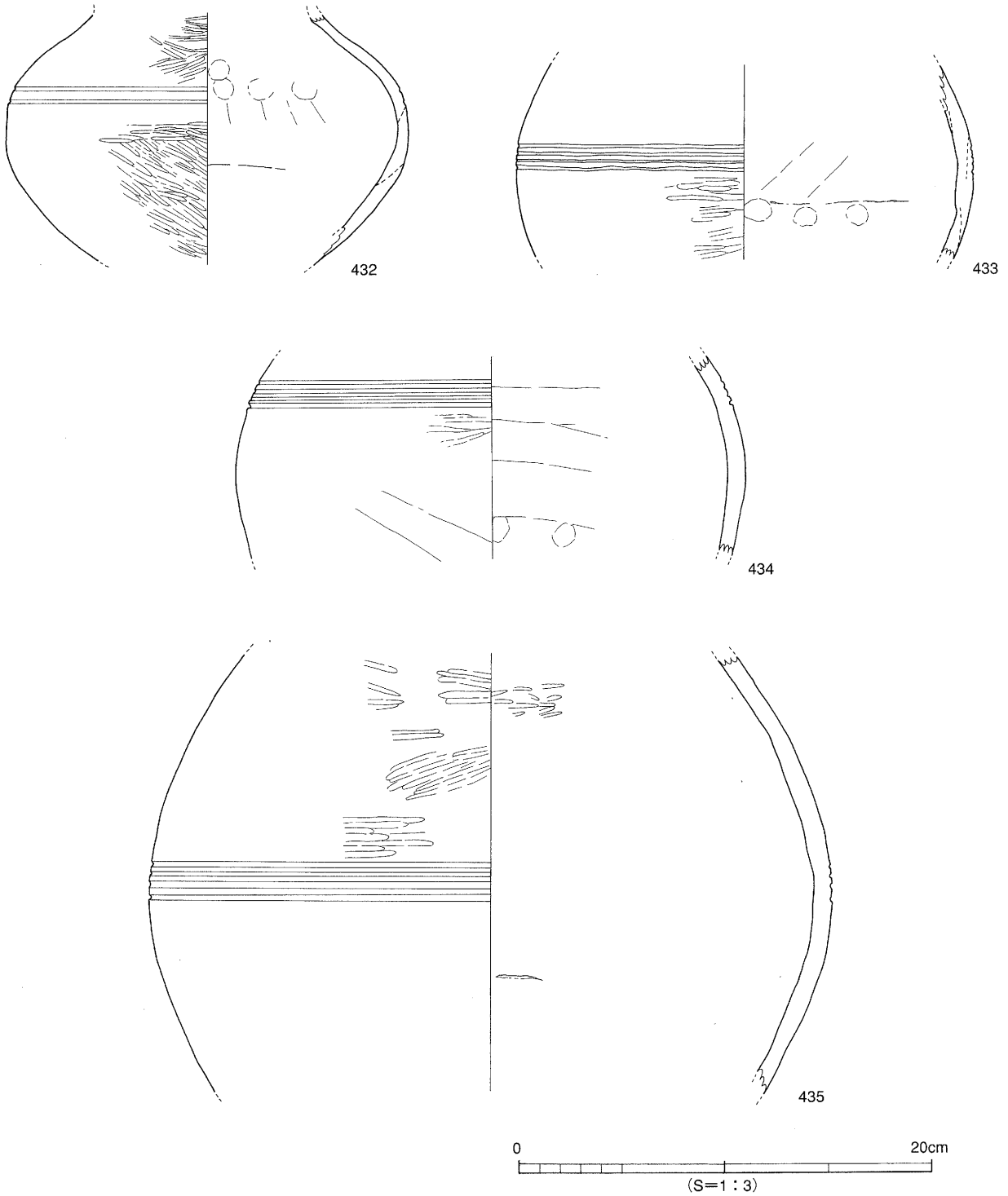


図110 SK8出土遺物実測図(6)

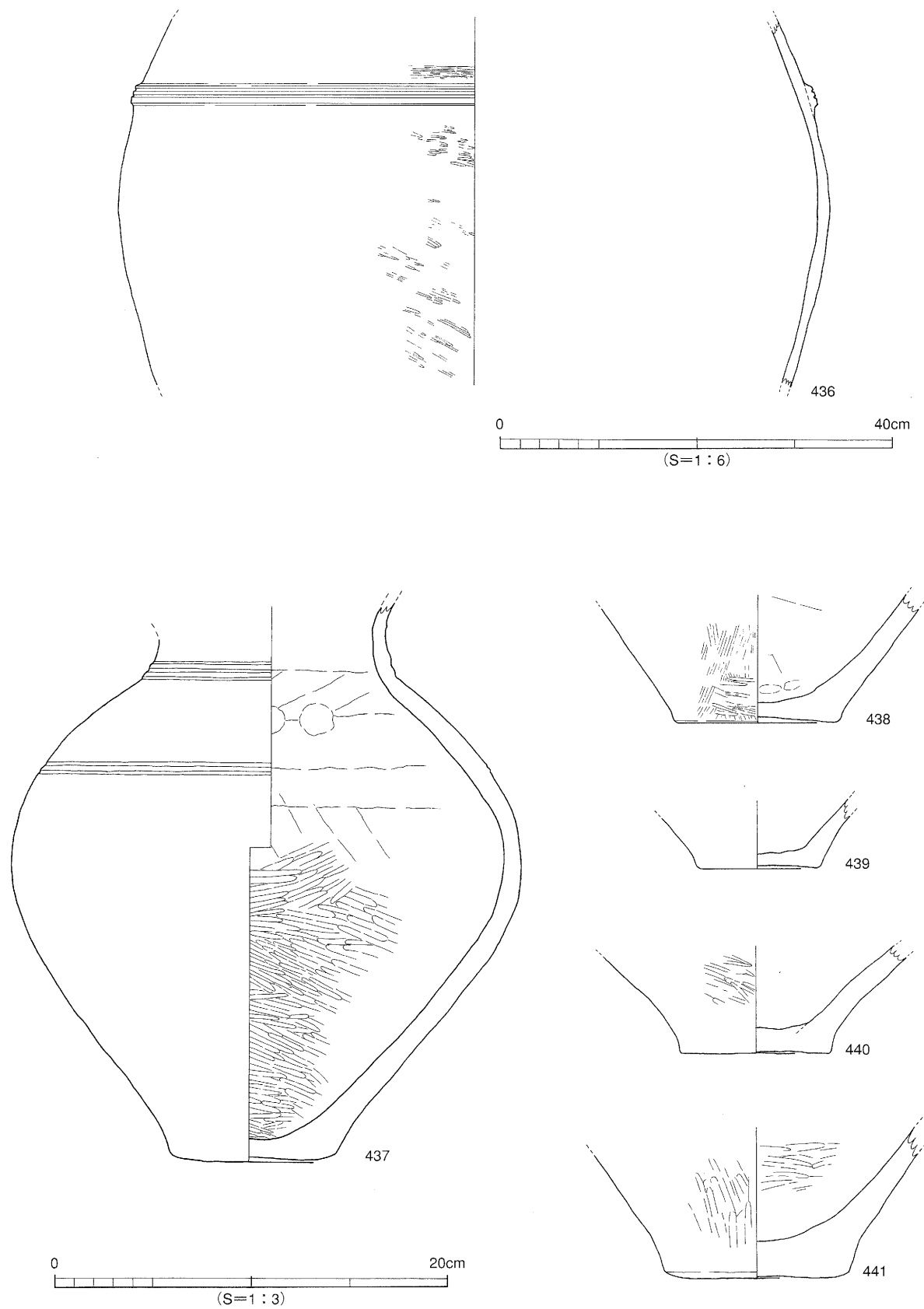


图111 SK8出土遺物実測図(7)

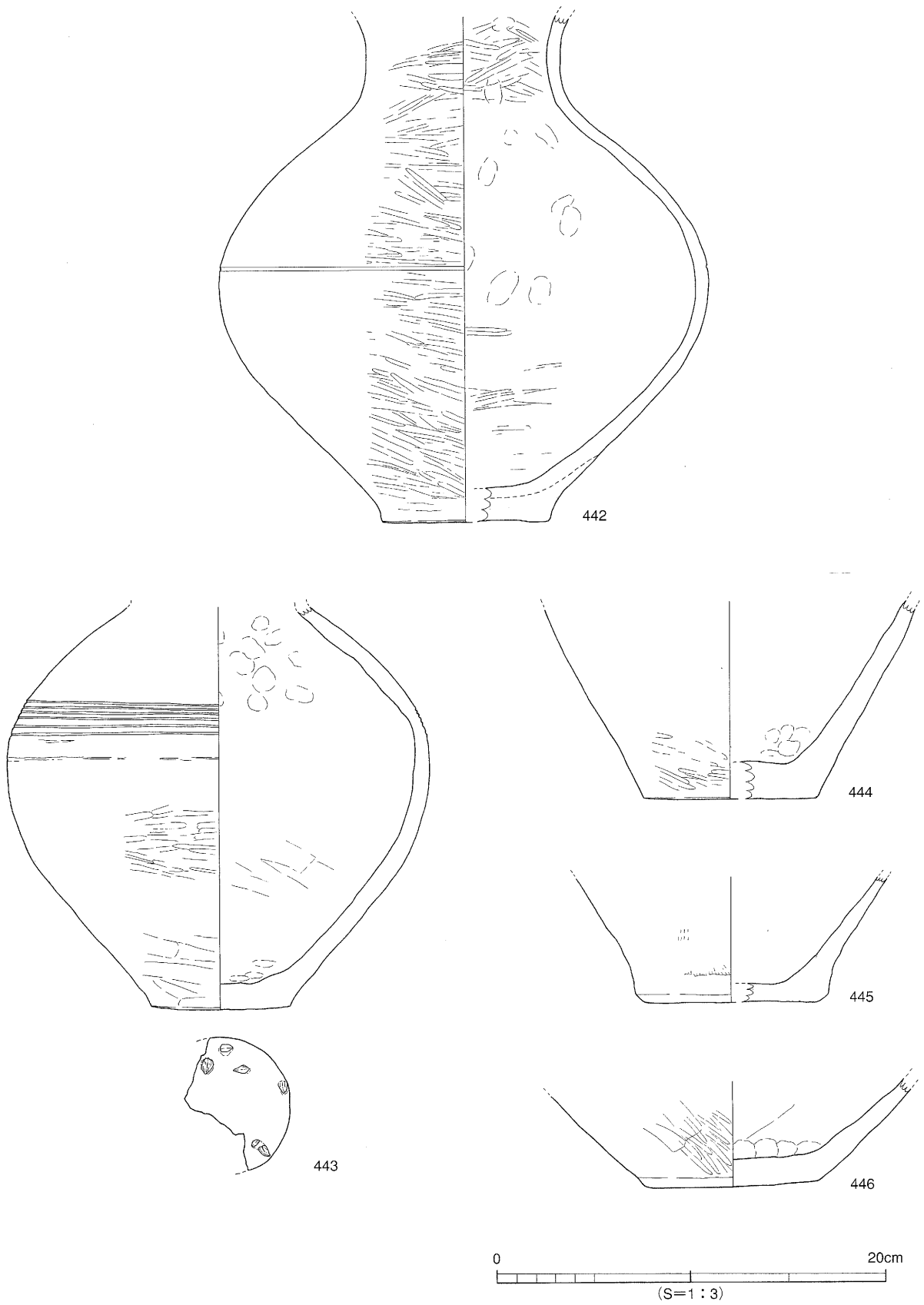


图112 SK8出土遺物実測図(8)

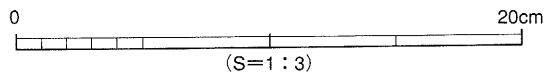
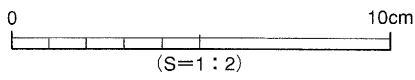
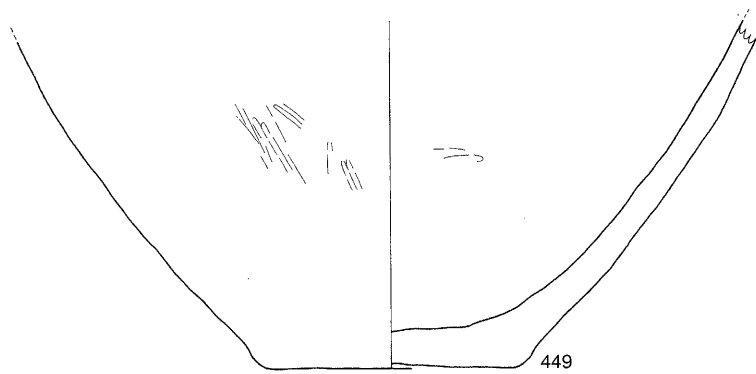
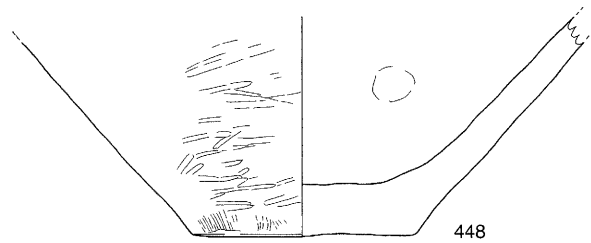
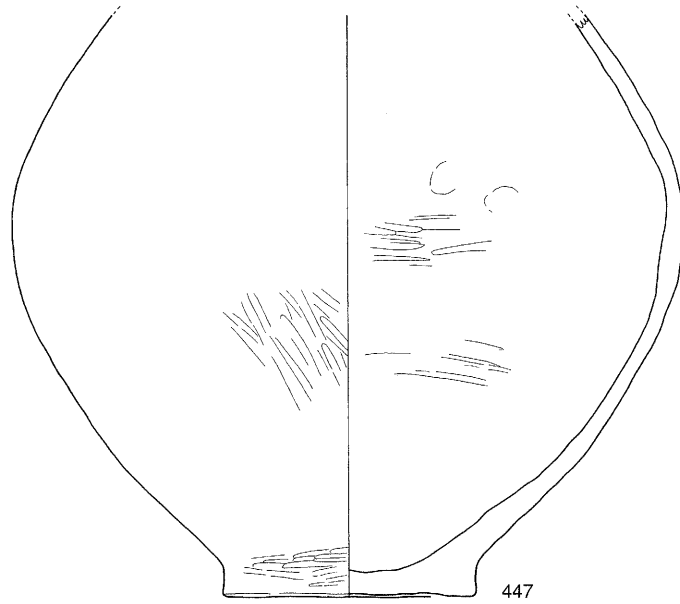


图113 SK8出土遺物実測図(9)

溝

SD 1 (図88) 4区から1区にかけて検出された直線的に走る東西溝で、幅0.8m程度、総長60mにわたって検出されたが、溝底が凹凸をなし、最深部でも0.1m程度の深さしかないので、随所に途切れる部分があり、3区では遺存していなかった。

SD 1 出土遺物 (図114)

壺 (451) 充填によって成形された平底で、外面は底面にいたるまで磨かれている。内面には焼成剥離痕が目立つ。

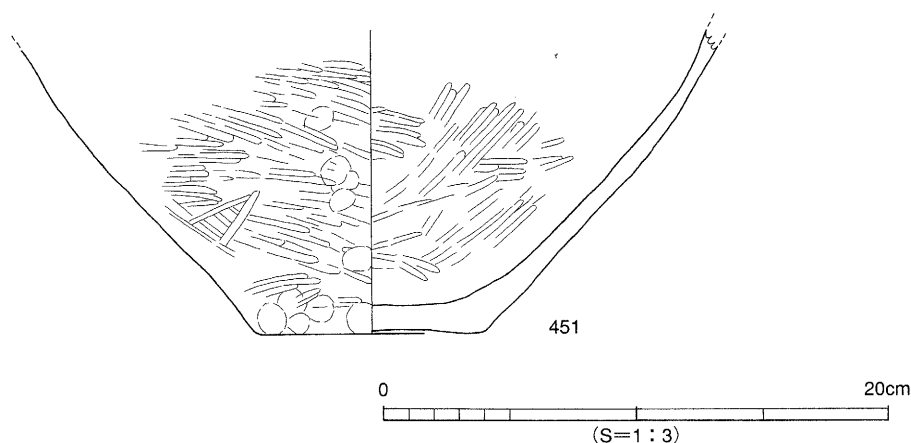


図114 SD1出土遺物実測図

性格不明遺構

S X 1 (図115) 土坑S K 4の北東2m付近で検出された集石遺構で、掘り込みを伴わない。石材には被熱した砂岩が多く、これらの石材の上に載ったり、間に落ち込んだ状況で弥生土器片が出土している。

S X 1 出土遺物 (図116~119)

甕 (452~456) 452は、折り曲げの口縁部を持つ破片で、22.0cmに復元される口径を胴部最大径が上回る器型となる。頸部には2条の平行沈線を引き、その沈線間を横長の刺突文で埋めている。内面はよく磨かれている。453・454も口縁部折り曲げの甕で、こちらは口径が胴部径を凌ぐものである。453では、面を持った口端部を刻み、頸部に2条の沈線文を施している。454の口端部には刻み目はなく、頸部施文は3条の沈線文となっている。底部455は僅かな窪み底、456は低い上げ底で端部に面を持ち、端面全体で接地する。

壺 (457~483) 457~462は口頸部の片で、形態的には459、461のようにあまり大きく開かないものと、その他の比較的開くものがあるが、そのいずれもが頸部に何らかの施文を持つ。沈線を施されるものには457、458、460があり、うち460の口縁部内面には注口状に成形された内面突帯が貼り付けられている。459、461、462は頸部に幅広で薄い突帯を貼り付け、その突帯上に沈線を引くものである。

頸部片463は、連鎖状刻み目突帯を貼り付け、その上下の部位に多条沈線を巡らせるものである。464~467は胴部片で、胴部にも先の頸部463と同様の施文を持つ465がある。464は、胴部上位にヘラ

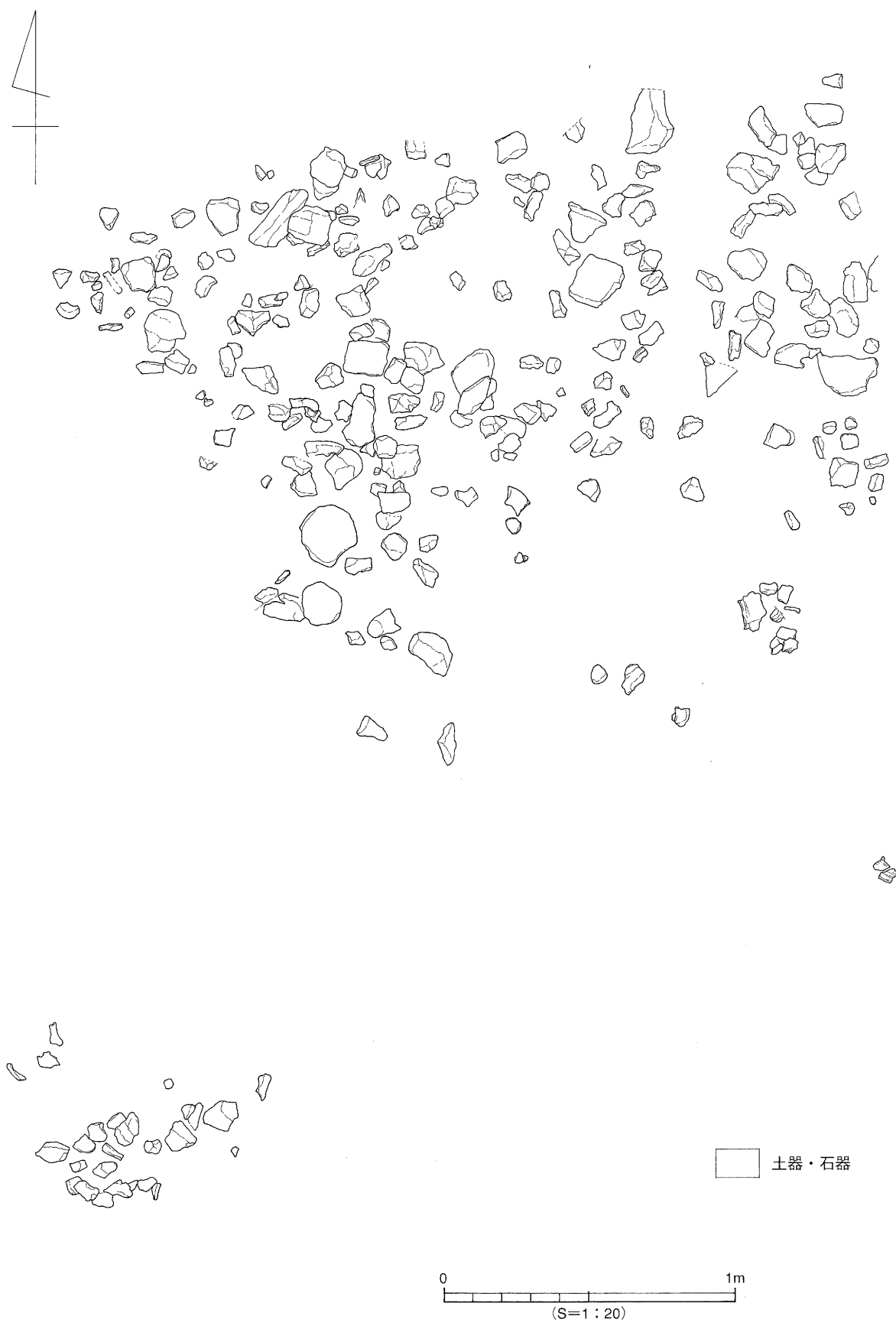


図115 SX1遺物出土状況図

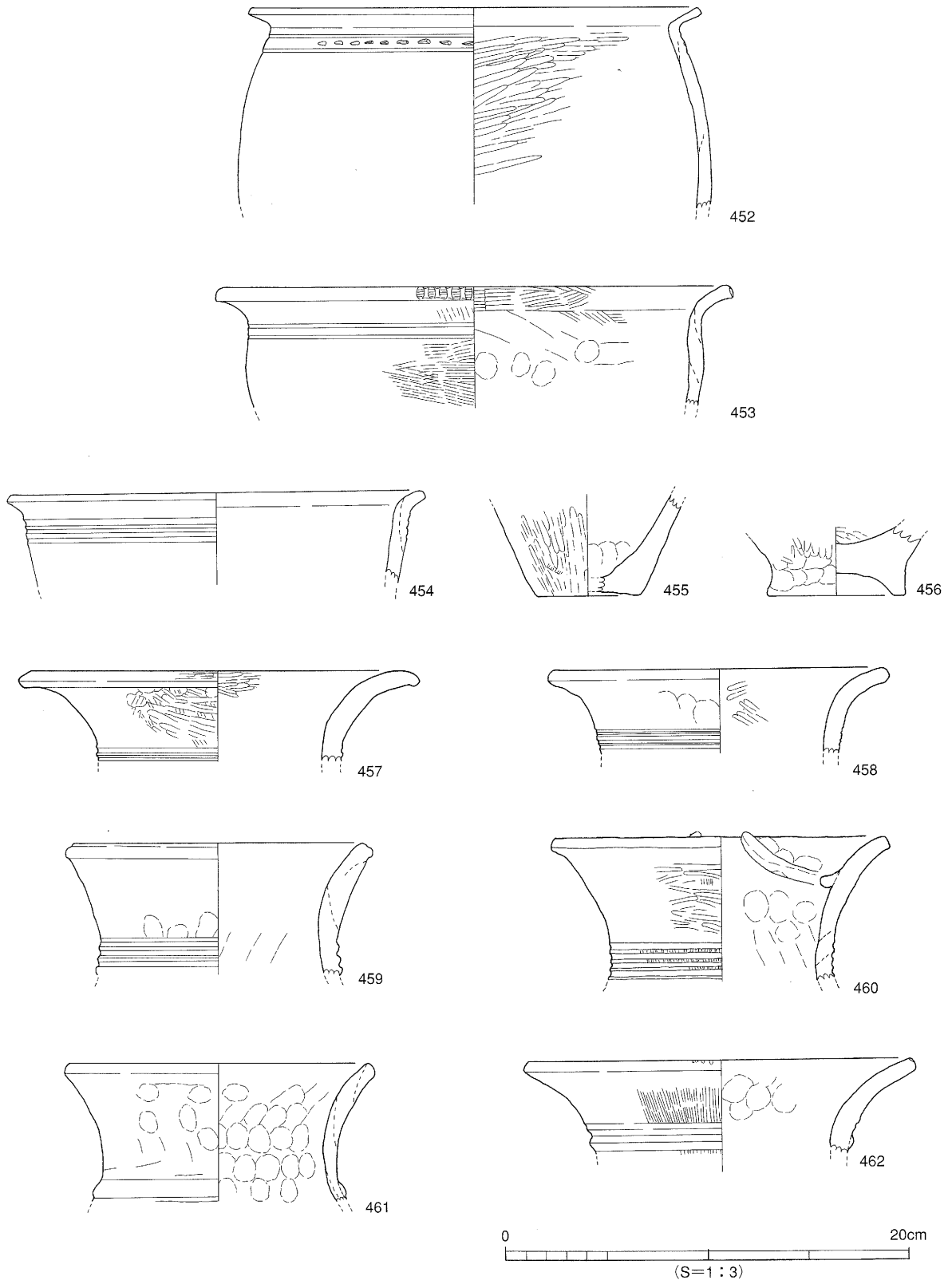


図116 SX1出土遺物実測図(1)

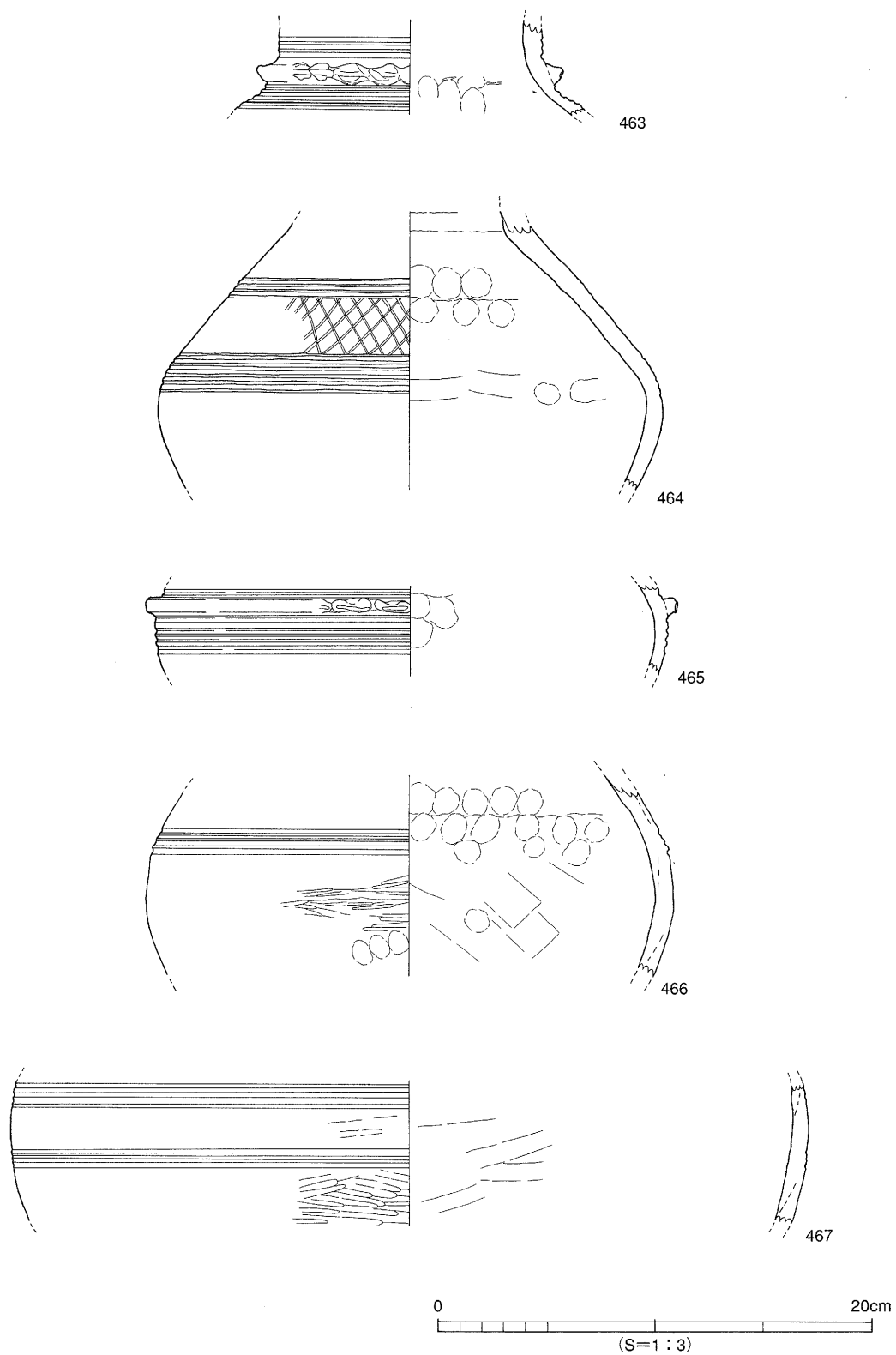


图117 SX1出土遺物実測図(2)

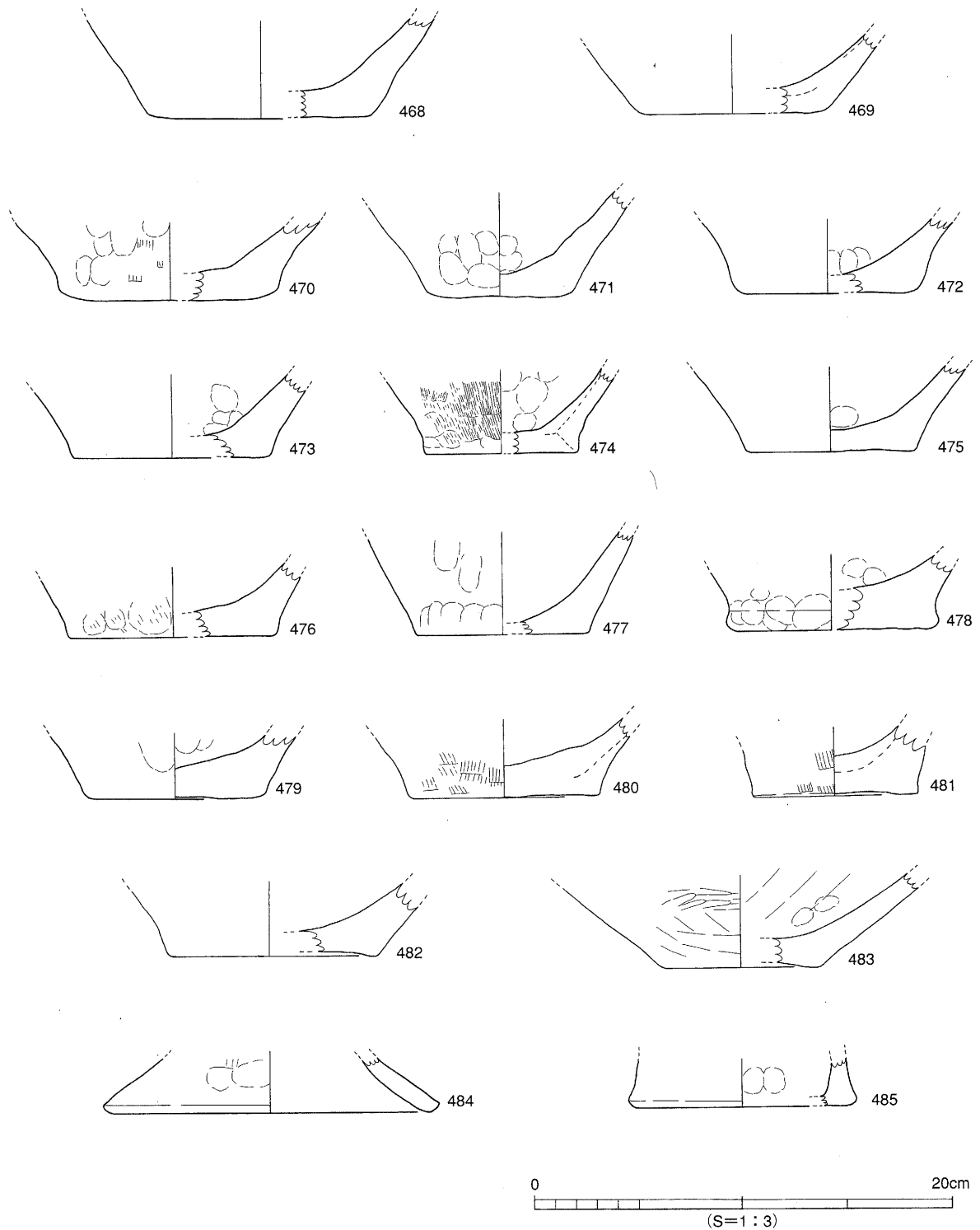


图118 SX1出土遺物実測図(3)

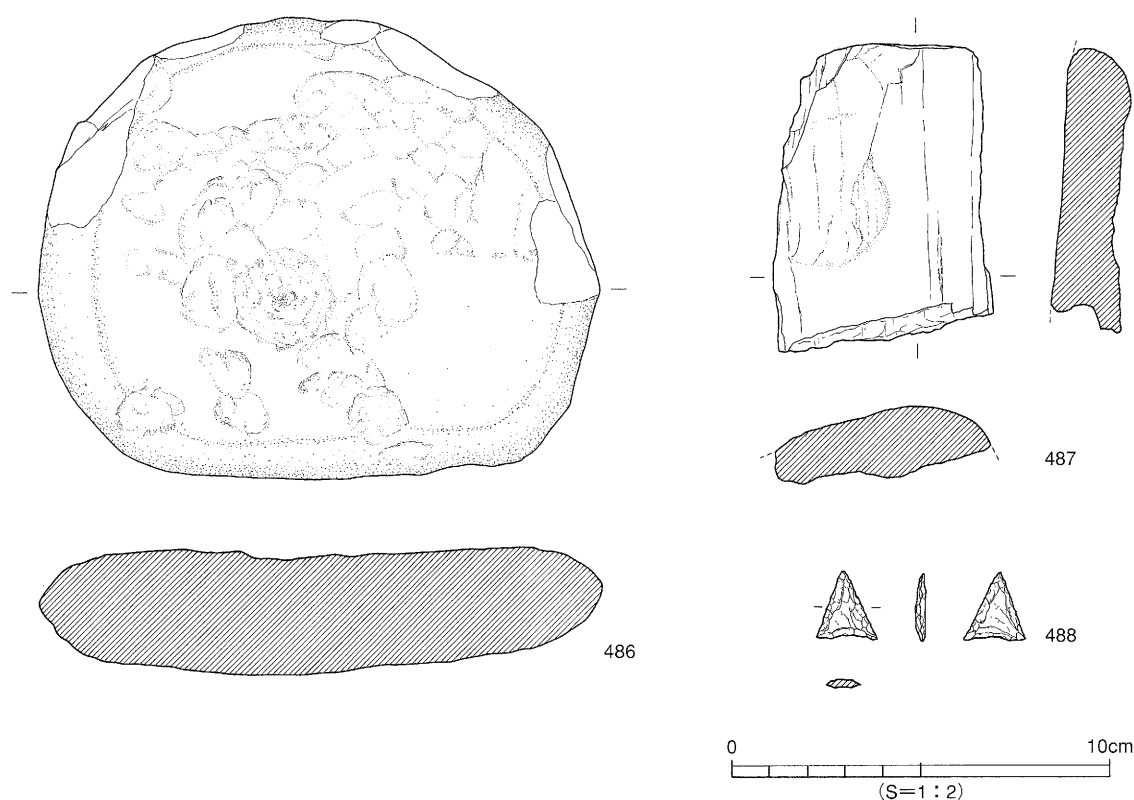


図119 SX1出土遺物実測図(4)

描沈線文と斜格子文を組み合わせた施文を持つ。468～483は底部片で、すべてが平底となっている。

蓋 (484) 裾端部の片、径15.2cmを測る。

ジョッキ形土器 (485) 底部の小片、復元底径10.0cm。

窪み石 (486) 扁平な砂岩の転石の片面と側縁の一部を使用している。

石 斧 (487) 緑泥片岩を素材とした伐採斧の身部の破片と考えられる。

石 鏃 (488) サヌカイト製の打製石鏃、凹基の二等辺三角形、重さ0.55gを量る。

S X 2 (図120) S K 3の南西に接するように検出された掘り込みで、2×2m規模の不整形プランをなす。深さは最深部で、0.35m程度で、拳大から人頭大の石と弥生土器片がいずれも浮いた状態で出土している。

S X 2 出土遺物 (図121)

甕 (489～492) 489～490の口縁部はいずれも折り曲げによるもので、端部に刻み目を持つ。489、490は端面全面を刻むが、491では下端部だけの刻みとなっている。すべてに施される頸部平行沈線文は、順に2本、3本、491では4本あるいはそれ以上となっている。492は平底の底部片、立ち上がりの状態から甕のものと思われる。

壺 (493～497) 口頸部3点のうち、493は頸部に貼り付けた突帯上に平行沈線をひくもの。494、495の口端面には1条の沈線が巡る。494では口縁部内面突帯を持ち、頸部には沈線が2条まで確認できる。底部2点は、やや突出した平底である。



図120 SX2遺物出土状況図

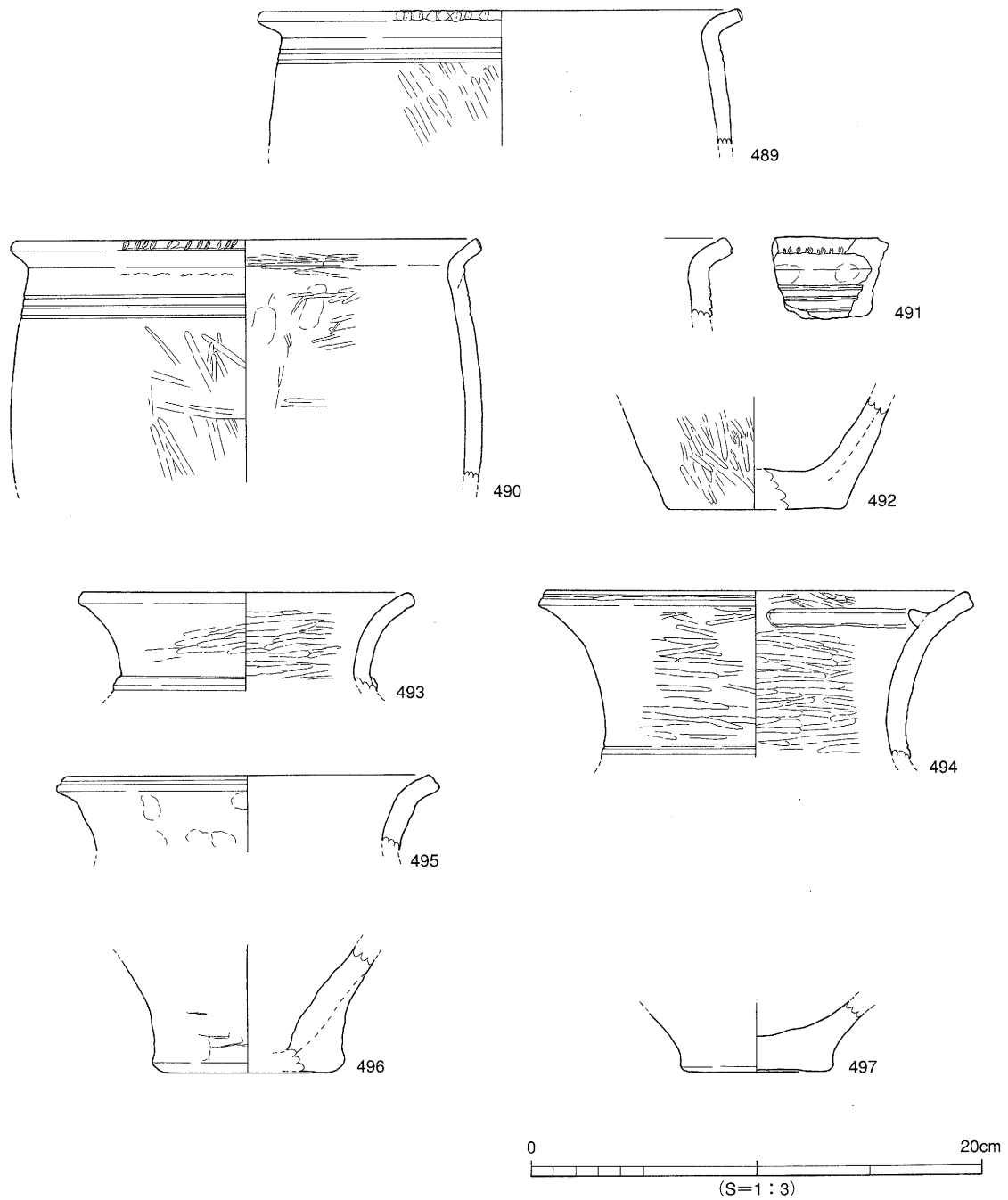


図121 SX2出土遺物実測図

柱 穴

以上のような土坑や溝のほか、検出された170基あまりの柱穴のうち約140基が黑色シルトを埋土に持つ弥生時代の柱穴であるが、建物等想定できる位置関係での検出はみられなかった。

柱穴出土遺物 (図122)

甕 (498~500) 498は、S P 86出土の折り曲げ口縁を持つ口頸部片で、無文のものである。499は、S P 26の出土、2条の頸部沈線と口端面の刻み目を持つ。口縁部は折り曲げによっている。500も499

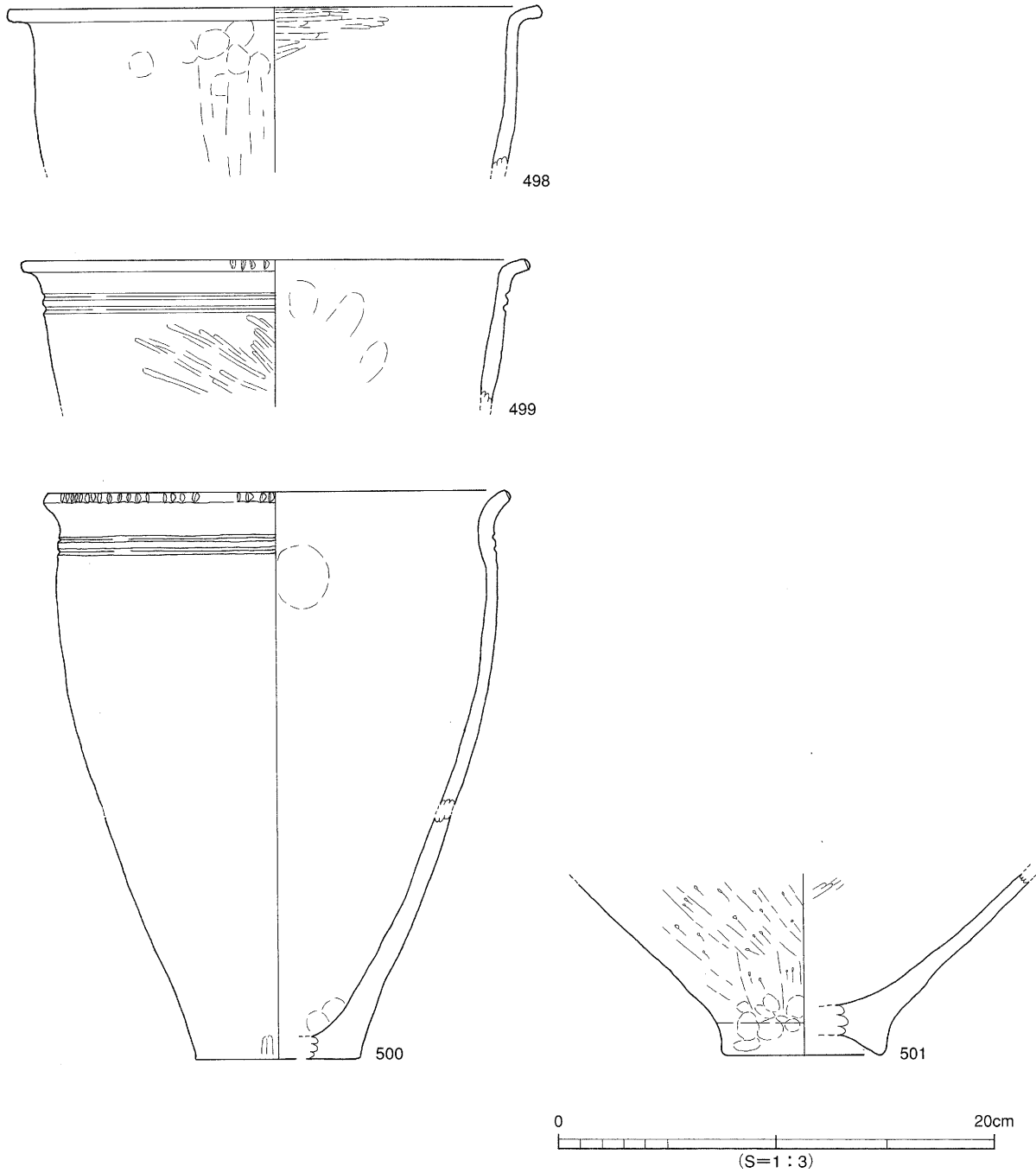


図122 柱穴出土遺物実測図

と同様の上半部と、同一個体と考えられる下半部を図上復元したもので、S P 55の出土である。口径20.8cm、底径7.4cm、推定器高26.0cmに復元された。

縄文土器深鉢（501） 上げ底形態の粗製深鉢底部片で、外面には粗い縦方向の削り痕を残している。S P 124からの出土。

b. 時期不明の遺構

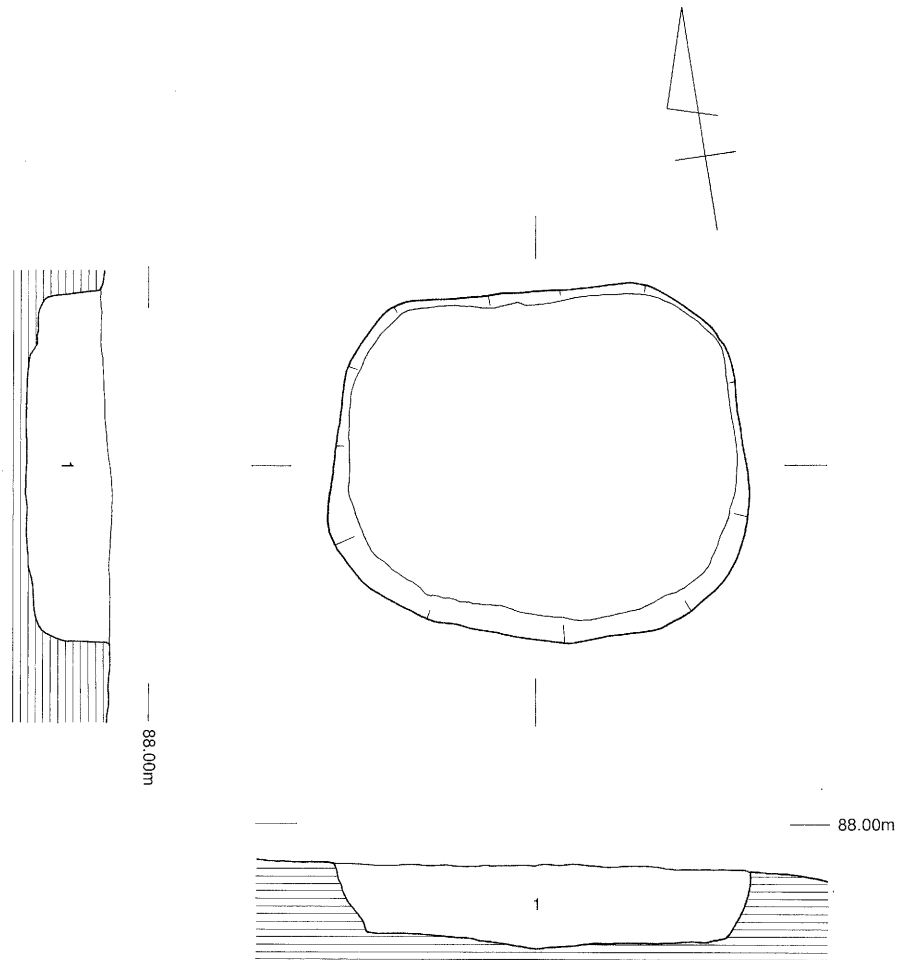
土 坑

S K 1 (図123) 調査区北西部で検出された、1.1×1 mのほぼ隅丸方形、深さ0.2mの土坑である。

埋土は弥生時代の包含層である黒色～暗褐色シルト質の土に地山の黄色シルトをブロック状に含んだ土で、削平以前に存在した弥生包含層上位から地山にかけて掘りこんで、その土で埋め戻したものであると思われる。弥生甕片を1点出土しているのはそのためであろう。遺構そのものの時期を示す遺物の出土はないが、他の調査区の例からすると、古代～中世の遺構と考えられる。

S K 1 出土遺物 (図124)

甕 (502) 口端部に刻み目、頸部に3本平行沈線文を持つ口頸部片、復元口径20.0cmを測る。



1. 含黄色シルトブロック暗褐色シルト

S K 2 (図125) 1.5×1.0mの隅丸長方形土坑で、0.1m程度の深さしか遺存していない。埋土は、S K 1と同様で、遺物の出土はない。

柱 穴

黒色シルトを埋土にせず、灰色系の土で埋まった柱穴が、調査区東寄りでは30基近く検出されたが、

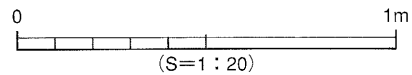


図123 SK1測量図

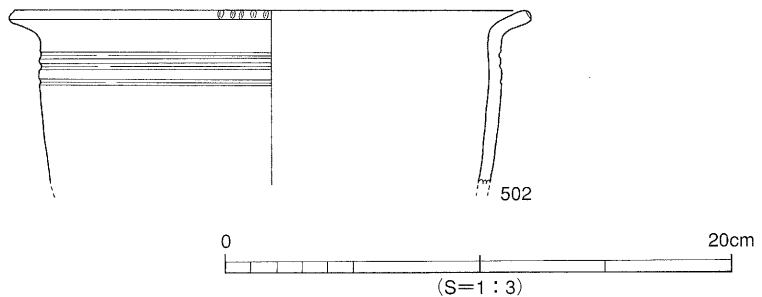


図124 SK1出土遺物実測図

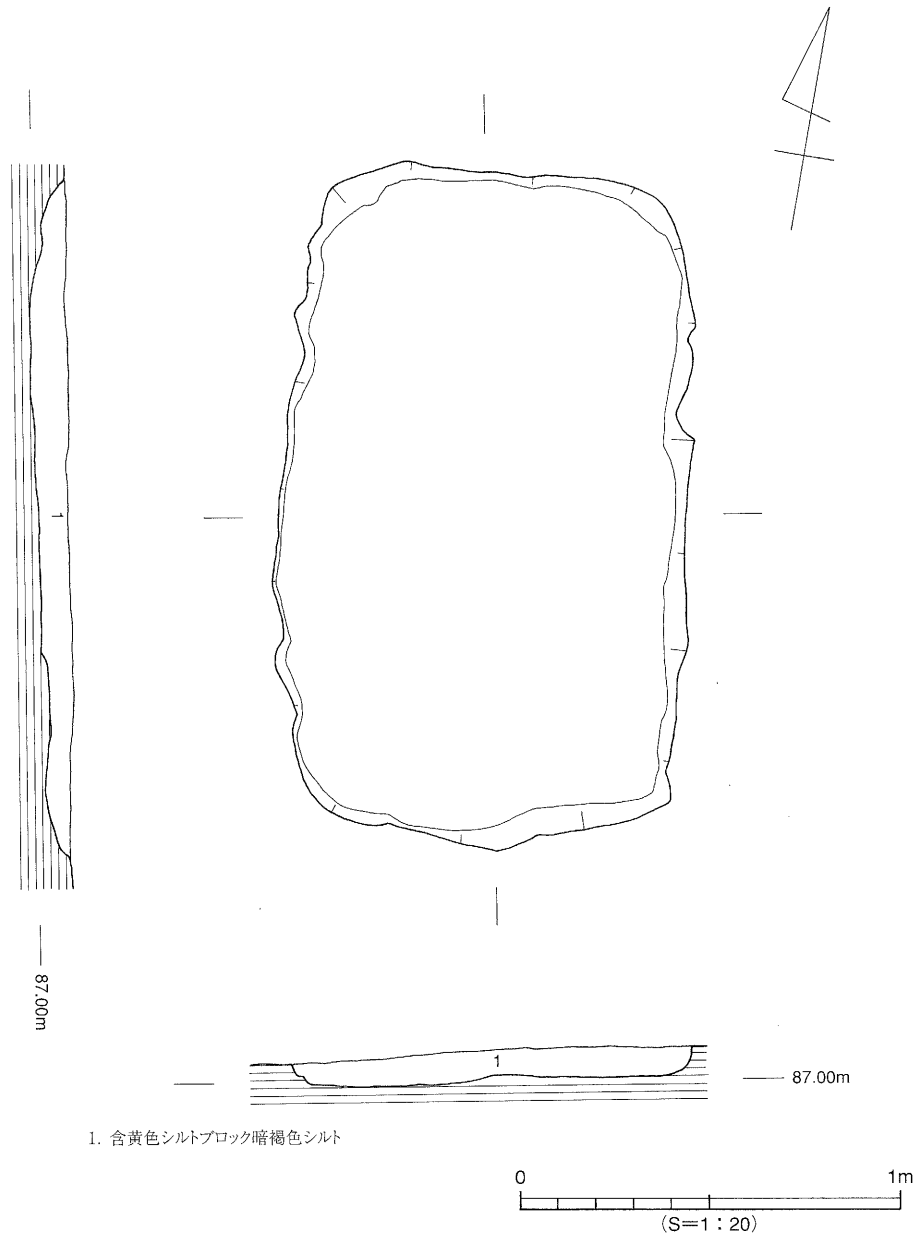


図125 SK2測量図

弥生期の柱穴同様、建物等を復元できる配置での検出はない。

c. 包含層出土の遺物 (図126~132)

縄文土器

浅鉢 (503~505、507) 503は、波状をなす口縁の小片で、穿孔が2箇所を確認できる。割れ口に確認される穿孔から、焼成前のものであることがわかる。504は、所謂リボン状口縁をなす浅鉢の

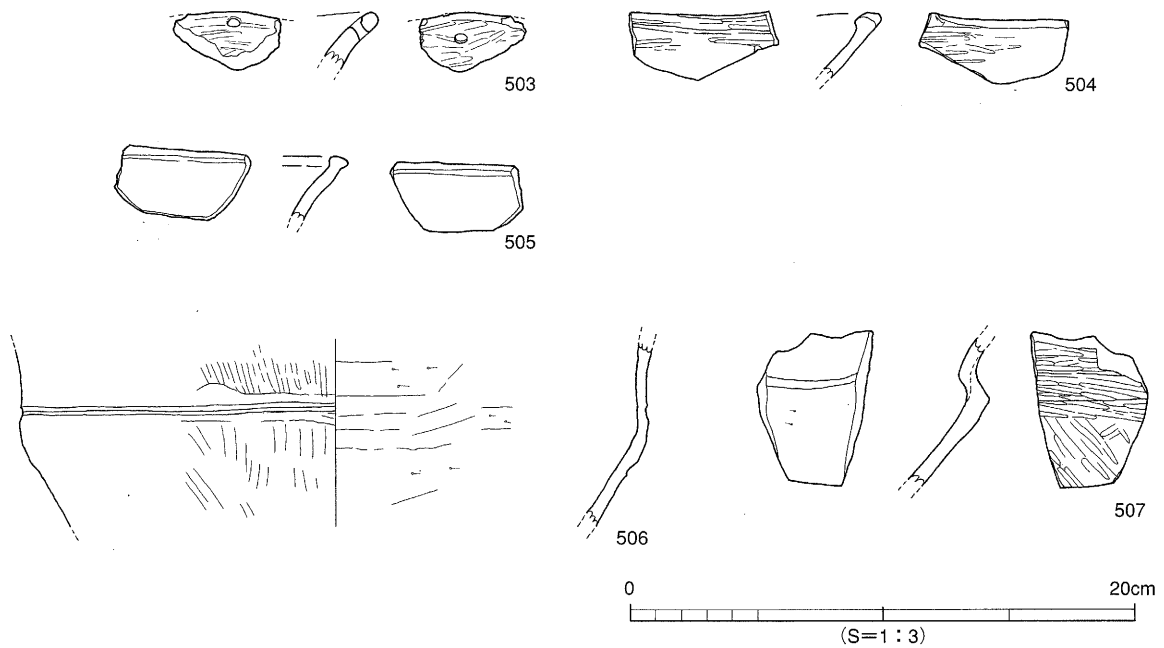


図126 包含層出土遺物実測図(1)

口縁部片である。505は、口端部が玉縁状に肥厚するもので、これら3点は晩期中葉のものと考えられる。507はやや遡って、晩期前葉。屈曲する胴部の破片で、内外面の磨きからすると、浅鉢のものであろう。

深 鉢 (506) 屈曲する胴部の破片、屈曲部の外面に1条の沈線が巡る。外面には二枚貝条痕が残り、内面は条痕をナデ消している。晩期前～中葉のものであろう。

弥生土器

甕 (508～520) 508～511は口頸部の片、いずれも折り曲げ口縁で、口端部に刻み目を持つ。508は頸部に3本の沈線、509、511も3本の沈線文を施されている。510の頸部には5本からなる平行沈線文、これを下った位置に本数は不明ながら、やはり平行沈線文帯を配し、この沈線文帯間にやはり複数条の沈線で山形文を描いている。512、513は頸部に近い破片である。512には沈線文とその下位に爪形の列点文、513には沈線とその下位に竹管文が2段にわたって施されている。底部は平底のものが多く中であって、517は若干の窪み底である。

壺 (521～563) 521、524は大型壺の口縁部で、うち521は1/6で図示してある。どちらも、SK4出土の376と同様の器型になるものと思われる。521の口端面には沈線を1条巡らせ、これに直交して切るような刻み目を施している。頸部には沈線が1条巡る。522の口端面にも沈線と刻み目による施文があるが、こちらの刻みは端部の上下端に施され、沈線を切るようにはなっていない。頸部には沈線の部分で折れている。内面には断面三角形の突帯が貼り付けられている。522、523も前二者のように大型ではないが、器型は同様の広口短頸になるものと思われる。522の口端面には沈線2条と刻み目による施文があり、523は沈線のみ施文となっている。525～535は口径20cm以下の口縁部・口頸部片である。530の頸部には、削り出した突帯上に引かれた平行沈線が3本まで確認できる。531は、頸部沈線の部分で折れている。532の口端面には沈線が巡る。535・536は口縁部内面突帯を持つもの

である。537・538は、これらのものより下る、中期中葉の口縁部片で、537では下方に肥厚させた中窪みの口端面にヘラ描斜格子文を描く。また538では、下方に垂下させて拡張した口端面や口縁部上面に櫛描文を施している。口縁部上面には斜格子文、口端面のものは鋸歯文と考えられる。539は、やや長頸になる頸部で、低く削りだした突帯上に5本、あるいはそれ以上の平行沈線を引き、この突帯直上に刺突列点文を施すものである。540は頸部下端から肩部の片で、肩部に5条、頸部に2条以上の沈線が巡っている。

541～550は、施文された肩部の破片で、541～543は刺突あるいは刺突とヘラ描き沈線を組み合わせたもの、544はヘラ描沈線と重弧文、545～547はヘラ描沈線と斜格子文の組み合わせで、545ではさらに連鎖状刻み目突帯を貼り付けている。548は櫛描沈線とコンパス文に刺突の組み合わせ、549・550

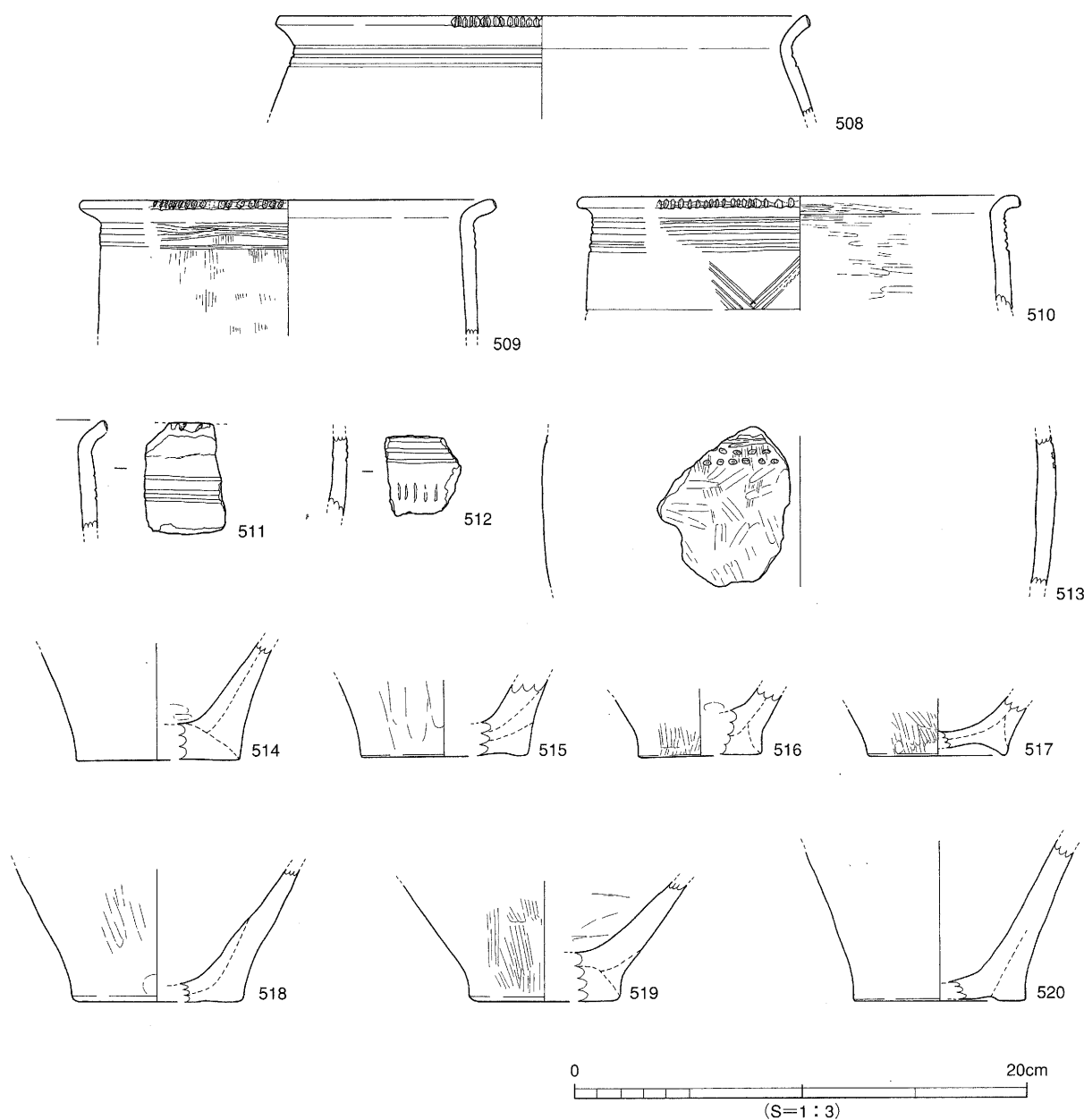


図127 包含層出土遺物実測図(2)

第 4 次 調 査

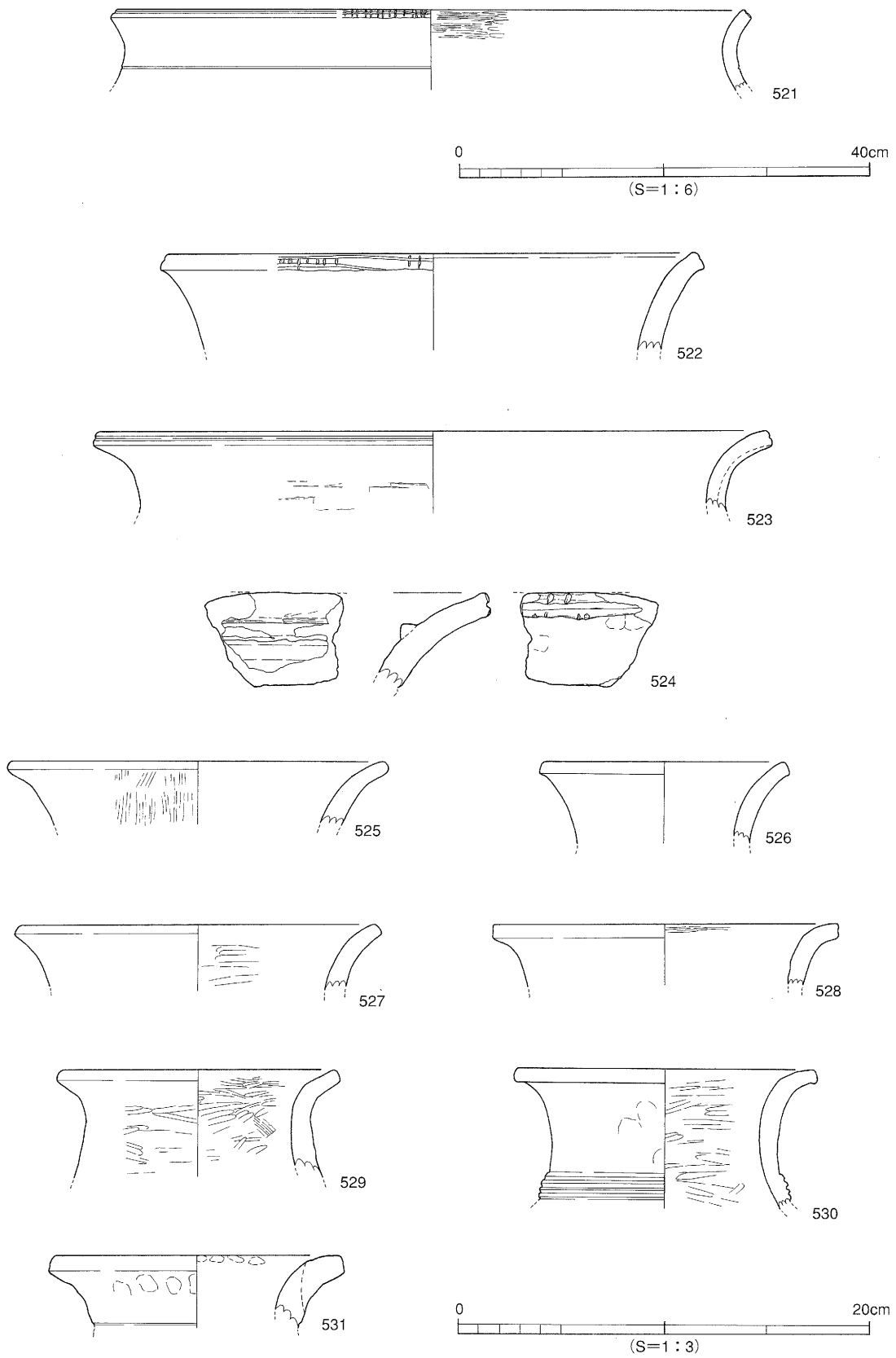


图128 包含層出土遺物実測图(3)

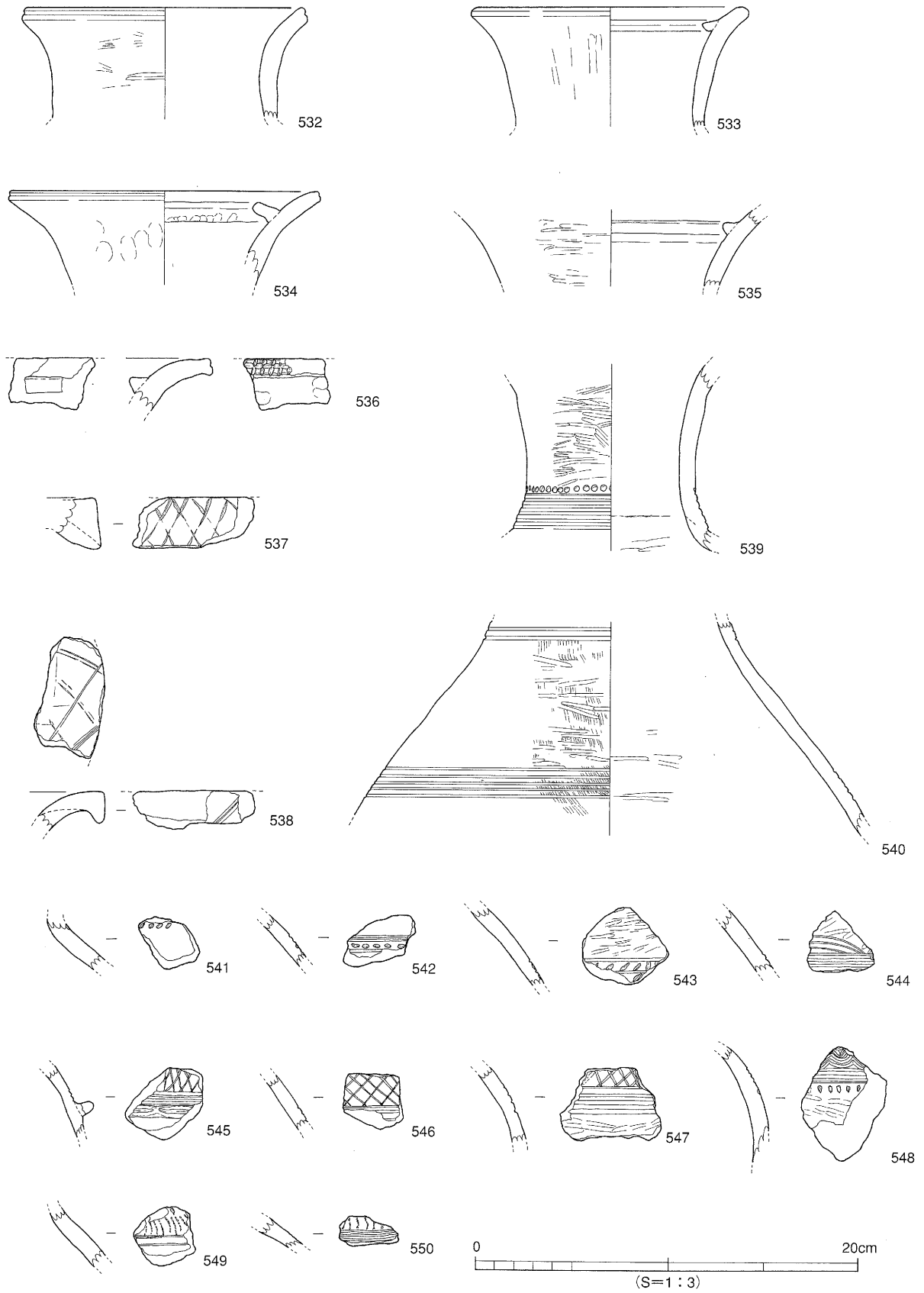


图129 包含層出土遺物実測図(4)

第 4 次 調 査

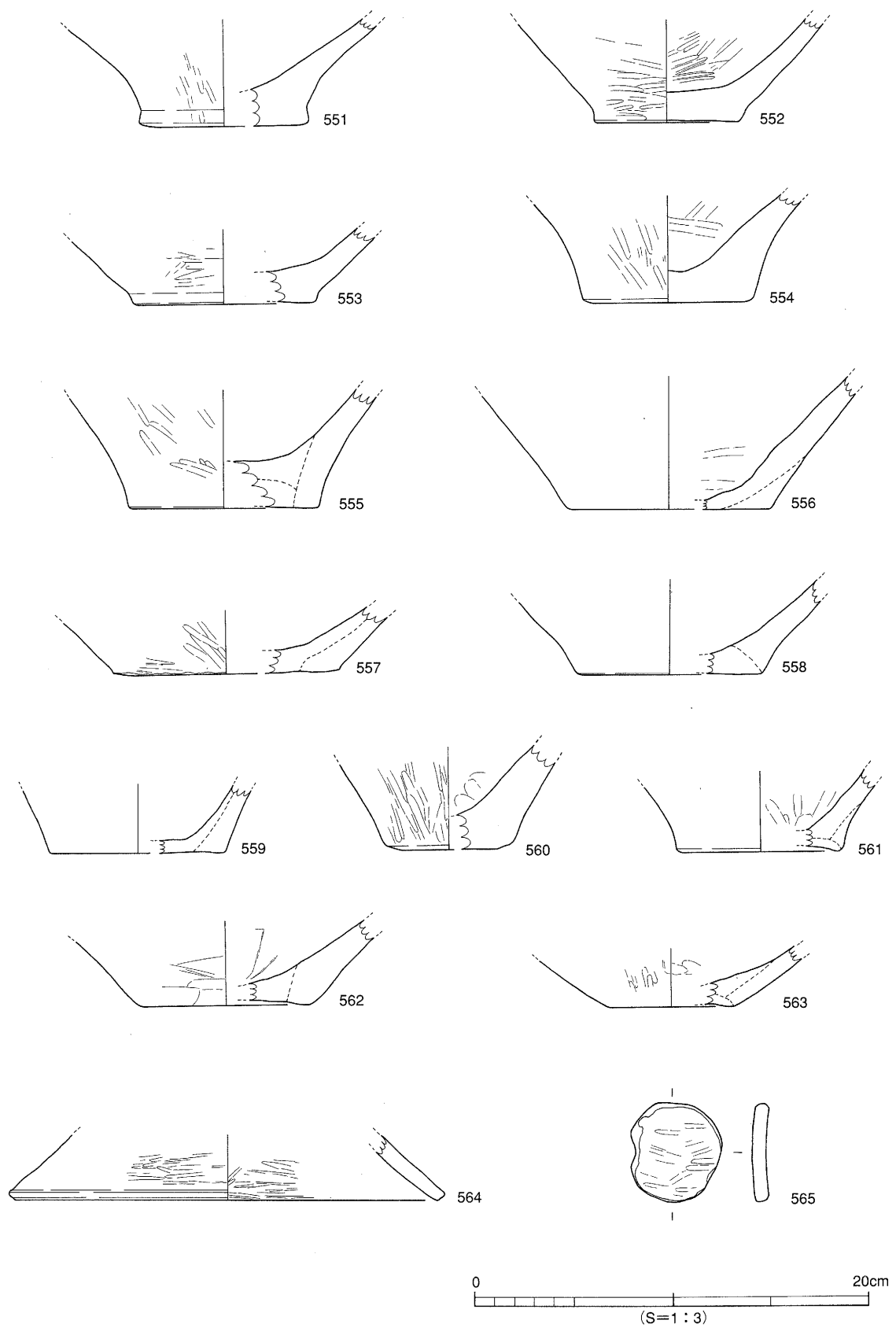


图130 包含層出土遺物実測図(5)

は櫛描沈線と貝殻刺突文を組み合わせたものである。551～563の底部はすべて平底で、その多くに充填の痕跡を観察することができる。

蓋 (564) 裾部の破片、直径20.2cmに復元できる。内外面を磨かれているが、特に内面の磨きは入念である。

土製円板 (565) 一部欠けているが、直径4.7～5 cm、厚さ0.7cmを測る。凸面の磨きの状況から、甕の底部付近の破片を転用したものと考えられる。

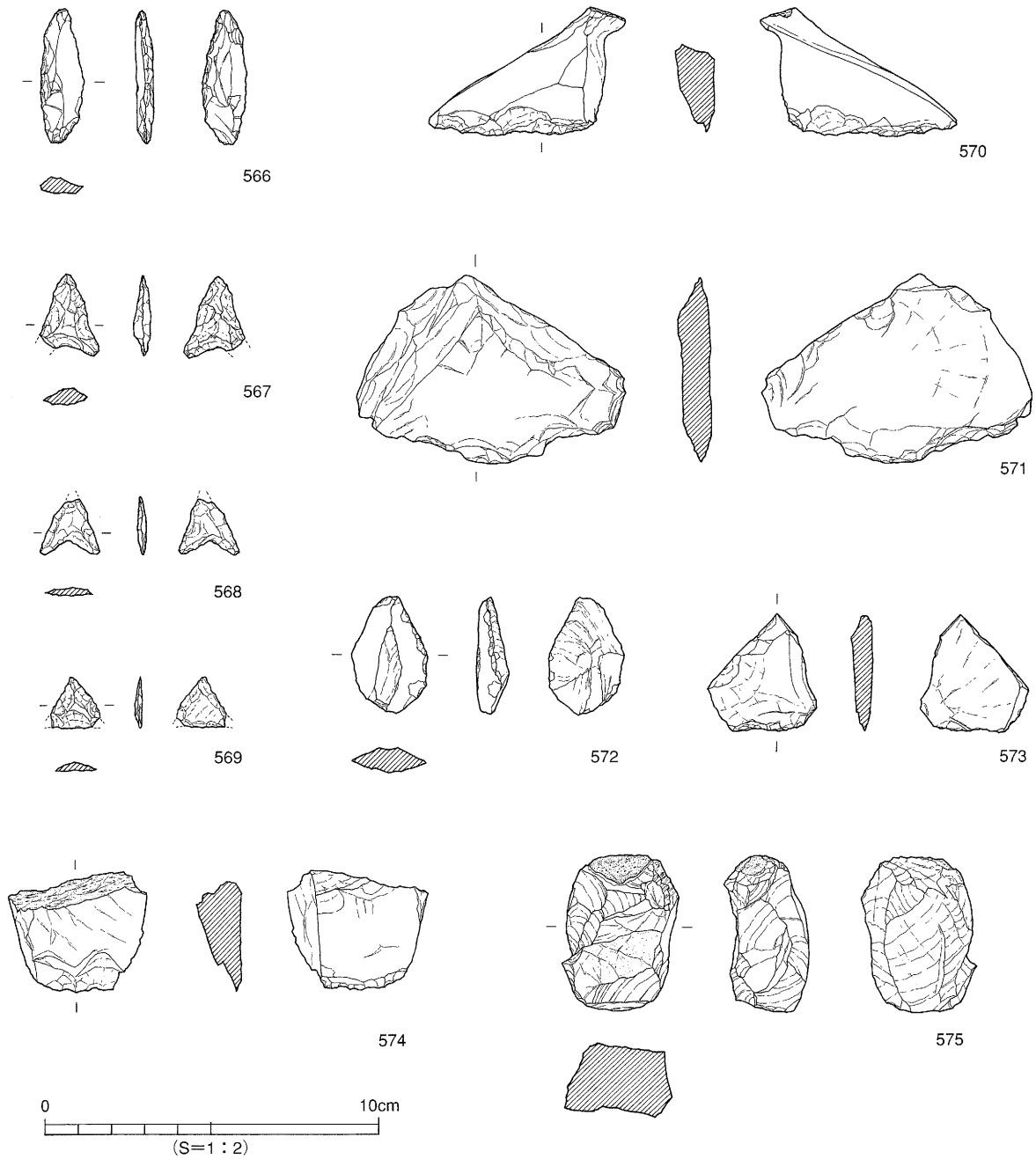


図131 包含層出土遺物実測図(6)

石器・石製品

ナイフ形石器 (566) 赤色チャートを素材とする両縁調整型のナイフ。全長4.05cm、最大幅1.31cmを測る。

石 鏃 (567~569) すべてサヌカイト製の打製石鏃。567・568は凹基無茎鏃で、567は逆刺の一方を欠き、568では尖端部を欠いている。569は平基無茎鏃基端部の両端を欠く。

スクレーパー (570~572) 570、571はサヌカイトの不定形な剥片の片縁を、572では、片縁の一部を調整している。

剥 片 (573・574) サヌカイトの剥片2点。

石 核 (575) 青色チャートの石核で、部分的に自然面を残している。

石 斧 (576) 緑泥片岩製、小型の柱状片刃石斧の完形品である。全長10.5cm、幅0.85cm、厚さ2.10cmと身幅の狭い器型で、前後の主面は磨かれているが、側面に磨きはみられない。

石庖丁 (577) 挟り入り方形石庖丁の側端挟り上位の部分から背部と考えられる破片、緑泥片岩

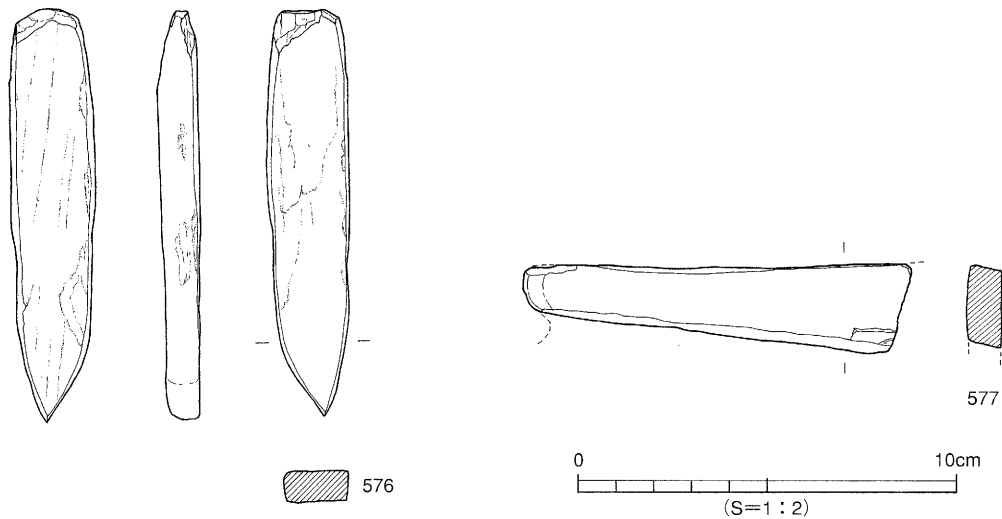


図132 包含層出土遺物実測図(7)

を素材とする。

古墳時代以降の遺物 (図133)

須恵器

杯 (578~581) 復元口径14.6cmを測る578の蓋は、外面の天井部と口縁部の境に鈍い段のような稜を持つ。579は底部切り離し後未調整、580とともに他の器種の可能性もあるが、ここでは一応坏で扱っておく。581は、円板高台の底部片で、やはり外底面に切り離し痕が残っている。

土師器

椀 (582) 復元口径14.0cmの口縁部~体部の片である。

杯 (583・584) 円板高台の杯底部片 2 点。

皿 (585~587) 小皿 3 点のうち587は灯明皿で、内面に煤が付着して残存している。586の外底面には回転糸切り痕が観察できる。

瓦 器

椀 (588) 和泉型瓦器椀の口縁部小片。

陶 器

壺 (589) 16世紀頃の備前焼壺口頸部片。肩部に櫛描波状文が 2 条施されている。

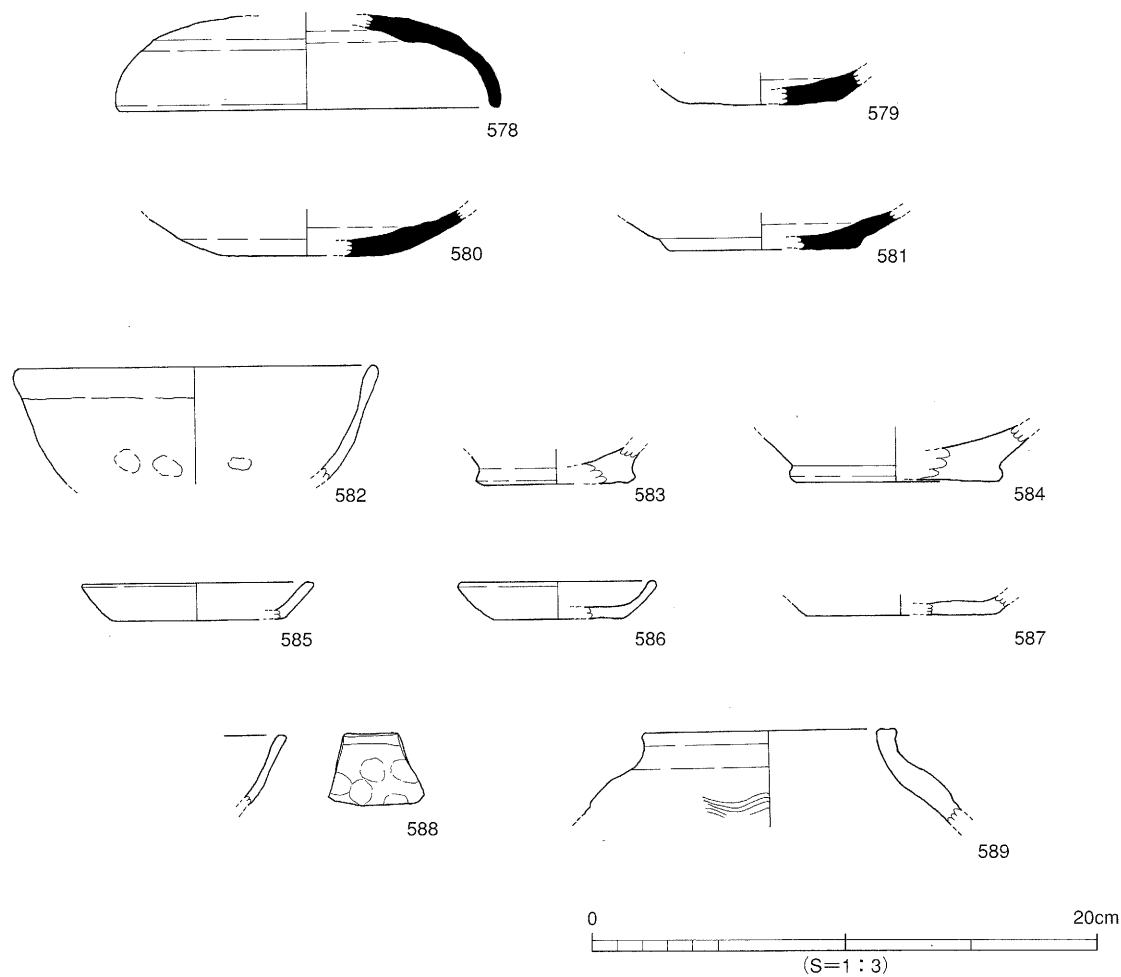


図133 包含層出土遺物実測図(8)

3. 小 結

今回の調査では、主として弥生時代の遺構・遺物が多く検出された。弥生時代の遺構としては、土坑や溝・柱穴がある。それでは、ここでそれぞれの遺構が弥生時代でも、どの段階に属するものかを考えておこう。土坑ではSK4・SK8でまとまった遺物の出土がみられた。これらの土坑出土の土器は共通した特徴を持っている。壺においては頸部や胴部に数条のヘラ描沈線や削り出し突帯、ある

いは連鎖状刻み目突帯などを持ち、口縁部内面に突帯を持ったりするものが多く、また、外面にヘラ磨きを多用するといった特徴を持つ。甕は壺に比べると出土量が少ないが、頸部にヘラ描の多条沈線をもつものが多い。その他の遺構出土のものも、これらに準じる特徴を持つ。したがって、弥生時代の遺構は、すべて前期末～中期初頭といわれる時期の遺構とすることができる。これらの遺構のうち、破損土器が多量に入れられたSK8のようなものは廃棄土坑と考えてよからう。しかし、SK4はそのありかたにおいて、廃棄土坑とはいっても特別な性格がありそうである。SK4からは、多くの被熱痕跡を有する土器とともに、石器としてこれもまた被熱した収穫具や調理具、あるいは炭化種実や焼土といった遺物が出土している。土坑自身には被熱した痕跡がないことから考えると、この土坑は食物調理にかかわる道具や容器類、あるいは食物残渣を廃棄した廃棄土坑と考えるのが最も考えやすい。さらに直近のSX1で、やはり被熱痕跡を持つ多量の石で構成される集石遺構と、これにからむ弥生土器の出土があることからみると、SK4とSX1はお互いに関連しあう遺構とみるべきであろう。そうすると、通常火にかけることのない壺類が被熱した状態で多数廃棄されていることも含めて考えると、SX1において、火を用いた食物祭祀のようなことを行った後、この祭祀に用いた道具類をSK4に埋納したものと理解するのが適当と思われる。さて、弥生時代前期末～中期初頭といえ、この調査地の西方約0.7kmの地点で調査が行われた「古市遺跡1区」の自然流路から出土した第10層の一括遺物がある。流路出土とはいえ、ローリング痕跡の希薄なこれらの遺物に伴う集落は、調査地東方一帯の本調査地を含めた上流部よりも、むしろこの流路北側直近の段丘上に想定されており、実際、段丘上では該期の土坑等の検出がみられている。したがって、「古市遺跡1区」の遺構や遺物と同時期とはいえ、その距離や周辺状況から、本調査の遺構・遺物と直接関わる集団は、やはり本調査地近隣に存在したものと考えたほうがよからう。

第4章 自然科学分析

1. 上苅屋遺跡3次調査における樹種同定

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、上苅屋遺跡3次調査において6区SE（井戸）1より出土した木材9点である。

(3) 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 写真1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅう状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、20細胞高をこえる。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用されている。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 写真2

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木であり、材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 写真4

横断面：小型で多角形の道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は50本前後である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、2?5細胞幅の細長い紡錘形であり鞘細胞のあるものが多い。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属は日本各地の日当たりのよい山野に自生する落葉低木である。株立ち状になり高さ1~3m、枝は分枝繁密、幹枝とも中空である。庭園樹、境界樹として栽培され、材は木釘などに用いられる。

タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科 写真5

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

(5) 所 見

同定の結果、上莉屋遺跡3次調査出土の木材は、モミ属1点、マツ属複維管束亜属4点、ヒノキ2点、ウツギ属1点、タケ亜科1点であった。マツ属複維管束亜属は薪、木屑、杭?に使用されている。ヒノキは曲物底板、桶底板に使用されている。モミ属は桶底板、ウツギ属は杭?、タケ亜科は桶のタガに使用されている。マツ属複維管束亜属には二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがある。いずれも温帯域の中下部に広く分布する樹種であり、周辺地域から供給できる木材である。

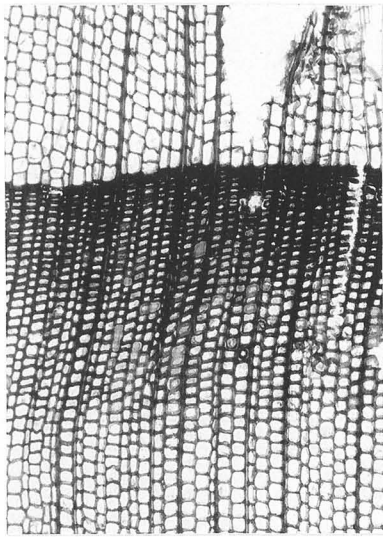
【参考文献】

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242
 中川重年（1994）検索入門 針葉樹，保育社

表1 上苜屋遺跡3次調査における樹種同定結果

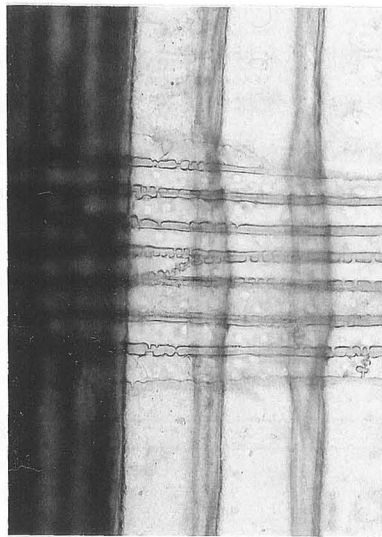
試料番号	器種	出土遺構・層位	備考	結 果 (学 名 / 和 名)	
No.1	曲物底板	SE(井戸)1		<i>Chamaecyparis obtusa Endl.</i>	ヒノキ
No.2	桶底板	SE(井戸)1		<i>Chamaecyparis obtusa Endl.</i>	ヒノキ
No.3	桶底板	SE(井戸)1		<i>Abies</i>	モミ属
No.4	薪	SE(井戸)1	焼けこげ有り	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
No.5	木屑	SE(井戸)1	切面有り	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
No.6	薪	SE(井戸)1	焼けこげ有り	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
No.7	桶 タガ	SE(井戸)1	竹製	<i>Bambusoideae</i>	タケ亜科
No.8	杭?	SE(井戸)1	切面有り	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
No.9	杭?	SE(井戸)1	切面有り	<i>Deutzia</i>	ウツギ属

上苅屋遺跡3次調査の木材 I

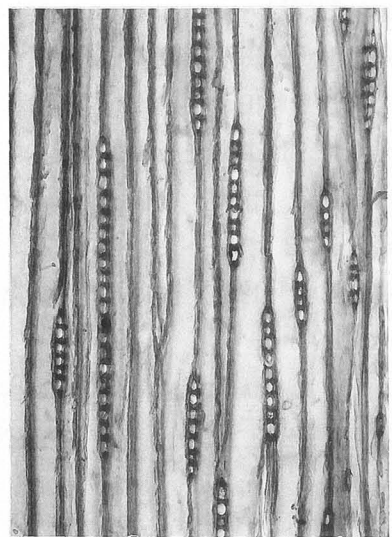


横断面 ————— : 0.5mm

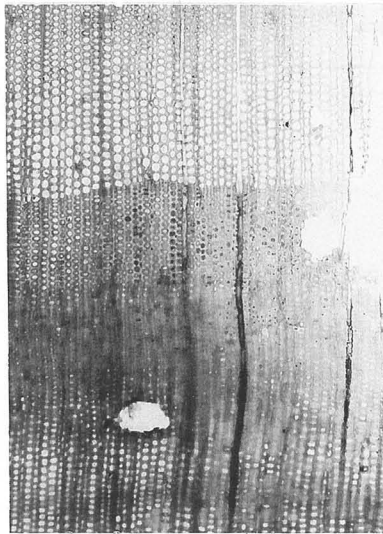
1. No. 3 桶底板 モミ属



放射断面 ————— : 0.1mm

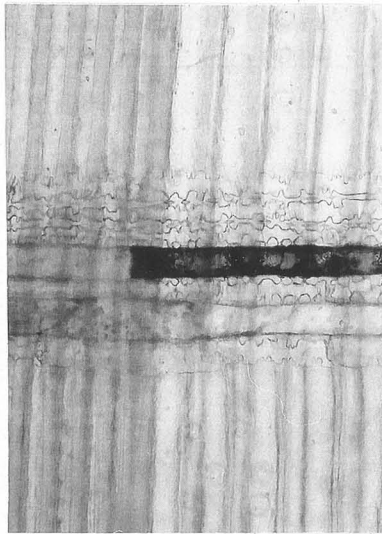


接線断面 ————— : 0.2mm

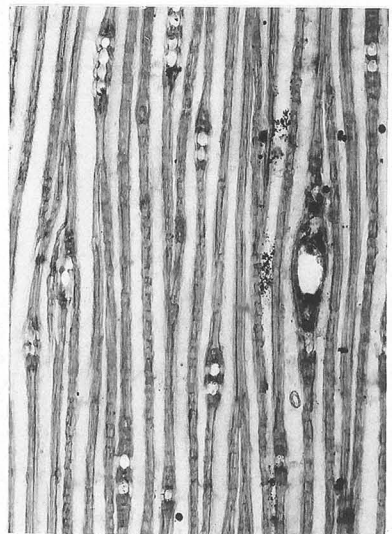


横断面 ————— : 0.5mm

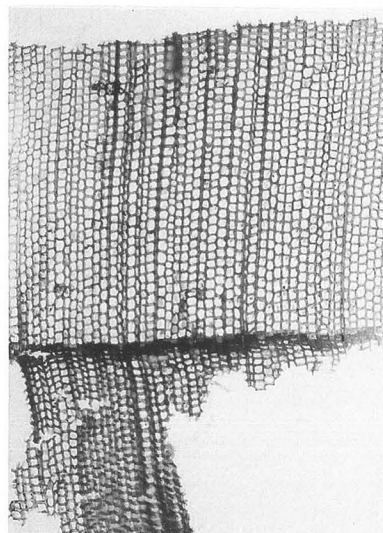
2. No. 6 薪 マツ属複雑管束亜属



放射断面 ————— : 0.1mm

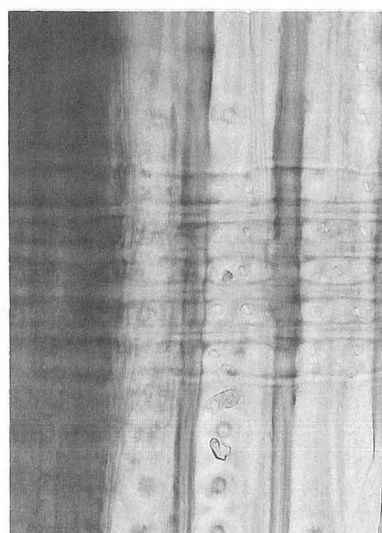


接線断面 ————— : 0.2mm

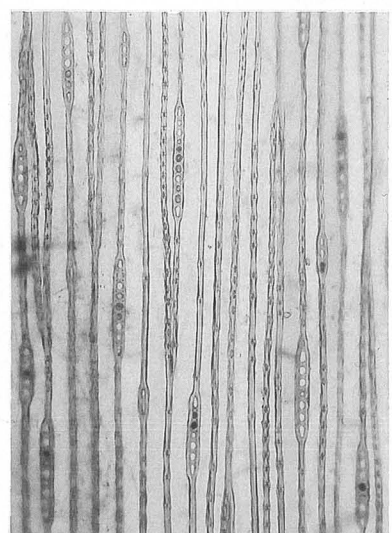


横断面 ————— : 0.5mm

3. No. 2 桶底板 ヒノキ

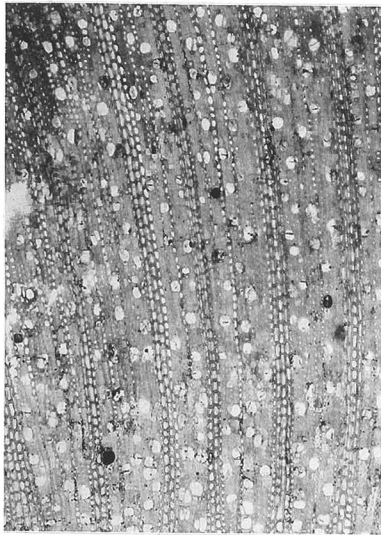


放射断面 ————— : 0.05mm



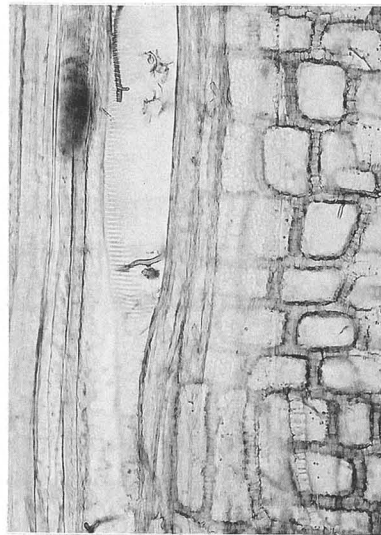
接線断面 ————— : 0.2mm

上苜屋遺跡3次調査の木材 II

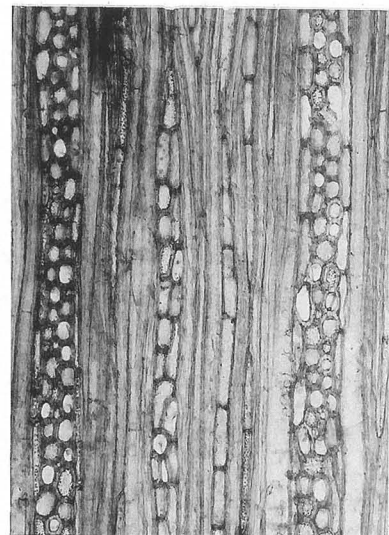


横断面 ————— : 0.5mm

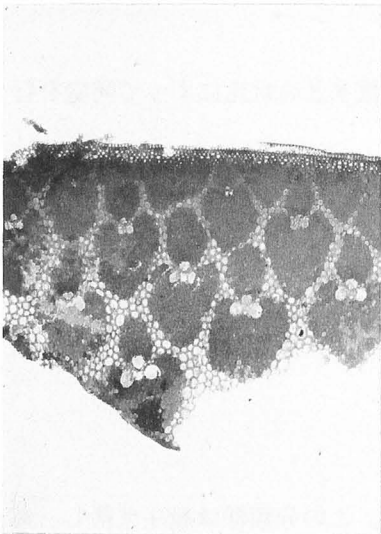
4. No. 9 杭? ウツギ属



放射断面 ————— : 0.1mm

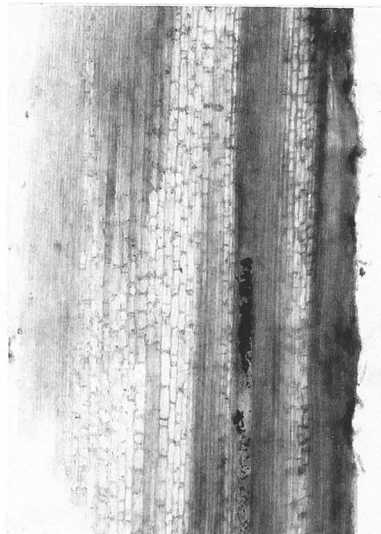


接線断面 ————— : 0.2mm

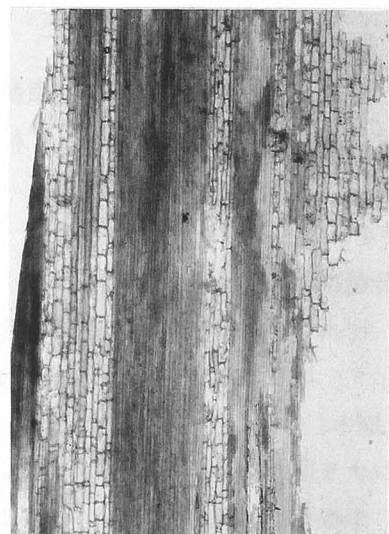


横断面 ————— : 0.5mm

5. No. 7 桶 タガ タケ亜科



放射断面 ————— : 0.5mm



接線断面 ————— : 0.5mm

2. 上苜屋遺跡 4 次調査における種実同定

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(2) 試料

試料は、水洗選別済みのサンプルで、1区SK4より検出された試料1, 試料2, 試料3, 試料5, 試料7, 試料11, 試料12の7点、1区SK4出土土器付着の堆積物より検出された試料13, 試料14, 試料15の3点、1区SX1より検出された試料16、2区SK5より検出された試料17、4区SK6より検出された試料18、1区包含層より検出された試料19の計14点である。

(3) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4) 結果

分類群

樹木2、草本2の計4が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

コナラ属 *Quercus* 子葉 (炭化) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は穀斗欠落し、属レベルの同定までである。

イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* Sieb.et Zucc. 種子 (炭化) ミカン科

種子は黒褐色で楕円状球形を呈す。側面に長く深いへそがある。表面にやや大きな網目模様がある。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 果実 (炭化) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

ササゲ属 *Vigna* 種子 (炭化) マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現時点ではこれらを識別することは困難であるが、アズキに類似する。

種実群集の特徴

1) 1区SK4, 試料1

イヌザンショウ、ササゲ属が同定された。

2) 1区SK4, 試料2

イヌザンショウ、イネ、ササゲ属が同定された。

3) 1区SK4, 試料3

イヌザンショウ、イネ、ササゲ属が同定された。

4) 1区SK4, 試料5

コナラ属、イヌザンショウ、イネ、ササゲ属が同定された。

5) 1区SK4, 試料7

コナラ属、イヌザンショウ、イネ、ササゲ属が同定された。

6) 1区SK4, 試料11

イヌザンショウ、イネ、ササゲ属が同定された。

7) 1区SK4, 試料12

ササゲ属が同定された。

8) SK4 出土土器、試料13

イヌザンショウ、ササゲ属が同定された。

9) SK4 出土土器、試料14

ササゲ属が同定された。

10) SK4 出土土器、試料15

イヌザンショウ、ササゲ属が同定された。

11) 1区SX1, 試料16

イネ、ササゲ属が同定された。

12) 2区SK5, 試料17

イネが同定された。

13) 4区SK6, 試料18

ササゲ属が同定された。

14) 1区包含層, 試料19

ササゲ属が同定された。

(5) 所見

同定の結果、上苜屋遺跡4次調査の1区SK4およびSK4出土土器から検出された炭化種実には、コナラ属、イヌザンショウ種子、イネ果実、ササゲ属種子であった。イヌザンショウは、人里周辺に生育する樹木で農耕が行われる弥生時代以降、集落域で多くなる。イネ、ササゲ属は栽培植物であり、イネは稲作の伝播で日本にもたらされ弥生時代以降よく出土する。一方、ササゲ属は縄文時代からは単独で出土し弥生時代にはイネと共に出土し中世にも栽培が盛行する。

【参考文献】

- 笠原安夫(1988) 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
南木陸彦(1991) 栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.

- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18-22.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.2-14.

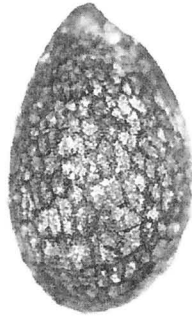
表2 上叡屋遺跡4次調査における種実同定結果

学名	分類群	和名	部位	1区SK4																		
				1	2	3	5	7	11	12	SK4出土器附着 土器No.3 土器No.4 土器No.5		16	17	18	19						
Arbor	樹木																					
<i>Quercus</i>	コナラ属		子葉(炭化) (破片)				1															
<i>Zanthoxylum schinifolium</i> S. et Z.	イヌザンショウ 草本		種子	18	19	96	105	1		10		3		6								
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ ササゲ属		果実(炭化) 子葉(完形) 子葉(半形) 子葉(破片)		1	4	4	2	1													
				53	70	170	161	51	74	20	4	4	35	14	107	25	3	3	3	1	1	
				222	310	1056	1178	472	484	199	+	+	+	+	+	+	4	4	3	+	+	
				+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	4	4	3	+	+	
Total	合計			293	400	1326	1449	526	569	219	42	7	127	5	3	26	1	1	1	1	5	
Unknown	不明炭化物																					5



1 コナラ属炭化子葉

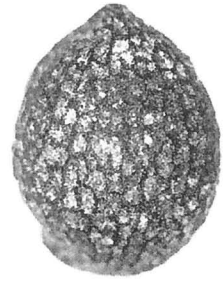
— 1.0mm



2 イヌザンショウ種子

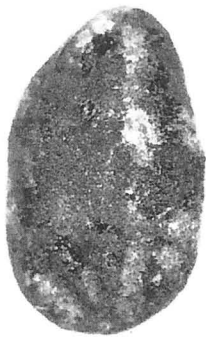


3 イヌザンショウ種子



4 イヌザンショウ種子

— 1.0mm



5 イネ炭化果実



6 イネ炭化果実



7 イネ炭化果実



8 イネ炭化果実

— 1.0mm



9 ササゲ属炭化子葉



10 同左



11 ササゲ属炭化子葉



12 同左

— 1.0mm

第5章 まとめ

今回の2次にわたる調査では、旧石器時代、縄文時代から近世までの各期の遺構や遺物が検出された。3次調査では大きく分けて、3時期の遺構が検出されている。ひとつは、13・14世紀以降の中世から近世までのもので、主に掘立柱建物と土坑、墓、井戸、溝からなる。ひとつは、古墳時代4、5世紀から古代のもので、検出されたのは竪穴住居、掘立柱建物、溝である。さらに、少なくとも弥生時代から存在し、8世紀頃には埋まってしまったと考えられる流路、こういったものが主なものである。4次調査では、弥生時代前期末あるいは中期初頭といわれる段階の土坑や、祭祀跡と思われる遺構が主なものであった。

旧石器と考えられるものは、4次調査でナイフ形石器1点が単独資料として出土した。この地域では、若干ではあるが古くより旧石器の採集例がみられ、今回の資料同様そのすべてが後期に属するものである。旧石器時代同様、縄文時代も遺構は検出されなかったが、早期や晩期の土器の出土があった。早期の土器の松山平野での出土はやはり数例の単独出土がみられるのみである。旧石器を含めてこのような出土の評価は難しいが、貴重な例であることにはかわりはない。晩期については、近隣の古市遺跡2次調査で土坑1基が検出されていたりするところから、この古市遺跡2次調査地を含めた調査地周辺のいづこかに確実に居住域が存在するものと考えてよからう。

弥生時代の遺構は、主に4次調査地で検出された。前期末から中期初頭の土坑や祭祀址と思われるものがすべてで、住居等は検出されなかったが、これらの遺構が集落を構成する一部であることは間違いなく、3次調査地の東端で検出された流路とその東の微高地上の4次調査地周辺に展開する集落といった景観が復元されよう。

古墳時代の遺構で確実なものは、3次調査4区で検出された竪穴住居と土坑といったところで、今回の2次、総延長約800mにわたる対象地の中でも、単発的な点としてしか確認されなかった。現況水田、水路、農道等を生かしながらの、道路幅ぶんの調査といったところの限界でもある。いずれにしても、該期の遺構は、この道路沿線ではむしろ調査地西方1～1.5km付近、路線西端近くの部分、下荇屋遺跡周辺で多く検出されており、濃淡でいえば西方に濃く、東よりの本調査地周辺では本来的に薄くなっているのかもしれない。

古代についても、状況は古墳時代同様である。過去の調査においても古市遺跡周辺で単発的な掘立柱建物等の検出があるのみで、現在のところ点として存在しているにすぎない。

過去の路線の調査と様相を異にしているところは、中世以降の遺構が比較的多く検出されたことである。掘立柱建物を中心に溝、柵、井戸、墓、畑等集落を構成する要素のほとんどが揃っている。これらのすべてが一時期に同時併存していたものでももちろんないが、周辺域を広範囲に調査できる機会ができれば、集落の構造・変遷等、詳しい情報が得られることは確実といえよう。

写真図版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85mm他
フィルム	白黒	プラスXパン・ネオパンSS・アクロス	
	カラー	エクタクロームEPP・RDPⅢ	

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマー S 240mm F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒 プラスXパン・ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキーMD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4. 製版 写真図版175線
印刷 オフセット印刷
用紙 マットコート
製本 アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』 vol.1～15 『報告書制作ガイド』

[大西 朋子]



1 ~ 4 区遺構検出状況
(西より)



1 区遺構検出状況
(西より)



2 区遺構検出状況
(西より)



3 区 遺 構 検 出 状 況 (東 よ り)



4 区 遺 構 検 出 状 況 (南 東 よ り)



1～4区遺構完掘状況（西より）



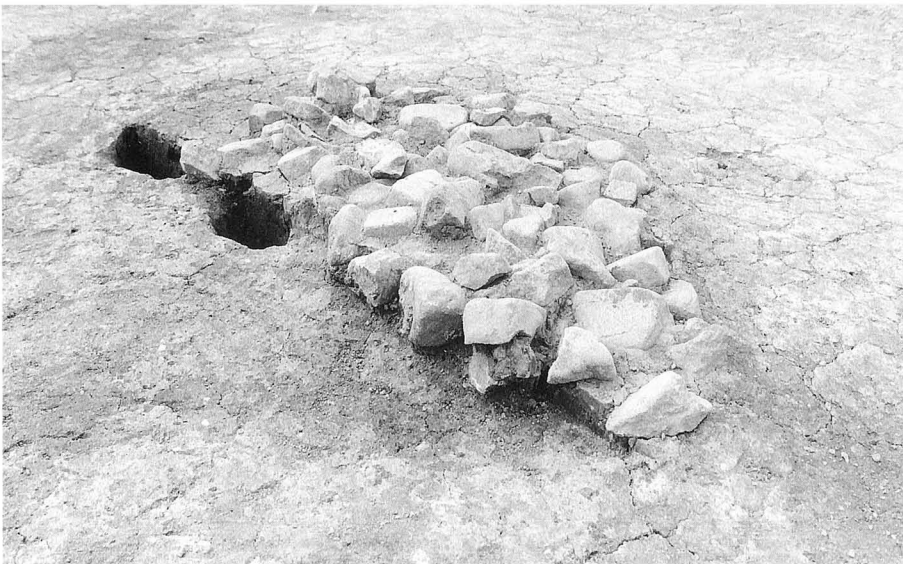
1区遺構完掘状況（南西より）



1 区倒木 1 土層断面
(南東より)



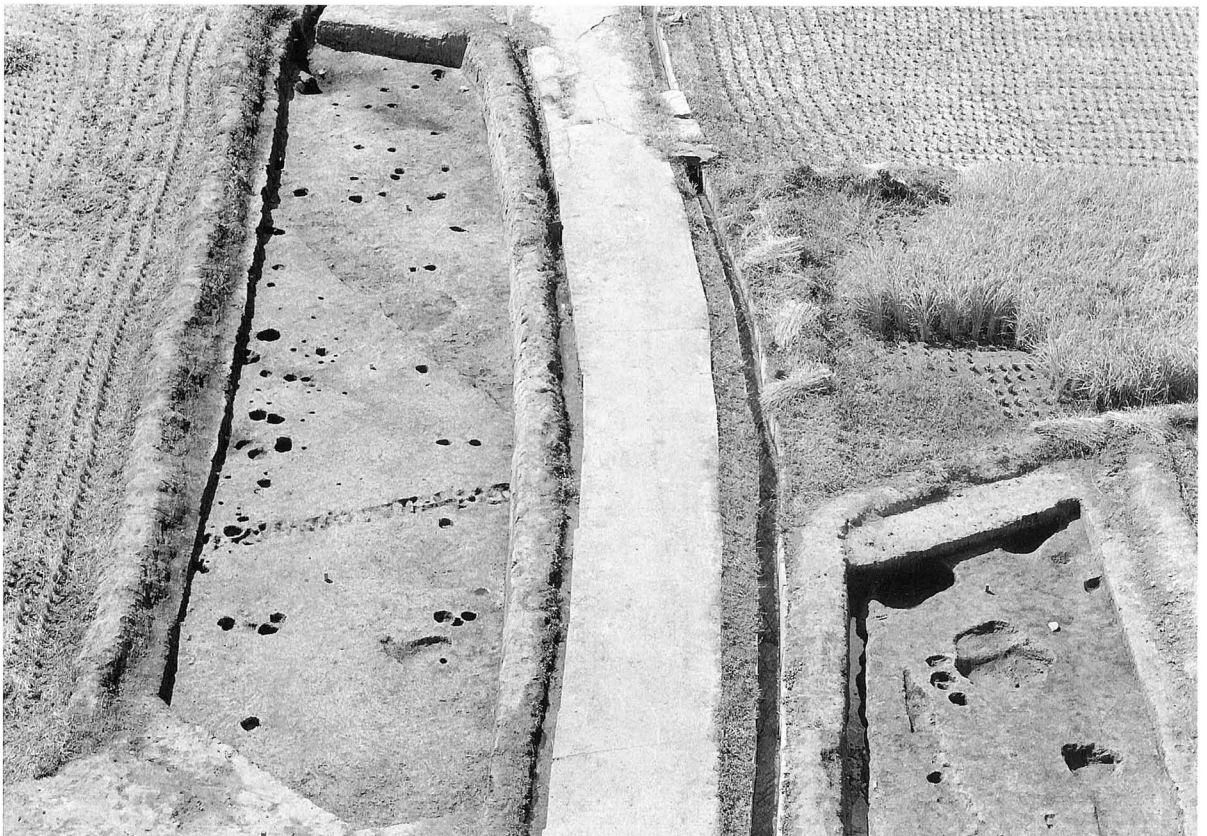
2 区積石 1 検出状況
(北より)



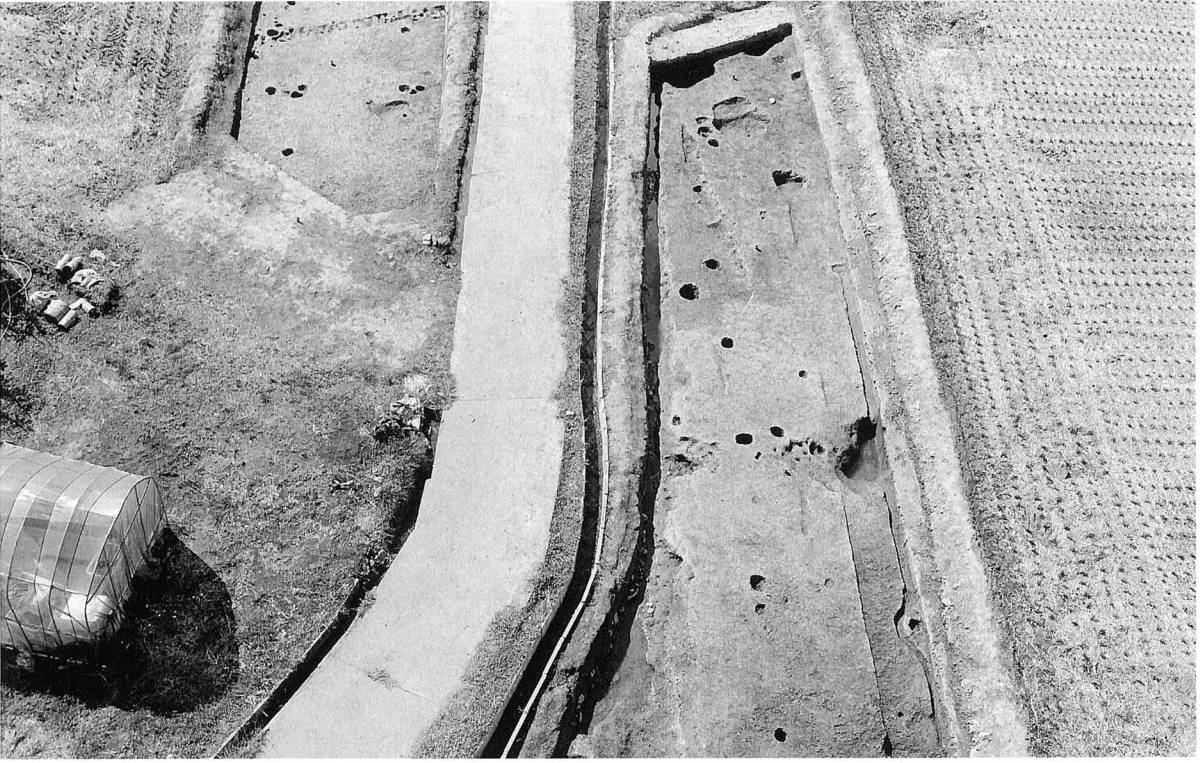
2 区積石 1 土層断面
(南東より)



2区遺構完掘状況（北西より）



3区遺構完掘状況（東より）



4区遺構完掘状況（東より）



4区SB1完掘状況（東より）



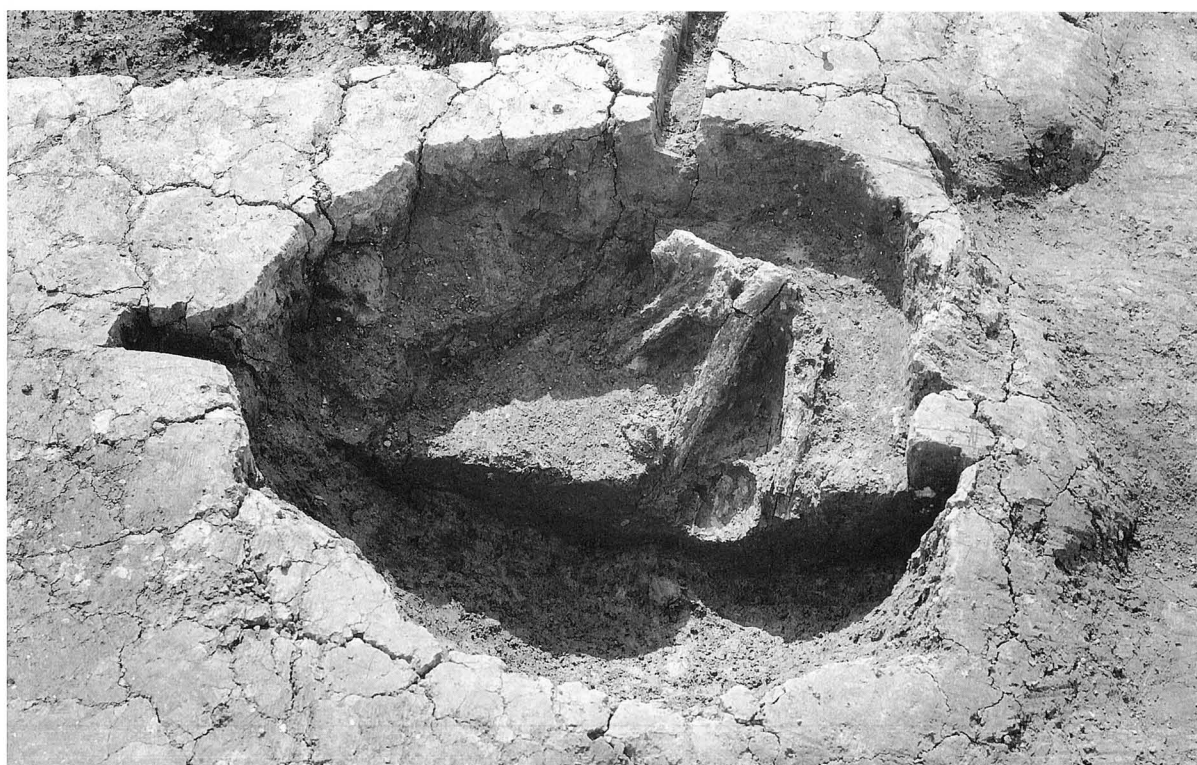
5区遺構検出状況（西より）



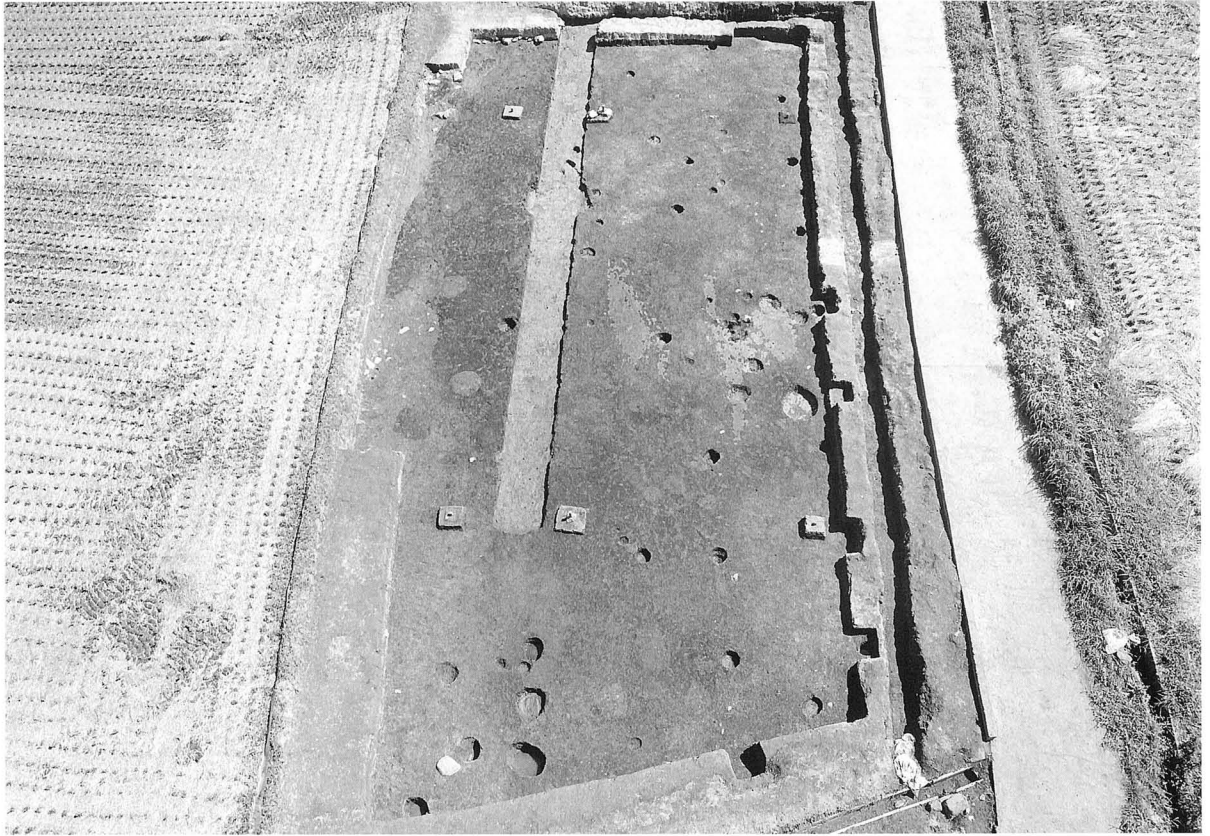
5区遺構完掘状況（西より）



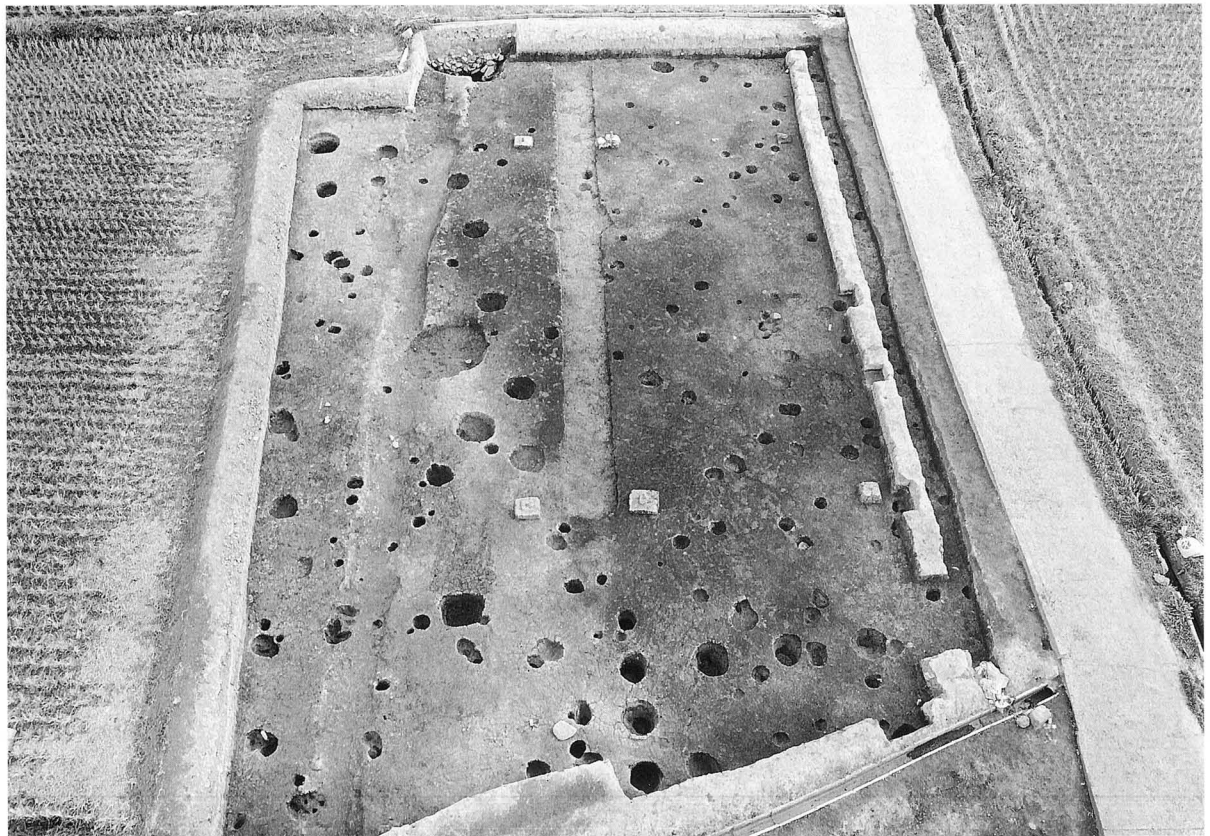
5区西部遺構完掘状況（西より）



5区SK2遺物出土状況（北より）



6区遺構検出状況（西より）



6区遺構完掘状況（西より）



6区SE1完掘状況（西より）



6区SK3完掘状況（北より）



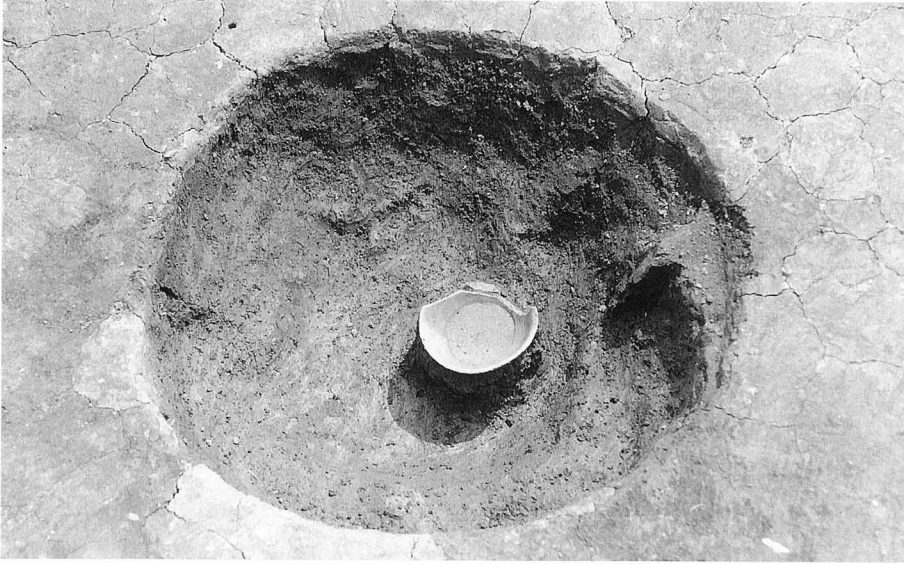
6区SE1 検出状況
(北西より)



6区SE1 遺物出土状況
(北より)



6区SD4 遺物出土状況
(西より)



6 区 S P 39 遺物出土状況
(北より)



6 区 S P 137 土層断面
(東より)



6 区 S K 1 遺物出土状況
(北より)



6区Ⅳ層除去後全景
(西より)



6区SP41遺物出土状況(1)
(北西より)



6区SP41遺物出土状況(2)
(北西より)



7区遺構検出状況
(東より)



7区SD2遺物出土状況
(西より)



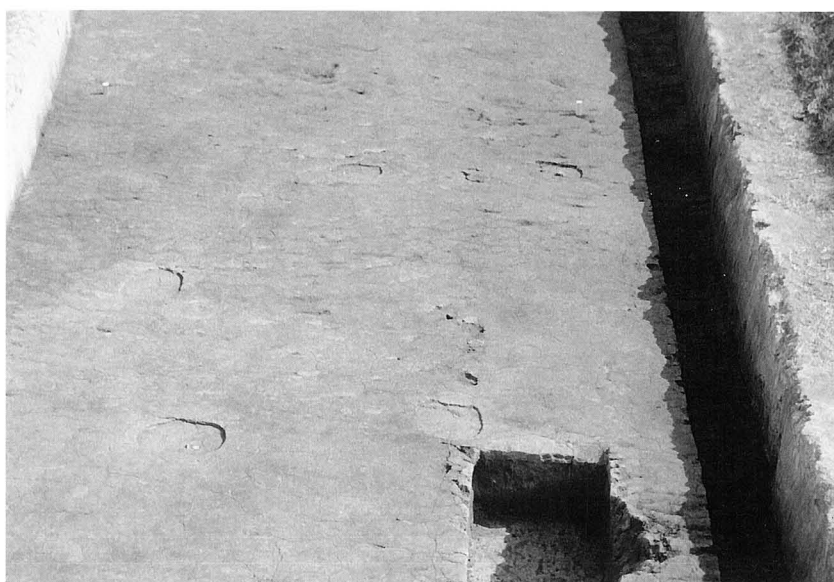
7区遺構完掘状況（東より）



7区SD1完掘状況（北東より）



8区遺構検出状況
(西より)



8区掘立1検出状況
(西より)



8区遺構完掘状況（東より）



9区遺構検出状況（東より）



9区SR1完掘状況（東より）



9 区遺構完掘状況（北西より）



9 区掘立 1 完掘状況（北西より）



10区遺構検出状況（西より）



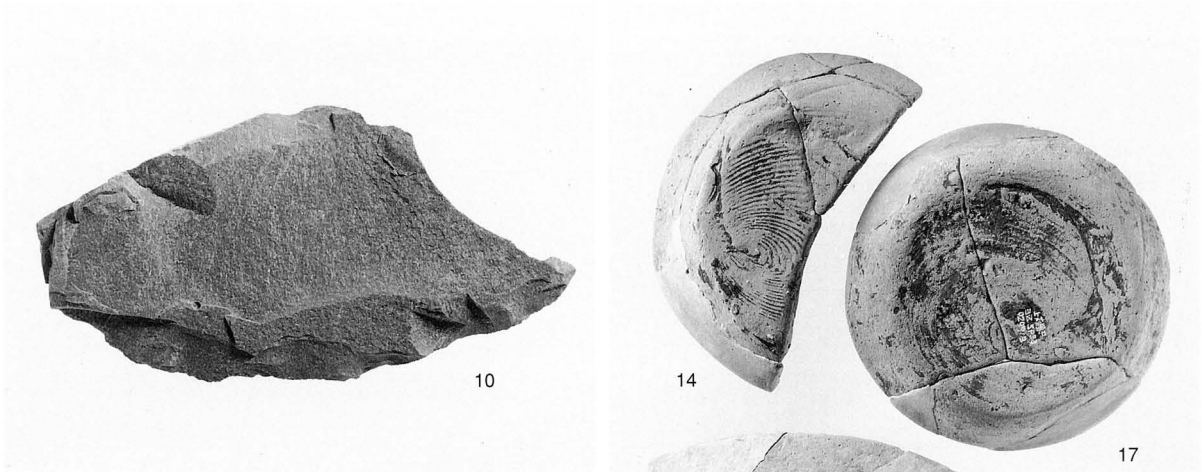
10区遺構完掘状況（西より）



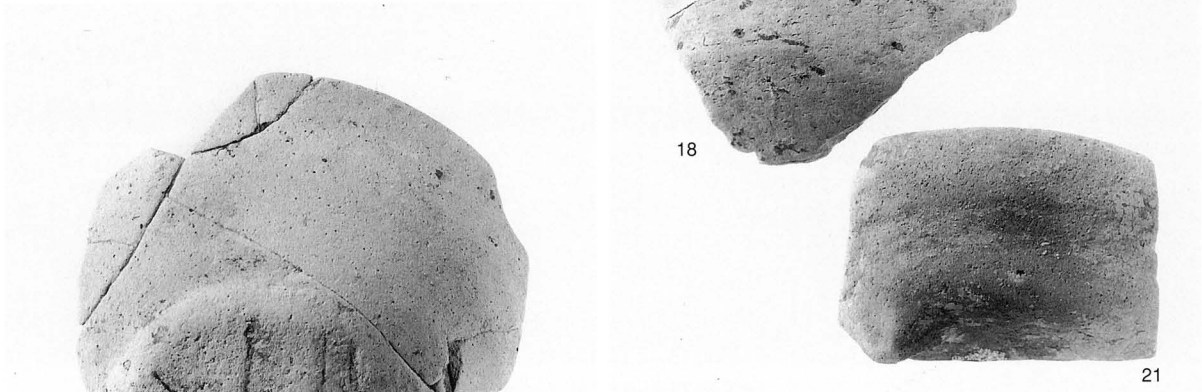
11区遺構検出状況（北西より）



11区遺構完掘状況（南西より）



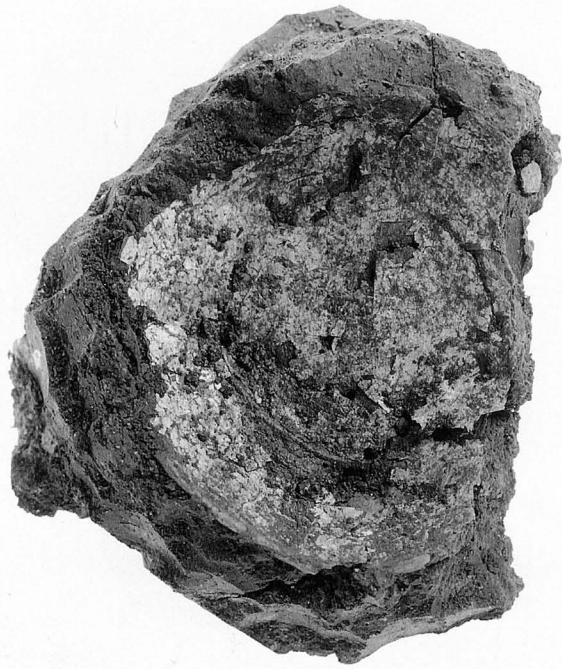
2区出土遺物



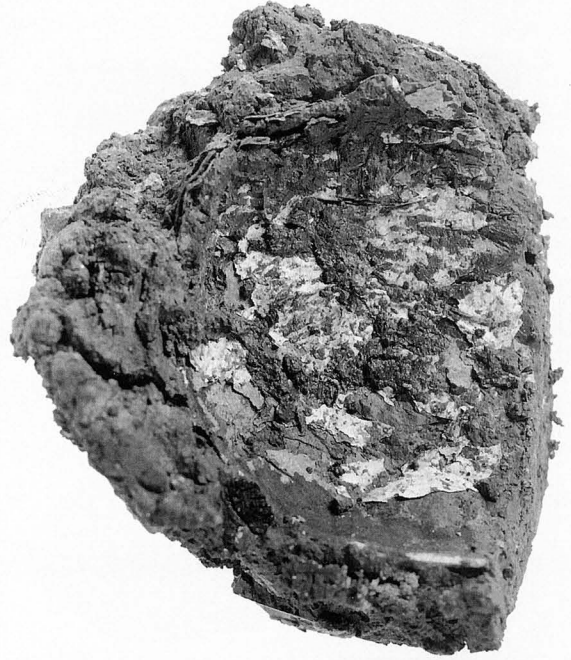
3区出土遺物



5区出土遺物 (1)

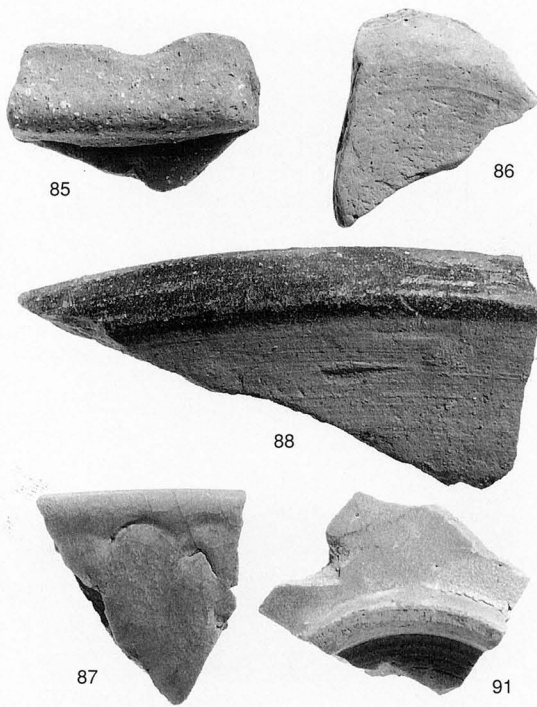


77



78

5 区 出 土 遺 物 (2)



85

86

88

87

91



95



94

6 区 出 土 遺 物 (1)



98



108



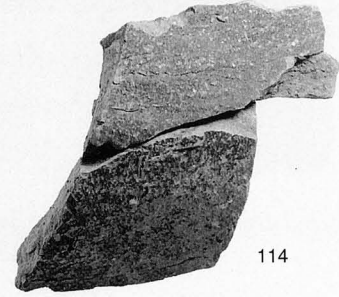
109



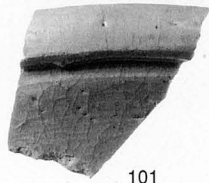
99



112



114



101



116



122



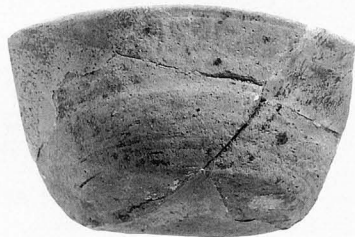
125



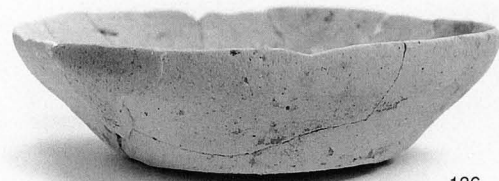
142



131

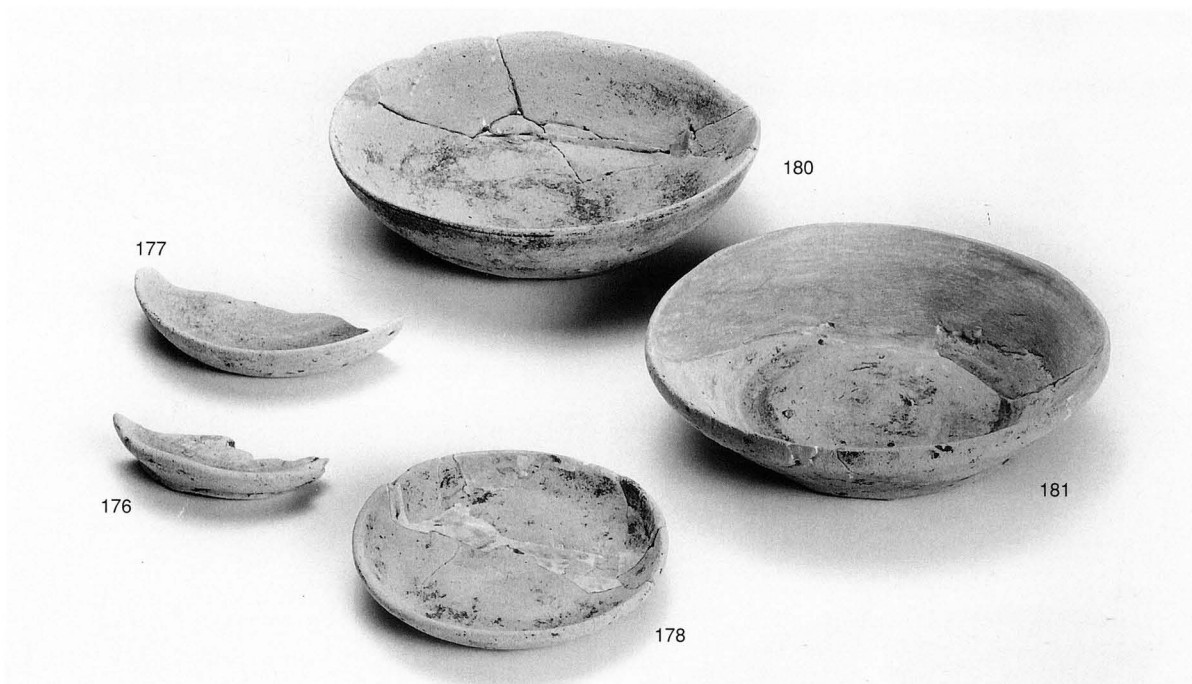
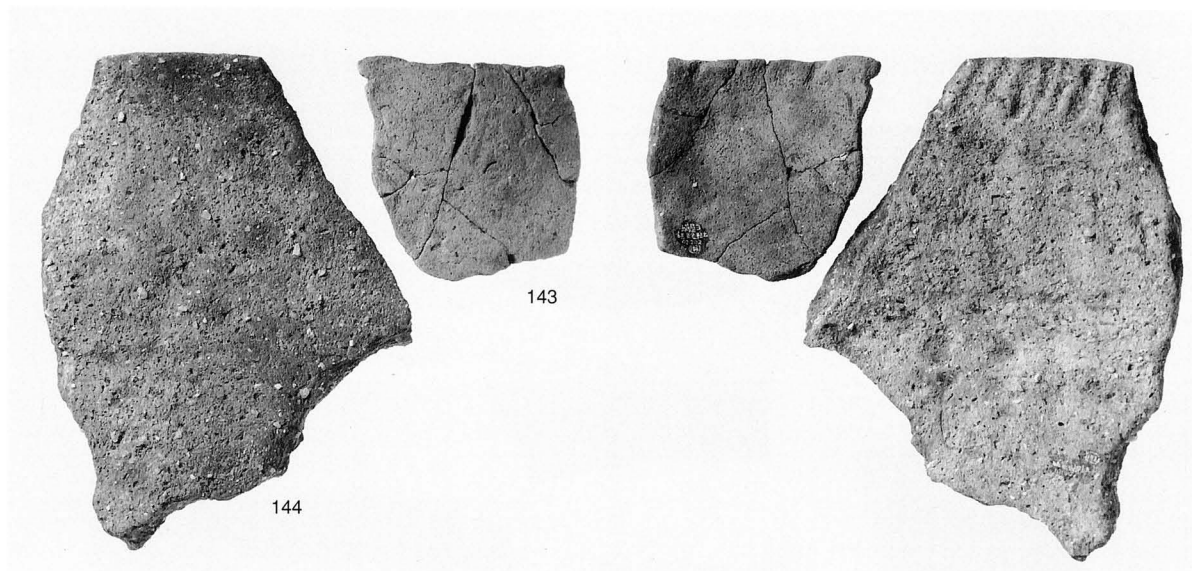


127

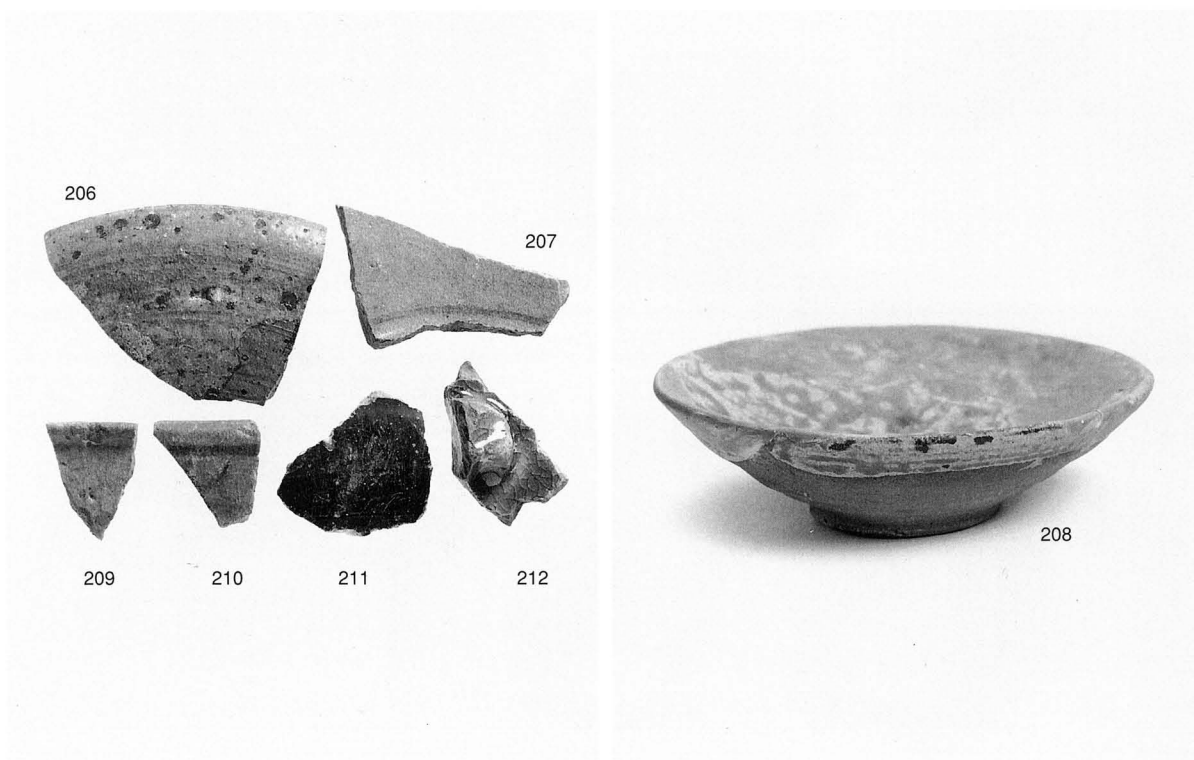
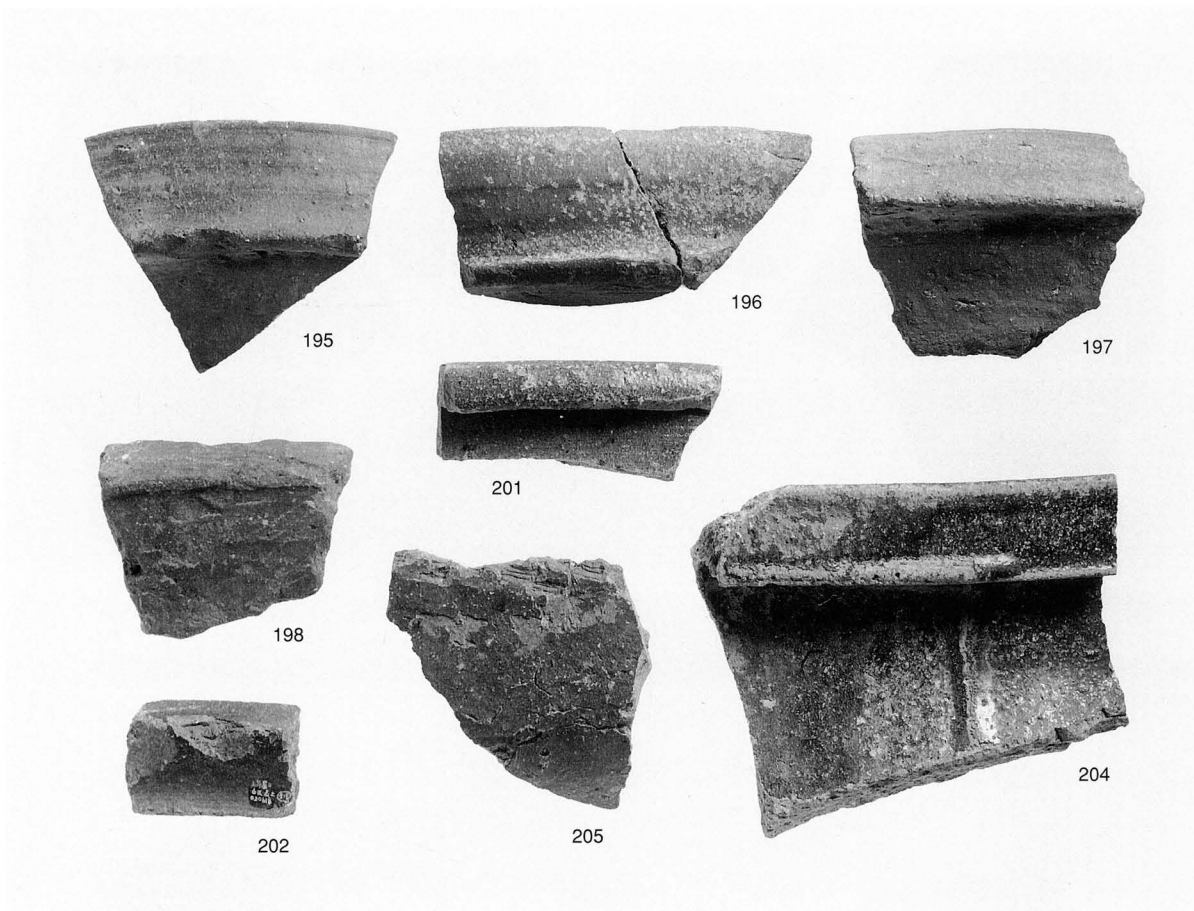


136

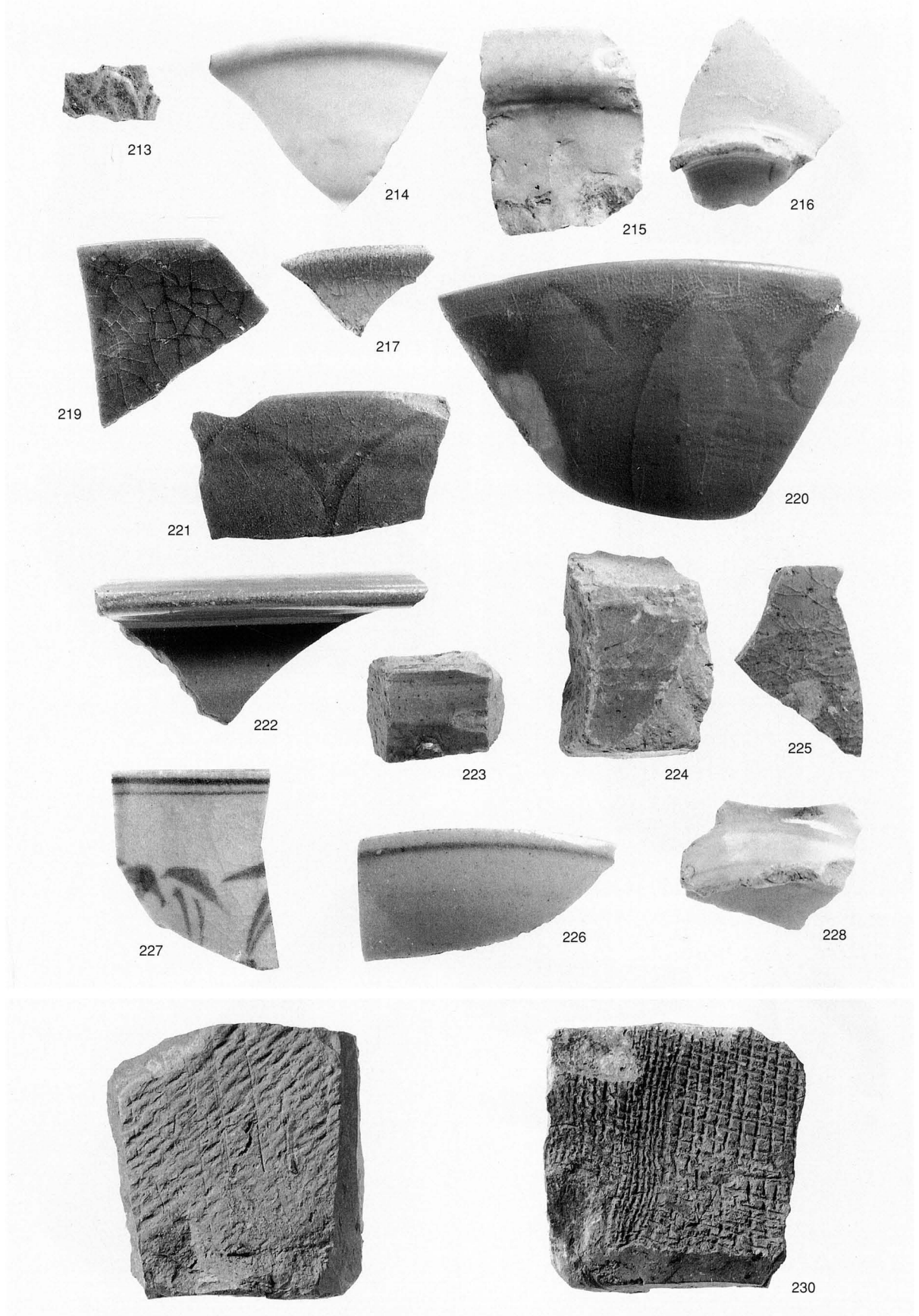
6 区 出 土 遺 物 (2)



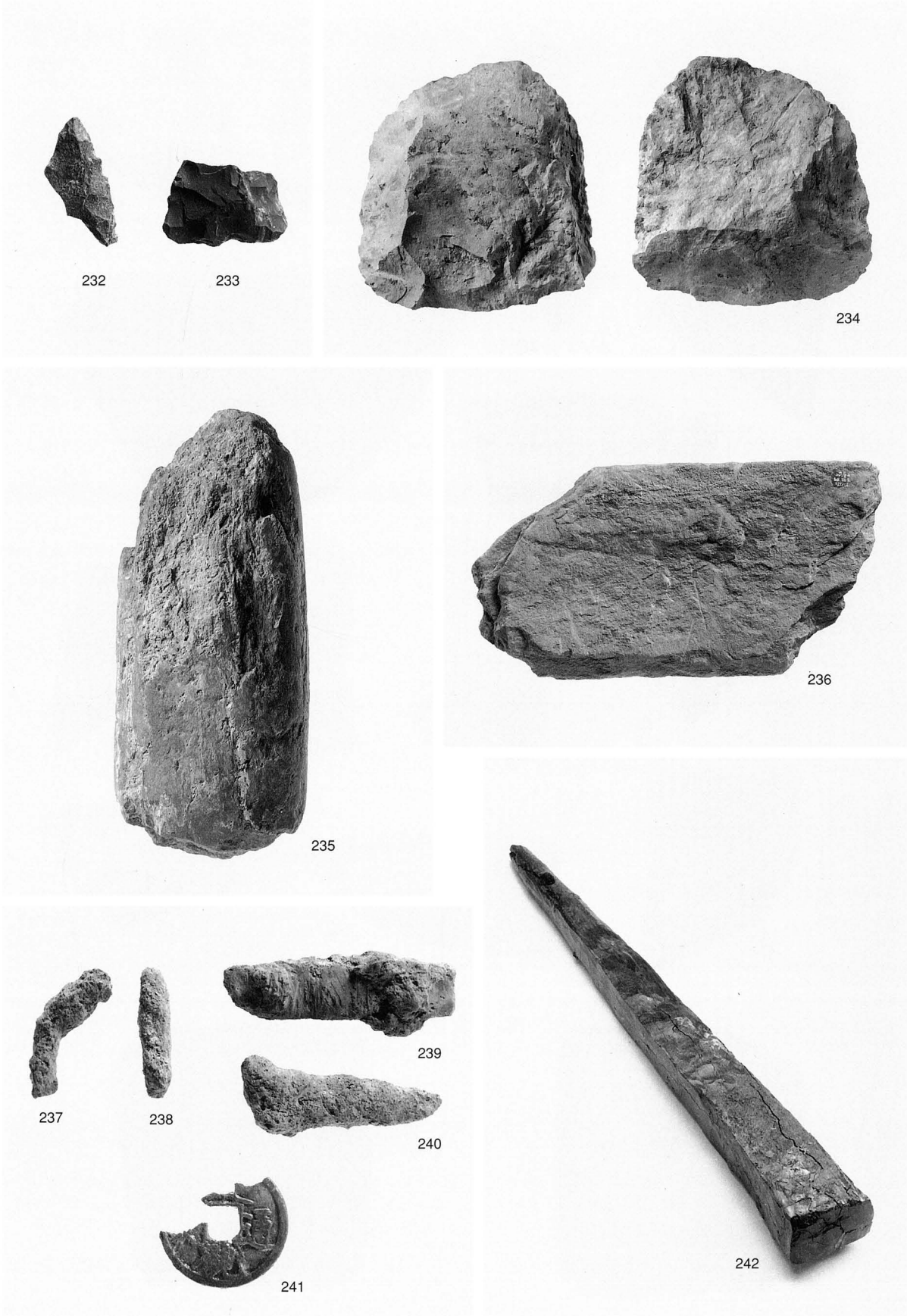
6 区 出 土 遺 物 (3)



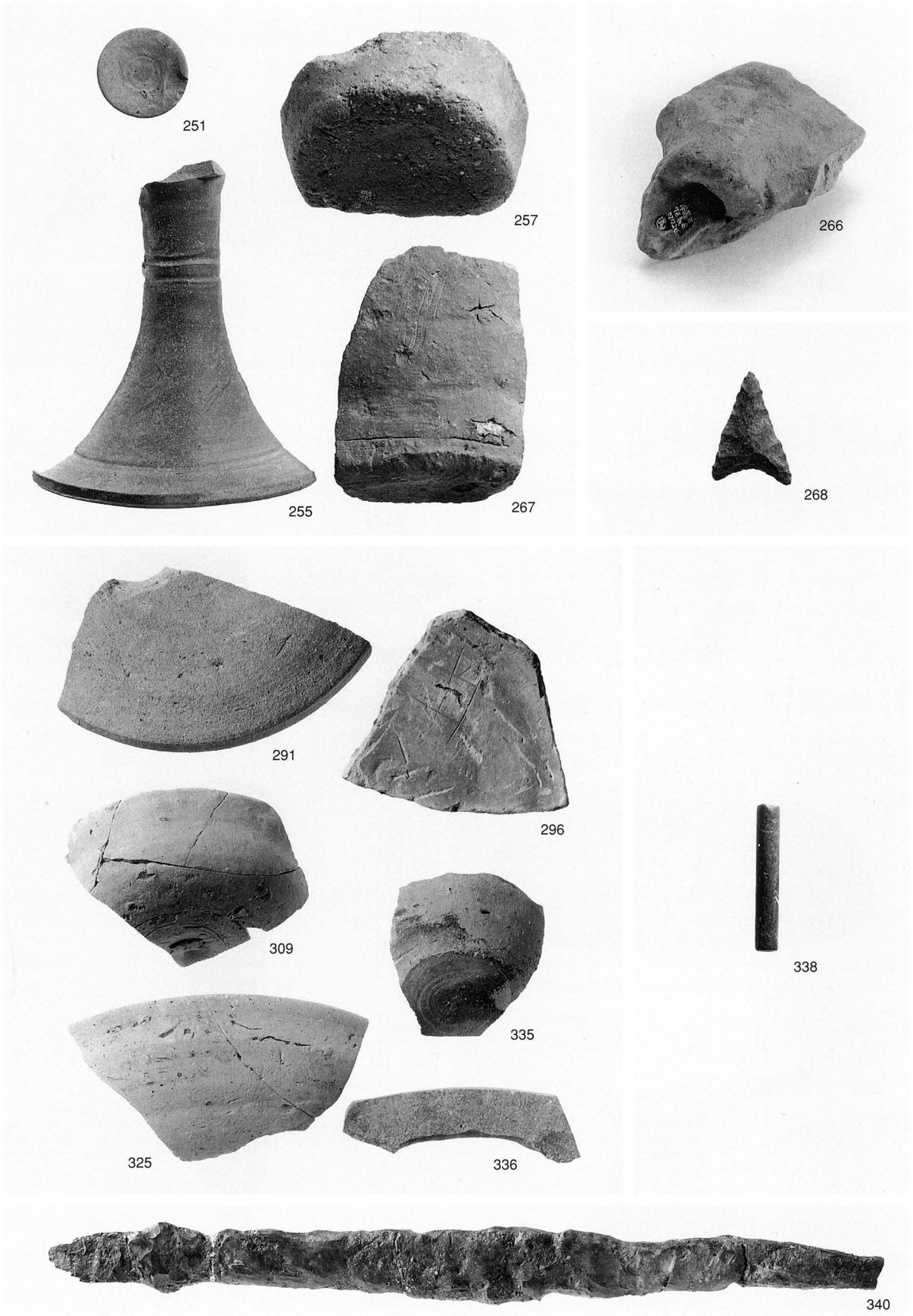
6 区 出 土 遺 物 (4)



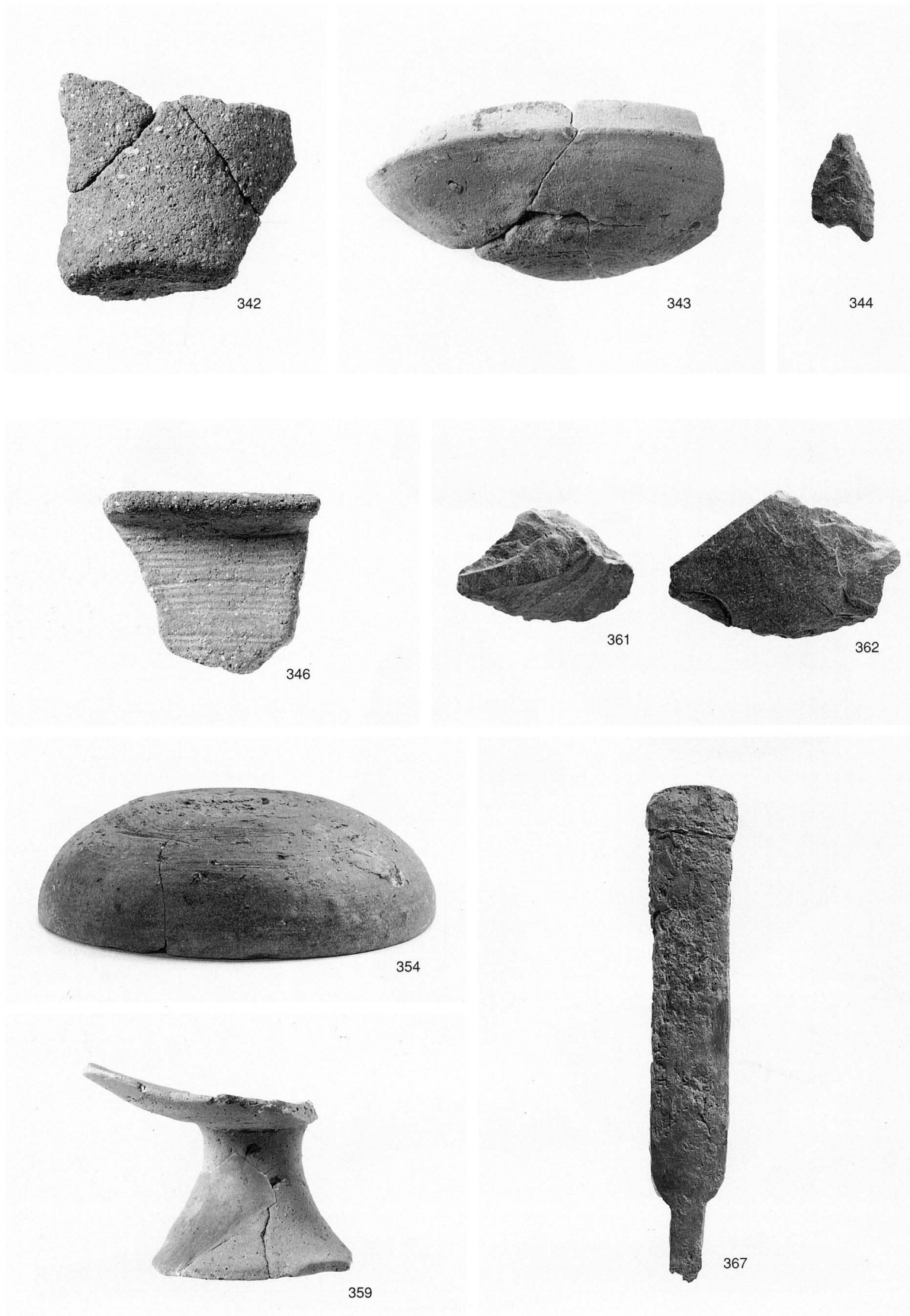
6 区出土遺物 (5)



6 区 出 土 遺 物 (6)



7 区 ・ 9 区 出 土 遺 物



10区・11区出土遺物



調査前全景（1）（西より）



調査前全景（2）（北東より）



遺構検出状況（西より）



SK4とSX1 (西より)



SK4 遺物出土状況 (1) (西より)



S K 4 遺物出土状況 (2) (西より)



S K 4 遺物出土状況 (3) (北東より)



S K 4 遺物出土状況 (4) (東より)



S K 4 遺物出土状況 (5) (北西より)



S K 4 遺物出土状況 (6) (西より)



S K 4 遺物出土状況 (7)